

日本語・日本学研究 vol.15 (2025)

《論文》

- Bayesian Linear Mixed Model に基づく漢字親密度推定の試み 浅原 正幸 (1)
——言語資源としての統計モデルの検討——
- 認知的アプローチから見た「硬さ」を表すオノマトペの意味拡張 葉 書辰 (21)
——「ゴリゴリ」を例に——
- Translating Character Voice: サンダース・リサ (51)
Proposing New subtitling guidelines for conveying character and culture in English subtitles for Japanese anime
- 安部公房『制服』論 解 放 (77)
——「死人」の語りと「反帰郷」の物語——

《研究ノート》

- 絵本を用いた初級日本語会話授業の実践 ゲエン・リン・ラン (97)
——語彙・文法習得の効果——
- 書き言葉資料における評価形容詞の構文についての考察 張 舒鵬 (119)
——「面白い」を「大きい」「嬉しい」と比較して——
- 戦後日本人の中国旅行記における「友好」の語り方 鄒 韻 (137)
——野上弥生子の『私の中国旅行』に着目して——

《寄稿論文》

- Tracing Japonic Lineages through Matryoshka Distribution: 五十嵐 陽介 (151)
Phylogeny, Migration, and Language Replacement in Eastern Japan

夏季セミナー2024・大学院生サマースクール報告要旨

執筆者一覧
国際編集顧問一覧

Bayesian Linear Mixed Model に基づく 漢字親密度推定の試み ——言語資源としての統計モデルの検討

An Attempt at Estimating Kanji Character Familiarity
Using a Bayesian Linear Mixed Model:
A Study on Statistical Models as Linguistic Resources

浅原 正幸

Abstract

This study reports on a method for estimating kanji familiarity based on data constructed for use in a course at Tokyo University of Foreign Studies. The course aimed to teach empirical research methods in linguistics, including experimental design and statistical analysis techniques. As exercise data for statistical analysis, evaluation information was collected for 2,136 commonly used kanji characters through Yahoo! Crowdsourcing. For each kanji, 50 participants (a total of 1,258 respondents) provided self-assessments on five aspects: "knowing the character," "being able to write it," "knowing its On'yomi (Chinese reading)," "knowing its Kun'yomi (Japanese reading)," and "knowing its radical." Based on these evaluations, a Bayesian linear mixed model was applied to experimentally estimate kanji familiarity.

Keywords 漢字親密度、ベイジアン線形混合モデル、クラウドソーシング、音読み、訓読み
Kanji Character Familiarity Rate, Bayesian Linear Mixed Model, Crowd-sourcing,
Onyomi (Chinese Reading), Kunyomi (Japanese Reading)

1. はじめに

本稿では、東京外国語大学の授業において、常用漢字の親密度調査を題材とし、質問紙の設計およびその統計処理手法を扱った過程を報告する。この授業は、学生からの「漢字について研究したい」という要望を受けて設計され、実証的な言語研究の手法を学ぶ機会として位置づけた。具体的には、学生が質問紙調査を用いたデータ収集と統計分析手法を習得することを目指したものである。限られた予算と時間の制約の中で、学生の要望に応えつつ、授業の目標に資する言語資源をどのように構築したかについて共有する。また、調査結果を Bayesian Linear Mixed Model によってモデリングし、これを公開に資する言語資源にする過程を詳細に示す。

言語研究において、質問紙調査は「印象評定」や「容認性判断」といった主観的評価を収集するための重要な手法である。たとえば、「印象評定」では、特定の言語表現に対する話者の印象を定量的に測定し、言語的要素がどのように知覚されているかを明らかにすることができる。また、「容認性判断」では、特定の文や表現が文法的に容認されるかを話者に判断させることで、言語の規範や使用傾向を体系的に把握することが可能となる。

これらのデータは、言語の規範的側面や使用実態を解明するための実証的な研究において不可欠であり、理論的考察を支える基盤を提供する。

質問紙調査結果の統計処理は、客観的な言語研究において極めて重要である。統計的手法を用いることで、調査データの信頼性と妥当性が担保され、個別の回答に内在するバイアスや偶然性を排除しつつ、全体としての傾向やパターンを明確化することが可能となる。これにより、調査結果が単なる主観的印象にとどまらず、一般化可能な知見として理論的枠組みに寄与することができる。また、統計処理は、調査結果の解釈を精緻化し、異なる条件や変数間の関係性を解明するための手段として、言語現象に対する深い理解を提供する。したがって、統計処理は、主観的データを客観的かつ科学的に分析し、言語研究における信頼性と精度を向上させるための基盤として不可欠である。

本研究では、常用漢字2136字を対象に、各漢字に対して「知っている」「書くことができる」「音読みがわかる」「訓読みがわかる」「部首がわかる」という5つの観点からデータを収集した。データ収集には、Yahoo! クラウドソーシングを活用し、大規模な実験協力者の募集を行った。漢字ごとに50名の参加者から評価情報を得ることで、信頼性の高いデータベースを構築した。さらに、講義においては、この収集データを用いて、統計分析手法の解説を行った。具体的には、平均や分散の算出、箱ひげ図の描画、統計的検定手法の紹介などを通じて、データの分布や傾向の把握、統計的有意性の検証手法について実践的な指導を行った。

授業において収集したデータを用いて、Bayesian Linear Mixed Model によるモデリングを行い、その結果を言語資源として整備し、<https://github.com/masayu-a/KANJI-familiarity> にて公開した。データ収集には、常用漢字2136字を対象とし、各漢字に対する認知度や習得度を多角的に評価するための評価情報を取得した。これらのデータを Bayesian Linear Mixed Model を用いて解析することで、漢字の親密度に関する信頼性の高いモデルを構築した。本稿では、データの収集手法についての詳細な説明とともに、授業での演習の実態と、構築したモデルの理論的背景および実装手法について解説する。

2. 関連研究

『日本語の語彙特性』（天野・近藤 1999）第1巻の単語親密度は、主観的な単語のなじみの程度とし、18歳以上30歳未満の40人に対してアンケート調査により収集したものである。刺激を、「音声のみ」「文字のみ」「音声と文字の両方」の3つの手法で呈示し、1-7の7段階評価を「できるだけまんべんなく」付与するように教示したうえで収集した。対象は『新明解国語辞典』第四版の見出し語 76,945 語の刺激による。評価データは 1995年9月から1996年7月にかけて、NTT研究所内で収集された。機関内で収集したために、教示により統制してデータを収集しているが、公開評価データは40人の評価値の平均値による。その後、『日本語の語彙特性』第9巻では、2002年2月から3月に調査した『学研

国語大辞典』第二版から32,443語を追加した。

『令和版単語親密度データベース』(藤田・小林 2020) は約16万3千語に対する単語親密度データである。2018年9月から2019年12月にかけて、1-7の7段階評定のデータをクラウドソーシングにより収集した。クラウドソーシングにおいては事前スクリーニングと事後スクリーニングを行い、より信頼性のあるデータを構築している。対象語は『日本語の語彙特性』第1巻・第9巻のほか、『幼児語彙発達データベース』『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『NTT絵本データベース』を出典とした。

受容過程の調査結果である単語親密度と生産過程の調査結果であるコーパス頻度情報の関連性は重要な研究課題である。Tanaka and Terada (2011) は、単語親密度と大規模コーパス頻度情報との相関について調査し、親密度情報と頻度の相関について実証した。水谷ほか (2018) は単語基本語情報を推定するために、教科書コーパスの語彙表、漢検難易度の初出情報のほか、ウェブコーパスの頻度情報を用いた。岡久ほか (2019) は、単語の定義(語釈)-被定義(見出し語)関係を用いて、単語の基本度の推定を行った。語釈文の収集にクラウドソーシングを用いた。11,936 語(被定義語)を対象として1語あたり10人分の語釈文を収集し、基礎データとした。また、単語の基本度を数値化する基本的な考え方は野呂ほか (2007) による。

水谷ほか (2019) は、『JUMAN++』の単語辞書に掲載されている単語 26,000語を対象にクラウドソーシングを用いて、「習得時期」を「小学生になる前」「小学校低学年」「小学校高学年」「中学生になった頃」「単語の意味を知らない／見聞きしたことがない」の5段階で収集した。1単語あたり20人の評定値を収集し、平均値により単語難易度データベースを構築した。

浅原 (2019) は、『分類語彙表増補改訂版』(国立国語研究所 2004) に掲載されている94,838語に対し、「知っている」「書く」「読む」「話す」「聞く」の5つの観点についての1-5の評定情報を収集した。収集したデータは研究協力者の個体差の情報を考慮するためにBayesian Linear Mixed Modelによりモデル化を行った。同調査は継続的に続けられ(浅原 2022)、WLSP-familiarityとして公開されているほか、辞書検索ツール『Cradle』にて検索ができる。

Chen and Asahara (2023) は、日本語機能表現辞書『つつじ』(松吉ほか 2007)の階層L7 6870件に対して、「知っている」「書く」「読む」「話す」「聞く」の5つの観点についての1-5の評定情報を収集した。収集したデータは研究協力者の個体差の情報を考慮するためにBayesian Linear Mixed Modelによりモデル化を行った。同データはTSUTSUJI-familiarityとして公開されている。

3. 質問紙調査手法

本研究では、質問紙調査にYahoo! クラウドソーシングを活用し、大規模なデータ収集を行った。マイクロクラウドソーシングを用いることの有用性は、迅速かつ広範な参加者

層からデータを収集できる点にある。特に、Yahoo! クラウドソーシングを利用することで、多様なバックグラウンドを持つ大量の実験協力者を効率的に確保でき、従来の調査手法では難しい規模のデータ収集が可能となる。この方法により、地域や年齢層に偏りのない広範なサンプルを得ることができ、研究結果の一般化可能性が高まる。また、オンラインプラットフォームを通じたデータ収集は、調査実施の時間的・経済的成本を大幅に削減しつつ、高品質なデータを短期間で収集できる点も大きな利点である。これらの特性により、マイクロクラウドソーシングは、特に大規模なサンプルが必要とされる言語研究において、極めて有用な手法であると言える。

本研究では、常用漢字2136文字を調査対象とし、各漢字に対して「知っている」「書くことができる」「音読みがわかる」「訓読みがわかる」「部首がわかる」という5つの観点からデータを収集した。調査対象となった常用漢字の中には、音読みが存在せず訓読みのみが定義されている漢字も含まれている。たとえば、「畑」(はたけ)、「峠」(とうげ)、「杵」(わく)などは、音読みが存在しない。一方で、音読みのみが定義され、訓読みが存在しない漢字もあり、たとえば、「亜」(あ)、「欧」(おう)、「却」(きゃく)などがその典型例である。このような漢字の特性は、漢字の認知度や習得度を評価する際に、音読みと訓読みのバランスや、漢字使用の文脈による影響を考慮する必要があることを示唆している。本研究では、これらの異なる特性を持つ漢字に対しても一貫した評価基準を適用し、漢字の認知度と習得度に関する包括的なデータを得ることを目的とした。

【目的】

言語学の研究を目的としています。

【内容】

示される漢字をどのくらい知っているかについてお答えください。

また、書くことができる、音読みがわかる、訓読みがわかる、部首がわかるかについてお答えください。

【その他】

※参加を自由に取りやめることができますが、その場合ポイントは進呈されません。

※本タスクによって得られたデータは統計処理したうえで公開いたします。

※専門の学会などにて発表する可能性があります。

※回答の送信をもって、この調査の趣旨にご同意いただいたものとみなされます。

図1 調査の説明文

調査の実施に先立ち、図1のような説明文を参加者に提示した。この説明文は、調査の

目的、具体的な内容、および参加者が留意すべき事項について詳細に記載されたものである。まず、調査の目的として、本調査が「言語学の研究」を主眼としている旨が明示され、学術的な背景に基づいて実施されることが参加者に対して説明された。次に、調査内容については、各常用漢字に対し、「知っている」「書くことができる」「音読みがわかる」「訓読みがわかる」「部首がわかる」という5つの評価項目に基づいて回答を求めることが説明された。このように具体的な作業内容が示されることで、参加者は調査の進行過程を十分に理解した上で回答を行うことができる。さらに、参加者への配慮として、調査の途中で自由に参加を中止することが可能であることが明記された。また、収集されたデータは、統計的に処理された後に公開され、さらに専門的な学会等で発表される可能性があることが告知された。最後に、調査への回答の送信をもって、調査の趣旨に同意したものとみなす旨が記載されており、参加者の自発的な同意に基づく参加が確保されている。このように、図1に示された説明文は、参加者が調査の全体像を理解し、安心して調査に参加できるように設計されており、調査の信頼性と参加者の協力を高めるための重要な役割を果たしている。

以下の漢字についてお答えください

嵐

この漢字を知っていますか？

☐ 知っている

☐ 知らない

書くことができる

☐ はい

☐ いいえ

音読みがわかる

☐ はい

☐ いいえ

訓読みがわかる

☐ はい

☐ いいえ

部首がわかる

☐ はい

☐ いいえ

確定して次へ

図2 調査画面

調査画面は、図2に示すように文字ごとに構成された。画面の上部には調査対象となる文字を表示し、「この漢字を知っていますか？」という問いに対して、「知っている」または「知らない」の二択選択肢を提示した。さらに、「書くことができる」、「音読みがわか

る」、「訓読みがわかる」、「部首がわかる」といった観点について、それぞれ「はい」または「いいえ」の二択選択肢を提供した。実験協力者は、提示された二択選択肢から該当するものを選択した後、次の文字の調査画面へと進む形式とした。この画面を用いて、各文字50人分の研究協力者の回答を授業中に収集した。各文字50人としたのは、先行研究の天野・近藤(1999)が40人であったほか、本授業に利用可能な予算的制約・授業中に終了可能であるという時間的制約から妥当な人数として設定した。予算・時間的な制約がない場合には、より多くのデータを収集したほうが良いと考える。

評定値はリッカート尺度を用いず二択(「知っている」or「知らない」／「わかる(はい)」or「わからない(いいえ)」)を用いた理由として、授業で用いる際の扱いやすさがあげられる。各文字50人分としたことにより、「知っている」「わかる(はい)」の数を計数することにより、簡易的な親密度を得ることができる。

謝礼として、10文字の回答に対し、PayPayポイントを4ポイント支払った。1人あたりの回答文字数は最大で200文字までとし、回答の目安時間を20分と提示しつつ、40分の制限時間を設けた。調査は2022年10月6日8:00に開始し、9:25に終了した。文字コードの問題により正しく表示されなかった5文字を含む10文字については、再調査を2022年10月8日8:00に開始し、8:10に終了した。調査費用は合計で108,000円(税別)であった。実験協力者数は異なり1258人であり、平均 17.0 文字について回答を得た。本研究は、国立国語研究所の研究倫理審査を受けて実施された。

実験協力者は、日本国内でYahoo!クラウドソーシングを利用可能な者を対象とした。事前に、国立国語研究所内で実施された別のタスクを通じてバッドワーカーを排除する措置を講じた上で調査を実施した。講義における利用については、実験協力者間の漢字能力の偏りについては統制しなかった。実験協力者間の漢字能力の偏りについては、後述するBayesian Linear Mixed Modelにおける実験協力者のランダム効果を利用して統制を図った。

4. 授業におけるデータの利用

東京外国語大学で行われた授業において、本データの意義や使用方法について詳細に説明を行った。この授業では、学生が言語研究に必要な基礎的なデータ収集と解析スキルを習得できるよう、「親密度」「容認性」「印象評定」「自己ペース読み時間」の4つのテーマに関連した調査手法を学び、実際に自力で調査を実施できることを目指した。特に、PCIbexを活用したオンライン実験環境の構築方法について丁寧に教示し、学生が自ら調査設計からデータ収集まで一貫して行えるように指導を行った。

しかしながら、2022年度の授業においては、学生が構築した実験環境を利用した調査

を実施するための倫理審査を授業期間内に完了することができなかった。そのため、事前に教員側で収集した本データを用いることで、統計処理や解析手法に焦点を当てた演習を実施した。このアプローチにより、学生は既存データを通じて統計的手法の基礎を学ぶことが可能となり、実際のデータ解析プロセスを体験する形でスキルを磨くことを目指した。

授業では、データ解析ツールとして主にR言語を用いた実践的なスキルの習得を目指し、その操作方法や応用例について詳しく解説した。具体的には、データの「たて持ち」形式と「よこ持ち」形式の相違点や、それぞれの形式が分析プロセスにおいてどのように役立つかについて説明した。さらに、データ間の統合手法として、漢字の部首情報が格納された別テーブルとの内部結合 (INNER JOIN) の方法についても解説し、実際にコードを書きながら演習を進めた。この過程を通じて、学生はR言語のデータフレーム操作や tidyverse パッケージを活用した効率的なデータ処理手法を習得することを目指した。

また、統計解析における基礎的な手法として、収集した評価データの観点ごとに代表値を算出する演習を行った。具体的には、最小値、第一四分位数、中央値、第三四分位数、最大値といった代表値の算出方法を学び、それらを視覚的に理解するための箱ひげ図の作成方法についても実践した。この際、箱ひげ図がデータの分布やばらつきを視覚的に把握するためにどのように役立つかについても、具体例を示しながら解説を行った。これらの演習により、学生は統計解析の基本的な考え方やその可視化技術を実際に体験し、分析の実践力を高めることができた。

授業では、漢字の部首情報を用いたグループ化を行い、部首ごとに各観点の評定値の平均や分散を算出する演習を実施した。これにより、データの特徴をより詳細に理解し、カテゴリ別の傾向を把握するスキルを習得することを目指した。また、このプロセスを通じて、集計とグループ操作を行うためのR言語の基本的なコマンドや関数についても解説し、実際にコードを実行しながら手順を確認した。

さらに、頻度主義統計学の基礎であるt分布と自由度について説明を行い、t検定を用いた平均の差の検定についても演習を行った。この演習では、部首ごとの評定値に基づき、2つのグループ間で平均値が統計的に有意な差を持つかどうかを検証した。特に、t値の計算過程やその統計的な意味について丁寧に解説を行い、p値の役割やその解釈の重要性についても詳しく教示した。学生には、t検定の結果をどのように解釈し、研究の文脈においてどのように活用できるかを具体的な例を通じて示した。これにより、統計解析の基本的な考え方を深く理解し、実際のデータに基づく科学的な判断の方法を学ぶことができるよう配慮した。

これらの漢字親密度に基づく頻度主義的な分析は、授業の後半で実施したさまざまな演

習の基礎として位置づけられた。特に、容認性判断に関する統計分析では、単純に「知っている・知らない」の二値ではなく、リッカート尺度を用いた多段階評価に基づく分析手法を学んだ。また、読み時間データの解析では、非負の連続値を扱う特性を考慮しつつ、これらのデータに対する適切な統計モデルや検定方法について演習を行った。これらの演習を通じて、頻度主義的アプローチに基づいたデータ解析の基本的な流れを学生が実践的に理解できるように設計された。

一方で、本調査のように、2,136文字の常用漢字を調査対象とし、1,258人の異なる実験協力者が部分的に調査に参加するという複雑な設定においては、頻度主義的な分析の限界も明らかとなる。たとえば、すべてのデータが均一かつ完全に収集された場合を前提とする従来の方法では、部分的なデータの欠落や協力者間の能力差を十分に考慮することが難しい。また、各漢字や参加者の特性が結果に与える影響を詳細にモデリングすることも困難である。

こうした課題に対応するため、次節ではベイズ主義的アプローチによる分析について解説する。このアプローチでは、実験協力者の漢字能力をランダム効果としてモデリングする一方で、漢字そのものの親密度もランダム効果として捉えることにより、データ構造の複雑性を柔軟に取り込むことが可能となる。これにより、頻度主義的手法では十分に説明できなかったデータのばらつきや関係性をより深く理解できることを目指す。

5. Bayesian Linear Mixed Model によるモデリング

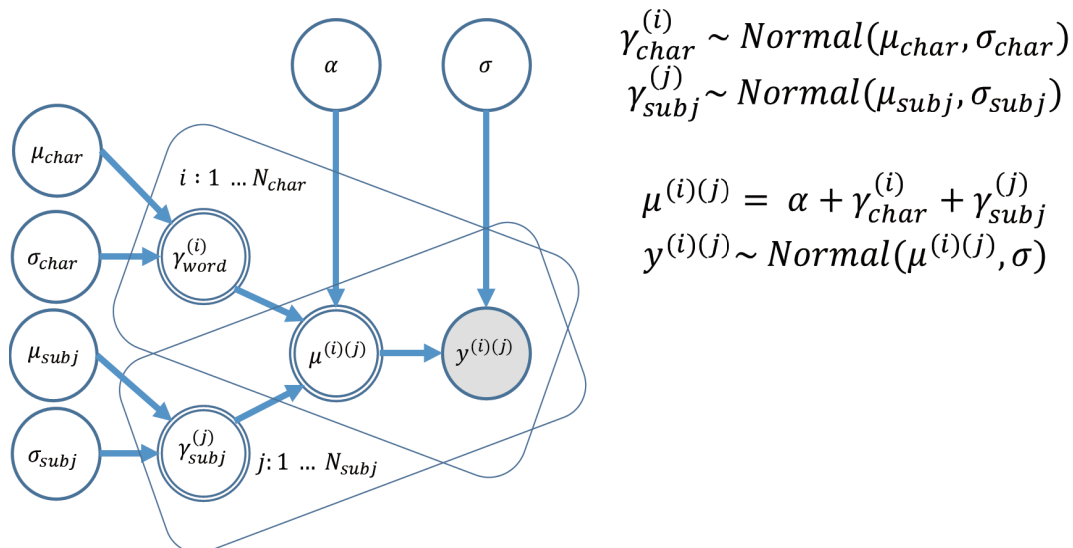


図3 グラフィカルモデル

収集した評定データは研究協力者ごとに個体差がある。この個体差は、研究協力者の漢字力や回答の傾向に依存するバイアスである。この個体差をベイズ線形混合モデルのランダム効果により正規分布としてモデル化し、個体差の影響を軽減する。また、文字親密度情報も文字の特性として標準正規分布としてランダム効果によりモデル化する。グラフィカルモデルを図3に示す。 N_{char} 漢字×5観点(知っている (KNOW)、書くことができる (WRITE)、音読みがわかる (Onyomi)、訓読みがわかる (Kunyomi)、部首がわかる (Bushu)) の定義域、 N_{subj} は研究協力者の数で、それぞれ漢字・観点のインデックス $i:1...N_{char}$, 研究協力者のインデックス $j:1...N_{subj}$ とする。 $y^{(ij)}$ は漢字×5観点の値域で、 y は平均 $\mu^{(ij)}$ 標準偏差 σ によって定義される正規分布とする：

$$y^{(ij)} \sim \text{Normal}(\mu^{(ij)}, \sigma)$$

σ は標準偏差である。 $\mu^{(ij)}$ は平均値で、切片 α と漢字×5観点のランダム効果 $\gamma_{char}^{(i)}$ と研究協力者のランダム効果 $\gamma_{subj}^{(j)}$ の線形式で次式のとおりに定義する：

$$\mu^{(ij)} = \alpha + \gamma_{char}^{(i)} + \gamma_{subj}^{(j)}$$

漢字×5観点のランダム効果 $\gamma_{char}^{(i)}$ と研究協力者のランダム効果 $\gamma_{subj}^{(j)}$ は、それぞれハイパーパラメータ平均 μ_{char} , μ_{subj} , 分散 σ_{char} , σ_{subj} によって定義される正規分布によりモデル化する：

$$\begin{aligned} \gamma_{char}^{(i)} &\sim \text{Normal}(\mu_{char}, \sigma_{char}), \\ \gamma_{subj}^{(j)} &\sim \text{Normal}(\mu_{subj}, \sigma_{subj}). \end{aligned}$$

推定時には、「知っている」「わかる（はい）」を 1.0 とし、「知らない」「わからない（いえ）」を 0.0 とした。推定には R と Stan を用いた。このうち漢字親密度はランダム効果 $\gamma_{char}^{(i)}$ の推定値である。一方、研究協力者の個体差はランダム効果 $\gamma_{subj}^{(j)}$ の推定値であるが、結果的に研究協力者の漢字運用能力の評価値となる。漢字親密度の分布の形を決めるハイパーパラメータ μ_{char} と σ_{char} は標準正規分布を仮定するために、0.0、1.0 に固定した。実験協力者の漢字知識の分布の形を決めるハイパーパラメータのうち、 μ_{subj} は中心化のため 0.0 とした。標準偏差 σ_{subj} については、データからの推定を試みたが収束しなかったため、初期値 1.0 としたうえで小さくしていき、収束する値（warm-up 100 iteration のあと、500 iteration × 3 chains 並列でシミュレーション）を探し、0.5 とした（収束条件 $\hat{R} \leq 1.10$ ）。

Bayesian Linear Mixed Model (BLMM) を採用する主な利点は、研究協力者の個体差の考慮が可能である点にある。従来の頻度主義的なアプローチでは、すべてのデータを一律に扱い、固定効果モデルによって一般的な傾向を推定するが、BLMM は研究協力者ごとの個体差をランダム効果として組み込むことができる。これにより、データのばらつきを適切に捉え、より信頼性の高い推定が可能となる。特に、本研究のように、1人の参加者がすべての漢字に評価を行うのではなく、部分的なデータ収集が前提となる場合、BLMM

の利点が顕著に発揮される。従来の線形回帰モデルでは、欠測データを扱うのが困難であり、すべての参加者が同じ条件で評価を行うことを前提とするが、BLMM では欠測データを考慮した統計推定が可能であり、部分的なデータからでも精度の高い推定を行うことができる。

6. 構築したデータ

6.1 データの量的分析

表1 観点毎の推定親密度の平均と標準偏差

	知っている	書くことができる	音読みがわかる	訓読みがわかる	部首がわかる
平均	0.830	-0.192	0.000	-0.411	-0.226
標準偏差	0.329	0.564	0.515	0.629	0.612

本節では、推定した親密度の量的分析を行う。前節のモデリングにおいては、5観点をまとめて1つの標準正規分布としてモデリングを行った。表1に観点毎の推定親密度の平均と標準偏差を示す。以下では観点ごとのヒストグラムを確認する。横軸を推定親密度とし、縦軸を当該推定親密度である漢字の頻度とする。すべてのヒストグラムはbinを0.01に設定した。

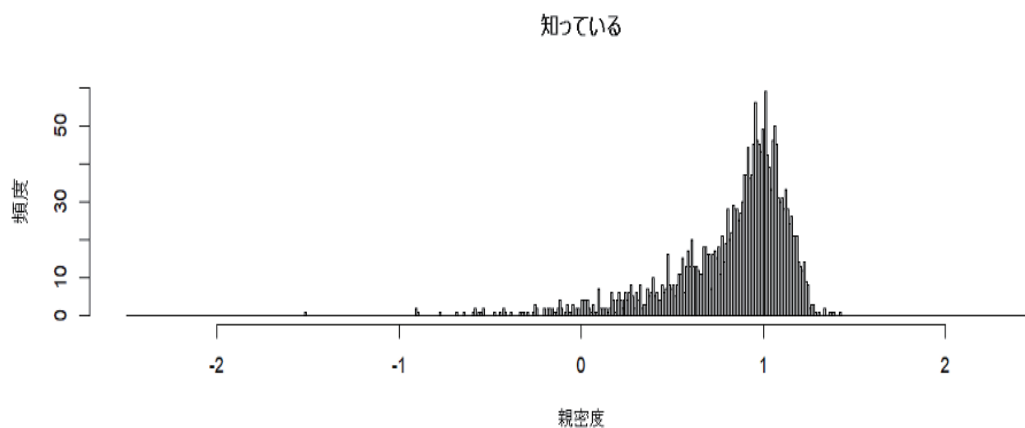


図4「知っている」の推定親密度の分布

図4に「知っている」の観点の推定親密度を示す。分布は右に偏った形状（平均 0.830、

標準偏差0.329)を示しており、特に親密度が0.5～1.5の範囲で最も高い頻度を持つことがわかる。これは、調査対象の漢字の多くが、実験協力者にとって比較的「よく知られている」ことを示唆している。

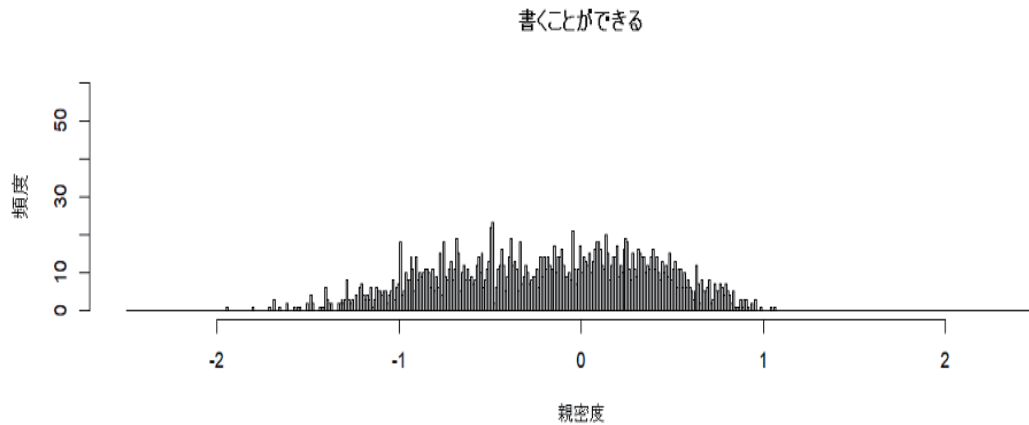


図5「書くことができる」の推定親密度の分布

図5に「書くことができる」の観点の推定親密度を示す。「書くことができる」の平均は -0.192、標準偏差は 0.565 である。「知っている」に比べるとより低い値に分布する。これは、書字能力が認知度と比較して低いことを反映しており、実験協力者が知識としては知っていても、実際に書ける漢字は限られている可能性を示している。

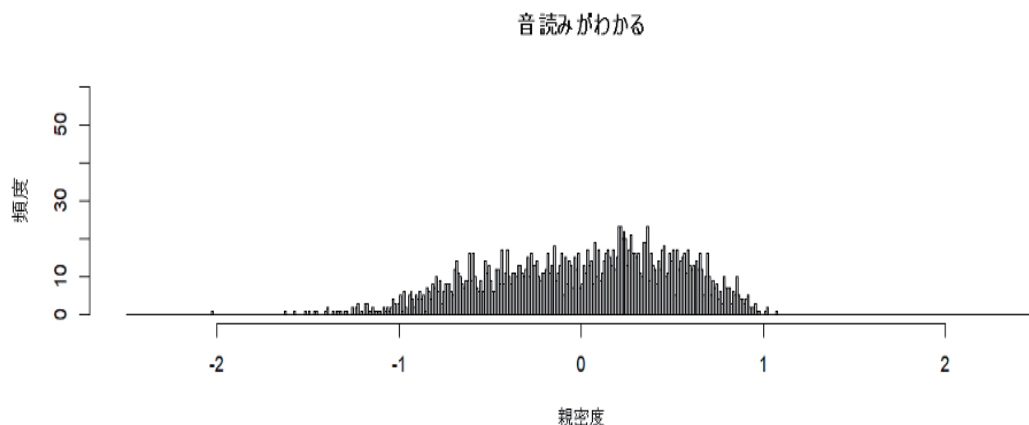


図6「音読みがわかる」の推定親密度の分布

図6に「音読みがわかる」の観点の推定親密度を示す。「音読みがわかる」の平均は0.000、

標準偏差は0.515である。「知っている」に比べるとより低い値であり、「書くことができる」に比べると高い値である。この結果は、音読みの知識が書字能力よりも一般的に高いことを示唆している。

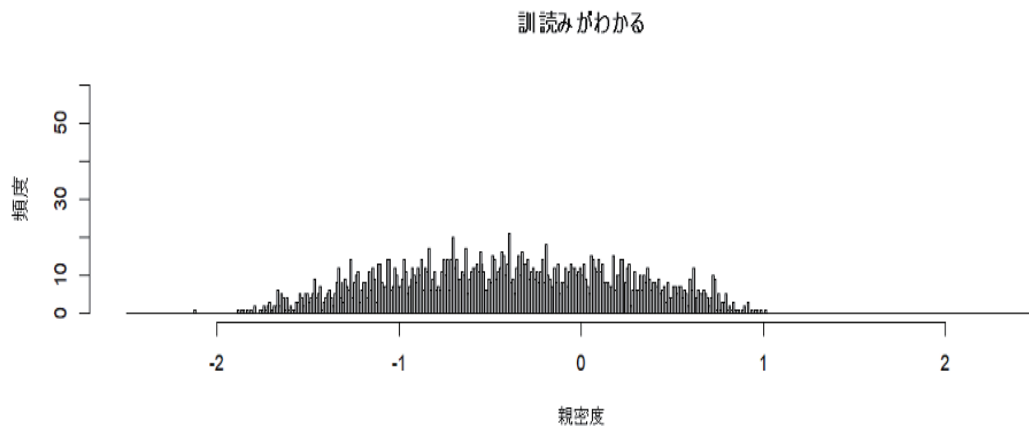


図7「訓読みがわかる」の推定親密度の分布

図7に示す「訓読みがわかる」の推定親密度の分布では、平均が-0.411、標準偏差が0.629であり、他の観点と比較して低い値に集中している。この結果は、訓読みの理解が他の観点と比較して困難であることを示しており、実験協力者が音読みよりも訓読みを苦手としている傾向が見受けられる。

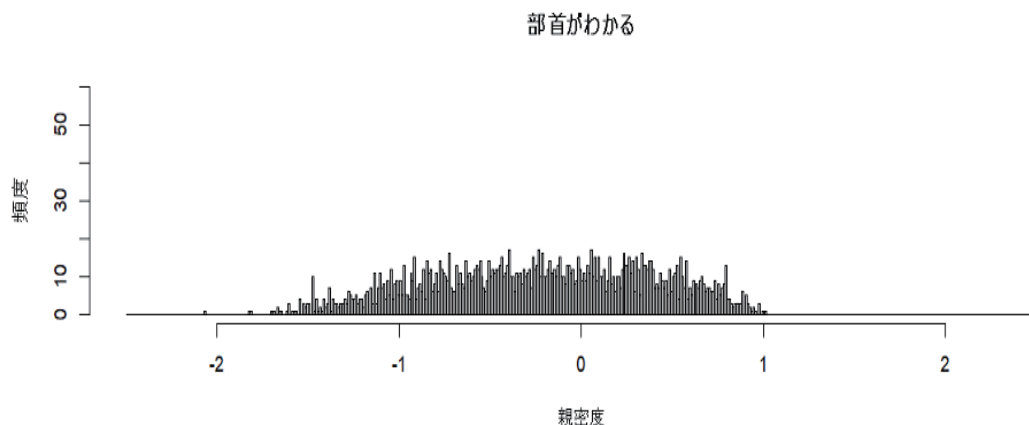


図8「部首がわかる」の推定親密度の分布

最後に、図8に示す「部首がわかる」の推定親密度の分布では、平均が-0.226、標準偏

差が0.629であり、全体として他の観点と同様に低めの値に分布している。この結果は、部首の理解が必ずしも容易ではないことを示しており、特に訓読みと同様に難解な部分があることがうかがえる。

以上のことをまとめると「知っている」「音読みがわかる」「書くことができる」「部首がわかる」「訓読みがわかる」の順に、数値のうえで推定親密度が低くなっている傾向が見られた。このなかで「知っている」のみが顕著に高い(2SDより外側)ことが確認された。それ以外の対については顕著な差異が見られなかった。今回、調査時の評定値に二値を用いたために得られたデータの粒度が粗く、それ以上の言及は難しいが、今後質問紙をリッカート尺度により構成することと実験協力者数を増やすことにより、「音読みがわかる」「書くことができる」「部首がわかる」「訓読みがわかる」の精緻化ができると考える。そのうえで、「訓読み」が「音読み」よりも本当に難しいのかなどを検討したいと考える。

表2 観点評定値間の共分散と相関係数

		知っている	書くことができる	音読みがわかる	訓読みがわかる
書く	共分散	0.144			
	積率相関係数	0.775			
	順位相関係数	0.772			
音読み	共分散	0.134	0.282		
	積率相関係数	0.794	0.971		
	順位相関係数	0.779	0.972		
訓読み	共分散	0.156	0.312	0.276	
	積率相関係数	0.754	0.877	0.853	
	順位相関係数	0.774	0.868	0.847	
部首	共分散	0.155	0.291	0.265	0.377
	積率相関係数	0.769	0.844	0.841	0.980
	順位相関係数	0.774	0.833	0.833	0.981

次に「知っている」「書くことができる」「音読みがわかる」「訓読みがわかる」「部首がわかる」の5つの観点について、相互の関係を統計的に検討する。表2に、各観点間における共分散、積率相関係数、順位相関係数の結果を示す。いずれの観点間も積率相関・順位相関ともに $p<0.001$ 水準で有意であった。まず、「知っている」と「書くことができる」間の共分散は0.144であり、これに対応する積率相関係数は0.775、順位相関係数は0.772である。このことは、漢字の知識と書く能力の間に強い正の相関が存在することを示している。「書くことができる」と「音読みがわかる」間の共分散は0.282で、積率相関係数は0.971、順位相関係数は0.972となっており、非常に高い相関が見られた。また、「音読みがわかる」と「訓読みがわかる」間では、共分散が0.276であり、積率相関係数は0.853、順位相関係数は0.847である。さらに、「部首がわかる」と他の観点との相関を分析した結果、最も高い相関が「訓読みがわかる」との間で確認された（共分散0.377、積率相関係数0.980、順位相関係数0.981）。これらの結果から、各観点間には一定の関連性が存在し、特に書き取り能力と音読み・訓読みの理解度、ならびに部首の認識が密接に結びついていることが明らかとなった。

さらに頻度との相関についても調査した。『国語研日本語ウェブコーパス』の文字頻度表 (<https://github.com/masayu-a/NWJC/tree/master/NWJC-n-gram>) と各観点の評定値の順位相関係数を表3に示す。

表3 各観点評定値と『国語研日本語ウェブコーパス』(NWJC)の文字頻度の相関係数

(順位相関係数)	知っている	書くことができる	音読みがわかる	訓読みがわかる	部首がわかる
NWJC 頻度	0.695	0.879	0.865	0.779	0.754

表3の結果から、文字頻度と「書くことができる」や「音読みがわかる」の間に非常に高い相関が見られることがわかる。特に、「書くことができる」における相関係数が最も高く、0.879という値を示していることから、頻繁に使用される漢字ほど、書くことができると認識される傾向が強いことが示唆される。一方で、「知っている」の相関係数は0.695であり、その他の観点と比較してやや低い、それでも高い相関が見られる。また、「訓読みがわかる」と「部首がわかる」の評価についても、いずれも高い相関が見られ、文字頻度と一定の関連があることが確認された。この結果から、頻繁に使用される漢字は、認知的な知識の広がりを示す「書くことができる」や「音読みがわかる」の評価と強く関連していることが明確である。以上の結果は、漢字の親密度や認知度に対する文字頻度の影響を示唆している。

6.2 データの質的分析

本節では、データを質的な観点から確認する。具体的には「知っている」の観点についての上位・下位の漢字を10件ずつ提示する。信頼性を確認するために、『国語研日本語ウェブコーパス』(NWJC) 37348864454文字中の頻度と常用漢字 2136文字中の頻度順位を示す。なお、『国語研日本語ウェブコーパス』には、ひらがな・カタカナ・英字・数字のほか、他言語の文字も含まれている。

表4 「知っている」の推定親密度上位の漢字と
『国語研日本語ウェブコーパス』(NWJC) の文字頻度

刺激漢字	知っている	代表音訓	部首	NWJC 頻度 (頻度順位)
【車】	1.421	シャ	くるま・くるまへん	17853531 (127位)
【者】	1.380	シャ	おいかんむり・おいがしら・おい	31020625 (47位)
【山】	1.374	サン	やま・やまへん	18835004 (117位)
【秋】	1.360	シュウ	のぎへん	4145565 (614位)
【形】	1.336	ケイ	さんづくり	9373889 (278位)
【兄】	1.333	ケイ	にんによう・ひとあし	2814277 (778位)
【週】	1.301	シュウ	しんによう・しんにゅう	10873679 (233位)
【事】	1.280	ジ	はねぼう	67859694 (9位)
【有】	1.278	ユウ	つき・にくづき・つきへん	13329814 (184位)
【口】	1.271	コウ	くち	11533611 (223位)

表4は、「知っている」という観点で推定された親密度が特に高い漢字を一覧化したものである。この表から、特定の漢字が実験協力者にとって極めて認知されている傾向が明らかとなる。最も親密度が高い漢字は「車」(シャ)であり、推定親密度は1.421である。この漢字は日常生活や教育で頻繁に接することから高い認知度が反映された結果といえる。

次いで親密度が高いのは「者」(シャ)と「山」(サン)であり、それぞれの推定親密度は1.380および1.374である。「者」は、広く使われる一般的な語彙に含まれることが親密

度の高さに寄与していると考えられる。同様に、「山」は地名や自然に関連する語彙で頻繁に使用されるため、高い認知度が示されている。

これらの漢字を『国語研日本語ウェブコーパス』(NWJC)の文字頻度と比較すると、頻度が高い漢字ほど親密度も高い傾向が見られる。たとえば、「事」(ジ)はNWJCで67859694(9位)という極めて高い頻度を記録しており、親密度も1.280と高い。このような頻繁に使用される漢字は、教育課程や日常生活の中で繰り返し目にする機会が多いため、自然と認知度が高まると推測される。

一方で、頻度がやや低い漢字であっても親密度が高い場合もある。たとえば、「秋」(シュウ)はNWJC頻度4145565(614位)と上位ではないものの、推定親密度は1.360と非常に高い。これは、季節や文化的な文脈で頻繁に目にする語彙であるため、比較的短い学習時間や接触頻度で高い親密度を獲得できる漢字であることを示している。

さらに、親密度が高い漢字には構造がシンプルで視覚的にわかりやすいものが多い点も特徴的である。たとえば、「口」(コウ)は部首としても頻繁に登場するため、認知度が高いと考えられる。これらの分析結果は、頻度の高い漢字が学習者にとって重要な基礎知識となる一方で、頻度以外の要因も考慮した教育設計が必要であることを示している。

表5「知っている」の推定親密度下位の漢字と
『国語研日本語ウェブコーパス』(NWJC)の文字頻度

刺激漢字	知っている	代表音訓	部首	NWJC 頻度 (頻度順位)
【璽】	-1.515	ジ	たま・たまへん・おうへん	8218 (2133位)
【鋼】	-0.905	コ	かね・かねへん	5713 (2135位)
【沃】	-0.905	ヨク	さんずい	12065 (2128位)
【逋】	-0.898	テイ	しんによう・しんにゅう	14023 (2122位)
【謁】	-0.777	エツ	ごんべん・ことば	13776 (2124位)
【彙】	-0.684	イ	けいがしら・いのこがしら	62065 (2068位)
【傲】	-0.641	ゴウ	にんべん・ひと・ひとがしら・ひとやね	67836 (2061位)

【毀】	-0.598	キ	ほこづくり・るまた	44468 (2087位)
【諧】	-0.584	カイ	ごんべん・ことば	12080 (2127位)
【憬】	-0.581	ケイ	りっしんべん	10696 (2131位)

表5は、「知っている」という観点で推定された親密度が特に低い漢字を一覧化したものである。この表から、特定の漢字が実験協力者にとってほとんど認知されていない傾向が浮かび上がる。最も親密度が低いと推定された漢字は「璽」(ジ)であり、推定親密度は-1.515である。この漢字は「たま」や「たまへん」、「おうへん」などの部首を持つ複雑な構造をしており、一般的な日常生活ではほとんど見かけないため、親密度が低いのは自然な結果と考えられる。

次に低い親密度を示したのは「鋼」(コ)と「沃」(ヨク)で、それぞれの推定親密度は-0.905である。これらの漢字もまた、日常的に使用されることが少なく、その結果、実験協力者にとって馴染みが薄いと推測される。他にも「逋」(テイ)や「謁」(エツ)といった漢字が低い親密度を示しており、これらの漢字には、専門分野でのみ使用されるものや教育課程での露出が少ないものが多いことがわかる。

これらの結果を『国語研日本語ウェブコーパス』(NWJC)の文字頻度と比較してみると、頻度が低い漢字ほど親密度も低い傾向が見られる。たとえば、最も低い親密度を示した「璽」は、NWJC頻度においても8218(2133位)と極めて低い頻度を記録している。また、「鋼」や「沃」も、それぞれ5713(2135位)と12065(2128位)という低い頻度となっており、この頻度の低さが認知度や親密度の低さと密接に関連していることが示唆される。

さらに、頻度が比較的高い漢字であっても、親密度が低い場合もある点に注目すべきである。例えば、「傲」(67836、2061位)や「毀」(44468、2087位)といった漢字は頻度的にはやや高めであるものの、推定親密度は-0.641や-0.598と低く、構造の複雑さや使用場面の限定性が親密度に影響を与えている可能性がある。

これらの結果から、漢字の親密度はNWJC頻度に強く影響される一方で、頻度だけでは説明できない要因、たとえば構造の複雑さや意味の専門性、教育課程での取り扱いなども重要な役割を果たしていると考えられる。

7. おわりに

本研究では、東京外国語大学の授業に必要なデータ収集にYahoo! クラウドソーシングを活用し、さまざまなバックグラウンドを持つ参加者から広範なデータを迅速に得ることができた。この手法を用いることで、多様なデータを収集し、研究結果の一般化可能性を高めることができた。

本データを用いた授業では、平均や分散の算出方法、箱ひげ図の描画方法、また部首毎の漢字群に関する統計的検定を演習として実施した。しかしながら、本データはすべての実験協力者がすべての漢字の調査に参加するわけではないため、頻度主義的な単純な分析には限界があった。そこで、Bayesian Linear Mixed Model（ベイズ線形混合モデル）を用いて常用漢字2136字の親密度を推定し、より信頼性のあるデータベースを構築した。このアプローチにより、「知っている」「書ける」「音読みがわかる」「訓読みがわかる」「部首がわかる」という五つの観点に基づく参加者の主観的評価を反映させ、信頼性の高いモデルを提供することができた。

さらに、本研究では『国語研日本語ウェブコーパス』（NWJC）の文字頻度との関連性も考慮した。頻度が高い漢字は、教育課程や日常的な使用において頻繁に目にするため、参加者の認知度や親密度も高い傾向にあることが示唆された。例えば、「車」や「者」といった頻出漢字は、親密度が高く、NWJCにおける頻度も上位に位置していることから、頻度と親密度に強い相関関係があることが確認できた。これに対し、頻度が低い漢字は親密度も低くなる傾向が見られ、NWJC頻度との関連性が示されることで、漢字の親密度は使用頻度や学習経験に強く影響されることが改めて確認された。今回作成したデータは<https://github.com/masayu-a/KANJI-familiarity>にて公開した。

一方で、本データは時間と予算の制約があったため、より精緻な親密度データを作成するためには、さらに研究の余地がある。1つ目は、二値からリッカート尺度への拡張である。本データは授業における統計処理の導入を目的として準備されたため、親密度の観点として「知っている」「知らない」などの二値データを収集した。しかし、既存の研究では5段階から7段階のリッカート尺度を用いて親密度を調査しており、リッカート尺度を使用することで、特にほとんどの人が「知っている」と回答する小学校低学年・中学年で学習する漢字について、親密度をさらに精緻に評価できると考えられる。

2つ目は、1人の調査者が回答する漢字数のカバー範囲である。今回、1人の調査者は最低10文字を回答する設定としたが、より信頼性の高い結果を得るためには、1人あたりの調査する漢字数を増やすとともに、各漢字に対する実験協力者の数を増加させることが可能であると考えられる。これにより、個々の漢字に対する評価のバリエーションを減らし、親密度推定の精度を向上させることができる。

3つ目は、モデリング手法の改善である。データの粒度を細分化し、収集したデータ量を増加させることで、ハイパーパラメータを含めたより詳細なモデリングが可能になると考えられる。特に、個体差や漢字そのものの特性を反映させるために、さらなるデータポイントを導入し、より精緻な予測モデルを構築することができるだろう。

浅原 正幸 (ASAHARA, Masayuki)

国立国語研究所 教授

引用文献

- 天野成昭, 近藤公久 (編) (1999). 日本語の語彙特性. 三省堂, 東京.
- 藤田早苗, 小林哲生 (2020). 単語親密度の再調査と過去のデータとの比較, 言語処理学会第27回年次大会発表論文集, p.p. 1037-1040.
- Tanaka-Ishii, K. and Terada, H. (2011). "Word Familiarity and Frequency." *Studia Linguistica*, 65 (1), pp. 96-116.
- 水谷勇介, 河原大輔, 黒橋禎夫 (2018). 日本語単語の難易度推定の試み. 言語処理学会第25回年次大会発表論文集, pp. 670-673.
- 岡久太郎, 久保圭, 水谷勇介, 河原大輔, 黒橋禎夫 (2019). クラウドソーシングにより収集した語釈文を基にした単語の基本度推定. 言語処理学会第25回年次大会発表論文集, pp. 1499-1502.
- 野呂智哉, 徳田雄洋 (2007). 語釈文記述のための日本語定義語彙の構築に関する一考察. 言語処理学会第13回年次大会発表論文集, pp. 626-629.
- 水谷勇介, 河原大輔, 黒橋禎夫 (2019). クラウドソーシングを用いた習得時期の想起質問に基づく単語難易度データベースの構築. 言語処理学会第25回年次大会発表論文集, pp. 1503-1506.
- 浅原正幸 (2020). Bayesian Linear Mixed Model による単語親密度推定と位相情報付与. 自然言語処理, 27 (1), p.p.133-150.
- 国立国語研究所 (2004). 分類語彙表増補改訂版. 大日本図書.
- 浅原正幸 (2022). クラウドソーシングによる単語親密度データの構築 (2021年版). 言語処理学会第28回年次大会発表論文集, pp. 800-805.
- Bocheng Cheng and Masayuki Asahara (2023). Word Familiarity Rate Estimation for Japanese Functional Words Using and Bayesian Linear Mixed Model. *Proceedings of the Pacific Asia Conference on Language, Information, and Computation (PACLIC 37)*.
- 松吉俊, 佐藤理史, 宇津呂武仁 (2007). 日本語機能表現辞書の編纂. 自然言語処理, 14 (5), p.p. 123-146.

データベース類

山田忠雄（編）（1989）『新明解国語辞典 第四版』三省堂

金田一晴彦・池田彌三郎（編）（1988）『学研国語大辞典 第二版』学研プラス

国立国語研究所（2011）『現代日本語書き言葉均衡コーパス』国立国語研究所

NTTコミュニケーション科学研究所『幼児語彙発達データベース』

NTTコミュニケーション科学研究所『NTT絵本データベース』

国立国語研究所（2021）『「国語研日本語ウェブコーパス」 n-gram データ・頻度表』

ウェブサイト（引用順、いずれも最終アクセスは2024年12月26日）

『令和版単語親密度データベース』<https://www.nttprint.com/lexicon-db/>

『JUMAN++』<https://nlp.ist.i.kyoto-u.ac.jp/?JUMAN%2B%2B>

『WLSP-familiarity (version 4.0) (2024/06/30)』<https://github.com/masayu-a/WLSP-familiarity>

『Cradle』<https://cradle.ninjal.ac.jp/wlsp/>

『日本語機能表現辞書「つつじ」』<https://sites.google.com/edu.teu.ac.jp/cl-lab/> 研究 / 言語資源 / 日本語機能表現辞書つつじ

『TSUTSUJI-familiarity (version 1.0) (2023/11/03)』<https://github.com/masayu-a/TSUTSUJI-familiarity>

『「国語研日本語ウェブコーパス」 n-gram データ・頻度表』<https://github.com/masayu-a/NWJC/tree/master/NWJC-n-gram>

認知的アプローチから見た「硬さ」を表す オノマトペの意味拡張 —「ゴリゴリ」を例に—

A Cognitive Approach to the Semantic Extension of Onomatopoeia Representing "Hardness (硬さ)": The Case of "Gorigori"

葉 書辰

Abstract

In this paper, a cognitive approach is employed to examine the grammatical functions and syntactic characteristics of the onomatopoeia "gorigori," which conveys a sense of "hardness," based on data collected from five corpora and Yahoo! Chiebukuro. After clarifying its usage patterns, this study analyzes the processes and mechanisms underlying its semantic extension. As a result, the interrelationships among the various meanings of "gorigori" and its polysemous structure are revealed, demonstrating how the seemingly chaotic polysemous senses are interconnected and clarifying their positions within a hierarchical structure. Several key findings emerge from this study. Although differences in script usage have led to variations in the number of examples in the corpora, the results indicate no significant difference in the usage patterns and practices of "gorigori" between its katakana and hiragana forms. Additionally, the semantic extension of "gorigori" influences the meaning and scope of the modifying verb and further affects particle selection. Drawing on corpus evidence, its meanings can be categorized into a prototypical meaning (subsense 1), subsenses 2 through 9, subsenses 10A through 10H, and subsenses 11A through 11E, with some discrepancies between actual usage and dictionary explanations. Finally, the mechanisms of semantic extension for "gorigori" involve three frames, five schemas, and three mechanisms.

Keywords オノマトペ、硬さ、ゴリゴリ、使用実態、意味拡張

Onomatopoeia, Hardness, Gorigori, Actual Usage Patterns, Semantic Extension

1 はじめに

本稿では、「硬さ」を表すオノマトペである「ゴリゴリ」を取り上げ、これにどれだけの意味が存在し、それらの意味間にどのような関係があるのかを考察する。認知言語学の観点から「ゴリゴリ」に備わるひとつひとつの意味がどのようなネットワークを形成しているのかを考察することで、「ゴリゴリ」の多義構造を解明することを目的とする。

「硬さ」を表すオノマトペには多くの多義語が含まれている。その中でも「ゴリゴリ」は特に多義性に富んでいる(葉 2024)。たとえば、例(1)では「かたい金属を削る」際の音や、削る際に感じられる「かたい触感」、および「削られている金属のかたい様子」の3つの情報が「ゴリゴリ」という一語に集約されている。例(2)では、削る対象が具体的な「金属」から抽象的な「精神」へと変わり、例(1)の意味用法との関連性が感じられる。例(3)では「背中と腰回りと二の腕」の筋肉が固まっている様子が描写されているが、例(4)と例(5)では「ゴリゴリに固まっている」対象がそれぞれ「彼ら」と「鬱」へと変わっているなど、例(3)～例(5)

の間にも何らかの関連性に基づいた意味関係が成り立っている。

- (1) 硬い金属をごりごりと削る重切削にも不向きなど用途も限られている。
(日経・2002/11/13)⁽¹⁾
- (2) この一年は、まだまだ就農5年目の新米農家である私の精神をごりごりと削ってくる
ような天候不順が多い年でした。
(毎索・2021/01/16)
- (3) 背中と腰回りと二の腕がごりごりに凝り固まっています。
(Yahoo!知恵袋・2019/10/24)
- (4) 彼らはいずれも、米国の夢の復活には、米国の競争力強化が不可欠であるという「競争
力信仰」でごりごりに固まっている。
(毎索・1995/04/23)
- (5) (前略)実は鬱な気分の自分と対峙しているのだ。ぽかぽか陽にあたりながら、ごりご
りに固まった「鬱」をゆっくりほぐす。
(朝日・2021/01/28)

しかしながら、「ごりごり」のこうした多義性やそれをもたらす意味拡張のプロセスについては、いまだ十分な考察がなされているとは言い難い。上述の例から分かるように、「ごりごり」の複数の意味には関連性があるが、それらが具体的にどのように繋がっているかは依然として明らかではない。そこで本稿では多義語の意味を意味ネットワークとして具体化することで、語の多義構造全体における各意味の位置づけが明確になることを、Langacker(2008)らによる認知意味論の枠組みを通じて明らかにする。

以下、本稿では次の手順で議論を進める。まず、第2章では先行研究を検討し、「ごりごり」の分析における課題を明確にする。次に、第3章では本稿の理論的枠組みを提示する。続く第4章では、研究課題を具体的に示す。第5章では、「ごりごり」の複数の語義を記述し、その中からプロトタイプの意味を選出し、語義間の関係や意味拡張のプロセス、意味ネットワークを構築する。最後に、第6章では結論および今後の課題について述べる。

2 先行研究及び問題点

2.1 オノマトペの意味拡張に関する先行研究

認知言語学の発展に伴い、認知的アプローチによるオノマトペの多義性や意味拡張に関する研究が進展している(呂 2004、三上 2006、井上 2013、虎谷 2013、浜野 2014、趙 2014、武藤 2015、張 2017、趙 2020など)が、本研究では、これらの研究を踏まえ、次の3つの問題点について言及する。

まず、先行研究ではオノマトペのひらがな表記とカタカナ表記を区別せずに考察したものがほとんどである。表記によるオノマトペの用例数、使用傾向、意味用法に違いがあるか

(1) 本稿で使用された用例は「現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下「BCCWJ」)」「朝日新聞クロスサーチ」「日経テレコン」「毎索」「ヨミダス」の5つのコーパス及び「Yahoo!知恵袋」から収集されたものである。紙幅の関係上、本稿では「朝日新聞クロスサーチ」と「日経テレコン」を出典においてそれぞれ「朝日」と「日経」と略す。

どうか、そしてその違いがある場合にはどのような違いがあるのかについて、十分な討論がなされていない。井上(2013)は「さらさら」「がたがた」「ばしゃばしゃ」「りんりん」「ちょきん」の5つのオノマトペの多義性を考察しているが、これら5語にはいずれもひらがな表記とカタカナ表記が含まれている。しかし、表記とオノマトペの用例数、使用傾向、意味用法との関係については、まだ明確にされていない。

次に、意味拡張の分類やそのプロセスに関する分析、ならびに基本義を押さえる点について、さらに精緻化する余地がある。例えば、趙(2014)は「からから」という日本語のABAB型オノマトペにおける擬音語の擬態語化を分析し、「軽い車の音」「風に吹かれている枯葉の状態」「乾いた喉の状態」(いずれも趙 2014:44)という3つの意味の関係性を説明している。しかし、小野(2007)によると、「からから」には「金属製や木製のものなど、かたいものがふれ合ってたてる明るくひびく音」「高く笑う声」「中に何もいないさま」(いずれも小野 2007:48-49)という3つの意味もあるため、趙(2014)で「軽い車の音」を意味の出発点とする理由が明示されていない。また、小野(2007)で挙げられた3つの意味と趙(2014)で分析された3つの意味の関連性も検討されていない。

最後に、語のフレーム知識と辞書説明にはしばしばギャップが生じるため、著者自身の内面的な判断や辞書に記載された意味を中心にオノマトペの意味拡張を分析している考察には、十分に検討されていない意味の発生という不備が見られる。例えば、趙(2020)は「ねっとり」に関して「粘液状のものが一面にまつわりついて離れないさま」「ねっとりした口調・視線」「ねっとりした感情」「ねっとりした性格」(いずれも趙 2020:25-26)という4つの意味の関係性と意味拡張の動機を説明しているが、例えば「(前略)鋭い眼光とねっとりした色彩が強烈。(毎索・2010/10/12)」「真夏の海を連想させるココナツの甘くねっとりした香りだ。(朝日・1996/01/01)」「美音ではなく、ねっとりした音を」が口癖。(朝日・2008/01/22)」などの用例は、上記の解釈では説明できない。

次節でも触れるように、辞書の解釈では捉えきれない「ゴリゴリ」の用例が多数存在し、「ゴリゴリ」の意味が動的に変化する可能性もあるため、使用実態と辞書の解釈には明確な乖離が見受けられる。そのため、「ゴリゴリ」の意味的特徴や使用状況を把握したうえで、意味ネットワークを構築することが求められる。さらに、虎谷(2013)で指摘されるように、「多義オノマトペは品詞が異なれば意味も変わる」(虎谷 2013:86)ため、オノマトペの意味的特徴や使用実態を把握するには、統語的特徴や文法機能の考察も重要である。

2.2 「ゴリゴリ」の語義に関する既存の研究

本節では、飛田・浅田(2002, 2018)、小野(2007)、山口(2015)の4冊の擬音語・擬態語辞典を取り上げ、「ゴリゴリ」の意味記述について検討する。これら4冊を扱う理由は以下の通りである。①これらの辞書は、オノマトペ研究において広く使用されている代表的な辞書である。②記述されている意味や用法が他のオノマトペ辞書や国語辞典に比べて豊富である。近年、新たに刊行された辞書も存在するが、和英・和独などの対訳辞書(松本 2020、

根本 2015)や、特定ジャンルに特化した辞書(永田 2024)、オノマトペの面白さやユニークさを強調する辞書(小野 2018、小野 2021)などがほとんどであり、意味や用法に関して十分な記述がなされていない。以上の理由から、本稿では上記4つの辞書を中心に検討する。まず、飛田・浅田(2002)では次のように記述されている。

【表1】 飛田・浅田(2002:157-158)に基づいた「ゴリゴリ」の意味解釈

ゴリゴリ
① 比較的厚くて硬い物を連続して摩擦する音を表す。ややマイナスイメージの語。
② 重くて硬い物が連続して摩擦したり衝突したりする様子を表す。ややマイナスイメージの語。
③ ①から進んで、無理強いする様子を表す。マイナスイメージの語。単独で述語にかかる修飾語になる。相当の摩擦と騒音が出ることを承知の上で、無理強いする様子を表し、不快・違和感の暗示を伴う。

飛田・浅田(2002)によると、「ゴリゴリ」は様子を表す際に、常にマイナスのイメージを伴い、不快感を暗示するとされている。しかし、以下の例からは、必ずしもそうではないことがわかる。

(6) 男女関係なく、対等に音楽をごりごりやりたかった。(朝日・2018/04/05)

(7) 地域ごとにコスト管理を徹底したり、抜本改革をゴリゴリ進めている。
(日経・2019/10/24)

例(6)と例(7)は、力を入れて何かを行うという意味で使用されているが、「無理強いする様子」よりも「一所懸命」「ひたむきに努力する」「積極的に」といったニュアンスで用いられていると考えられる。これらの例は、飛田・浅田(2002)の解釈に対する反論として挙げられるものだが、両者には約16年の間隔があり、「ゴリゴリ」の意味は現実の事象と関連し合って変化したという通時的な変化として捉える方が適切である。なお、飛田・浅田(2018:157-158)でも、2002年と同じように「ゴリゴリ」の意味を解釈しているが、この語の意味やそれに関わるフレーム知識が動的に変化する可能性が考慮されていない。上記のことからも分かるように、辞書に頼り過ぎて多義語を分析する場合、語の意味を断片的に考察する危険性があると予想される。

続いて、小野(2007)および山口(2015)の意味記述について以下に示す。

【表2】「ゴリゴリ」の意味解釈(小野 2007:136、山口 2015:181に基づく)

小野 (2007:136)	① 強く力を込めてこすったり、踏みつけたり、かんだりする音。
	② 厚い織物などの、かたくこわばったさま。
	③ かたくなで頑迷なさま。
山口 (2015:181)	① かたい物を嚙んだり、かじったりする時に出る音。また、歯ごたえのある様子。
	② 表面に凹凸があつてなめらかでない様子。厚くてかたい布にもいう。
	③ 力を入れてかたい物をこする様子。
	④ 筋肉など体が鍛えられていて、弾力があつてかたい様子。

山口(2015)の意味④では、「ゴリゴリ」を「鍛えられた筋肉が弾力があつてかたい」と解釈しているが、「ゴリゴリ」が筋肉のかたさを表す場合、「弾力がある」という意味は伴わないことが多い。例(8)～例(10)における「ゴリゴリ」は「筋肉がかたい」といった意味で使用されているが、これは「筋肉が発達している」という意味ではなく、「凝りや血行不良、浮腫みによって筋肉が緊張し、かたくなっている」という意味であると考えられる。また、例(11)のように、「ゴリゴリ」が筋肉を修飾する際には、「筋肉が太い」や「筋肉モリモリ」といった意味が含意されることが多い。

(8) 陸上長距離をやっているもも裏がものすごく硬いです。つまむと**ゴリゴリしています**。

自分で揉んでほぐすのが難しいです。どのようにすれば硬さがとれますか？

(Yahoo!知恵袋・2022/03/25)

(9) ふくらはぎの筋肉がガチガチに硬くて悩んでいます。(中略)むくみは朝はないのですが、

ふくらはぎは朝も重いままです。触ると**ゴリゴリする**ような感じで、押すと筋肉痛のような痛みがします。

(Yahoo!知恵袋・2011/08/21)

(10) **筋肉自体もゴリゴリに凝り固まっている**ので、先生の指がポイントを押さえていく度に、「アガッ、ンググッ」と声が出てしまう。

(朝日・2016/04/04)

(11) ボディビルダーのような**ゴリゴリの筋肉**じゃなくて見た目痩せてるけど引き締まったバキバキの筋肉を造り上げる方法を教えて下さい！

(Yahoo!知恵袋・2023/10/06)

また、飛田・浅田(2002, 2018)、小野(2007)、山口(2015)は「ゴリゴリ」について意味の説明を行っているが、実際の用例の中には、辞書に載っている意味だけでは説明が難しい

ものが依然として多く存在する。さらに、各辞書では「ゴリゴリ」の事例を個別に提示し、それぞれがどのような意味で使用されているかについて記述レベルでの分析にとどまっている。そのため、「ゴリゴリ」の各意味間にどのような関係があるのか、またその意味がどのように拡張していったのかについては、解明されていない。このような背景を踏まえ、「ゴリゴリ」の新たな意味記述を行い、各意味間の関係性や意味拡張のプロセス、意味ネットワークの解明が求められる。

3 理論的枠組み

3.1 ネットワークモデルの定義と有効性

Langacker(1987, 1988, 1999, 2000, 2008, 2011)では、ネットワークモデルが取り上げられ、ある多義語の全ての語義がプロトタイプの意味からの拡張と、語義の共通成分であるスキーマによる意味の統合によって関連付けられるとされている。鷺見(2013)は「ネットワークモデルとは、カテゴリー化関係によって結び付けられる複数の成員が、プロトタイプからの拡張とスキーマからの精緻化によって構造化されると考えるモデルである」(鷺見 2013:35)と定義している。スキーマとは、「本来異なる構造の違いを大まかな見方を取ることで抽象する事によって生じる共通性」のことである(Langacker 2000:65, 坪井訳)。プロトタイプからの拡張とスキーマからの精緻化は、類似性に基づくものであり、それぞれメタファーとシネクドキーに相当する(鷺見 2013:37)。

しかし、類似性に基づくネットワーク・モデルでは、メタファーとシネクドキーによる意味拡張は表せるが、メトニミーによる意味拡張は表せないという限界が見受けられる(瀬戸 2007, 松本 2010)。このような欠陥を改善するために、鷺見(2013)は「スキーマの役割はカテゴリー化を支えることであることを考えれば、メトニミー的拡張を支えるフレームは、ネットワーク・モデルと相容れないものではない」(鷺見 2013:48)と論じている。この点に関して、早瀬(2017)もフレーム構造を明確化したうえでのメトニミーによる意味ネットワークの記述ができると支持し、「フレームをネットワークに取り込むことで、メタファー・メトニミー・シネクドキーの階層性や中間的な事例を扱うことができるので、放射状カテゴリーよりも精緻な表示が可能となる」(早瀬 2017:101)と指摘している。靱山(2021)もフレーム構造を取り入れた「統合モデル」を提唱し、「この統合モデルは、放射状ネットワークモデル、スキーマティック・ネットワークモデル、フレームに基づくモデルを統合したものであり、3つのモデルの優れた点はそのまま継承し、さらにこれらを統合することによって、ある多義語の複数の意味すべてを包括的に記述・統合し、多義構造を明示することができるモデルである」(靱山 2021:239-240)と説明している。

以上の内容を踏まえ、本稿は従来のネットワークモデル構造を改善し、メトニミー的拡張やその基盤となるフレームもモデルに取り込むことによって、多義語の意味拡張のプロセスをより明確かつ詳細に示すことを目指している。

3.2 多義語の語義間の関係性及び多義語分析のプロセス

認知言語学では、一つの多義語が持つ複数の語義を一つのカテゴリーとして見なし、意味ネットワークの構築を試みている(王 2019:15)。日常の言語使用における多義認識の問題も、その語を用いる我々の視点との関連から説明が試みられることになる(松中 2022:203)。しかし、どのようにして一つの多義語が持つ複数の語義の関係性を解明するかという問題が浮かび上がってくる。多義語の語義間の関連性について、中野(2017a:18)は最も一般的な捉え方として、「基本義－派生義」という関係で捉えるべきだと述べている。松中(2022)は「認知科学では、多義現象を主にカテゴリーとメタファーという視点から捉え」(松中 2022:203)と述べ、「そうした意味の拡張を支えているのが中心義の存在であり、各語義は中心義からメタファー的に推移、拡張して多義が形成される」(松中 2022:203)と説明している。しかし、多義現象の発生には、メタファーだけでなく、メトニミーやシネクドキーが関与する場合もあることが、中野(2017b:45)や靱山(2021)などによって指摘されている。

多義語の意味分析については、これまで様々な方法が提案されてきたが、日本語の事例を中心に詳細な記述と検討が行われているものとして、靱山による一連の研究が挙げられる。靱山(2001, 2002, 2019, 2020, 2021)は、多義語の分析において解明すべき課題として、少なくとも4つの点を指摘している。年代による細かな違いはあるものの、ここでは最新の靱山(2021:15)の記述に基づき、以下の4つの課題を挙げる。

- ① 何らかの程度の自立性を有する複数の意味(多義的別義)の認定
- ② プロトタイプの意味の認定
- ③ 複数の意味の相互関係の明示
- ④ 複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明

4 研究課題と研究方法

4.1 研究課題

先行研究の問題点を踏まえ、本稿では以下の2つの研究課題を設定する。

- ① 「ゴリゴリ(ごりごり)」の文法機能や統語的特徴を考察し、その使用実態を把握すること。
- ② 認知的アプローチによって「ゴリゴリ(ごりごり)」の意味拡張プロセスを明らかにし、意味のネットワークを究明すること。

4.2 研究方法

分析データとして、「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」「朝日新聞クロスサーチ」「日経テレコン」「毎索」「ヨミダス」という5つのコーパス、およびYahoo!知恵袋の用例を利用する。分析のプロセスに関して、まず5.1節では、「ゴリゴリ(ごりごり)」の文法機能や統語的特徴を考察し、その使用実態を把握する。次に、5.2節では、2.2節の内容およびコーパスから収集されたデータを踏まえ、「ゴリゴリ」の複数の意味やプロトタイプの意味を認定

する。最後に、5.3節では、「ゴリゴリ」の複数の意味の関連性を分析し、意味のネットワークを描き出す。

5 考察

5.1 「ゴリゴリ(ごりごり)」の使用実態や統語的特徴

5つのコーパスと1つのサイトを用いて「ゴリゴリ」のひらがな表記とカタカナ表記の用例数を調査した結果、表3に示す通り、どのコーパスにおいてもカタカナ表記の「ゴリゴリ」の用例がひらがな表記を大幅に上回っていることが確認された。この結果は、「ゴリゴリ」が「硬さ」を表すだけでなく、現在では程度を表す表現としても頻繁に使用されているため、柔らかいイメージを持つひらがな表記よりも、かたくて曲がりにくいイメージを連想させるカタカナ表記の方が適していると推測される。

【表3】「ゴリゴリ」のひらがな表記とカタカナ表記の用例数

	ゴリゴリ	ごりごり
BCCWJ	42 件	14 件
朝日	271 件	115 件
日経	96 件	55 件
毎索	159 件	59 件
ヨミダス	219 件	67 件
Yahoo!知恵袋	約 33629 件	約 3375 件

(2024/1/3 最後の閲覧)

【表4】 朝日新聞クロスサーチに基づく「ゴリゴリ」の使用実態(上位計200例²⁾)

	ゴリゴリ (ごりごり)													
	連用用法			連体用法						述語用法			その他	合計
	ト	ニ	/	ナ	ニ	ト シ タ	シ タ	ノ	/	ダ	シテ	スル	省略・引 用など	
ゴリゴリ	26	5	15	2	1	5	3	29	5	0	0	1	8	100
ごりごり	30	1	27	0	0	3	2	29	1	0	0	2	5	100
合計	56	6	42	2	1	8	5	58	6	0	0	3	13	200

(2023/12/31閲覧)

(2) 表3から分かるように、5つのコーパスの中で「朝日新聞クロスサーチ」における「ゴリゴリ(ごりごり)」の用例数が最も多かったため、これに基づいて調査を行った。また、ひらがな表記「ごりごり」の用例数は115件と少なかったため、両表記の上位100例をそれぞれ抽出し、分析を行った。

しかし、表4に示すように、新聞コーパスにおいては「ゴリゴリ」と「ごりごり」の表記による使用法や実際の使われ方に大きな違いは見られなかった。両表記において、用言を修飾する際には「と」や「ゼロ型」が多用され、「に」はあまり使用されていない。また、名詞を修飾する際には「の」が頻繁に使用されていることが確認された。

【表5】 Yahoo!知恵袋に基づく「ゴリゴリ」の使用実態(上位計400例)

	ゴリゴリ (ごりごり)													
	連用用法			連体用法						述語用法			その他	合計
	ト	ニ	/	ナ	ニ	ト シ タ	シ タ	ノ	/	ダ	シテ	スル	省略・ 引用など	
ゴリゴリ	3	22	19	3	1	2	3	109	24	4	1	4	5	200
ごりごり	3	23	30	4	3	3	10	74	26	4	2	11	7	200
合計	6	45	49	7	4	5	13	183	50	8	3	15	12	400

(2024/1/2 閲覧)

さらに、表5に示すように、知恵袋においても、表記による使用法や実態の違いは依然として見られなかった。しかし、用言を修飾する際には「に」と「ゼロ型」が多用され、「と」は逆にあまり使用されていなかった。また、名詞を修飾する際には「の」が頻繁に使われている一方で、「の」を介さずに名詞に直接結びつく例もかなり多く見られた。

【表6】 各コーパスに基づく「ゴリゴリ」に後続する助詞の傾向

	BCCWJ	朝日	日経	毎索	ヨミダス
ゴリゴリと (ごりごりと)	11件	95件	37件	53件	76件
ゴリゴリに (ごりごりに)	1件	8件	4件	7件	5件

(2023/12/31 閲覧)

表4と表6に示すように、各新聞コーパスでは「に」よりも「と」が多用されている傾向が確認された。この理由としては、以下の2点が考えられる。①新聞記事などの書き言葉コーパスにおいて、「ゴリゴリと音がする」「ゴリゴリと音を立てる」「ゴリゴリと音が鳴る」など、引用的な意味合いで「と」が使用される場合がある。②「ゴリゴリ」が修飾する動詞には、「ほぐす」「擦りつける」「擦る」「すり潰す」「削る」「摩擦する」「切り落とす」「すりおろす」「挽く」など、実際に硬い物と接触し摩擦する動作を表すものが多く、動的・過程的な意味を持つ動

詞が多いことが挙げられる。

一方、知恵袋では「と」よりも「に」が多用されている傾向が見られた。その理由として、以下の2点が考えられる。①「ゴリゴリにかわいい」「ゴリゴリに苦手」「ゴリゴリに強め」「ゴリゴリに激しい」「ゴリゴリに甘い」など、形容詞や形容動詞を修飾する用例が多く見られるが、このような用法は新聞記事などの書き言葉コーパスにはあまり見られない。②「ゴリゴリ」が修飾する動詞としては、「ゴリゴリに広告を使う」「ゴリゴリにスピってる」「ゴリゴリに病んでいる」「ゴリゴリに狂っている」「ゴリゴリに光る」「ゴリゴリにヘッドホンする」「ゴリゴリにハマっている」「ゴリゴリに鍛えている」「タトゥーゴリゴリに入ってる」「ゴリゴリに頑張る」「ゴリゴリに付き合っている」「スカウトマンがゴリゴリにいる場所」など、実際に摩擦する動作を表す動詞から脱却し、静的・結果的・描写的な意味を持つものが多いことが挙げられる。これにより、「ゴリゴリ」の意味が拡張し、修飾する用言の意味や範囲が広がり、その結果、助詞の選択にも影響を及ぼしていると考えられる。

5.2 「ゴリゴリ」の意味分析

本節では、調査したコーパス及びYahoo!知恵袋の用例に基づき、「ゴリゴリ」の複数の意味を認定し、ボトムアップ的に記述を試みる。認定した「ゴリゴリ」の各意味については、具体的な例文を用いて説明する。

【多義的別義1】

(12) (前略)医師が頭にドリルを当ててゴリゴリと音を立てながら穴を開けていった。

(日経・2018/08/27)

(13) 口に入れると、ごりごりという太い音が耳に響いた。

(日経・2012/07/21)

(14) これをすり鉢の中で、ごりごりごりごりとすってトロロ汁をつくる。

(日経・2008/10/30)

例(12)から例(14)はいずれも、かたい物をこすり合わせたり噛んだりする際に発生する連続的な摩擦音を「ゴリゴリ」として捉えている。小野(2007)や山口(2015)では、「ゴリゴリ」がそれぞれ「強く力を込めてこすったり、踏みつけたり、噛んだりする音」や「かたい物を噛んだり、かじったりする時に出る音」と解釈されている。しかし、これらの音はすべてかたい物を摩擦する際に発生する音であるため、飛田・浅田(2002)が提示した「比較的厚くて硬い物を連続して摩擦する音」というフレーズで一括して説明できる。したがって、本稿では、飛田・浅田(2002)の解釈に基づいて多義的別義1を記述する。以上を踏まえ、この種の「ゴリゴリ」の意味を以下のように定義する。

多義的別義1 <比較的厚くてかたい物を連続して摩擦する音>

【多義的別義2】

- (15) ゴリゴリのロックだけでなく、いろいろな経験をした自分の音楽の奥行きや音の深みを伝えたい。 (朝日・2016/03/11)
- (16) フリフリのメイド姿の女の子が奏でる、ゴリゴリのハードロック。 (朝日・2018/05/07)
- (17) 例えばX-JAPANのアルバムの中にはゴリゴリのヘビーメタルも、ロマンチックなバラードもある。 (日経・2007/06/20)
- (18) 実際、国府のソロピアノには、ゴリゴリとエネルギッシュなジャズのイメージはなく、滑らかで透明度の高いクラシックの小品集のようである。 (毎索・2015/01/08)

(15)～(18)の用例では、「ゴリゴリ」が音楽ジャンルや演奏スタイルを形容する際に使用されており、物理的な摩擦音とは異なる抽象的な意味で使われている。これらの例は、力強さや迫力、重厚感といった特性を強調する表現としての「ゴリゴリ」の使用を示している。このように、これらの用例における「ゴリゴリ」は、＜音楽が激しい＞という意味で解釈できる。また、「ヘビーメタル」「ロック」「ハードロック」などの言葉を修飾することが見られる。

こうした曲で、ギターやベースなど金属を含む楽器が掻き鳴らされると、別義1の＜比較的厚くてかたい物を連続して摩擦する音＞が発生しやすく、それが結果的に＜音楽が激しい＞という印象を与えると考えられる。これは因果関係に基づく隣接性のメトニミーによる拡張として捉えられる。

さらに、＜比較的厚くてかたい物を連続して摩擦する音＞から＜音楽が激しい＞という意味へのメトニミー拡張を可能にする要因は、「重金属音楽を演奏する際、物理的な摩擦音が伴い、激しく、迫力のある力強い演奏スタイルになる」という音楽に関する百科事典的知識⁽³⁾である。このように、別義1から別義2への意味拡張は、「音楽フレーム」に基づくメトニミーの拡張としても解釈できる。これにより、「ゴリゴリ」という表現は音楽の特定のジャンルや演奏スタイルの激しさ、力強さを象徴的に指すようになる。以上を踏まえ、この種の「ゴリゴリ」の意味を以下のように記述する。

多義的別義2 <音楽が激しい>

(3) 「百科事典的知識」について、靱山(2020:50)は「その語から想起される(可能性のある)知識の総体」と定義している。また、ある語の百科事典的意味を構成する要素として「その語から連想される(可能性のある)もろもろの事柄。そこには、その語の基盤となる背景知識(フレームなど)も含まれる」と靱山(2020:51)は述べている。具体的な応用例として、早瀬(2017:98)は「『ヒロシマ』で『原子爆弾』や『核兵器』を想起させるメトニミーの場合、『原子爆弾が落とされた町』という場所と事態をもとに、A(ヒロシマ)からB(核兵器)への拡張がなされたことになる」と述べている。この際、メトニミー拡張を許容するうえで重要な役割を果たすのは、「ヒロシマに原爆という核兵器が落とされた」というフレーム知識である。

【多義的別義3】

(19) 残念ながら、焼き芋は、帰宅時間に間に合わず、半焼けのゴリゴリ。

(朝日・1999/11/11)

(20) 足つぼのゴリゴリは老廃物じゃなくて骨ですよ？？

(Yahoo!知恵袋・2020/05/28)

例(19)と例(20)を見てわかるように、「ゴリゴリ」は名詞として使用され、かたいものを表すことができる。この意味で用いられる際、例(19)のようにかたい食べ物を指す場合もあれば、例(20)のように身体部位に関連する用例も見られる。以上から、この意味の「ゴリゴリ」を以下のように記述する。

多義的別義3 <かたい物>

【多義的別義4】

(21) 筋肉自体もゴリゴリに凝り固まっているので、(後略)。(朝日・2016/04/04)

(22) (前略)ストレスなどでゴリゴリになっている人は、どうやってリラックスしていいか、分らない。(朝日・1987/08/30)

(23) ところが口にすると、身が固くてごりごり。(毎索・2005/09/10)

(24) ゴリゴリとした歯触りだった。(毎索・2019/08/28)

(25) ヨーロッパの水で煮ると米も野菜もゴリゴリになる。(日経・1989/12/01)

例(21)～例(25)では、「ゴリゴリ」が身体や物のかたさを示している。特に、筋肉が凝り固まった状態や食べ物の硬質な性質を描写する際に使われている。例(21)での「ゴリゴリ」は、筋肉が強く凝り固まってかたくなっている様子を表しており、外的な力や状況(おそらくストレスや身体的な負荷)が筋肉に影響を与え、その結果として硬直した状態が生じていることを示している。例(22)でも、ストレスが体や心に働きかけ、その結果として「ゴリゴリ」になっている状態、つまり硬直したりリラックスできない状態を指している。

例(23)と例(24)では、食べ物がかたい食感を持っていることを意味しており、「何らかの力が加わって」そのかたさを強調している。例(25)は何らかの外的な力(この場合は水の成分)が影響を与え、食材がかたくなる現象を示している。これらの例から、「ゴリゴリ」は、物理的な力や状況的な力(ストレスや環境的要因など)が作用し、その結果として対象がかたくなる、または固まる様子を表現していることが分かる。したがって、別義4「ゴリゴリ」は「何らかの力が働き、結果としてかたくなった状態、様子」を示すと考えられる。以上のことから、この種の「ゴリゴリ」の意味を次のように記述する。

多義的別義4 <何らかの力が加わり><結果としてかたくなった状態や様子>

【多義的別義5】

- (26) ごりごりの敬語を面接で使うと不自然に聞こえますか？それとも丁寧に接するにこしたことはないのでしょうか。 (Yahoo!知恵袋・2022/12/22)

例(26)の「ごりごり」は言葉が硬直しており、丁寧すぎて不自然な印象を与える際に使われる。このことから、この種の「ごりごり」の意味は、次のように記述できる。別義4から別義5への移行において、かたい対象が具体的な物理的存在から抽象的な言葉へと変化し、これは類似性に基づくメタファーによる意味の拡張である。

多義的別義5 <言葉がかたい状態が><そのかたさを変えようとする力に対して><元の状態を保ち続ける様子>

【多義的別義6】

- (27) イカついゴリゴリの見た目が好きで、付き合うならこういう人がいいなと思っているのですが。 (Yahoo!知恵袋・2023/06/30)
- (28) 見た目がめちゃ怖くてゴリゴリの人にも立ち向かう勇気を付けるにはどうしたらいいですか？ (Yahoo!知恵袋・2020/10/01)
- (29) 確かに私はイカツイような顔とはほど遠いです。ハタチを過ぎてもお酒を買う時に店員さんに『未成年ですか？身分証の提示をお願いします』としばしば言われる。私はもっとゴリゴリしている顔というか、イカツイ顔になってみたいと思うんですけど、こういう場合は顔を整形すればなんとかなるもんなんですか？ (Yahoo!知恵袋・2014/04/02)
- (30) 私は爽やかなフェイスでエキサイティングな性格になることがあります。しかし世の中には私の逆で、ゴリゴリした顔で大人しい性格の人もいると思います。あなたは私のように『爽やかな顔でエキサイティングな人』と『ゴリゴリした顔で大人しい人』ではどちらの方が印象が良いですか？ (Yahoo!知恵袋・2014/04/02)

葉(2024)は、「ごりごり」が「硬さ」を表す時、付随的に「物の表面がなめらかではなく、角張っている」という意味が含意されていないが、岩石やダイヤモンドなどのように、「(触覚的に)硬いもの」には、不規則的な輪郭を有するという視覚的特徴が認められる場合があるということが考えられる。このように、「硬い」という触覚的特徴と「硬いものが不規則的な輪郭を持つさま」という視覚的特徴が同時に認められる場合があるというメトニミー

の基盤がある」(葉 2024:139)と述べている。また、この「硬いものが不規則的な輪郭を持つさま」という視覚的特徴が「顔」や「筋肉」に焦点化されることにより、「ゴリゴリ」の意味も変化することが葉(2024)によって指摘されている。しかし、この2つの焦点化された状況に関する意味の説明や認知的基盤のフレーム分析は不十分であり、さらに、葉(2024)では「ゴリゴリ」の意味をボトムアップ的に記述していないため、これら2つの意味が全体の意味ネットワーク内でどのように位置づけられ、他の意味とどのように関連しているのかを理解することが難しい。

前述の「硬いものが不規則的な輪郭を持つさま」という視覚的特徴が「顔」に焦点化されると、「ゴリゴリ」の意味は「かたい」という基本的なニュアンスから拡張され、顔に関しては「凹凸があり、粗く、柔らかさが無い」といった特徴を指すようになった。具体的には、以下のような変化が見られる。

例(27)では、「ゴリゴリの見た目」という表現が使用されており、ここでは力強く、荒々しく、男らしい外見を指している。例(28)では、「ゴリゴリ」は威圧感を与える印象が含まれている。顔が持つ強さや力強さが、他人に圧力を感じさせるような印象を与える場合に使われる。例(29)では、話し手が自分の顔が「ゴリゴリ」、すなわち強面であることを望んでいることが示されている。例(30)では、「ゴリゴリ」は無骨で厳つい外見を指しており、その外見に反して穏やかな性格が強調されている。

これらの例に共通しているのは、「ゴリゴリ」が「力強い」「荒々しい」「男らしい」といった強い印象を与える外見に関連して使われている点である。このような意味の拡張により、「ゴリゴリ」という言葉は、顔における不規則な輪郭や目立つ骨格を強調する際に使われるようになり、特に丸みが少なくシャープで凹凸のある印象を与える顔の特徴を表す際に適用されるようになった。この背景を踏まえて、「ゴリゴリ」の意味を以下のように記述できる。

多義的別義6 <人のある部位(顔)><表面に凹凸があり、滑らかでない様子><ごつごつしていて、柔らかくない様子>

【多義的別義7】

(31) たくさん食べて、ゴリゴリのマッチョになりたい。(毎索・2015/02/17)

(32) ボディビルダーのようなゴリゴリの筋肉じゃなくて見た目痩せてるけど引き締まったバキバキの筋肉を造り上げる方法を教えて下さい！

(Yahoo!知恵袋・2023/10/06)((11)再掲)

例(31)と例(32)における「ゴリゴリ」は、筋肉が非常に発達し、表面がかたく、筋肉の凹凸が目立つ状態を表現している。「ゴリゴリのマッチョ」や「ゴリゴリの筋肉」という表現は、筋肉の大きさや発達、そして力強さが強調されている。この文脈での「ゴリゴリ」は、単に

物理的なかたさだけでなく、筋肉の外見や状態を視覚的に描写する際に使われている。

特に、例(32)における「見た目は痩せているけど」というフレーズからも分かるように、筋肉のかたさだけでなく、その大きさや発達が重要な要素として際立っている。細身であっても、しっかりと引き締まり、発達した筋肉が理想とされており、「ゴリゴリの筋肉」という表現は、筋肉の隆々とした様子を示す。筋肉が非常に発達している場合、その表面にラインや輪郭の起伏が現れることが考えられる。ここで注目すべきは、別義6が「硬いものが不規則的な輪郭を持つさま」を「顔」に焦点化しているのに対し、別義7では焦点化される対象が「顔」から「筋肉」へと変わる点である。これにより、「ゴリゴリ」は例(31)～例(32)のように「筋肉が盛り上がり、筋肉隆々であること」を表す意味として拡張されている。したがって、この種の「ゴリゴリ」の意味は、以下のように記述できる。

多義的別義7 <人のある部位(筋肉)><表面に凹凸があって滑らかでない様子><筋肉が発達している様子>

別義6と別義7はいずれも、別義4から「硬いものが不規則的な輪郭を持つさま」という視覚的特徴を基盤とするメトニミーによる拡張であるため、ここでは「視覚的フレーム」という概念が考えられる。この視覚的フレームに基づくメトニミーの拡張では、かたさに加えて、不規則な形状や凸凹のある外観が強調され、それが「顔」や「筋肉」のような身体的特徴に適用される。このように、触覚的な「かたさ」から、視覚的な「凸凹が目立つ様子」への意味の広がりが見られる。

【多義的別義8】

- (33) 焙煎したコーヒー豆を鉄の受け皿に入れ、握り棒を前後に転がしてゴリゴリと豆を挽く。 (日経・1993/07/10)
- (34) 歯鑪と呼ばれる先端におろし金のようなやすりがついた金属製の道具でゴリゴリと削って治療した。 (日経・2014/08/13)
- (35) 毎日、猫のように柱に肩をゴリゴリとこすりつけないとおさまらない。 (日経・1997/09/29)

例(33)から例(35)における「ゴリゴリ」は、それぞれ「豆」「金属製の道具」「柱」といったかたい物を力を入れて連続的に摩擦する様子を表現している。別義1である<比較的厚くてかたい物を連続して摩擦する音>が発生すると同時に、<力を入れてかたい物を連続して摩擦する様子>という意味も同時に発生し、別義8は、音の描写である別義1から「摩擦行為」そのものへのメトニミーによる拡張であると考えられる。摩擦音からその行為そのものを指す意味への移行は、力を入れて行う動作と音が密接に関連していることを示して

おり、音と行為が一体となっていることがメトニミー的に捉えられている。したがって、この種の「ゴリゴリ」の意味は以下のように記述できる。

多義的別義8 <力を入れてかたい物を連続して摩擦する様子>

別義1と別義3・4・8の間には、メトニミーによる意味拡張が見られる。<比較的厚くてかたい物を摩擦する際の経験>を1つのフレームと考えると、このフレームの「音」の側面が焦点化されると、語の意味は別義1<比較的厚くてかたい物を連続して摩擦する音>に展開される。フレームの「様子」の側面が焦点化されると、「ゴリゴリ」の意味は別義8<力を入れてかたい物を連続して摩擦する様子>となり、フレームの「モノ」の側面が焦点化されると、語の意味は別義3<かたい物>となる。最後に、「モノの性質」の側面が焦点化されると、語の意味は別義4<何らかの力が加わり><結果としてかたくなった状態や様子>へと拡張される。このフレームは、<比較的厚くてかたい物を摩擦する際の経験>という摩擦に基づいた百科事典的知識に依拠している。

【多義的別義9】

(36) 大根おろしのように心がごりごりとすり下ろされ、痛みとみずみずしさが同時にわき上がってくる。 (朝日・2020/09/26)

(37) 介護の手伝いでゴリゴリメンタルを削られます。 (Yahoo!知恵袋・2022/08/16)

例(36)と例(37)における「ゴリゴリ」は、物理的な摩擦や削る動作とは異なり、精神的な苦痛や負担を表現している。具体的には、例(36)は感情や心が強烈に削られるような痛みや感覚を示しており、例(37)は精神的な負担やストレスを表している。別義8における物理的な摩擦や削る動作を示す「ゴリゴリ」と、別義9における精神的な苦痛や負担を示す「ゴリゴリ」には、類似性が見られる。以上から、この種の「ゴリゴリ」の意味を以下のように記述する。

多義的別義9 <体力、精神力、メンタルを削る様子>

次に、別義10について記述する。別義10は、<能力、性格、考え、意志などの人間の性質が、その推進力の強さを示す様子>を表している。この別義10は、大きく8つの意味に下位分類でき、それぞれ10A～10Hとして示す。以下、具体例を挙げて説明していく。

【多義的別義10A】

(38) とはいえ、ごりごりのその剛腕も、老獪な「重鎮」たちにかかつてはまだまだのようで。
(朝日・2009/07/17)

例(38)の「ごりごり」は、強い力や影響力を持つ様子を示す表現である。つまり、例(38)での「ごりごり」は、物理的な摩擦や削る動作とは関係なく、力強さや強調された影響力を示す形容詞として使われている。以上から、この種の「ゴリゴリ」の意味を以下のように記述する。

多義的別義10A <人に関する性質(能力の強さ)が><その推進力の強さを示す様子>

【多義的別義10B】

(39) 好きな人に好きなタイプを聞いたら「強気で見た目も中身もゴリゴリな人」と言っていたのですが、ゴリゴリな人ってどういうことだと思いますか！

(Yahoo!知恵袋・2023/09/07)

(40) 年をとり丸くなる必要などありません。ごりごりととがったまま自分を笑える懐の深い老人を目指しましょう。
(日経・2017/10/28)

例(39)と例(40)における「ゴリゴリ」は、強い性格や個性が際立っている様子を表現している。具体的には、「強気で見た目も中身もゴリゴリな人」や「ごりごりととがったまま自分を笑える老人」という表現では、しっかりとした主張を持ち、他人に迎合せず、自分の個性や意志を貫く様子が強調されている。つまり、例(39)では、外見や内面においてしっかりとした個性がある人、例(40)では、年齢に関係なく鋭い個性を維持することを目指すという意味で使われている。この「ゴリゴリ」は、物理的な意味からの派生で、性格や精神面における強さや鋭さを表現していると言える。以上から、この種の「ゴリゴリ」の意味を以下のように記述する。

多義的別義10B <人に関する性質(性格)が><その推進力の強さを示す様子><柔らかくない>

【多義的別義10C】

(41) ごりごりの保守の父には猛反発された。
(朝日・2019/10/09)

(42) ゴリゴリの石頭から出た発想ではなさそう。
(日経・1983/10/20)

例(41)と例(42)における「ゴリゴリ」は、考え方や思想が非常にかたく、頑固である様子を表現している。例(41)では、父親が非常に保守的で強固な意志を持ち、柔軟な対応や変化を拒むような人物像が描かれている。「ごりごりの保守」は、単に保守的であるだけでなく、その考え方が極端で、妥協や変化をほとんど受け入れない様子を強調している。例(42)では、考えが非常にかたい人を「石頭」として表現し、そのような頑固な思考からは新しいアイデアが生まれないことを暗示している。ここでの「ゴリゴリ」は、さらに「石頭」に強固さを加え、考え方が特に柔軟性に欠け、凝り固まっている様子を強調している。以上から、この種の「ゴリゴリ」の意味を以下のように記述する。

多義的別義10C <人に関する性質(考え方)が><その推進力の強さを示す様子>
<融通がきかない>

【多義的別義10D】

(43) ランプレーではR B 横田が相手守備網をゴリゴリと押し開ける。

(日経・2016/01/03)

(44) ゴリゴリに相手をつぶしたい。

(毎索・2012/12/26)

例(43)と例(44)における「ゴリゴリ」は、物理的な力や圧力を強調し、相手に対して力強く押し進む、または押し潰す様子を表現している。例(43)では、横田選手が強い力を使って相手の守備を押し開き、道を切り開く様子が描かれている。「ゴリゴリと押し開ける」は、力強く連続的に押す動作を意味し、物理的なパワーの強調が見られる。例(44)では、相手を徹底的に押し潰す、または圧倒したいという意図が表現されている。「ゴリゴリ」は、圧倒的な力や力強い攻撃を示唆し、相手を徹底的に支配する、強く押し込むニュアンスを持っている。したがって、例(43)ではランニングプレーでの物理的な押し進める動作、例(44)では相手を力で圧倒する願望が表現されており、いずれも強力な物理的な力や圧力を強調した使用となっている。実際の接触のような物理的な要素も入っている。以上から、この種の「ゴリゴリ」の意味を以下のように記述する。

多義的別義10D <人に関する性質(意志)が><その推進力の強さを示す様子><攻撃的>

【多義的別義10E】

(45) 大切なのはこうした機会を見付けては、内部の改革をゴリゴリと進めることです。

(日経・2021/12/23)

- (46) いまどきの17歳がモダンジャズの王道ビバップのスタイルでゴリゴリと押してくるのである。(日経・2018/06/06)

例(45)と例(46)における「ゴリゴリ」は、物理的な意味ではなく、力強く、積極的に物事を進める様子を表現しており、特にマイナスのニュアンスは含まれておらず、肯定的な意味合いで使われている。例(45)では、改革が積極的に推進されていることを示し、組織やプロジェクトの進行が力強く、着実に進む様子が描かれている。この表現に否定的な要素はなく、むしろポジティブな印象を与える。例(46)では、演奏スタイルが力強く、エネルギーで、はっきりと主張される様子が示されており、音楽の世界での積極的かつ強力なパフォーマンスを表現している。この場合も、マイナスのニュアンスはなく、むしろ演奏者の自信や力強さが前面に出ている肯定的な表現である。総じて、これらの文脈における「ゴリゴリ」は、積極的に力強い行動や進行を示しており、マイナスのニュアンスを伴わない、前向きな表現と解釈できる。以上から、この種の「ゴリゴリ」の意味を以下のように記述する。

多義的別義10E <人に関する性質(意志)が><その推進力の強さを示す様子><積極的>

【多義的別義10F】

- (47) 最初のうちは細かい部分は分からなくてもごりごり読んでいく。(日経・2017/04/27)
- (48) ゴリゴリとした強引な突破から腰の入った強いシュートをゴールの枠へ打ち込んだオランダと、できなかった日本。(日経・2019/06/26)

例(47)の「ごりごり読んでいく」では、細かい部分にこだわらず、強引にでも進めていく姿勢を示している。ここでは、知識や理解の欠如にかかわらず、無理にでも読み進めるという意味合いがある。例(48)の「ゴリゴリとした強引な突破」は、力強く、相手を押しのけるような動作を指している。この文脈では、スポーツにおける物理的な強引さやパワフルなプレーが強調されている。自分の意志に基づき、何かをしようとする。以上から、この種の「ゴリゴリ」の意味を以下のように記述する。

多義的別義10F <人に関する性質(意志)が><その推進力の強さを示す様子><がむしゃら><無理強い>

【多義的別義10G】

(49) ピアノでなんか弾いてって言われてゴリゴリに弾かれたら引きますか？難しすぎない曲を弾いた方が受けいいんですかね？ (Yahoo!知恵袋・2022/09/23)

(50) 自分は、そこまでロードバイクをゴリゴリにやるという訳ではなく、楽しみ程度にやるのですが今回買い替えということで、質問しました。

(Yahoo!知恵袋・2018/11/14)

例(49)と例(50)における「ゴリゴリ」は、「本気で」「真剣に」「本腰を入れて」取り組む様子を表現している。例(49)は、ピアノ演奏において、本気で技術を駆使して真剣に演奏することを指し、相手が引いてしまうほどの力強い演奏を意味している。例(50)は、単なる趣味ではなく、真剣に取り組み、本腰を入れて活動することを意味している。このように、「ゴリゴリ」は何かに対して本気で、真剣に、本腰を入れて行動する姿勢や取り組み方を強調する言葉である。以上から、この種の「ゴリゴリ」の意味を以下のように記述する。

多義的別義10G <人に関する性質(意志)が><その推進力の強さを示す様子><本気で真剣で本腰>

【多義的別義10H】

(51) 伊勢崎は、ごりごりの護憲派ではない。 (朝日・2017/06/19)

(52) ごりごりの競争原理主義者ではない。 (朝日・2008/02/12)

この場合、「ゴリゴリ」は、内面的な強さや特性が非常に強固で、外部からの圧力や影響に対しても揺るがないことを意味する。例(51)および(52)に示すように、人間を表す言葉と共起し、特にある主義や理論に対する強い信念や信仰が強調されている。以上から、この種の「ゴリゴリ」の意味を以下のように記述する。

多義的別義10H <人に関する性質(信念や信仰)が><その推進力の強さを示す様子><揺るがない>

以上で示した別義10A～別義10Hはいずれも別義10の一種であり、その関係は種と類の関係にあるため、シネクドキーによる精緻化として整理できる。別義10A～別義10Hは、能力、性格、考え、意志といった人間の性質が、その推進力の強さを示す様子を表している。この意味は、別義4<何らかの力が加わり><結果としてかたくなった状態や様子>との間に類似性があり、これらはメタファーによる意味拡張の関係にあると考えられる。

次に、別義11について記述する。別義11は、ある対象が持つ特徴を極端に示す様子を表している。この別義11は、大きく5つの意味に下位分類でき、それぞれ11A～11Eとして示す。以下、具体例を挙げて説明していく。

【多義的別義11A】

(53) 至急お願いします。映画「遊星からの物体X」ってごりごりのホラーですか？若干のホラーが含まれてるパニック映画寄りだったら見てみようかなと思ひまして…。

(Yahoo!知恵袋・2022/08/18)

(54) 自らの経歴を「ゴリゴリの野球の王道」と言う。 (朝日・2023/12/30)

(55) ゴリゴリの本格ミステリーから、組織と個人の葛藤を描く小説など、多彩な作品を網羅するジャンルなのだ。 (ヨミダス・2021/10/19)

例(53)から例(55)における「ゴリゴリ」は、それぞれの文脈において強い特徴や本格的な要素を表現している。例(53)の「ごりごり」は、ホラーの要素が非常に強く、正真正銘の状態を意味する。例(54)における「ゴリゴリの野球の王道」という表現は、自らの経歴が野球の基本に忠実で、非常に伝統的かつ確固たるものであることを示している。ここでの「ゴリゴリ」は、野球の王道を偽りなく守っていることを表している。例(55)の「ゴリゴリの本格ミステリー」は、本格的なミステリー作品が非常に多く含まれていることを意味しており、この場合、「ゴリゴリ」は、特定のジャンルや要素が本場さながらに強調されていることを示している。以上から、この種の「ゴリゴリ」の意味を以下のように記述する。

多義的別義11A <ある対象が持つ特徴を極端に示す様子><正真正銘、本格的、偽りなし>

【多義的別義11B】

(56) ごりごりの佐賀弁は出なかったですけど、なまりは出ましたね。

(朝日・2019/01/04)

(57) チョコプラの長田さんって、京都の人なのに、なんで関西弁薄いんですか？結構前の映像見ると、ゴリゴリの関西訛りでした。東京にずっと居て慣れただけ？

(Yahoo!知恵袋・2023/03/13)

例(56)と例(57)における「ゴリゴリ」は、言語や訛りの強さを表現している。例(56)の「ごりごりの佐賀弁は出なかった」という表現では、「ごりごり」が佐賀弁の強さや濃さを示している。この文脈では、「ごりごり」は言語や訛りが非常に強い状態を意味し、結果的に佐賀弁が予想よりも強くなかったことを示している。例(57)における「ゴリゴリの関西訛り

り」という表現は、関西弁の強さや濃さを強調している。ここでの「ゴリゴリ」は、関西弁が非常に強く、明確に聞こえる状態を示しており、現在はその強さが薄くなっていることにも言及している。以上から、この種の「ゴリゴリ」の意味を以下のように記述する。

多義的別義11B <ある対象が持つ特徴を極端に示す様子><方言が強い>

【多義的別義11C】

(58) そもそもユニセックスのかけらもないゴリゴリの男物。(朝日・2014/03/13)

例(58)における「ゴリゴリの男物」という表現では、「ゴリゴリ」が「男物」の特徴が非常に顕著であることを示している。ここでは、ユニセックスではなく、完全に男性的で、性別に特化した強い特徴を持つ物品やスタイルを意味している。「ゴリゴリ」は、物の特徴や性質が強調される際に使われる。この場合、商品のデザインやスタイルが非常に男性的であり、ユニセックスな要素が全く含まれていないことが強調されている。以上から、この種の「ゴリゴリ」の意味を以下のように記述する。

多義的別義11C <ある対象が持つ特徴を極端に示す様子><徹底した><まったく>

【多義的別義11D】

(59) 貿易障壁を作って関税合戦をごりごりやるのは経済の破壊行為だ。

(日経・2018/07/18)

(60) ごりごりに加工した顔をネットにあげてる人は、その加工が不自然だと自分では気付かないのですかね？
(Yahoo!知恵袋・2022/07/21)

例(59)と例(60)における「ごりごり」の意味は、「とても」「めちゃくちゃ」「非常に」といった強調を示す表現として解釈できる。例(59)では、「ごりごりやる」は「とても激しく、極端に行く」ことを意味している。つまり、関税合戦を非常に強力に、または激しく行うことを強調している。例(60)では、「ごりごりに加工する」は顔を非常に極端に加工することを示しており、その加工の程度が強調されている。以上から、この種の「ゴリゴリ」の意味を以下のように記述する。

多義的別義11D <ある対象が持つ特徴を極端に示す様子><とても、非常に>

【多義的別義11E】

(61) 大浴場にゴリゴリの手術痕テープが貼ってあるがある人が湯船に浸かってたら嫌ですか？ (Yahoo!知恵袋・2023/10/26)⁽⁴⁾

(62) ゴリゴリの部屋着ですみません。横から見た時のおしりがデカいのが悩みです。 (Yahoo!知恵袋・2023/05/12)

(63) この前ゴリゴリにヘッドホンしてLUUPのキックボードに乗ってる女性がいて、そんな時ちょうどパトカーも対向にいたんですけど、特に取り締まり等されてませんでした。 (Yahoo!知恵袋・2023/12/06)

例(61)～例(63)の場合、「ゴリゴリ」は、対象や状態の性質が非常に顕著であり、その度合いがピークに達していることを強調する表現として解釈できる。この表現は、物理的な特徴に限らず、抽象的な概念や状況にも適用され、強さや徹底ぶりが際立っている様子を示している。

例(61)では、目立つテープを堂々と隠さずに見せることが示され、悪びれず、堂々とした態度が表れている。例(62)では、部屋着が非常にラフであることを自覚し、少し恥ずかしさや気まずさを感じながらも、それを隠さず堂々と着ている様子が示されている。例(63)では、LUUPのキックボードに乗っている際、本来ヘッドホンが安全上好ましくない状況であるにもかかわらず、それを全く気にせず、堂々と悪びれもせずに使用している様子が強調されている。このように、「ゴリゴリ」は、態度や行動における図太さや神経の図太さを示す表現として用いられている。以上から、この種の「ゴリゴリ」の意味を以下のように記述する。

多義的別義11E <ある対象が持つ特徴を極端に示す様子><堂々と、図太さの強調>

以上で示した別義11A～別義11Eはいずれも別義11の一種であり、その関係は種と類の関係にあるため、シネクドキーによる精緻化として整理できる。別義11A～別義11Eは、ある対象が持つ特徴を極端に示す様子を表している。この意味は、別義4<何らかの力が加わり><結果としてかたくなった状態や様子>との間に類似性があり、これらはメタファーによる意味拡張の関係にあると考えられる。

舩山(2002:108)は、「多義語の複数の意味のうち、用法上制約がない、あるいは制約は相対的に少ない意味をプロトタイプの意味と認定し、用法上制約のある意味を非プロトタイプの意味と認定するという方法は妥当なものである」と指摘している。基本義を選定する

(4) 例(61)の原文のリンクはhttps://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q11288017981 (2024年12月17日最終確認)である。この例における「貼ってあるがある人」について、査読者の先生から「貼ってある人」の方が適切ではないかという指摘があったが、原文に従って記載している。

際には、用法上の制約に加え、瀬戸賢一(2007:47)は「中心義とは、共時的な多義ネットワークの中心に位置する意義であり、その出発点となる意義である。中心義は文字通りで、母語話者の頭の中で中心的であると想定される意義である。つまり、ほかの意義を理解する上での前提となり、具体性(身体性)が高く、認知されやすく、想起されやすく、用法上の制約を受けにくい。それゆえ、意義展開の起点(接点)となることがもっとも多い意義である。また、おそらく中心義は、言語習得の早い段階で獲得される意義でもある」と述べている。さらに、大澤(2007)は、擬音語を持つオノマトペに見られる意味拡張において、聴覚に基づく音の概念が最も先行し、次に視覚や触覚など、他の感覚に基づく状態が音象徴によって表現されると主張している。つまり、擬態語は、擬音語が擬態語化する過程として捉えることができる。

本稿では、先行研究の内容を踏まえたうえで、以下の3つの理由で【多義的別義1】(<比較的厚くてかたい物を連続して摩擦する音>)を「ゴリゴリ」のプロトタイプの意味とする。①【多義的別義1】は飛田・浅田(2002, 2018)、小野(2007)、山口(2015)の4冊の辞書によって第一義と記載されている。「ゴリゴリ」という語の意義展開の起点であり、ほかの意義を理解する上での前提であると考えられる。②オノマトペの音象徴性が顕著であり、「ゴリゴリ」の文字通りの意味は音と関係していると言える。③「肩や顎のゴリゴリ音」「ゴリゴリという食感の音」など、具体性(身体性)が高く、認知されやすく、想起されやすく、用法上の制約を受けにくい。言語習得の早い段階で獲得される意義とも考えられる。

5.3 「ゴリゴリ」の意味ネットワーク

前節の分析結果から、「硬さ」を表すオノマトペ「ゴリゴリ」は多様な意味を持つ多義語であり、その意味拡張のプロセスが複雑であることが明らかとなった。この意味の拡張は、基本的な「かたさ」という特性から出発し、様々な文脈で異なる意味合いを持つようになっていく。前節の分析に基づき、「ゴリゴリ」の多義構造は次の図Iに示されている。

図Iでは、最も自立性や定着度が高いプロトタイプの意味(別義1)を太線の実線で囲んだ四角で表し、そこから派生する相当程度の自立性を持つ別義については実線の四角で示している。プロトタイプの意味(別義1)は最も容易に喚起され、定着度が最も高いことを示している。一方で、フレームやスキーマに基づく意味は、本稿での分析結果を踏まえたものであり、その認知度は他の各意味ほど高くはないと判断し、塗りつぶされた点線の楕円で囲んで表現している。また、「ゴリゴリ」は非常に多様な意味を持ち、その意味の拡張プロセスには3種の比喩的なメカニズム(メタファー、メトニミー、シネクドキー)が関与していることが示された。図Iにおいて、それぞれの意味拡張における動機づけを異なる線種で示している。すべての「ゴリゴリ」の意味は1つのカテゴリーに組み込まれ、実線で囲まれた外円に位置づけられる。

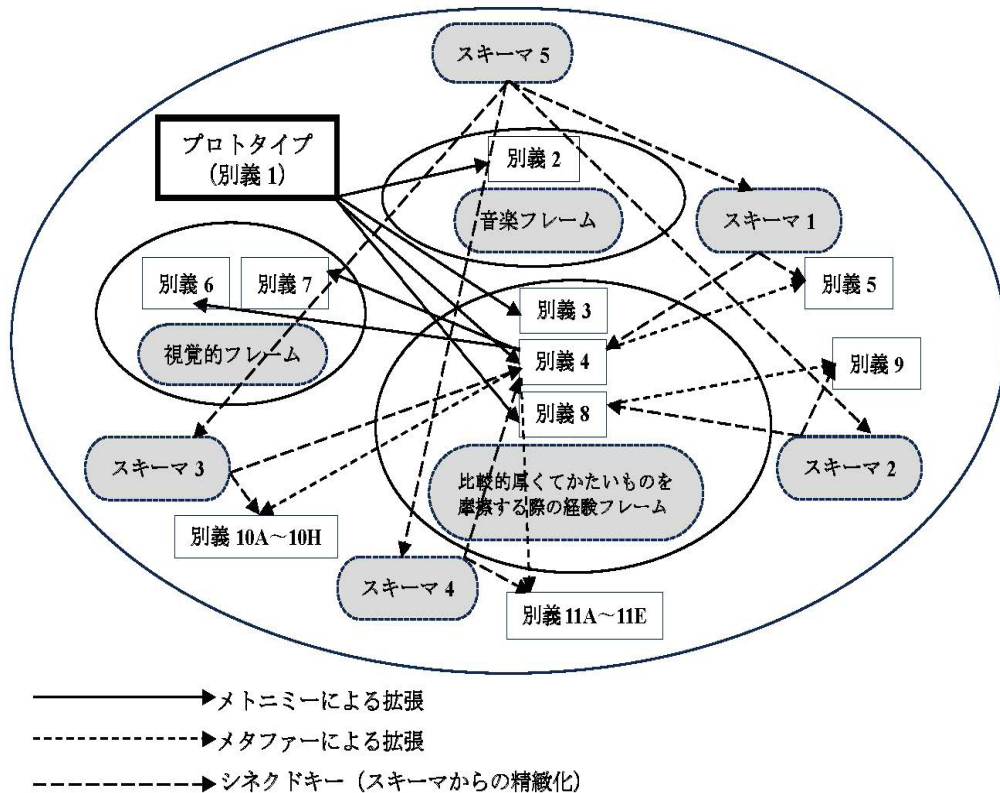


図1 「ゴリゴリ」の意味ネットワーク

「ゴリゴリ」の意味は、プロトタイプの意味(別義1)、別義2～別義9、別義10A～別義10H、別義11A～別義11Eに分けられる。プロトタイプの意味(別義1)は、＜音楽フレーム＞、＜比較的厚くてかたいものを摩擦する際の経験フレーム＞の2つのフレームに基づき、それぞれ別義2、別義3・4・8にメトニミーによる拡張が起こる。また、別義4と別義6・7は＜視覚的フレーム＞を形成している。このフレームにおける「触感的にかたいものが不規則的な輪郭を持つさま」という視覚的特徴が、それぞれ異なる対象に焦点化することによって、別義4から別義6・7へのメトニミーに基づく意味拡張が行われる。

次に、別義4からメタファーによるスキーマ1＜何らかの力が加わることによって、対象が変化を受けるが、その結果として元の状態を維持または強化する様子＞に基づき、別義5に拡張し、別義8からスキーマ2＜対象(物理的または精神的なもの)に対して、連続的に力を加え、その結果として徐々に削られたり、消耗したりする様子＞によって別義9に拡張する。別義5と別義9は、それぞれ別義4と別義8からのメタファーによる拡張例としてカテゴリー化される。スキーマ1とスキーマ2もそれぞれのカテゴリー内に階層的に組み込まれる。つまり、別義4から別義5への拡張、また別義8から別義9への拡張は、いずれもスキーマ化を伴い、別義4と別義5は、スキーマ1の精緻化された例として考えられ、別義8と別義9は、スキーマ2の精緻化された例として捉えられる。

別義4では、何らかの外的な力(圧力やストレスなど)が加わることで、物理的なかたさが強化され、対象がかたくなる状態が強調される。別義10では、外的または内的な推進力(能力、性格、考え、意志など)が作用し、その力が人間の性質や行動に強さをもたらす様子が強調される。別義11では、対象が持つ特徴が、何らかの状況や条件(例えば、典型的な例や強調された状況)によって、非常に顕著に現れる様子が示されている。このように、別義4と別義10A～10Hから<何らかの力が加わり、その結果として変化や強さが強調され、対象の状態や性質が際立つ様子>という共通性がスキーマ3として抽出でき、別義4と別義11A～11Eから<何らかの力が加わり、変化を受けることによって、対象の状態や特徴がより明確に、または極端に示される様子>という共通性がスキーマ4として抽出できる。別義10A～10Hと別義11A～11Eはいずれも別義4の拡張例であり、別義4との間には類似性が認められる。

スキーマ1、スキーマ2、スキーマ3、スキーマ4においては、いずれも何らかの外的な力(物理的、精神的、または状況的な力)が加わることが前提となっている。この力が加わることによって、対象は変化を受け、その結果として状態や特徴、性質に変化が生じる。変化の種類(力が加わった後の結果)は異なるが、すべてのスキーマにおいて「変化」が伴い、変化後の状態、特徴、性質が強調される、または際立つ様子が描かれている。このように、上記の4つのスキーマに共通する特徴として<何らかの力が加わることによって対象に変化が生じ、その結果として対象の状態、特徴、または性質が変化し、それらが強調される様子>という共通性がスキーマ5として抽出できると考えられる。

スキーマ5は、局所的スキーマ⁽⁵⁾(スキーマ1からスキーマ4)の共通性をさらに抽象化したものであるが、「ゴリゴリ」の「スーパースキーマ⁽⁶⁾」とは言えない。スキーマ的意味は、類似性に基づくメタファーによる意味の拡張やシネクドキーの関係を説明することができるが、メトニミー⁽⁷⁾に基づく意味間の関連性を説明することはできない。そのため、メトニミーが多義語の意味拡張に関与する場合、カテゴリー内のすべてのメンバーが共有する最も抽象的な意味、すなわち「スーパースキーマ」を抽出することは困難だと考えられる。このように、鷺見(2013)に指摘されているように、「複合的なカテゴリーの成員の離散性を認め

(5) ネットワークにおける一部の節点に対するスキーマを「局所的スキーマ」(local schema)と言う(靱山 2021:155)。

(6) 「スーパースキーマ」について、鷺見(2013)は「ネットワークにおいて、他の全ての成員が共有する、最も抽象的な意味」(鷺見 2013:36)と定義している。また、靱山(2021)は、「スーパースキーマ」について、「ネットワークにおける最も抽象的な意味であり、他のすべての節点はその意味を具体化したものである場合、その節点を「スーパースキーマ」(superschema)と言う」(靱山 2021:155)と指摘している。さらに、「スーパースキーマ」が必ず抽出できるわけではないことが、両者ともに指摘されている。

(7) 靱山(2021)は、メトニミーについて、「空間的な隣接性、さらには、(類似性を除く)多様な関連性に基づく比喩であることから、ある表現の本来の意味とメトニミーによって拡張した意味との間に共通の要素が存在することを必要としない」(靱山 2021:126)と述べている。また、メトニミーとメタファーやシネクドキーとの区別について、靱山(2021)は、「メタファーとシネクドキーは要素の共有という共通点を有する同系の比喩であるのに対して、メトニミーはこのような要素を持たず、基本的な性格が異なるものである」(靱山 2021:126)と指摘している。

ながら、その連続性が重視されている」(鷲見 2013:36-37)ことが重要であると言える。

スキーマの意味は別義間に共通する意味であるため、必然的に、スキーマ1と別義4・5、スキーマ2と別義8・9、スキーマ3と別義4・10A～10H、スキーマ4と別義4・11A～11E、スキーマ5とスキーマ1・2・3・4の関係は、いずれも類と種の関係、すなわちシネクドキーの関係(スキーマからの精緻化)にあることになる。これらのスキーマの意味は、具体的な意味ほど定着度が高くないものの、一定の単位としてある程度定着していると考えられる。ただし、これらのスキーマは各別義より高次で抽象的な概念として位置づけられ、意味として確立していないため、点線の楕円で囲まれている。

以上により、一見雑多である「ゴリゴリ」の多義的別義の相互関係を示し、すべての意味のネットワークを明示することで、各語義が互いに関連し合い繋がっていることが示され、各自の位置づけや階層性が明確化された。

6 終わりに

本論文では、「硬さ」を表すオノマトペ「ゴリゴリ」の文法機能や統語的特徴を考察し、その使用実態を明らかにした上で、意味拡張のプロセスとそのメカニズムを詳細に分析した。これにより、「ゴリゴリ」の各意味間の相互関係や多義構造も解明した。

従来の研究では、オノマトペのひらがな表記とカタカナ表記を区別せずに考察する傾向があり、表記ごとの用例数、使用傾向、意味用法の違いについては十分に議論されていなかった。本研究では、両表記における「ゴリゴリ」の用例数や使用傾向を比較し、意味用法の違いを示した。その結果、調査した5つのコーパスとYahoo!知恵袋のデータにおいて、いずれもカタカナ表記の「ゴリゴリ」がひらがな表記を大幅に上回っていることが確認された。このことから、「ゴリゴリ」は「硬さ」だけでなく、程度を示す表現としても頻繁に用いられ、柔らかい印象を持つひらがな表記よりも、カタカナ表記の方が、かたく曲がりにくいイメージを想起させるため、適していると考えられる。ただし、両表記の「ゴリゴリ」の使用方法や実態には大きな違いは見られなかった。次に、「ゴリゴリ」の用言の修飾や助詞との組み合わせが、意味拡張に与える影響を考察した。その結果、「ゴリゴリ」の意味拡張により、修飾する用言の意味や範囲が変化し、助詞の選択にも影響を及ぼすことが判明した。また、「ゴリゴリ」の使用実態は辞書の説明と一定のズレがあり、これを踏まえ、各意味を網羅的に再分析し、その関連性を整理した。「ゴリゴリ」の意味拡張には、3つのフレーム、5つのスキーマ及び3種の動機づけが絡み合っており、最上位のスキーマ5まで抽出できたものの、スーパースキーマの抽出は困難であることが明らかになった。

本研究では、「硬さ」を表すオノマトペ「ゴリゴリ」の意味拡張のプロセスや意味ネットワークの形成に注目したが、今後の課題として以下の2点が考えられる。

まず、日本語における「硬さ」を表すオノマトペには他にも多くの語が存在するが、本研究における「ゴリゴリ」の具体的な位置づけはまだ明確ではない。冒頭でも述べたように、「ゴリゴリ」は「硬さ」を表すオノマトペの中でも特に多義性が豊富な語であることは確認

されているが、その複雑な多義性を生み出す背景にある深層的な仕組みについて、さらに考察する必要がある。この点は、「ゴリゴリ」を他の「硬さ」を表すオノマトペと区別するためにも必要であり、さらに「硬さ」を表すオノマトペを他のカテゴリーのオノマトペと区別する際にも重要な視点となる。具体的には、「硬さ」を表すオノマトペの多くは多義的であり、意味の拡張範囲がより広いのに対して、「笑い」や「泣き」に関するオノマトペ(にこにこ、にやにや、げらげら、めそめそなど)や、「歩き方」を表すオノマトペ(よたよた、よぼよぼなど)は、意味の拡張が限られていると言える。これらの差異を生じさせる要因や仕組みの解明が求められる。

また、日本語のみならず、中国語や韓国語など他の言語にも「硬さ」を表すオノマトペが存在するが、それらの使用実態、意味拡張のプロセスや動機づけ、多義構造に共通点や相違点が見られるかどうかを比較することで、「硬さ」を表すオノマトペの多義性が日本語に特有の現象であるのか、他の言語にも見られる一般的な現象であるのかを明らかにすることができる。これらの考察を通じて、「硬さ」を表すオノマトペの多義性や有契性、さらには「硬」という概念の本質をより深く探ることが可能となる。

葉書辰(ようしょしん、YE Shuchen)
筑波大学大学院 国際日本研究プログラム

参考文献

【日本語】

- 井上加寿子(2013)「オノマトペの多義性と創造性」篠原和子・宇野良子編『オノマトペの射程』pp.203-216 ひつじ書房
- 王 雋(2019)「認知言語学における多義語研究の概観」『地球社会統合科学研究』11, pp.15-21 九州大学大学院地球社会統合科学府
- 大澤(伊藤)理英(2007)「オノマトペの意味拡張の事例に基づく共感覚的比喩表現の一方向性における反例と考察」『日本認知言語学会論文集』7, pp.365-374 日本認知言語学会
- 鷲見幸美(2013)「カテゴリー化とプロトタイプ」森雄一・高橋英光編『認知言語学基礎から最前線へ』pp.27-52 くろしお出版
- 瀬戸賢一(2007)「メタファーと多義語の記述」楠見孝編『メタファー研究の最前線』pp.31-61 ひつじ書房
- 趙寅秋(2014)「擬音語の擬態語化についての日中対照研究：日本語「ABAB」型オノマトペ両用語と中国語「ABB」型形容詞を例として」『比較社会文化研究』35, pp.41-51 九州大学大学院比較社会文化研究科
- 張鎮暎(2017)「韓・日触覚オノマトペの意味拡張と名詞・動詞共起制約—「かたさ、湿り気、粘り気、痛み」の意味資質を持つオノマトペを中心として—」『日本言語文化』41,

- pp.253-275 韓国日本語文化学会
- 趙麗君(2020)「食感オノマトペの意味拡張に関する考察」大連外国語大学修士論文
- 虎谷紀世子(2013)「副詞的オノマトペの特殊性」篠原和子・宇野良子編『オノマトペの射程』
pp.85-99 ひつじ書房
- 中野弘三(2017a)「語の多義性」中野弘三編『語はなぜ多義になるのか：コンテクストの作用を考える』pp.2-23 朝倉書店
- 中野弘三(2017b)「多義性とコンテクスト」中野弘三編『語はなぜ多義になるのか：コンテクストの作用を考える』pp.24-47 朝倉書店
- 浜野祥子(2014)『日本語のオノマトペ：音象徴と構造』くろしお出版
- 早瀬尚子(2017)「多義語の分析Ⅱ－認知意味論的アプローチ」中野弘三編『語はなぜ多義になるのか：コンテクストの作用を考える』pp.80-105 朝倉書店
- 松本曜(2010)「多義性とカテゴリー構造」澤田治美編『語・文と文法カテゴリーの意味』
pp.23-43 ひつじ書房
- 三上京子(2006)「日本語の擬音語・擬態語における意味の拡張－痕跡的認知・予期的認知の観点から－」『日語日文学研究』57-1, pp.199-217 韓国日語日文学會
- 武藤彩加(2015)『日本語の共感覚的比喩』ひつじ書房
- 松中完二(2022)「語の多義的意味拡張についての認知的考察―「色」の多義性を基に―」『久留米工業大学研究報告』44, pp.202-210 久留米工業大学研究報告編集委員会
- 靱山洋介(2001)「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」山梨正明他編『認知言語学論考』1, pp.29-58 ひつじ書房
- 靱山洋介(2002)『認知意味論のしくみ』研究社
- 靱山洋介(2019)「多義語分析の課題と方法」プラシヤント・パルデシ・靱山洋介・砂川有里子・今井新悟・今村泰也編『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』pp.32-50 開拓社
- 靱山洋介(2020)『実例で学ぶ認知意味論』研究社
- 靱山洋介(2021)『「例解」日本語の多義語研究 認知言語学の視点から』大修館書店
- 葉書辰(2024)「「硬さ」を表すオノマトペの特徴と使用実態について」『日本語学研究』80, pp.123-144 韓国日本語学会
- 呂佳蓉(2004)「比喩としてのオノマトペ―「ころころ」と「圓滾滾」―」『日本認知言語学会論文集』4, pp.480-483 日本認知言語学会

【英語】

- Langacker, Ronald W (1987) *Foundations of Cognitive Grammar: Volume I: Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press
- Langacker, Ronald W (1988) A Usage-Based Model. Brygida Rudzka-Ostyn, ed. *Topics in Cognitive Linguistics*, pp.127-161. Amsterdam: John Benjamins
- Langacker, Ronald W (1999) *Grammar and Conceptualization* (Cognitive Linguistics Research

[CLR]). De Gruyter Mouton

Langacker, Ronald W (2000) A dynamic Usage-Based Model. Michael Barlow, and Suzanne Kemmer, eds. *Usage-based models of language*. 「坪井栄治郎(訳)「動的使用依拠モデル」坂原茂編『認知言語学の発展』」pp.61-143 ひつじ書房

Langacker, Ronald W (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press

Langacker, Ronald W (2011) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.
「山梨正明(監訳)『認知文法論序説』」研究社

【日本語辞書】

小野正弘(2007)『日本語オノマトペ辞典擬音語擬態語4500』小学館

小野正弘(2018)『くらべてわかるオノマトペ』東洋館出版社

小野正弘(2021)『イラストでわかるオノマトペじてん』成美堂出版

永田守弘(2024)『官能小説「擬声語・擬態語」用例辞典』河出書房新社

根本道也(2015)『オノマトペ(擬音語擬態語)和独小辞典』同学社

飛田良文・浅田秀子編(2002)『現代擬音語・擬態語用法辞典』東京堂

飛田良文・浅田秀子編(2018)『現代擬音語・擬態語用法辞典 新装版』東京堂

松本道弘(2020)『難訳・和英オノマトペ辞典』さくら舎

山口仲美(2015)『擬音語・擬態語辞典』講談社

【用例出典】(調査期間:2023年12月～2024年12月)

朝日新聞クロスサーチ(<https://xsearch.asahi.com>)

現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)(<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj>)

日経テレコン(<https://telecom.nikkei.co.jp>)

毎索(<https://mainichi.jp/contents/edu/maisaku>)

ヨミダス(<https://yomidas.yomiuri.co.jp>)

Yahoo!知恵袋(<https://chiebukuro.yahoo.co.jp>)

付記

本論は、2024年6月30日に開催された2024年度現代日本語研究会研究集会での発表内容をもとに、加筆・修正を加えたものである。発表の場および本稿執筆にあたり、貴重なご指摘やコメントを賜った皆様に深く感謝申し上げます。また、本稿の作成に際しては、2名の匿名査読者より極めて有益かつ示唆に富むご指摘とご助言を賜り、本論の考察を一層深めることができた。ここに記して、心より感謝申し上げます。

Translating Character Voice: Proposing new subtitling guidelines for conveying character and culture in English subtitles for Japanese anime

キャラクターの声の翻訳 —日本アニメの英訳においてキャラクターと 文化を表すための新しい映画字幕作成方針—

Lisa Sanders

Abstract

映像作家やその他の創作家は様々な方法で複合的かつダイナミックなキャラクターを作る。一つの方法はキャラクターの「声」であり、方言、個人語、なまり、その他のメタ言語的特徴によって、観客はキャラクターを早く分類できるのである。これらの特徴は「キャラクターの声」と呼ばれる。キャラクターの声やそれを形作る様々な文化的要素は重要であるとされるが、その翻訳は困難である。

映画字幕の翻訳の作成方針によると、簡潔性と中立性のため、メタ言語的特徴は一般的に除かれるべきものがある。しかし、絶えず進化するデジタル環境において、観客はこれまで以上に字幕に慣れているため、キャラクターの声を保つ新しい映画字幕作成方針を提示することが可能性であると考えられる。様々な日本語の方言と個人語、そして時に外国語によって形作られている「キャラクターの声」の多様性を分析し、新しい翻訳方法と字幕作成方針を試みるにあたり日本アニメは最適なケーススタディである。

本論文では、従来のキャラクターの声の字幕翻訳を分析し、文化的とメタ言語的特徴を保つ新しい字幕作成方針を提案する。この作成方針と翻訳方法は記号論的翻訳学に基づき、また素人字幕と非標準的な字幕の斬新な方法を参考に、観客のキャラクターと文化の理解を高めるものになっていると考えられる。

Keywords Audiovisual translation, Cultural translation, Character voice, Subtitling, Semiotics
視聴覚翻訳、文化翻訳、役割語、映画字幕、記号論

Introduction

Creating believable and engaging characters is vital to storytelling in any medium or form. Whether in literature, oral storytelling, video games, or film and television, audiences hope to relate to and understand the characters whose stories are being told, regardless of whether those characters actually ever existed. Amidst the very welcome discussions on inclusivity and representation in today's media, the way people are portrayed and how these portrayals are shared across geographic and cultural boundaries is worth examining more than ever. In order for the characters whom we see in the works we consume to cross these borders successfully, however, I would argue that it is crucial to translate the characters in such a way that maintains their carefully crafted nature—taking the necessary consideration required of the issues of identity, power, and ethics involved.

I will examine the translation of characters in the context of audiovisual translation (AVT) and, specifically, subtitling. A relatively young academic field, AVT was formalised within

academia during the late 1980s, as pointed out by foremost AVT scholar Jorge Díaz Cintas (2004: 56). Subtitling norms, used in the practice of film translation long before audiovisual translation was formalised as an academic field, were delineated within AVT scholarship by field pioneers Jan Ivarsson and Mary Carroll only in the 1990s (Ivarsson & Carroll, 1998a: v). The formal guidelines in both the academic and professional spheres have remained largely unchanged since that time, despite the numerous changes in the ways that audiences consume media over the decades—especially in the wake of the development of broadband internet and digital streaming platforms. One of the primary concerns of subtitling governed by these well-established rules is the reduction, or omission of superfluous information, that is necessary in this mode of translation. Audiovisual translators carry out what translation studies scholar Christopher Titford termed “constrained translation” (1982), creating subtitles to be clear and concise. Writing on the application of the theory of relevance in AVT, translation studies scholar Łukasz Bogucki argues that subtitlers focus on relevance in a vague sort of “sense to sense” translation approach, with the end goal of conveying only key information within the smallest amount of time and space possible (Bogucki, 2004: 73). To that end, often many of the conventional features of speech—ranging from hesitations, false starts and emphatic affixes, e.g. “st-st-stuttering,” or “y’know,” to dialectal variations and extra-linguistic characteristics such as accents are usually omitted entirely.

These features, however, can be seen as essential elements of character. Writing about Japanese anime and its translation, linguist Peter Howell terms this component as “character voice,” that is, the way in which a character speaks and how that places them within the sociocultural environment of not only their fictional world but also our own (Howell, 2009: 292-293). This includes how the other characters within the work view and interact with them but also how we, the audience, see and understand the characters. Howell therefore argues that translators should try to retain character voice when translating and subtitling, rather than adhering to the neutralising approach recommended by most subtitling norms. It is to this end that, as part of a set of new guidelines for subtitling Japanese media into English, I will propose subtitling rules that encourage the inclusion of character voice. This method, which I call “semiotic subtitling,” builds upon AVT scholar Helena Kruger’s paper on the interpretive semiotic approach as applied to AVT in order to achieve equivalence in subtitles. It involves manipulating the semiotic signs in the translation process in order to create subtitles that convey more than the denotative, linguistic meaning of the original dialogue.

Unlike existing subtitling guidelines which favour brevity over equivalence, semiotic subtitling aims to retain what linguist and proclaimed founder of modern translation studies Eugene Nida called functional equivalence (1993: 118), paraphrased by translation student Xinyue Pan as “the basic principle of using...different languages to transform the same information and effectively express its meaning” (2022: 282). The “new” subtitling method should allow for translators to

convey more than only the key information of the dialogue without rewriting too many of the necessary rules regarding the constraints of subtitling—rules that are required for making subtitles that the audience can read comfortably enough to understand and enjoy the work.

Semiotic subtitling also includes methods derived from film historian Markus Nornes's observations of so-called "abusive" translations produced by amateur or fan subtitlers (Nornes 1999: 31-32). These various interventions can allow subtitlers to convey extra layers of semiotic meaning in their translations. Through this, semiotic subtitling allows the specified target audience of the translated media to understand characters and character voice in a way that is more functionally equivalent to their intended portrayal than current subtitling guidelines do. I will apply the guidelines to anime, which has a broad range of character voice and often includes a variety of real and fictional accents, dialects and idiolects. This makes it an ideal candidate for comparing the amount of information conveyed in semiotic subtitling against the subtitles found in the results of current norms.

In the following sections, I will explain in more depth the features of character voice, characters, and current subtitling norms and approaches. Thereafter, I will describe the semiotic subtitling method before providing some examples of its application to translating character voice.

Character Voice

There are several ways that authors and directors flesh out their characters in order to promote identification. According to psychoanalyst Francis Baudry, this includes giving the characters motives—clear or ambiguous—or persistent personality traits (Baudry, 1990: 375). In audiovisual media such as film or even anime series, these character-building elements coalesce in their voice, both in the literal sense of their vocal performance and the broader concept that encompasses the character's distinctive mode of expression. Writing on the translation of character voice between Japanese and English, AVT scholar Hugh Nettelbeck defines the concept as "elements of speech that inform the audience about a character's motivations, beliefs, social status, background and personality" (2020: 51). These "elements" are what linguist Peter Howell describes as "the diverse varieties of language found within speech communities, including idiolect, dialect, sociolect and register" (2009: 292).

I will use the following definitions from the Oxford Dictionary of English for these elements: idiolects are "the speech habits peculiar to a particular person." Dialects are "a particular form of a language...peculiar to a specific region or social group." A sociolect is "the dialect of a particular social class," and, finally, register is the way in which language is used or altered "as determined by degree of formality and choice of vocabulary, pronunciation, and syntax, according to the communicative purpose, social context, and standing of the user" (Oxford Languages, n.d.).

It should be clear that these elements of character voice provide a great deal of information

about who a character is, without the need for descriptions from the writer or director through other characters or a narrator. For an almost clichéd example, consider George Bernard Shaw's *Pygmalion* (1913) or its perhaps more famous film adaptation *My Fair Lady* (1956).⁽¹⁾ The Cockney-speaking Eliza Doolittle is supposed to be made into a completely different person, “a lady,” by two men with an interest in one very narrow area of study: phonetics. Having selected Eliza based on her character voice, Higgins and Pickering take on the challenge of converting her into a different character through elocution lessons. They do this by “correcting” her dialect, sociolect, and register, changing her voice from Cockney to Received Pronunciation (Beilowitz, 2023: 13).

Conversely to the under-representation of character voice in English-language literature, this concept has been described in great detail in the Japanese context. Linguist Kinsui Satoshi introduced the concept of *yakuwarigo* or “role language” in 2000 and has researched it extensively since (Kinsui, 2017: iii; Kinsui & Yamakido, 2015: 30).⁽²⁾ *Yakuwarigo* refers to “a characteristic way of speaking ... which correspond[s] to the speaker's social and cultural stereotypes” (Kinsui, 2017: iii). These “social and cultural stereotypes” include those relating to “gender, age, social status, occupation, region of residence or birthplace, appearance, personality, etc.” (Kinsui, 2017: 125), and this is shown through particular linguistic features such as non-standard or fictional grammatical forms of Japanese (Kinsui, 2017: 125). In describing the translation of character voice in anime subtitles, Howell provides a clear explanation of *yakuwarigo* and its significant role in Japanese media, particularly in how it shapes character voice:

In Japanese anime and manga, writers make use of the connotations of language varieties to create a “virtual” *yakuwari-go* (“role language”) and bring to life stereotypical characters such as the kindly old scientist, the cosseted young rich girl, the wise-cracking Osakan etc. (Howell, 2009: 292-293).

Discussions of character voice have begun to surface in broader contexts as well. Recent qualitative studies of audience perception of characters based on voice actor performance suggest that “multiple anime voice types are becoming established in contemporary anime, and can be viewed sociolinguistically as registers” (Ishii, Utsugi & Ōta, 2023: 21). This shift from a niche aspect of media analysis to one that impacts sociolinguistics on a broader scale emphasises the effect that character voice has not only on individual audiences but even society on a larger scale.

(1) In the context of this paper, it appears to be quite a twist of irony that leading actress Audrey Hepburn was infamously dubbed over by “ghost singer” Marni Nixon in *My Fair Lady*; allegedly due to Hepburn's singing voice not being strong enough (Kyriazis, 2021). Furthermore, a feud between Hepburn and the long-time star of West End and Broadway's *My Fair Lady*, Julie Andrews, also arose due to the supposed embodiment of Eliza Doolittle by Andrews in a phenomenon well documented in studies of character creation and reception (Kyriazis, 2021; Välisalo, 2023: 30).

(2) Japanese names are presented in the Japanese order of surname and given name.

Another element of film dialogue that is crucial to the translation of character voice is that it is not spontaneous but rather crafted deliberately:

The fact that ostensibly spontaneous speech in film dialogues is acted rather than genuine means that its production is subject to ... constraints of synchrony. [The dialogue] has to conform to the other communicative elements of a filmic message ... while it has most of the features of natural spoken language ... [these features] are studiously prepared (Bogucki, 2004: 84).

That dialogue and thus character voice is carefully created for a particular effect indicates its necessity to the audiovisual work and its importance in the process of identifying with and understanding the characters and the narrative as a whole, as characterisation is an essential element of enjoying the media we consume as audiences.

What makes a character?

Examining character voice and how it portrays the characters to audiences raises the question of why it is important for their creators to craft them in that particular way, or even what makes them unique amongst other characters or even as fictional “beings.” Superficially, it is quite easy to identify a character as a “person” who appears in any consumable work such as a novel, film, or comic book...or even a person in real life. As film theorist Murray Smith explains, characters are not merely a collection of traits, tropes, or even units of meaning referred to as “semes” (2023: 120). We have to consider characters as robust mimetic representations of “possible humans” (Smith, 2023: 120), regardless of whether or not they are actually portrayed as human. Several studies indicate that we *do* take characters as something more than the texts (filmic and otherwise) that they are bound to. Speaking of literary characters from a psychoanalytic perspective, Francis Baudry says that

[i]n a novel the reader may be taken in by the “as if” nature of the interactions and believe that characters are more than puppets in the hands of the hidden author. To speak of the unconscious of a literary character is, as I see it, to introduce one's own fictions on top of the author's and to attribute to an artificial creation an aspect of real life (1990: 380).

Furthermore, according to communications scholar Jonathan Cohen, identification with these possible humans is a core facet of the capacity to suspend disbelief and enjoy media

entertainment:⁽³⁾

[o]ne way in which we develop an interest in fictional events is through identification with characters in a story. [...] Identifying with a character provides a point of view on the plot; it leads to an understanding of character motivations, an investment in the outcome of events, and a sense of intimacy and emotional connection with a character (Cohen, 2006: sec. 1, par. 4).

That we can even identify with these fictional characters demonstrates our ability to see them as more than just literary devices or plot points, although much of the literature still views characters as vehicles for engagement with a fictional work, as media studies researcher Tanja Välsälö indicated in her thesis (2023: 33). “One of the premier challenges of actors and directors is to entice viewers into identification,” echoes Cohen (2006: sec. 2, par. 6). This impetus for identification with characters and therefore the fictional work as a whole is “partly achieved by offering an illusion of reality, a semblance of how people behave and act in real life, and a consistency of character that resonates with audience members” (2006: sec. 2, par. 6).

It is therefore quite clear that understanding the characters is key for the audience to identify with the audiovisual works they are consuming, and that the characters themselves are highly important to the narrative of the works in general. Furthermore, the effects of character voice on this characterisation and identification with media are rather profound. When it comes to the translation and subtitling of Japanese anime for audiences who are likely still unfamiliar with all the nuances of Japanese language and culture, it would therefore make sense that it, too, is translated. Unfortunately, in most cases, it is not (see also Howell, 2009: 304; Nettelbeck, 2020: 51). In order to understand why, let us examine the current generally accepted rules for subtitling, especially as they pertain to character voice.

Current Subtitling Guidelines

There is not, and there arguably *cannot be*, a universal set of subtitling guidelines, due to the tremendous challenge of trying to standardise rules across multiple languages and cultures, as explained by foremost AVT experts Jorge Díaz Cintas and Aline Remael in their seminal book on subtitling (2021: 91-92). Furthermore, in practice, many production and localisation studios employ their own style guides and manuals for subtitling which may differ somewhat to scholarly prescriptions (Díaz Cintas & Remael, 2021: 47; Nettelbeck, 2024: 31). Nevertheless, there is an

(3) For more in-depth studies regarding viewer identification with film, please see Janet Staiger’s work focusing on the sociocultural contexts surrounding audience reception (1992, 2000) and Christian Metz’s Semiotic and psychoanalytic analysis of identification with cinema (1981).

emphasis on legibility, even within contemporary streaming platforms such as Netflix. Their in-house style guides regulate many of the aspects also outlined by AVT scholarship, including language and spelling, reading speeds, and the limits on number of characters per line (Nettelbeck, 2024: 32). These myriad proprietary style guides are beyond the scope of my research, so I will focus on the oft-repeated guidelines within academic AVT: in addition to the preeminent textbook on subtitling produced by Díaz Cintas and Remael (2021), I will refer to two of the forerunning prescriptive texts, AVT scholar Fotios Karamitroglou's influential text *A Proposed Set of Subtitling Guidelines for Europe* (1998) and its predecessor, subtitling pioneers Jan Ivarsson and Mary Carroll's *Code of Good Subtitling Practice* (1998a: 157-159).

The time and line length guidelines are by far the most restricting component of subtitling rules: Subtitles should be on screen for a duration of time and at a line length that maximises legibility for general audiences. There are two factors that contribute to the need for subtitles to be kept brief: firstly, audiences require sufficient time to process the subtitles, as reading written text takes longer than it does to understand spoken dialogue. Secondly, subtitles appear as part of a complex audiovisual work, and audiences need time to look at the visuals and listen to the soundtrack of the work they are watching (Díaz Cintas & Remael, 2021: 147).

The generally accepted parameters for these criteria are a maximum of two lines per subtitle consisting of no more than around 35 characters per line, which are on screen for a minimum of one second and a maximum of six (the so-called “six-second rule” [Díaz Cintas & Remael, 2021: 109]) depending on the length of the subtitle text (Ivarsson & Carroll, 1998a: 158; Karamitroglou, 1998: 3-4). It is for these reasons that subtitlers are typically forced to omit words, phrases and other utterances that are considered to be extraneous, retaining only linguistic information that is relevant to the plot through a process that is commonly referred to as “reduction” (e.g. Howell, 2009: 295).

Díaz Cintas and Remael justify the process of reduction through arguing that subtitles do not need to be “a verbatim and detailed rendering of the spoken text” (2021: 146-147), because the subtitles are read in conjunction with other channels that provide context and information, namely the audio and video tracks of the subtitled work (Díaz Cintas & Remael, 2021: 147). It is likely for this reason that

Overall, AVT, and commercial interlingual subtitles especially, still displays a preference for standard language, neutral word order and simple well-formed sentences, often limiting the type and amount of marked and improper language to be displayed (Díaz Cintas & Remael, 2021: 184).

The “marked... language” referred to in the above quote is defined by the authors as “language features that are not neutral” (Díaz Cintas & Remael, 2021: 179), and in addition to the

elements identified by Howell (2009: 292), they include features such as taboo language (profanity, slurs, etc.), slang, and what they term “entanglements” (Díaz Cintas & Remael, 2021: 179-182), known in linguistics as code-switching. This is defined in the *Encyclopaedia Britannica* as the process by which a person or character adapts their register, dialect, etc, based on their interlocutor (Morrison, 2024). Later, however, in a passage also focusing on subtitles for *My Fair Lady*, they again caution that marked subtitles “must obviously be applied only to very short stretches of text, otherwise they risk disrupting the readability of the [target text] and the enjoyment of the viewing experience” (Díaz Cintas & Remael, 2021: 195).

Regarding language in subtitles, Ivarsson and Carroll state that “straightforward semantic units must be used” (1998a: 157)⁽⁴⁾ and that the “language should be (grammatically) ‘correct’ since subtitles serve as a model for literacy” (1998a: 158). Who defines what is “correct” is unclear, however, and suggests a level of normativity by the authors themselves.⁽⁵⁾ They go on to propose that “translation quality must be high with due consideration of all idiomatic and cultural nuances” and that “the language register must be appropriate and correspond with the spoken word” (1998a: 157). These aims seem to be contradictory, a fact pointed out by Díaz Cintas and Remael (2021: 184): how can the unique features of speech that comprise character voice be translated with due consideration if the subtitles are expected to be simple and meet an undefined criterion for correctness? Karamitroglou provides plenty of examples on how to deal with linguistic nuances in subtitles (1998: 9-12), although only after further contributing to this sense of incongruence:

A decision as to which pieces of information to omit or to include should depend on the relative contribution of these pieces of information to the comprehension and appreciation of the target film as a whole. The subtitler should not attempt to transfer everything, even when this is spatio-temporally feasible (1998: 9).

Explaining items to omit when subtitling, Karamitroglou lists items such as “tautological cumulative adjectives/adverbs” (e.g. “teeny weeny”) (1998: 9) and other linguistic features that may constitute character voice. He then expressly advises that words and phrases in the original dialogue should be subtitled “when they are not clearly uttered or when they are presented in a slang, informal or colloquial version,” since in those cases “they are not recognisable or comprehensible” (Karamitroglou, 1998: 9). This appears to be somewhat contradictory, although he adds that these phrases should be rendered in “simpler syntactic structures (canonical forms)” in the subtitles (Karamitroglou, 1998: 10). Regarding dialect, Karamitroglou states that “only dialects that

(4) This was revised to “simple syntactic units should be used” in Ivarsson and Carroll, 1998b: 1.

(5) For a more in-depth discussion on correctness and quality in subtitling and how these concepts differ between various parties, please see the article by AVT scholar Jan Pedersen (2017) included in the bibliography.

have already appeared in a written form in printed materials are allowed to be used in subtitles”, and that “sociolect forms like ‘whaddaya doin?’ are not allowed because they are not immediately recognisable and comprehensible by the viewers’ eye” (1998: 11). AVT and translation studies scholar Łukasz Bogucki furthermore blames this loss of meta-linguistic information on the shift in audible dialogue to written text, placing it in the context of the differences between spoken and written language:

[Subtitling’s] most outstanding characteristic is the shift in mode from speech to writing. This has the result that certain features of speech (non-standard dialect, intonation, style-shifting) will not automatically be represented in the written target text (Bogucki, 2004: 83).

Ultimately, these recommendations to omit everything except the elements of the dialogue crucial to the understanding of the plot stem from the focus of AVT on reduction. Bogucki’s article pertains to the communications studies concept of relevance (proposed by cognitive scientists Dan Sperber and Deirdre Wilson, 1986/2001) in subtitling and how it would allow a subtitler to “maximally [simplify] their product, so that the message it conveys gets across to the intended recipient, yet the process of taking it in is not too strenuous” (Bogucki, 2004: 86).

What is relevant in this paper and other emerging studies, however, is that there are consequences of this reduction—especially with regard to extra- and metalinguistic information in the form of character voice (Howell, 2009: 295; Nettelbeck, 2020: 53). Much of Díaz Cintas and Remael’s chapter on “subtitling language variation” which I quoted at the start of this section is devoted to subtitling techniques intended to deal with these types of marked language (2021: 178-200), as the authors acknowledge that this is part of characterisation and that erasing any trace of character voice results in subtitles that are too sterile and homogeneous (2021: 185).

But what if the subtitles are not “maximally simplified” and are instead created in such a way that more of the dialogue and character voice is retained, instead of being relegated as irrelevant? To answer this question, we can turn to one arena of subtitling that seeks “to resist the deodorising translation practices” of professional subtitling: Fansubbing (Pérez González, 2019: 173). In the following section, I will introduce the practice of fansubbing and some of the hallmarks of fansub and other non-standard subtitle translation practices and why they may be invaluable for retaining character voice in subtitles rather than reducing it.

Fansubbed Characters

Despite the inclusion of other types of amateur- and fan-created subtitles through the course of the evolution of the sub-genre over the years, and indeed at its beginnings, the term “fansubbing” still

evokes recollections of its origins—translations of Japanese anime (Bogucki, 2009: 49; Díaz Cintas & Muñoz Sánchez, 2006: 37; Pérez González, 2019: 172).

Writing on fandom in translation, film studies and AVT scholar Tessa Dwyer describes how fan translations of anime emerged during the late 1970s, following the cessation of the broadcasting of anime on US networks (Dwyer, 2018: 438). Due to this embargo, fans resorted to creating their own networks for gaining access to, distributing, and translating anime videotapes amongst themselves (Dwyer, 2018: 439). The first instances of true fansubbing occurred in the latter half of the 1980s, when the technology eventually became available for fans to add subtitles to these videos themselves (Dwyer, 2018: 439). The practice became more prolific during the 1990s alongside the increasingly widespread use and development of the internet and computer technology (Díaz Cintas & Muñoz Sánchez, 2006: 37; Dwyer, 2018: 440).

Because fansubs are not regulated in any way, as a product created “by fans, for fans” (Díaz Cintas & Muñoz Sánchez, 2006: 51), there are large discrepancies in not only the quality of these subtitles themselves, but also in their reception. Within AVT literature, there are numerous criticisms of fansubs ranging from complaints about the ubiquitous errors within them (Bogucki, 2009: 50; Díaz Cintas & Muñoz Sánchez, 2006: 46, 47), the dubious honour of calling fansubbers translators at all, given the opinion that “the product under discussion does not qualify as fully fledged subtitling” (Bogucki, 2009: 49), to the unexpected position of power that fansubbers occupy, perpetuating the dominance of Japanese and US media conglomerates and the use of English and the proliferation of English and Japanese language in global entertainment (Dwyer, 2018: 441, 443). But fansubs’ lack of regulation also allows for another opportunity—breaking free from the constraints of professional subtitling.

Contrary to the aims of professional subtitlers, one of the priorities of early fansubbers, according to translation studies and AVT expert Luis Pérez-González, was to retain more of the Japanese culture and language within anime in their subtitles:

[Fansubbers’] translations aimed to facilitate fellow fans’ access to anime’s idiosyncratic imagery, the interpretation of Japanese obscure cultural references, and the appreciation of genre-specific narrative conventions (Pérez González, 2019: 173).

In his now (in)famous article *For an Abusive Subtitling* (1999), film historian Markus Nornes celebrates these fansubbing conventions for their defiance of what he calls the “corrupt” standards of professional subtitling: “Working outside of the mainstream translation industry, lacking any formal training, these fans have produced abusive subtitles *quite by instinct*” (1999: 32, emphasis in original). These “abusive” subtitles are those that challenge the conventions of mainstream or professional subtitles, as well as the expectations of the average audience member:

Rather than smothering the film under the regulations of the corrupt subtitle, rather than smoothing the rough edges of foreignness, rather than converting everything into easily consumable meaning, the abusive subtitles always direct spectators back to the original text (Nornes, 1999: 32).

Ideally, subtitles should not attempt to remain invisible and disguise the fact that they are translations through excessive domestication; rather, they should be an “experience of translation” (Nornes, 2007: 177). A possible reason they are not such an experience, according to Nornes in his *Ran’yō-teki jimaku no tame ni: Saikō (Afterthoughts to “For an Abusive Subtitling”)* (2017), is that attempting to sanitise any hint of the foreign, any sign of the unusual in corrupt, mainstream subtitles is most likely “because there is no faith in the audience” (2017: 8, my translation) that they will appreciate or even be able to process them. Fansubbers themselves appear to agree that this is bad practice, as they set out to create

a foreignising translation of the text to provide viewers with a ‘closer’ understanding of the original dialogue ... with translators utilising their enhanced expertise of genre-specific conventions to maximise their fellow fans’ enjoyment of the narrated culture (Pérez González, 2012: 336-337).

They do this partially through altering and “exploiting the materiality of subtitles” (Pérez González, 2019: 175) with changes to the colour, typeface, placement and even line length of the subtitles (Díaz Cintas & Muñoz Sánchez, 2006: 47; Nornes, 1999: 32; Pérez González, 2019: 175). The other component, of course, is the linguistic and meta-linguistic aspect of their translations. Not only do fansubs often include “translation notes” by way of headnotes or intertitle-like segments inserted before or after the episode, but more pertinently to this article, they make rather liberal use of marked language in their translations—especially that associated with character voice (Díaz Cintas & Muñoz Sánchez, 2006: 46; Nornes, 1999: 32; Pérez González, 2019: 175).

These foreignising strategies arguably allow for a greater understanding of not only the medium but the narratives and the characters themselves, and bring the fact of their translation to the foreground. These non-standard features used in fansubs are not without demerits, however. There are valid concerns within AVT discourse about the true ability of general audiences to process non-standard subtitles, given the greater cognitive effort they impose (Pérez González, 2019: 175; see also AVT scholar Colm Caffrey’s 2009 dissertation for an in-depth study). Another problem is the reception of such subtitles; writing on the use of honorifics such as *-san* and *-kun* in

Japanese and the options for translating them in subtitled anime,⁽⁶⁾ Howell notes that including them as-is, a practice he notes is prevalent in fansubs, “risks...creating an exotic stylistic effect totally absent from the original dialogue” (2007: 294). In contrast, he also cautions against neutralising these foreign elements, for fear of rendering “stylistically flat, bland dialogue,” and asserts that “heavily domesticating” these elements would be jarring for audiences who are expecting Japanese characters but reading character voice and dialogue that is, in his example, “distinctly American” (Howell, 2007: 294). It is therefore crucial that the translator strikes a fine balance between neither domesticating the text too much, nor overly foreignising the text; while at the same time avoiding the very real possibility of initialising or perpetuating certain stereotypes of the characters in either the source or target texts.

In an earlier passage concerning dialect, Howell notes that “[the] Japanese local colour of, for example, Kōbe dialect cannot be directly reproduced in another linguistic culture” (2007: 293). He addresses some of the language and cultural aspects that can be seen as “untranslatable” (2007: 293-294), highlighting that “the recreation of these distinct pragmatic aspects of character voice presents a major challenge when translating represented speech from Japanese into English” (2007: 294). Yet Howell makes one crucial claim amidst this apparent pessimism which served as one of my impetuses for seeking new subtitling strategies: “in functional translation some procedure should ideally be sought to recreate the general connotations conveyed by the dialect in the source culture” (2007: 293).

Howell himself turns to examples of apparently “abusive” subtitles, which employ a variety of subtitling strategies which defy conventional rules and guidelines. He demonstrates the ways in which non-standard subtitling practices may bridge the gap between the translation strategies and the need to recreate character voice (2007: 296-303). In his study, two sets of subtitles for various works were compared against each other. One set was created by subtitlers employing tactics such as marking language through spelling, capitalisation, and italics, as well as including features such as taboo words and interjections, which are often omitted in standard subtitles. The other set followed standard, neutralising subtitling guidelines. The findings of this comparison were that

depending on the type of subtitling adopted, the narrative function of characterisation in the Japanese dialogue can be reproduced by the use of a variety of compensatory procedures (Howell, 2007: 304).

By using these compensatory procedures and seeking “to preserve some of the cultural

(6) The honorific title *-san* is often translated with Mr. or Ms. in English, and *-kun* is considered to be a term of address for especially males younger or of a lower status than the speaker. The latter can also be seen as a more intimate form of address compared with the more respectful former (Ōshima, 2023: 169).

idiosyncrasies of the original in the target text” (Díaz Cintas & Muñoz Sánchez, 2006: 46), non-standard subtitles aim to and often succeed in conveying more of the sociocultural information that is lost in standard subtitling practices, often without compromising the technical considerations with regard to the length and timing of the subtitles (Howell, 2007: 304). As I have explained above, these subtitles that “abuse” the overly-domesticating, neutralising strategies proposed by conventional subtitling guidelines are mostly found within fansubs, perhaps significantly more so than they are in professional subtitles. It is for this reason that I intend to incorporate the translation choices regarding character voice often made by fansubbers into the semiotic subtitling method, which I will explain in the following section.

Semiotic subtitling

In one of the first few academic articles on the subject of subtitling, translation scholar Christopher Titford acknowledges concerns regarding dialect and cultural references, among others, but concludes that

an attempt to deal with all of the (identifiable) factors that affect [subtitle] translating would take us way beyond the space available.... It is to be hoped that the limitation has been an increase in readability (rather than complexity)—since this is, after all, what sub-titling [sic] is all about (1982: 116)!

This oft-repeated “fact” of what subtitling “is all about” has relegated the concept of equivalence as secondary, if not completely unimportant within this type of translation. As I mentioned earlier, one argument in this vein is that “[s]ince subtitles interact with the visual and oral channels of the film, a complete translation is, in fact, not always required” (Díaz Cintas & Remael, 2021: 184). I believe contrarily that these channels can contribute positively to the way that subtitles are created, *adding* to the subtitles rather than justifying their reduction.

In my previous research on emphasising equivalence in subtitles, I adapted a particular theoretical model for subtitle translation based on semiotics for the Japanese context, incorporating into it the semiotic theory from semiologist Roland Barthes’s *Empire of Signs* (1980/1974) as well as a collection of essays on semiotics in Japan with the same title, edited by linguist Ikegami Yoshihiko (1991) (Sanders, 2022). This somewhat updated “semiotic subtitling” method that I proposed also included efforts to address translation problems beyond the linguistic, incorporating metalinguistic and non-verbal visual and audible signs as part of the subtitle translation and making full use of the semiotic potential that the medium of film provides (Sanders, 2022: 10). This included rudimentary suggestions for resolving the matter of translating character voice within subtitles, among which was the incorporation of abusive, fansub-inspired marked dialect and

incorrect or non-standard grammar and spelling (Sanders, 2022: 10-13).

The model that I adapted was from Helena Kruger's groundbreaking proposal for a new method of translating for subtitles (Kruger, 2001). Intending to address the effects of reduction and the disregard for equivalence in general subtitling guidelines (Kruger, 2001: 192), she turned towards a theory of translation based on interpretive semiotics for a potential solution—linguist and translation theoretician Dinda L. Gorlée's seminal work on "semiotranslation" (Gorlée, 1994). This is the name Gorlée proposed for her translation method based on the semiotics of Charles S. Peirce.⁽⁷⁾ It involves the interpretation and reinterpretation of the semiotic signs in the translation process and in both the source and target texts to achieve what Gorlée terms "significational equivalence" (Kruger, 2001: 185; 189-191). This is where "[the] interpretant is supposed to indicate the same things or facts as the primary sign, and to signify these things, and assert these facts, in like manner" (Gorlée, 1994: 181). Kruger's proposed method works as follows:

the *object* is a linguistic aspect of the film/television reality; the *sign* is the language used to convey this; the [first] *interpretant* is the idea formed in the mind of the subtitler about the sign; this interpretant gives rise to a *new sign*, namely the subtitle created by the subtitler to convey the meaning of the first sign ... to the viewer who does not understand the source language; the *final interpretant* is the idea formed by the viewer of the object [via the new sign] (Kruger, 2001: 190, emphasis mine).

After interpreting and reinterpreting as necessary the original sign as a whole in the work, the subtitler can create a new sign in the target text, the subtitle, for the audience to interpret. If the process has been carried out correctly and the subtitler's interpretant of the original sign and the audience's interpretant of the subtitle sign are the same—or close enough to be considered the same—both interpretants will refer to the same object and the semiotic subtitling process will have been successful. The audience will have perceived the subtitle in the same way as an audience who understands the source language will have understood the original sign.

As AVT researcher Serenella Massida pointed out, Kruger's proposal was a novel and unique approach towards subtitle translation (Massida, 2017: 48-49). Kruger herself, however, acknowledges that her contribution was purely theoretical and not prescriptive (2001: 194). Furthermore, her approach attempts to fit the translations into the tight constraints and restrictive rules of subtitling, aiming to create subtitles that "obtain maximum equivalence *in spite of* [reduction]" (Kruger, 2001: 177, emphasis in original). In my opinion, however, the semiotic

(7) A full discussion of Peirce's semiotic theory is beyond the scope of this paper. For further reading on the topic, I recommend the seminal work on semiotics by Daniel Chandler (2017) and, especially in the context of translation studies, the cited work by Gorlée (1994).

subtitle translation method, which I call semiotic subtitling, is the perfect starting point for the reexamination of the existing interlingual subtitling rules, especially those governing reduction and what—and how much—is to be omitted. I therefore intend to build upon Kruger’s work and develop practical guidelines based on her theory.

As I have in this paper, I tested this theory specifically for the translation of anime, due to the wide range of translation problems the medium presents, from character voice to so-called “untranslatable” cultural references. It is as a result of this research that I believe there is the potential in semiotic subtitling as a starting point for creating more robust subtitling guidelines that embrace equivalence and all the various semiotic channels that contribute towards understanding the entire narrative. I would like to present here the tentative guidelines I have developed for the subtitle translation of the meta- and extra-linguistic elements that comprise character voice.

New subtitling guidelines

The semiotic subtitling guidelines that I now propose for the translation of Japanese audiovisual works incorporates both my adapted version (with some additional refinements) of Kruger’s semiotic subtitling method and the non-standard, so-called “abusive” subtitling practices such as those discussed by Nornes (2007) and Howell (2007).

There is the potential in the way non-standard subtitles are created for an additional semiotic layer, another “sign-within-a-sign” that can convey the first interpretant to the audience more clearly and result in a translation that is more significationally equivalent to the original sign, while still avoiding subtitles that are overly long. This additional semiotic information includes the visual design of the subtitles, which can be edited with different colours, placements and typefaces and other orthographical features such as font (that is, the use of italics, bold or all-caps) for specific effects. This type of subtitle editing lends itself especially well to anime subtitles, given the genre’s history of fansubbing.

More pertinent to this paper, however, is the manipulation of the language and meta-linguistics of the subtitles. This refers to the adjustment of the register, etc., of the subtitles through the use of non-standard and even incorrect spelling, grammar and vocabulary to show the features of character voice. By relying on non-standard English in the subtitles for anime and adjusting the way the language is used, it should make it possible to reflect a character that is perceived by the target audience similarly to how they are received within the source culture. This target audience has to be carefully considered by the subtitler, and due to the sensitive nature of translating character voice and dialect and all the implications that the resulting translation may carry, caution when carrying out these manipulations is advised. Cultures and characters are not so easily transposed, and sociocultural sensitivity is crucial. According to translation studies scholar Wai-ping Yau in his writing on power and stereotyping in translation, there is a “need to recognise the

heterogeneity of language use across communities, social groups and individuals, and to investigate the consequences of the translator's choices" (Yau, 2018: 291).⁽⁸⁾

It is for these reasons that I emphasise Skopos theory in my proposal. Pioneered by Hans Vermeer (1978; Reiss & Vermeer, 1984), Skopos theory governs the purpose ("*skopos*") of the action of translation, and has been expanded to include multiple aspects or what translation studies scholar Xiaoyuan Du terms "stages" (2012: 2190). I will focus particularly on the fourth of these stages, Christiane Nord's concept within it of "loyalty" (Nord, 1997: 125), urging for the careful consideration of the implications within the source text as well as the approach to its translation and the intentions the translation produces.

I also advocate for a reexamination of the pacing of the subtitles, timing them to align with the audible dialogue rather than follow preexisting rules for their timing, such as the previously identified "six-second rule." Together with the material structure of the subtitles, this timing can help identify who is speaking the line, and employing creative strategies when dialogue overlaps in the audio track can add an extra element of meaning to the subtitles. Especially in the context of anime translation, in my experience, this timing is increasingly expected from interlingual subtitles by younger viewers.⁽⁹⁾ This decision is also to be determined by the Skopos of the translation, however, and consideration should be taken if the subtitles are intended to be more accessible, as in the case of creating subtitles for the deaf or hard of hearing (SDH captions).

There is, however, mounting scholarly evidence that today's audiences are capable of reading and processing interlingual subtitles at a much faster rate than in the past, and some scholars such as AVT luminary Agnieszka Szarkowska, together with subtitling researcher Olivia Gerber-Morón have raised calls for revision of the existing guidelines based on their eye-tracking studies (Szarkowska & Gerber-Morón, 2018). There should be limits, however, as legibility is also a concern. For these guidelines concerning the line length, number of lines, and the timing of the subtitles, I will refer to the upper limits of these subtitles set within prior subtitling guidelines.

Delineating this more clearly, the semiotic subtitling guidelines that I refer to are as follows:

- Include non-standard features of speech in subtitles that comprise character voice, such as dialect, sociolect, etc.
- The timing of the subtitles should align with the start and end times of the audible dialogue being translated, but single-word subtitles should be displayed for a minimum of one second.
- Subtitles should be displayed at a maximum rate of 25 characters per second.
- A subtitle line should be a maximum of 42 characters.

(8) See Yau, 2013 and 2018, for in-depth analyses of the reinforcement of stereotypes within subtitling.

(9) I will address this claim, which I encountered in an undergraduate-level subtitling class, in more depth in a forthcoming article.

- There should be no more than two lines for a standard dialogue subtitle.
- Subtitles may be formatted to match one or more of the semiotic channels in the film, altering the typeface, colour, etc., in order to add meaning.

In order to demonstrate the application of these guidelines, I translated and subtitled a segment of a popular anime series. The translations and a brief analysis will be provided in the following section, along with a comparison of the subtitles created for and distributed by Netflix.

Applying the semiotic subtitling method

These translations are for the anime series *The Disastrous Life of Saiki K.* (Saiki Kusuo no Psi-nan) (2016, directed by Sakurai Hiroaki). In particular, I will focus on the third part of the very first episode, subtitled *The Jet Black Wings AKA Kaido Shun* (Shikkoku no tsubasa koto Kaidō Shun). The series was selected due to its rife translation problems, including a very wide range of character voices and cultural references, as well as a number of seemingly untranslatable puns and word-plays. The lines I selected here clearly highlight elements of character voice in order to demonstrate semiotic subtitling's potential for dealing with its translation.

With no particular brief, there is a large degree of agency and liberty regarding the Skopos of this translation. In line with the fact that translators typically translate into their strongest language and because I am most familiar with the nuances of South African English and can therefore manipulate it to the best effect, that is the dialect of English I have chosen to use in my subtitles. I will avoid overly-domesticating vocabulary choices such as loan words from other South African languages and tend towards a more “global” English, and endeavour not to perpetuate negative stereotypes through the types of dialects and idiolects I include in the subtitles. Finally, considering the genre of this anime as a shōnen (“boys”) anime, the target audience of these subtitles are South Africans primarily between the ages of 12 and 18 (Thornton, 2022).

Following the standards frequently used in translation studies and AVT texts, I will present the Romanised transcription of the original dialogue followed first by its literal translation, and then its subtitle translations; next, the subtitles provided by Netflix, and finally my own translation according to the semiotic subtitling method (labelled “new”).

00:14:17

In these lines, we can see a clear, although short example of one type of *yakuwarigo* that appears rather frequently in this series.

Original:	<i>Maji ka yo, abunē na!</i>
Literat:	Are you serious, [that's] dangerous!
Netflix:	Seriously? That's so dangerous!

New: For real? Freakin' scary!

The speakers of these lines are the protagonist's unnamed classmates, discussing a snake that escaped from a nearby zoo. They are male second-year high school students, and the way their speech deviates from standard Japanese identifies them as such; they are merely "teenage boys." As recommended by standard subtitling guidelines, the Netflix subtitles appear to have neutralised this character voice, putting the speaker's slurred "*abunai*" into standard English. I opted instead to try to convey his casual way of speaking, retaining his register with my choices of vocabulary and grammar, referring back to the original sign of the dialectal and sociolectal form of the original "*abunē*".

00:14:12

The below excerpt is from a single scene in the episode. I have omitted some parts of the dialogue, shown with ellipses. There are two characters in this conversation, although only the last line below, is spoken by the second character.

Original: *Osoraku ano hebi... karini "mādā doragoramu suneiku" wa / osoraku tada no hebi janē! / ... / Osoraku da ga, "mādā doragoramu suneiku" wa / yatsura no gokuhi kenkyū shisetsu ni yotte umi dasareta kyōakuna monsutā! / "Osoraku" ōi na.*

Literal: It's likely that that snake—tentatively the "Murder Dragoram Snake"/ is likely not an ordinary snake! / It's [only] likely but, the "Murder Dragoram Snake" / is a fiendish monster created in their top-secret research facility! / [That's] a lot of "likely."

Netflix: That snake, which I've named the Murder Dragoram Snake, / is probably no ordinary snake! / This Murder Dragoram Snake / is probably a dangerous monster created in a top secret [sic] Dark Reunion lab. / That's all speculation.

New: It's likely that the snake, tentatively the **Murder Dragoram Snake**, / is likely no ordinary snake! / It's only likely but the **Murder Dragoram Snake** / was likely bred at "their" top-secret research labs as a vile monster! / He says "likely" a lot.

The first character in this excerpt, Kaidō, is essentially defined by the game- and comic-inspired fantasy world he appears to live in. He speaks in an overly dramatic way, giving many ordinary things elaborate titles and designations to fit in with his delusion. In the semiotic subtitles, I stylised

these titles, such as the name “Murder Dragoram Snake” in a comic-like typeface and in a different colour. In this transcription, I have tried to illustrate this effect with the use of bold italics. Kaidō’s use of the pronoun *yatsura* when referring to one of these important figures within his delusion is also significant—in something of a condemning, secretive manner, he puts emphasis on this word in his speech, so I opted to include inverted commas around this term in the subtitles to mark its importance clearly.

I do not disagree with the Netflix subtitler’s choice regarding the translation of “‘*Osoraku*’ *ōi na*” as “That’s all speculation,” as that appears to be one of the nuances of the speaker’s wry comment. The series protagonist Saiki who spoke the line has been explaining Kaidō’s eccentricities to the audience throughout this part of the episode, however. I therefore believe it is more fitting for Saiki to break the fourth wall and point out Kaidō’s character voice, spotlighting the prolific repetition of the word “likely.” Taken as sarcasm, this should also retain the meaning conveyed by the Netflix subtitle. This highlights how the sign in both the original and the subtitle can be interpreted—and reinterpreted—differently.

It is difficult to demonstrate here, but there is another aspect of the subtitles for Saiki’s dialogue that should be noted. Saiki never speaks in the series; rather, he acts as more of a narrator than just a protagonist. The in-universe reason given for this is that he communicates with the audience telepathically and is otherwise completely silent. To show this unique aspect of his dialogue, I marked Saiki’s voice in the subtitles by changing their outlines to match his distinctive pink hair colour. The other characters, with only a few exceptions such as Kaidō’s catchphrases, are subtitled with the standard white subtitles outlined in black.

The timing of these subtitles should also be noted: there are 28 more characters in total in the semiotic subtitles than in the Netflix subtitles, yet these are displayed on screen for the same duration. As per the guidelines for semiotic subtitling, however, my subtitles are paced quite fast. They were timed to match the speed of the audible dialogue while still remaining under 42 characters per line. In order to facilitate this extremely fast reading pace, which sometimes reached a very brisk 23 characters per second, I made use of the other semiotic channels of the video to compliment the way the subtitles are read—aligning similar-sounding words in the audio track with the subtitle. This can be seen in the English words “Murder Dragoram Snake” and “monster” which are emphasised in the audio track and, consequently, the semiotic subtitles.

00:16:24

The following lines were spoken by one character in a single dialogue. As I am focusing on the speaker’s character voice, I have extracted only the relevant lines from the same character within that dialogue for this example.

Original:	<i>Nasakenē nā? / ... / Kintama tsuiten no ka? O? / ... / Abayo.</i>
Literal:	Aren't [you] pathetic? / Aren't your testicles attached? Huh? / Goodbye.
Netflix:	You little wimps! / What's wrong? Did you lose your balls? / I'm a goner.
New:	Pathetic, aren't yous? / Don't yous have yer balls on, hmm? / Cheers.

The character speaking, Nendō, is portrayed as somewhat stupid and has a rough, frightening appearance. His casual, masculine style of speaking is part of his idiolect, and identifies him as Nendō as much as it identifies his role as a teenager or as the foil to the psychic genius Saiki. The Netflix subtitles somehow polish Nendō's words, despite retaining the vulgarity of his use of *kintama* by translating it as "balls." I aimed to recreate his coarseness more generally, using some of the vocabulary and grammatical errors typically found in South African English, such as "yous." The final subtitle's "Cheers" is perhaps functionally equivalent as-is to *abayo*; it is slang for "goodbye" and used most often by male speakers of South African English.

These "new" semiotic subtitles were created with the intention of allowing the viewer to understand both what is being said and *how* it is being said more closely. This is especially visible when comparing them to the somewhat stilted, almost sanitised subtitles made according to Netflix's professional subtitling guidelines.

Conveying more of the manner that the dialogue was presented in within the source text entailed retaining the "colour" (Howell, 2007: 293) of the register, slang, idiolect and vocabulary, as well as increasing the pace and sentence structures of the subtitles to more closely match the original dialogue. The translations and design of the subtitles were considered also from multiple semiotic channels, such as including different colours, fonts, and typefaces, as well as incorporating non-verbal information from other audio and visual cues in the translation, with the end goal of including as much of the meaning entwined in the original work as possible.

It is still necessary to refine the semiotic subtitling model further and outline a more formal set of guidelines for its application. I hope that these few examples, together with the overview of the theoretic background thus far of the semiotic subtitling method, has at least partially demonstrated its potential in updating the way subtitles are translated.

Voicing the unvoiced

The characters that appear in the media we consume are portrayed and even created as they are with careful intent by their writers. This includes their *voice*, the unique registers, dialects, idiolects and sociolects that they speak with. Subtitling guidelines have nearly always advocated for the neutralisation of these features, focussing on creating short, easily readable subtitles in the standard form of the language they are written in. This can lead to most of this deliberate characterisation being lost when the audience does not have access to these linguistic and meta-linguistic cues about

who the character is, and can lead to bland and even stilted subtitles as I have shown above (“You little wimps!”). Retaining this information, while challenging, is crucial for the subtitler who wishes for their audience to understand as much of the nuance of the works they are consuming as possible (Howell, 2007; Nettelbeck, 2020, 2022).

In a genre such as anime, especially, which is practically defined by its wide range of character voice and deliberate *yakuwarigo*, it becomes especially relevant to convey the characters as they are, even through the tightly-constrained medium of subtitling. I believe that focusing not solely on the linguistic aspects of the dialogue but the semiotic signs that comprise the work as a whole for subtitle translation, it is possible to give voice to these elements that are called to be omitted by current subtitling guidelines. Subtitlers should aim to create subtitles that resist the “deodorising” methods of domestication that “risk removing the traces of the other” (Pérez González, 2019: 173; Yau, 2018: 293), but care must be taken while interpreting and reinterpreting the signs that make up the character, bearing continually in mind the final sign and its implications.

This interpretive semiotics-based method of translation, first identified by Gorrée in her seminal work on semiotranslation (1994) and adapted by Kruger for subtitle translation (2001), is readily adaptable for the context of Japan and especially anime, particularly in conjunction with the semiotically rich fansubs that “abuse” the stifling norms of professional audiovisual translation (Nornes, 2007, 2017). I believe that these resulting “semiotic subtitles” can provide at least a starting point for the revision of the long-standing subtitling guidelines, in an era when audiences want to experience the works as they are in the original—including understanding who the characters portrayed within them are actually supposed to be.

Lisa SANDERS

Tokyo University of Foreign Studies

Suggested further reading

De Linde, Z., & Kay, N. (1999). *The semiotics of subtitling*. Routledge.

Bibliography

- Barthes, R. (1982). *The Empire of Signs*. Noonday. (Original work published 1970)
- Baudry, F. (1990). “Character in Fiction and Fiction in Character”. *The Psychoanalytic Quarterly*, 59(3), 370–397. doi.org/10.1080/21674086.1990.11927277
- Beilowitz, M. (2023). “A Sociolinguistic Approach to Pygmalion: Eliza’s Bidialectalism”. *The Measure: An Undergraduate Research Journal*, 7, 7–26. <https://measure-ojs-shsu.tdl.org/measure/article/view/112>. Accessed 12 September 2024.
- Bogucki, L. (2004). “The Constraint of Relevance in Subtitling”. *The Journal of Specialised*

- Translation*, 1, 71-88. jostrans.soap2.ch/issue01/art_bogucki_en.php. Accessed 12 September 2024.
- Bogucki, Ł. (2009). “Amateur Subtitling on the Internet”. In J. D. Cintas & G. Anderman (Eds.), *Audiovisual Translation* (pp. 49–57). Palgrave Macmillan UK. doi.org/10.1057/9780230234581_4
- Caffrey, C. (2009). *Relevant Abuse? Investigating the effects of an abusive subtitling procedure on the perception of TV anime using eye tracker and questionnaire* [Doctoral thesis, Dublin City University]. www.doras.dcu.ie/14835/1/Colm_PhDCorrections.pdf. Accessed 12 September 2024.
- Chandler, D. (2017). *Semiotics: The basics* (Third edition). Routledge.
- Cohen, J. (2001). “Defining Identification: A Theoretical look at the identification of audiences with media characters”. *Mass Communication and Society*, 4(3), 245–264. doi.org/10.1207/S15327825MCS0403_01
- Cohen, J. (2006). “Audience Identification with Media Characters”. In J. Bryant & P. Vorderer (Eds.), *Psychology of Entertainment* (Vol. 13, pp. 183–197). Routledge. doi.org/10.4324/9780203873694 [Consulted as an eBook; hence I provide sections and paragraphs instead of page numbers in my text]
- Díaz Cintas, J. (2004). Subtitling: The long journey to academic acknowledgement. *The Journal of Specialised Translation*, 1, 50–68.
- Díaz Cintas, J., & Muñoz Sánchez, P. (2006). “Fansubs: Audiovisual translation in an amateur environment”. *The Journal of Specialised Translation*, 6, 37–52. www.jostrans.soap2.ch/issue06/art_diaz_munoz.php. Accessed 12 September 2024.
- Díaz Cintas, J., & Remael, A. (2021). *Subtitling: Concepts and practices*. Routledge Taylor & Francis Group.
- Du, X. (2012). A Brief Introduction of Skopos Theory. *Theory and Practice in Language Studies*, 2(10), 2189–2193.
- Dwyer, T. (2018). “Audiovisual Translation and Fandom”. In L. Pérez González (Ed.), *The Routledge Handbook of Audiovisual Translation* (1st ed., pp. 436–452). Routledge. doi.org/10.4324/9781315717166-27
- Gorlée, D. L. (1994). *Semiotics and the Problem of Translation: With special reference to the semiotics of Charles S. Pierce*. Rodopi.
- Howell, P. (2007). “Character Voice in Anime Subtitles”. *Perspectives*, 14(4), 292–305. doi.org/10.1080/09076760708669045
- Ikegami, Y. (1991). *The Empire of Signs: Semiotic essays on Japanese culture*. John Benjamins.
- Ishii, C. T., Utsugi, A., & Ōta, I. (2023). *Voice Types and Voice Quality in Japanese Anime*. [Paper presentation]. 20th International Congress of Phonetic Sciences, Prague, 1–5. www.icsph2023.org.

- researchgate.net/publication/373485937_Voice_types_and_voice_quality_in_Japanese_anime. Accessed 12 September 2024.
- Ivarsson, J., & Carroll, M. (1998). *Subtitling* (2nd ed.). TransEdit.
- Ivarsson, J., & Carroll, M. (1998b). *Code of Good Subtitling Practice*. ESIST.
- Karamitroglou, F. (1998). “A Proposed Set of Subtitling Standards in Europe”. *Translation Journal*, 2(2). translationjournal.net/journal/04stndrd.htm. Accessed 12 September 2024.
- Kinsui, S. (2017). *Virtual Japanese: Enigmas of Role Language*. Osaka University Press.
- Kinsui, S., & Yamakido, H. (2015). Role Language and Character Language. *Acta Linguistica Asiatica*, 5(2), 29–42. <https://doi.org/10.4312/ala.5.2.29-42>
- Kruger, H. (2001). “The Creation of Interlingual Subtitles: Semiotics, equivalence and condensation”. *Perspectives*, 9(3), 177–196. doi.org/10.1080/0907676X.2001.9961416
- Kyriazis, S. (2021). “My Fair Lady: Julie Andrews’ extraordinary “revenge” over Audrey Hepburn”. *Express*. www.express.co.uk/entertainment/films/1542805/My-Fair-Lady-Julie-Andrews-revenge-Audrey-Hepburn-Eliza-Doolittle-musical-film-sing-dubbed. Accessed 12 September 2024.
- Morrison, C. D. (2024). “Code-switching”. *Encyclopaedia Britannica*. www.britannica.com/topic/code-switching. Accessed 12 September 2024.
- Nettelbeck, H. W. (2020). “Comparing Audience Perceptions of Characters in Subtitled Film: Validating a strategy for assessing equivalence of character voice”. *Journal of Audiovisual Translation*, 3(1), 50–71. doi.org/10.47476/jat.v3i1.2020.102
- Nettelbeck, H. W. (2022). “Perceptions of Characters in Subtitled Film: Strategies to achieve similarity in Japanese- and English-speaking audience understanding”. *Interpreting and Translation Studies*, 22, 31–51.
- Nettelbeck, H. W. (2024). *Decision Making in the Subtitling Process: Facilitating communication between stakeholders*. [Doctoral thesis, Monash University]. doi.org/10.26180/25210889.v1
- Nida, E. (1993). *Language, Culture, and Translating*. Shanghai: Shanghai Foreign Language Education Press.
- Nord, C. (1997). *Translating as a purposeful activity: Functionalist approaches explained*. St. Jerome Pub.
- Nornes, M. (1999). “For an Abusive Subtitling”. *Film Quarterly*, 52(3), 17–34. doi.org/10.2307/1213822
- Nornes, M. (2007). *Cinema babel: Translating global cinema*. University of Minnesota Press.
- Nornes, M. (2017). *Ran’yō-teki jimaku no tame ni: Saikō* (Afterthoughts to “For an Abusive Subtitling”). University of Michigan Library. doi.org/10.7302/1163
- Ōshima, D. Y. (2023). “The Semantics and Sociopragmatics of the Japanese Honorific Titles san, kun, and chan: Some focal points of variation”. *Journal of East Asian Linguistics*, 32(2), 169–

200. doi.org/10.1007/s10831-023-09255-9
- Oxford Languages. (n.d). *Oxford Dictionary* (Version 15.5.1105) [Mobile App]. Google Play Store. play.google.com/store/apps/details?id=com.mobisystems.msdict.embedded.wireless.oxford.dictionaryofenglish.
- Pan, X. (2022, July). “Functional Equivalence in the Process of English Translation Chinese Idioms from a Social Semiotic Translation Approach”. In *2022 3rd International Conference on Language, Art and Cultural Exchange (ICLACE 2022)* (pp. 281-285). Atlantis Press.
- Pedersen, J. (2007). “Cultural Interchangeability: The effects of substituting cultural references in subtitling”. *Perspectives*, 15(1), 30–48. doi.org/10.2167/pst003.0
- Pedersen, J. (2017). “The FAR model: assessing quality in interlingual subtitling”. *The Journal of Specialised Translation*, (28), 210-229. jostrans.soap2.ch/issue28/art_pedersen.php. Accessed 12 September 2024.
- Pérez González, L. (2012). “Amateur Subtitling and the Pragmatics of Spectatorial Subjectivity”. *Language and Intercultural Communication*, 12(4), 335–352. doi.org/10.1080/14708477.2012.722100
- Pérez González, L. (2019). “Fan Audiovisual Translation”. In M. Baker & G. Saldanha (Eds.), *Routledge Encyclopedia of Translation Studies* (3rd ed., pp. 172–177). Routledge, Taylor & Francis Group.
- Reiss, K., & Vermeer, H. J. (1984). *Grundlegung einer allgemeinen Translationstheorie* (Foundations of a General Theory of Translation). M. Niemeyer.
- Sakurai, H. (Director). (2016). *The Disastrous Life of Saiki K.* (Saiki Kusuo no Psi-nan) [Broadcast]. TV Tokyo.
- Sanders, L. (2022). “Subtitling, Semiotics and Spirited Away”. *Journal of Audiovisual Translation*, 5(1). doi.org/10.47476/jat.v5i1.2022.112
- Smith, M. (2023). “The Reality of (Screen) Characters”. In R. Davies, P. Russo, & C. Tieber (Eds.), *The Palgrave Handbook of Screenwriting Studies* (pp. 111–130). Springer International Publishing. doi.org/10.1007/978-3-031-20769-3_6
- Shaw, G. B. (1913/2024). *Pygmalion*. Standard Ebooks. https://standardebooks.org/ebooks/george-bernard-shaw/pygmalion. Accessed 12 September 2024.
- Sperber, D., & Wilson, D. (2001). *Relevance: Communication and cognition* (2nd ed). Blackwell Publishers.
- Szarkowska, A., & Gerber-Morón, O. (2018). “Viewers Can Keep Up with Fast Subtitles: Evidence from eye movements”. *PLOS ONE*, 13(6), e0199331. doi.org/10.1371/journal.pone.0199331
- Titford, C. (1982). “Sub-titling: Constrained translation”. *Lebende Sprachen*, 27(3), 113–116.
- Thornton, N. (2022, November 6). *The Four Main Manga Demographics, Explained*. CBR. https://www.cbr.com/four-main-shonen-shojo-seinen-josei-manga-demographics-explained/. Accessed

12 September 2024.

- Välisalo, T. (2023). *Who is Your Favourite Character? Audience engagement with fictional characters* [Doctoral Thesis, University of Jyväskylä]. <http://urn.fi/URN:ISBN:978-951-39-9275-0>. Accessed 12 September 2024.
- Vermeer, H. J. (1978) “Ein Rahmen für eine allgemeine Translationstheorie” (A Framework for a General Theory of Translation). *Lebende Sprachen*, 23(1): 99-102.
- Yau, W.-P. (2013). “Power, Identity and Subtitling in a Diglossic Society”. *Meta*, 57(3), 564–573. doi.org/10.7202/1017080ar
- Yau, W.-P. (2018). “Sociolinguistics and linguistic variation in audiovisual translation”. In L. Pérez González (Ed.), *The Routledge Handbook of Audiovisual Translation* (1st ed., pp. 281–295). Routledge. doi.org/10.4324/9781315717166-27

安部公房『制服』論 ——「死人」の語りと「反帰郷」の物語——

The ‘Anti-Homecoming’ Narrative and the Voice of the Dead in Abe Kōbō: “Seifuku”

解 放

Abstract

This paper analyzes Abe Kōbō’s early play “Seifuku” (1954), focusing on the presence of the “dead man” as a central character and the work’s “anti-homecoming” narrative structure. Set in northern Korea shortly before Japan’s defeat in World War II, the play foregrounds characters who simultaneously occupy the positions of both perpetrators and victims. In particular, it investigates how the figure of the “dead man” functions as a narrative device through which the memories of war and colonial rule are articulated. A comparative examination of the two versions of “Seifuku”—originally written as a one-act, five-scene play and later expanded into a three-act, seven-scene work—reveals how concerns of guilt and victimhood become more explicitly addressed, reflecting the complexities of Abe’s own experiences as a repatriate returning to Japan after the collapse of the empire.

Moreover, this study locates “Seifuku” within the broader context of Abe’s “literary adaptation,” whereby he consistently revisits key themes across multiple genres and media—ranging from novels to television and radio scripts—as a means of probing the political and social realities of his time. By re-evaluating the often criticized “adaptational” aspect of Abe’s drama, this paper demonstrates how “Seifuku”, through its intense focus on repatriation, illuminates marginalized voices in postwar Japanese society, especially those whose personal and collective memories could only be expressed through figures of the dead or spectral presences. In doing so, the play exemplifies Abe’s creative process of negotiating political and social identity within the spatial constraints of the stage, establishing “Seifuku” as a significant milestone in his dramatic oeuvre.

Keywords 安部公房、『制服』、アダプテーション、語り、引揚げ
Abe Kōbō, "Seifuku", Adaptation, Narrative, Repatriation

はじめに

安部公房は、『砂の女』(1962)などの長編小説が世界に注目されるようになったことが理由となり、小説家としてのイメージが強く残されている。しかし、1940年代から1990年代まで、半世紀近くも創作活動が続けてきた安部には、実に多様な文芸ジャンルに触れた作品があるという点は注目すべきである。

安部が最初に刊行した文学作品は、『無名詩集』(1947)という詩集である。この詩集に見られる陰湿な風景や、空虚な内面は、敗戦直後の日本を目の当たりにした作者の考えの露出で、リルケ的な世界への接近の土壌となっている。その後、安部は実存哲学が織り込まれている長編小説『終りし道の標べに』(1948)を発表し、意識の流出に焦点を当てながら文学創作を模索してきた。しかし、1950年代に入ってから、安部はシュールレアリスムに傾倒し、代表作『S・カルマ氏の犯罪』(1951)をはじめ、寓話的な物語世界を構築してきた。この転換の背景には、おそらく彼がこの時期に日本共産党に入党したことで、 Kommunismus

の影響があったことを見出すことが可能であろう⁽¹⁾。また、党员作家として政治運動に参加したことによって、安部は1950年代初期に社会の現実をありのままに記録するルポルタージュを書くようにもなった。

以上、安部の初期文学作品を概観したが、ここで留意すべきは、彼が戯曲を創作するようになったのもこの時期だったということだ。たとえば、戯曲『少女と魚』は『群像』1953年7月号に掲載され、最初に上演された戯曲『制服』は『群像』1954年12月号に掲載されている。このように、安部はフィクションやノンフィクションを同時に描き、さらに小説家と劇作家としての多くの実績を残してきたにも関わらず、現在の安部公房研究へ目を向ける時、小説を対象とする傾向が多く見られ、戯曲に視点を置いたものは相対的に少ないと言わざるを得ない⁽²⁾。とりわけ、安部公房の思想的転換期とも言える1950年代の戯曲に関する研究では、同時代の小説研究と比較すると、十分にされてきたとは言い難いのが現状である。

こうした中、本論文では、安部公房の戯曲が当該小説の翻案ではないか、という疑問を発端とし、『制服』(1954)という戯曲を対象に、登場人物が被害者であると同時に加害者でもある、という特徴に焦点をあて、加害意識と被害意識との葛藤を内包するテクストの意味合いを考察する。さらに、「死人」という登場人物の語りを通して、この戯曲に託されている〈引揚げ者〉としての安部公房の眼差しを明らかにしたい。

一、戯曲に託された作者の想い

安部公房は、小説家としてだけでなく劇作家としての評価も高い。戯曲作品の受賞歴を挙げるならば、『幽霊はここにいる』(1958)は岸田演劇賞を、『友達』(1967)は谷崎潤一郎賞を、そして、『緑色のストッキング』(1974)は読売文学賞を受賞している。ただし、このように数多くの受賞作品があるにも関わらず、彼の戯曲作品が小説ほど評価されていない点には留意すべきである。この理由の一つに、彼の戯曲の多くが小説からの翻案であり、原作としてのオリジナリティに欠けていることが挙げられる。たとえば、『幽霊はここにいる』は、1957年に書かれた『人間修行』という未完の短編小説のパロディで、『友達』は、1951年に出版された短編小説『闖入者』を基に翻案されたものであり、『緑色のストッキング』に至っては、1955年に刊行された短編小説『盲腸』を修正した上で創作されたものである。このような翻案の痕跡を辿ると、安部の戯曲は確かにオリジナリティに欠けており、批判されるべき作品と言わざるを得ない点があるだろう。

実際、これら戯曲のみでなく、安部公房は一つのテーマやモチーフについて、しばしば多様な文芸ジャンルで多角的にその表現を繰り返してきた。その最たる例が小説『夢の兵士』

(1) 安部公房の思想的転換について、拙稿「安部公房における思想的転換——『デンドロカカリヤ』と『S・カルマ氏の犯罪』を通して——」(『日本語・日本学研究』第12号、2022年3月)を参照した。

(2) 安部公房の戯曲に関する研究成果は、単著として、高橋信良『安部公房の演劇』(水声社、2004年4月)、コーチ・ジャンルーカ『安部公房スタジオと欧米の実験演劇』(彩流社、2005年2月)が挙げられる。他に、木村陽子『安部公房とは誰か』(笠間書院、2013年5月)、岩本知恵『安部公房と境界——未だ／既に存在しない他者たちへ』(春風社、2024年3月)などの著作において、安部の戯曲に言及している。

から戯曲『巨人伝説』への流れと言えよう。1957年6月に刊行された短編小説『夢の兵士』は、1957年7月に『兵士脱走』としてラジオドラマ化された後、1959年10月にテレビドラマ化された『日本の日蝕』が放送され、最終的には、1960年3月に戯曲『巨人伝説』が上演された。このように同一の主題を異なるメディアで再度呈示する安部の姿勢は、同時代評において既に批判されてきたのである。たとえば、NHK大阪中央放送局の芸能部長は「前にラジオでやったことがあるとは全く知らなかった。私は芸術祭参加作品はオリジナルでなくてはいけないと思うので、事前にそれが分っていれば出品をひかえただろう」と、安部の創作方式について批判的なコメントを出している⁽³⁾。このような、小説で既に描いた発想の延長線上に脚本を作ることは、あくまで二次的な創作ではないか、という質疑に対して、安部は「作者としてテーマを大切にすれば、いろんな表現媒体を使ってみてくり返し練り直すことが望ましいと思う」と反論している⁽⁴⁾。

小説が映画化されることは、芸術創作においてよくみられることである。しかし、安部公房ほど、小説の映画化だけでなく、演劇、テレビ、ラジオなど、多様なメディアによって同じテーマを表現することに愛着を持つ芸術者は少ない。また、安部に即していえば、すでに発表された短編小説を加筆修正して、長編小説として改めて刊行したこともしばしば指摘されてきた⁽⁵⁾。しかし、安部自身の話に示されているように、彼にとって重要な「テーマ」は、異なるメディアを通して複数回にわたって表現すべき価値を持ち、このプロセスは単なる反復ではなく、「練り直す」ことによって「テーマ」の重要性が逆に浮上する創作方法であるとする。木村陽子は安部のこのような創作手法を「リテラリー・アダプテーション」と定義づけ、その意義について次のように語っている⁽⁶⁾。

安部はそうしたメディアそのものが持つ固有のメッセージ性をいち早く創造行為に取り入れ、それぞれのメディア特性と自らのテーマとを切り結ぶことで、テーマそのものの〈進化／深化〉を図ったのである。その意味で、安部の〈リテラリー・アダプテーション〉は、単なる複数メディアへの横展開ではなく、彼独自の思考方法だったと言えるだろう。[…]つまり、安部を〈リテラリー・アダプテーション〉へと駆り立ててやまなかったその原動力は、日々革新を遂げるメディア・テクノロジーに対する好奇心と、あらゆる手段を用いて世界を表現し尽くそうとする〈トータル〉への欲望の強さであっ

(3) 「焼き直しの芸術祭参加作品 安部氏 放送劇からTV劇に」『朝日新聞』、1959年10月13日

(4) 同上、『朝日新聞』、1959年10月13日

(5) 短編小説から長編小説への改稿について、たとえば、『砂の女』(1962)は短編小説『チチンデラ ヤパナ』(1960)を長編化したもので、『燃えつきた地図』(1967)の原型となっているのは短編小説『カーブの向う』(1966)、『方舟さくら丸』(1984)のプロローグは、『ユープケツチャ』(1980)という短編小説から構成されている。

(6) 木村陽子は「リテラリー・アダプテーション」について、「核となる原作や発想を、紙メディア(小説／漫画)、音声メディア(音楽／ラジオドラマ／ボイスドラマ)、映像メディア(映画／アニメ／テレビドラマ)、舞台メディア(演劇／ダンス)などの複数のメディアで展開することは、今日〈リテラリー・アダプテーション〉と呼ばれる」(木村陽子『安部公房とは誰か』笠間書院、2013年5月、p.14)と述べている。

たと言っていることができるだろう。⁽⁷⁾

引用にあるように、安部は「それぞれのメディア特性」を利用して、「テーマそのものの〈進化／深化〉を図った」のであり、「リテラリー・アダプテーション」に没頭する「原動力」の一つが、「世界を表現」しようとする彼の「欲望」にある。木村の論考を敷衍すれば、安部にとって「テーマ」とは、彼が直面している「世界」の反映であり、現実世界を異なる角度から徹底的に追い詰めようとする思想こそが、作品の「リテラリー・アダプテーション」に通底していると言える。

つまり、安部がある「テーマ」を繰り返し表現することは、この「テーマ」自体に安部が重要視している社会の現実が反映されているということである。作者のこうした意図の背景には、おそらく当時の彼の政治的アイデンティティを見出すことができるだろう。先述した通り、1950年代初頭の安部は思想的転換期の段階にあった。とりわけ、日本共産党に入党してから間もなく、安部公房をはじめ、真鍋呉夫、戸石泰一、小山俊一、吉岡達一などを中心メンバーとして、1952年3月には「現在の会」が発足された⁽⁸⁾。この会合はルポルタージュを重要視するものであり、安部は「現在の会」に入会して以降、各地の運動に参加の際、そこで観察した社会の現実をルポルタージュとして記録してきた⁽⁹⁾。この時期の安部は、日本共産党の綱領に従い、社会の現実を作品に記録することで一般民衆の闘争性を喚起するという、反権力運動に携わっていた。1950年代初頭の安部の作風について、鳥羽耕史は次のように指摘している。

一九五二年は連合軍による占領の終わった年であり、また安部にとっては一九五一年三月の日本共産党入党の翌年であった。夜の会、世紀の会に続き、この改稿の時点で、現在の会という会合に安部は参加していた。これはルポルタージュを志向する会合であり、[……]彼は現在の会に参加していく中で、ルポルタージュと寓話的なものとの接点を探っていた。⁽¹⁰⁾

引用で述べられている「改稿の時点」とは、改訂版の『デンドロカカリヤ』（書肆ユリイカ）が刊行された1952年12月のことである。したがって、1950年代初頭の安部公房が、小説のみならず多様なメディアにおいても同じ主題を描き続けたのは、この社会の現実に着目した姿勢によるものであると推測できる。ここで留意すべきは、この時期の安部の戯曲も、

(7) 前掲、木村陽子(2013年)、pp.40-43

(8) 鳥羽耕史『1950年代——「記録」の時代』河出書房新社、2010年12月、p.63

(9) 安部公房の最初のルポルタージュ『夜蔭の騒擾——五・三〇事件をめぐる』は、血のメーデー事件を記録して、1952年7月に刊行された。続いて、二作目のルポルタージュ『裏切られた戦争犯罪人』はBC級戦犯の探訪記で1953年4月に出版された。三作目は松川事件を下敷きにした『不良少年』で、1954年11月に刊行された。

(10) 鳥羽耕史「『デンドロカカリヤ』と前衛絵画——安部公房の「変貌」をめぐる」『日本近代文学』第62号、2000年、p.108

鳥羽が述べている「ルポルタージュと寓話的なものとの接点を探っていた」軌跡なのだ、という点である。

安部の戯曲が客観的な現実世界を描いている点は、早い段階で指摘されてきた。高野斗志美が「じつさい、安部の戯曲は、小説以上に、現実を素材化してしまうようにみえる」と述べているように、安部の小説と戯曲を比較すれば、戯曲の方が社会の現実之光を当てていることがわかる⁽¹¹⁾。戯曲が現実に着目していることに関して、安部公房は「戯曲をなぜ書くか」という座談会で次のように語っている。

戯曲の空間的特徴としては、第一にむろんあの舞台の制約だけど、もう一つ、そこに現わされてる対象が、完全に意識的に再構成されたもの以外はないという点ですね、全部一応人間の手がかかっている……。反対に、映画や小説の場合は偶然が自由に入り込んでかまわない、というよりそれが特徴だ。芝居を書く面白さは、この相違点の自覚ということもありますね。⁽¹²⁾

上記の引用において、安部は戯曲の特徴を説明しており、さらに戯曲と他の文芸ジャンルとの相違点を述べている。小説や映画と異なり、劇は舞台空間が限定されており、この空間内にあるもの、たとえば登場人物やシーンの設定はすべて限定された舞台を意識しながら構築しなければならない。こうした制限によって、劇が小説や映画ほど幻想的には作れない、というのは紛れもない事実である。しかし、同時に、劇というものが、その劇場にいる観客たちにリアリティを与える効果を生じさせているとも言えよう。戯曲とは、その制約された特徴を活かすことで、むしろ現実をよりリアルに再現することが可能である。この点にこそ、戯曲ならではの「面白さ」があるのだ、という安部の思考がうかがえる。

次に、安部の戯曲は、現実には存在しない物を登場させることによって、大衆に訴えていることで寓意の要素を満たしている。たとえば、本論で取り扱う『制服』(1954)では、「死人」といった人間が死んだ後の魂が登場し、この「死人」を通して、戦後日本における戦争の記憶が喪失しつつある傾向を描いている。また、『どれい狩り』(1955)では、「ウエー」という人間にそっくりな生き物が姿を現しており、この「ウエー」という奇妙な生物を労働力としながら売買する過程を描くことによって、安部は戦後の資本主義社会の風潮を批判してきたと評することができる。安部の戯曲に見るこうした特徴について、高橋信良は「安部演劇の独自性を語ろうとすると、どうしても安部文学の枝葉の一つとして捉えられるだけで、戯曲の示す寓意的意味や文学的意義ばかりが脚光を浴びたことも事実である」と、彼の戯曲における「寓意的」側面を総括している⁽¹³⁾。

以上、安部の戯曲をいくつか辿ってきたが、そこには、彼の小説と共通した特徴——現実

(11) 高野斗志美「安部戯曲の方法意識」『國文學 解釋と鑑賞』第39巻第3号、1974年3月、p.57

(12) 安部公房「戯曲をなぜ書くか」『新劇』1955年9月号(『安部公房全集5』新潮社、1997年12月、p.90)

(13) 高橋信良『安部公房の演劇』水声社、2004年4月、p.55

を描く側面と寓話的な側面が融合されている——が見られた。安部の戯曲には、創作当初から、現実をよりリアルに反映したいという意図があったといえる⁽¹⁴⁾。また、戯曲のみではなく、多様なジャンルにわたって、同じテーマを多角的に表現して追求している理由についても、彼が直面し続けた複雑な構造をなす社会の現実にあったと考える。こうした中、本論では、『制服』という戯曲を対象に、テキストに反映されている社会的現実を考察したい。

二、戯曲『制服』とその改稿

安部公房の最初の戯曲とされているのは、『群像』1954年12月号に掲載された『制服』である⁽¹⁵⁾。1954年12月に刊行された『制服』は一幕五景の構成だが、上演に際して安部は、一幕五景の『制服』を大幅に加筆して三幕七景の改訂版『制服』を創作した。初出版と改訂版の梗概については大きな変化がなく、両方とも1945年2月の朝鮮半島北部を舞台に、定年になった(一説は退職勧告された)日本人の元巡査が本土日本に帰還する直前に殺害され、「死人」となった巡査が自らの死を調査する話を主に描いている。

この三幕七景の改訂版は1955年3月10日から21日まで、新橋飛行館ホールにて劇団青俳によって上演された。後に、三幕七景の『制服』は戯曲集『どれい狩り・快速船・制服』に収録され、青木書店から1955年9月に刊行された。また、三幕七景の改訂版『制服』が上演された約5年後、1960年11月30日から12月5日までに、六本木俳優座劇場で劇団青俳によって一幕五景の初出版『制服』が上演された。つまり、『制服』という戯曲が、一幕五景の初出版よりも三幕七景の改訂版のほうが先に上演されている点には注意しておく必要がある。

処女作の戯曲として未熟なところが散見されるこの『制服』は、残念ながらこれまで十分に研究されてきたとは言い難い⁽¹⁶⁾。代表的先行研究としては、木村陽子の論考が挙げられる。木村によれば、『制服』が創作されたのは、安部が戦争による死者が戦後の日本社会において忘却される傾向に抗い、「自己の内に生きる死者たちの声の代弁する努力を示した」ためである⁽¹⁷⁾。また、『制服』の改稿について、木村は次のように指摘している。

(14) 安部公房の演劇に関して、高橋信良は「安部は、当たり前すぎて私たちが気づこうともしない自己の内部と外部のバランスの不安定さを剥ぎだしにする。そのことは嘘の出来事というよりも、私たちが直面する日常の出来事に直結させて考えることができる。この点において、彼の演劇論は、虚構や現実の違いを越えて普遍的なのであって、舞台芸術の変革とみなすだけでは不十分なのである。/私たちは、演劇をつうじての彼のものの見方が、つねに現在性＝普遍性を持っていることに気づかねばならない」(同上、p.55)と指摘し、その演劇が「日常の出来事」に焦点を当てていることを強調しながら、その背景に「現在性＝普遍性」を見出している。

(15) 新潮社の『安部公房全集』によれば、安部が最初に描いた戯曲は『群像』1953年7月号に掲載されている『少女と魚』である。ただし、この戯曲には目次と本文ともに「戯曲」の表記がなく、上演されることもなかったために、安部の最初の戯曲とは認定されていない。

(16) 『制服』を考察した先行研究として、まず高野斗志美の論考を挙げることができる。高野は作品における加害者と被害者の問題に着目しながら、「おのれの生の真の状況をみうしない、罪と罰をわすれはてていく、みにくい日本人たち」(『制服』『國文學 解釋と鑑賞』第39巻第3号、1974年3月、p.123)と、この被害と加害の問題を、戦後の一般日本人が置かれていた状況に重ね合わせようとしていたのである。

(17) 木村陽子「死者との同化からマルクスの幽霊へ——『制服』から『幽霊はここにいる』への更新」『安部公房 メディアの越境者』森話社、2013年12月、p.77

安部の大幅改稿の意図を推測するならば、「制服」という、より高次の加害者を設定することによって、下級役人や下層日本人が朝鮮人に行った加害行為があたかも免責され、彼らが純然たる被害者のように受け取られかねない危険性を回避する意図があったのではないか。⁽¹⁸⁾

安部はこの改稿を通して、戦時中における植民地での日本人——「下級役人や下層日本人」といった被害的側面を帯びる弱者共同体——の加害的側面を描こうとしていた。木村によれば、安部の着眼点は戦時中の入植者にあり、こうした入植者の両面性と、敗戦直前の彼らの惨状を『制服』において表象しようとしたのである⁽¹⁹⁾。ただし、『制服』における登場人物の被害的側面と加害的側面の葛藤や、「死人」の語りは、戦時中の入植者のみではなく、敗戦後の引揚げ者の内実とも関わっているように思われる。本節では、『制服』の改稿箇所を詳細に比較対照した上で、作品に託されている安部の引揚げ者としての記憶と認識を見出したい。

『制服』の初出版と改訂版のストーリーはほぼ同じで、改訂版の方では登場人物間の会話が大幅に増やされている。そこで、改訂版において一部の登場人物の結末が初出版のそれと異なっている点に注目する⁽²⁰⁾。まず、酒の密造を行っている日本人二人組「ひげ」と「ちんば」についてだが、初出版の「ちんば」が病気で亡くなっているのに対して、改訂版での「ちんば」は、「ひげ」が「口をふさいで」殺している。また、「巡查」が殺されて、「巡查」の「女房」が「ひげ」と共に日本へ戻ろうとする場面だが、初出版では二人はそのまま舞台から退場するのだが、改訂版での「女房」は、舞台上で「ひげ」に殺されてしまうという結末を迎える。

以上の考察から、改訂版の登場人物、とりわけ「ひげ」という人物に焦点を当てる時、その行為はより残酷なものへと改筆されており、初出版の「ひげ」よりも改訂版の「ひげ」のほうが、一層加害性の強い人物として描かれている。実際に二つのテキストを更に比較するとき、「被害者」という言葉が両テキスト共に使用されているものの、「加害者」という表現は改訂版にしか見られない。(以下、引用部分の下線、太字、及びカッコの数字は全て執筆者によるもの)

(18) 木村陽子「「境界」者たちの加害者論争——安部公房・戯曲「制服」の改稿問題を中心に——」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第51巻、2005年2月、p.180

(19) 〈入植者〉という表現について、木村陽子は「旧植民地出身者」という言葉を使っており、この〈入植者〉における被害と加害の問題に関して、「この時期すでにさまざまなレベルで語られていた旧植民地出身者の、いわゆる〈被害の神話〉として受容されてしまうことを、彼は激しく警戒したのではなかったか」(同上、p.180)と指摘している。

(20) 『制服』における初出と改訂の差異について、木村陽子もその結末部分にあると述べた上で、改訂版の登場人物はより「凶悪化」したものと指摘している。また、初出版においては、「支配階級上層部という階級レベルでの共通の敵を発見したことで」(同上、p.179)、登場人物が本来持つ加害的側面が隠蔽されたと論じている。本稿では、このような〈入植者〉の被害と加害をめぐる葛藤を、敗戦後の引揚げ者と関連づけて考察を進める。

【初出版】(一幕五景)

ちんば 誰だい、あんたは？

青 年 おれはこの男を(と制服の男を顎でさし)殺した犯人だってんで、なぶり殺しに された朝鮮人だよ。

ちんば (ニヤリとする)じゃ、あんたも何割かはこの大将のギセイ者だってわけだな。

青 年 そうだな、何割かはね。

制服の男 おれのギセイ者だって？

ちんば そうだよ、だって、犯人は……

制服の男 (腹をたてて)ちんばのくせにだまってろ。犯人のこたア、こちとらがいちばんよく知ってるんだ。

青 年 (ちんばの方にのりだして)誰が犯人なんだ？

ちんば ひげだよ。おれはね、半分死にかかってたけど、ちゃんと知ってたんだ。あいつ、おれがもうなんにも分からねえと思ってるもんだから、大声でひとり言をいうのさ。え、チンサア、おとといの晩、おめえなんで死んだんと思う？

制服の男 ……(息をはずませて)なんだ？

ちんば 凍死だよ。こごえ死にだよ。おめえの声を聞いて、ひげのやつがすぐ出ていったろ。けど、すぐ手ぶらで、戻ってきてさ、こんなこと言ってるんだ。やつ、眠ってやがる。死んだかと思ったよ。追いはぎめ、やつが死んだと思って、ずらかりやがったんだな。運のいいやつだ。人間なんて、そうめったに運がいいなんてこたア、ねえんだけどなア。二千円と土地に養子か、ちえっ、すこしつめてえとこで、酔いをさましやがれた。わざわざ手をかしてやるほど、おれア、お人好しじゃねえからな、ちっとくらい、風邪でもくらったほうが、身のためだい……てなことばかり言ってさ、ぐるぐる歩きまわって、二時間くらいもおめえを表にほっといたんだぜ。

制服の男 なんだって、おめえ、そんなに細かくおぼえてるんだ。

ちんば (笑って)そうよ、おれもそう思ったからさ。

青 年 (ニヤニヤしながら)犯人と被害者の区別がだんだんつかなくなってくるようだな。(1)

制服の男 (くやしそうに)二千円のことなんか、黙ってりゃよかったんだ。

ちんば 問題はそれだけじゃないさ。おれたちだってそれほどの悪党じゃなえからな。だっておめえ、その二千円がかせげなくて、結局こらでうろうろしてたんだぜ。おれたちはな、おめえに、もっとでっかい、うらみがあったんだ。いいかい、聞きなよ、おれたちがなんとか食っていったのはな、そりゃおめえのおかげよ。おめえは、内地人だってんで、朝鮮と同じことしてるおれたちを大目に見てくれやよな。

制服の男 それで、なんでうらむことがあるんだい。

ちんば おかげで、おれたちは朝鮮からきらわれたよ。朝鮮相手の商売で、朝鮮からきらわれたら、たまんねえじゃないか。おかげでよ、ついせんだって山の方の部落に行ったときだって、どこにもとめてくれねえで、これこのとおりおっちぬもとをつくちゃったんだ。

制服の男 おれのせいじゃねえ。

【改訂版】(三幕七景)

ちんば 誰だい、あんたは？

青 年 おれはこいつを(と男をさし)殺した犯人だってんで、なぶり殺しにされた朝鮮人よ。

ちんば それじゃ、むかむかするはずだ。

青 年 (皮肉に)ばかにさとったようですねえ。

ちんば (むっとして)おれは、おれはね、我慢することになれてるんだ。

青 年 そういう言い方は、よけいむかむかさせられるね。

(ひややかな、対立的な、間)

ちんば (意地悪げに、男にむかい、青年の方を顎でしゃくってみせて)いまこの大将と、なにを喧嘩していたんですね？

制服の男 (狼狽しながら、不安げに)え？……なに……

青 年 (せまるように)誰が被害者で、誰が加害者か、(2)この男に、小屋の中の芝居を聞かせようとしていたんだ。

ちんば 被害者と加害者だって！へへへ……(3)

青 年 (制服の男を指さし、低く、ゆっくり)いいか、おれは、こいつが苦しむところを見たいんだ。こいつが加害者だ。おれが殺されたのは、こいつのせいだ。このばかさえ、いなけりゃ、なにもかも、すっかりもとどおりだったんだ。

ちんば (いきどおりをたたえて)なに、この地獄みてえな冬のせいさ。この先生はね、凍死だったんだぜ。ひっくりかえったか、ひっくりかえされたかした後でよ、ひげとこの先生の女房とはね、たがいになすりあいしながら、この先生をほっぽりだしといて、いちゃついでいやがったんだ。おお、つめてえ冬のせいよ。

制服の男 (おどおどと)おい、もういっぺん、言ってみな。

ちんば ひげとあんたの女房はな、知っててあんたを、凍らしちゃったんでさ。

制服の男 女房だって？……なんで、あいつ、そんなにおそくまで……？(間)そうか……やっぱり、そうか……私の女房には、みんな、目をつけてやがったからな……私はちゃんと知ってたよ。

ちんば (はげしく)あんたはばかだよ。二千元と土地に養子だなんて……そんなこと、黙ってりゃいいんだ。うまいことは、自分だけで、こっそりやりゃ、

いいんだ。腹がへりすぎた犬に食べねえ肉のかたまりを見せりゃ、気が狂うのは当たり前じゃないか。

[…]

ちんば おれが山に仕入れに行ったときによ、あんたの仲間が、おれに宿をかさねえんで、ごらんのとおりの風邪をひいちゃったんじゃないか。別じゃないって言い合えんなら、犯人のお仲間に入んな。そんなら、おれも、文句はねえよ。

制服の男 私のせいじゃない。

ちんば そうとも、冬のせいよ。だがね、火がなきゃ、火薬も、ただの粉さ。

制服の男 私は、おまえに、親切だったよ。おまえも、そう言ってたんじゃないか。

ちんば おれは、あんたのその服に可愛がられたよ。おかげで、このちんばが人様からは一人前の悪党あつかいしていただいたからね。

[…]

制服の男 私のせいじゃない。私だって……

二つのテキストを詳細に比較対照すれば、まず初出版では、朝鮮人の「青年」は「犯人と被害者の区別がだんだんつかなくなってくるようだな」(1)と語っているが、改訂版では、「誰が被害者で、誰が加害者か」(2)と、「犯人」から「加害者」へと言葉が変容している。また、改訂版では「ちんば」が、「被害者と加害者だって」(3)と語っているのに対して、初出版ではこの言葉が全く見られない。こうした修正が、作者の意図的行為であるかどうかは断言できないが、改訂版では登場人物の「加害」意識が明らかに強くなっている。また、初出版に見られる「犯人」という言葉はあくまで〈法律上に罪を犯した者〉を意味しており、その罪が必ずしも加害行為を伴うという意味で書かれている訳ではない。しかし、改訂版では「犯人」が「加害者」に修正されており、この「加害者」という言葉に着目すると、冤罪であるという可能性を除くならば、この表現自体が〈傷害や損害を加える人間〉という意味合いを帯びていると言えるだろう。

改訂版にみる「加害者」におけるイメージの具現化は、上記引用の他の箇所からもうかがわれる。初出版では「制服の男」(＝「巡査」)の死亡原因についてだが、「ちんば」の説明によれば、「ひげ」は「制服の男」を「二時間くらい」「表にほっといたんだ」と述べており、「制服の男」は「凍死」したのである。この記述に着目すれば、「ひげ」は残酷な人間ではなく、むしろ「ちんば」が「おれたちだってそれほどの悪党じゃなえからな」と語っているように、敗戦間際の悪化した状況下で日本へ帰還しようとする「制服の男」に嫉妬する人物でしかない。

しかし、改訂版ではこの状況が一変する。「制服の男」の「凍死」は、「ひげとこの先生の女房とはね、たがいになすりあいしながら、この先生をほっぽりだしといて」ということに改筆されている。この「ほっぽりだしといて」に示されているように、「制服の男」が「凍死」したのは、間違いなく「ひげ」と「制服の男」の「女房」による殺人行為であり、ここでの「ひげ」は、改訂版の「ちんば」が語っている「一人前の悪党」のイメージとも合致している。このように、

改訂版での「加害者」と「被害者」との葛藤は、初出版より一層際立っており、一部の登場人物が「加害者」として改筆、導入されている。

以上のように、『制服』という戯曲の改訂は、被害と加害をめぐる問題を内核の一つとして呈示している。被害と加害の葛藤というテーマを前景化しているこのテキストは、安部がこの時期において考えていた社会の現実と関連しているとも考えられる。周知のように、安部は青少年期を満洲で過ごし、敗戦後に引揚げ者として日本に帰っている。またこの引揚げ者とは、帝国の棄民であると同時に、入植者でもあったために、被抑圧者と抑圧者の側面を同時に備えてもいる。本作品に描かれている被害的記憶と加害的立場の葛藤は、日本に帰還してからの引揚げ者たちが直面した普遍的な課題でもあり、当然安部公房を苦しめた理由の一つでもあろう。

『引揚げ文学論序説』を書いた朴裕河は、その著作において、「こうしてみると、『引揚げ者』の文学は戦後の早い時期から出されていて、なかでも五味川純平、梶山季之、林青梧、そして小林勝はすでに五〇年代に占領地・植民地・引揚げ体験を作品化していたことがわかる」と指摘している⁽²¹⁾。したがって、引揚げ作家が引揚げ体験を語り始めた1950年代において、1954年に刊行された『制服』が植民地や引揚げを主題としていることは、作者の意識した結果と推測できる。おそらく、安部は『制服』に通底する加害意識と被害意識の葛藤を通して、1950年代に直面している重要な現実の一つ、すなわち、引揚げ者が本土の日本社会における生存の状況を深く考えていたのかもしれない⁽²²⁾。次節では、『制服』における「死人」という特殊な存在に焦点をあてながら、安部が引揚げについて如何に考えてきたかを探求する。

三、「死人」の語り／引揚げ者の代弁者

『制服』は1945年2月の朝鮮半島北部を舞台として、安部自身の話によれば、この戯曲は敗戦間際に新潟から奉天に戻る途中、朝鮮半島北部に上陸した際の実体験をモデルにして描いたものである⁽²³⁾。ここで注意すべきは、歴史的に実在した地名や確実な時間が提示されている安部の作品に彼の植民地体験が見出せる、という点である⁽²⁴⁾。『制服』の舞台となる朝鮮半島北部の町は、現実の「羅津」という町を下敷きにして、「羅津」は戦時中に貨物と乗客が集まる重要な植民地都市と言われている。安部公房は自身の経験を描くことには否

(21) 朴裕河『引揚げ文学論序説——新たなポストコロニアルへ』人文書院、2016年11月、p.34

(22) 1957年に刊行された『けものたちは故郷をめざす』は、安部が唯一公言している過去の満洲の実体験による小説である。朴裕河の『引揚げ文学論序説』でも、『けものたちは故郷をめざす』を引揚げ文学に帰結している。安部はこの長編小説以降、小説作品において、満洲での実体験を語ることがなかった。したがって、安部公房が1950年代に考えた主題の一つに、植民地と関連するものを挙げることができるかもしれない。

(23) 安部公房「年譜」『新鋭文学叢書2 安部公房集』筑摩書房、1960年12月、p.278

(24) 小林治は安部の作品に歴史的地名が記述されていることについて、「作品世界内の街や村が、その描写の緻密さと即物性によってきわめて具体的であっても、固有の名前を持たず、現実存在する街や村との照合を拒否していることが常である安部作品の中では、その意味で特別な存在であると言える。そして、そのような作品を書いた背景に、安部の満洲体験があることはとりあえず指摘しておかねばならない」(「安部公房『けものたちは故郷をめざす』について：満洲体験の対象化をめぐる」『駒沢短大文』第25号、1995年3月、p.54)と述べている。

定的だとされるが、この戯曲は『けものたちは故郷をめざす』(1957)と似て、彼の植民地での記憶が前景化されているということに何の問題も生じないだろう。たとえば、安部はエッセイ「“制服”について」の中で下記の一節を書き記している。

これは私が文字どおり生まれてはじめて書いた芝居である。このテーマは、もう三、四年前から、なんとかしてみたいと思ってはうまくいかず、投げ出すことをくりかえしていたもので、それが突然芝居になってとび出してきたときには、われながらびっくりしてしまったものである。まったく突然とび出してきた。芝居を書く気などまるでなかったのに、もしや芝居に、と思ったと同時に、出来上ってしまっていた。[…]
私の発想の中には、なにか芝居の形でなくては現わせないものが、ながいこと押しこめ閉じこめられたままになっていたようなのだ。⁽²⁵⁾

安部公房は『制服』を創作する「三、四年前」からある「テーマ」を考え、この「テーマ」の媒介について、「芝居の形でなくては現わせない」と思案に暮れて戯曲『制服』を作った。ここで留意すべきは、1954年12月の初出版『制服』から「三、四年」遡ると、『<歴史の頁が>』(1951)という小説に辿り着くことができるという点である⁽²⁶⁾。この『<歴史の頁が>』という小説は未完のままで、安部の「なんとかしてみたいと思ってはうまくいかず」の記述と合致する。『<歴史の頁が>』は、引揚げ船での出来事を中心に描いていることで、安部が上記のエッセイにおいて思案していた「テーマ」に社会の現実が投影されているならば、この現実とは引揚げを指し示している可能性が高い。

そこでまず、『制服』において、登場人物の死体から魂が抜け出して、死者の視線で物語を語っている設定に着目したい。実際、「死人」という死んだ人間が魂となってテキストに登場することは、この時期の安部作品の一つのテーマとも言える。たとえば、『制服』とほぼ同時期に書かれた『変形の記録』(1954)や『死んだ娘が歌った……』(1954)などの短編小説にも、死んだ肉体から魂が出るエピソードが描かれている。『制服』に登場する「死人」のイメージは非常にユニーク且つ意味深いと思われる。たとえば、次の二箇所が典型的である。

【改訂版】(三幕七景)

制服の男 ……おや、知らん顔だね、ばかにいばってるんだね……(やや、きつとして、自転車の前をまわり、反対側にきて)ねえ、郵便屋さん、なんとか言えばよ。ふん、そうかい、おれのこたあ、見えもせん、聞えもせんというわけか……(すねて)ああ、結構ですよ、どうせおれなんぞ生きそこないだあ！

(25) 安部公房「“制服”について」『劇団青俳「制服」上演パンフレット』1955年3月10日(『安部公房全集5』新潮社、1997年12月、p.62)

(26) 『<歴史の頁が>』という小説は、安部公房の未完成作品で、題目も明記されておらず、『安部公房全集3』(新潮社、1997年10月)では、冒頭部の「歴史の頁がめくられようとするとき」という一節を題目とし、本作を1951年に書かれたものとしている。

[…]

……(急に自信を失った様子で)な、郵便屋さん、見えないのかい？え、本当に見えんのかね……(立ちどまって、あえぐように)くそ、やっぱり、見えな
いんだ！

【改訂版】(三幕七景)

制服の男 なんだ、私が見えるのかい？

青 年 (静かに、あざけりの調子をこめて)びっくりするこたぁない。おたがいさま、私も死人ですからね。

制服の男 (相手をじろじろ見ながら、半信半疑で)へえ……でも、あんた朝鮮人じゃないか？

青 年 (笑って)お気の毒さまでしたね。朝鮮人なら、死なないとでも言うつもりかい？[…]

引用に示されているように、この「死人」は生きている人間と全く同じであり、ただ他の人間から見えない存在なだけである。しかし、「死人」同士はお互いの姿が見え、言葉も通じる。このように『制服』では、「死人」と、生きている人間という二つの共同体が対立的に創られている。また、一般の人間は、殺されるか、もしくは自殺するか、といった主体が剥奪されるプロセスを経て、「死人」となっている。つまり、一般の人間に対して、「死人」とは主体を失った他者とされており、この両者の間には明確な非対称的な関係を見出すことができよう。何よりもこうした非対称的な関係は、戦後の日本社会における引揚げ者と、本土の日本人との関係を思い起こさせる。たとえば、安部と同じ引揚げ者であり、劇作家でもある宮本研は、帰還後に受けた差別と偏見について、次のように回想している。

当時のわたしにとっては、日本というのは一つの小さな島であり、日本人はそこに住む原住民でしかなかった。そして、わたしはといえば、肩身のせまい思いで、そこに寄留している一人の在日日本人であった。その意識は、いまだに確固として、わたしのなかのどこかにある。[…]
わたしはその七年間を日本を離れていたわけだが、結果としては、帰国してからの二十年間が、逆に、わたしにとっては空白なのである。[…]
美しいなどといわれる日本語も、わたしには一つの器物でしかない。⁽²⁷⁾

宮本の記述にあるように、引揚げ者は日本に帰還後、自身が受けた偏見と差別に抵抗することができず、その〈声〉は社会において完全に排除されてきたのである。ルポルタージュをこの時期に描いていた安部は、引揚げに関する記録文学を残していないものの、自身が

(27) 宮本研「特別企画 日本人の侵略と引揚げ体験 引揚げ者一〇〇人の告白」『潮』第142号、1971年8月、pp.138-139

そうであるように、引揚げ者の現状を冷静に観察してきたことが予想される。『制服』では「死人」という登場人物が設定されたが、これは引揚げ者が戦後の日本社会では受け入れられず、その記憶を死者として表象するしかなかった、ということが想定される⁽²⁸⁾。つまり、安部は、戦後の日本社会において、〈声〉を奪われただけでなく他者化されてしまった引揚げ者の哀しい現実を、「死人」の語りによってよりリアルな台詞と共に打ち明けようとしたのだ。木村陽子は安部の作品に登場する死者や幽霊といった存在から、彼の外地での経験との関連性を次のように見出している。

こうして、収容所と病院船の中で、恐らくは一〇〇〇人を下らない死者と遭遇する〈境遇〉に置かれた安部は、引揚げ後、大学に復学し医学部を卒業したが、生涯医師になることはなかった。[……]大量の死者と遭遇するという〈境遇〉が、若き安部の心に深い傷痕を残したことは疑いえないが、むしろ、戦後の彼は「俺は死人が大好きさ」とアイロニカルに公言し、死者と向き合う作家になった。そして、その言葉にたがわず、彼は〈リテラリー・アダプテーション〉によってさまざまな〈手法〉に乗せながら、テーマをくり返し練り直し〈死者／幽霊〉をめぐる思索を深めていった。⁽²⁹⁾

引用にあるように、安部の作品に「死者」や「幽霊」といったものが登場するのは、彼が引揚げの総移動において、「大量の死者」を目の当たりにしたことで、「深い傷痕」というトラウマを受けたからである。こうした心的外傷を克服するために、安部はあえて「死者と向き合う」ことを選んで死者を書いた。つまり、安部は引揚げという過酷な移動を通して、死者という存在の意義を発見したのである。このように、『制服』における「死人」という設定の背景に、引揚げ者としての安部公房の記憶を見出すことができるかもしれない。

ただし、「死人」という登場人物を引揚げ者の代弁者とする設定にはいくつかの疑問が残る。たとえば、敗戦後の日本社会において、他者とされている引揚げ者を描く場合——たとえ引揚げ者をそのまま描くのでなく、「死人」という存在を通して描くとしても、引揚げ者に関する描写を、作者の望む方向に操作する傾向に陥ってしまいがちだからである。実際、現実をありのままに記録するはずの安部のルポルタージュにおいても、鳥羽耕史が「ルポルタージュとしては必須の論証を怠ってしまった」と述べているように、そこには〈声〉を奪うという他者を描くことの暴力性がうかがわれる、ということをここで指摘しておかなければ

(28) 朴裕河が「戦後日本において『引揚げ』が、一般に国民の物語になりやすい『受難』の物語でありながらも原爆物語と違って日本人の『公的記憶』にならないままなのは、まずはそれが植民者たちの物語であったことに理由を求めることができるだろう。すなわち『加害者としての日本』を含む物語は、戦前とは異なるはずの『戦後日本』では受けとめられる余地がなかったのである」(前掲、朴裕河(2016年)、p.24)と指摘しているように、戦後日本は戦時中の帝国日本と異なることを表明するために、植民地自体を象徴する引揚げ者に関わる全ての記憶とその存在を排除しようとしたのである。

(29) 前掲、木村陽子(2013年)、pp.70-71

ならない⁽³⁰⁾。

先述の通り、死者の視線から物語を語る設定は、『制服』以前に構想されている。それは、たとえば、1954年4月に刊行された『変形の記録』という短編小説では、殺された日本軍人の魂が満洲で彷徨う姿が描かれている。『制服』と『変形の記録』は、共に植民地を舞台として設定し、巡査と軍人という登場人物は、同じ国家権力を象徴しており、物語の主人公は殺されて魂となっている点でも共通している。ここで注目すべきは、『変形の記録』において、その登場人物が満洲という特殊な空間に閉じ込められたことで、日本へ引揚げることができないように設定されている、という点である。この構想に対して、『制服』では、植民地に残留せざるをえない引揚げ者の結末が暗示されており、この示唆性も『変形の記録』で呈示されている引揚げ者の結末と類似している。そこで次節では、『制服』に描かれている日本に帰還できない日本人の結末に焦点を当て、安部公房の引揚げ体験、ひいては、その引揚げ者としてのアイデンティティが如何に反映されているかを洗い出す。

四、帰郷できない引揚げ者の物語

『制服』に登場する日本人は、そのほとんどが無事に本土へ引揚げることが叶わない。初出版においての「巡査」は、引揚げ船の切符を買う直前に凍死してしまう。酒の密造をしている日本人「ひげ」と「ちんば」に関しては、まず「ちんば」は病気でなくなってしまう。「ひげ」は「巡査」が凍死してから、「巡査」の「女房」と共に引揚げ船に向かうが、二人が乗船できたかどうかは、その描写からは判断できない。一方、改訂版では、「ひげ」は、「ちんば」と「巡査」の「女房」を殺し、そのまま自分も姿を消してしまう。この初出版における日本人引揚げ者が日本に帰国できないという設定は、改訂版においてさらに補強され、登場人物全員が帰国できない設定へと修正されている。

こうした本土へ引揚げることができない日本人集団は、敗戦が近づいてきたことで権力構造の底辺に転落し、それでもその中でお互いを必要としていた。たとえば、「ひげ」は「巡査」の「女房」に向かって、「そういうわけじゃねえ、弱いもの同志はくつつくのがあたりめえだ」と語っていることから、弱者共同体における団結の必要性を主張しているといえることができるだろう。ここで、「巡査」が引揚げる前夜に、「ひげ」から受けた話の部分に注目する。

【初出版】(一幕五景)

友情だよ。おれたちは、本当に、一人欠けても、やっていけない仲だったんだぜ。おれだって、なにも、仲間の倅せに水さそうなんては思わねえ。けど、盃もかわさねえで行っちゃうなんて、おめえ、それも、もう一人の仲間が寝込んでるって時に
よ……

(30) 鳥羽耕史によれば、安部公房のルポルタージュ『裏切られた戦争犯罪人』(1953)には作者自身の認識が過剰に投影されており、その詳細について、「ルポルタージュとしては必須の論証を怠ってしまった。その点で、『裏切られた戦争犯罪人』はルポルタージュとして失敗作に終わったといえるだろう」(『運動体・安部公房』一葉社、2007年5月、p.178)と指摘している。

「ひげ」は「巡查」との「友情」を語り、「ちんば」を合わせて、三人は「一人欠けても、やっていけない仲だった」と述べている。酒の密造という作業において、三人の間には上下関係や、雇用関係といった抑圧的な関係がみられない⁽³¹⁾。木村陽子はこうした弱者共同体内部の関係を「友情にも似た落伍者同士の連帯感」と指摘している⁽³²⁾。ここに描かれている登場人物の連帯関係は、そのまま敗戦間際の植民地における引揚げ者が、互いに依存しながら生きていたという実態を示唆していると推測できる。この特殊な状況は『制服』という作品において偶発したことではなく、たとえば、引揚げ文学の代表作『流れる星は生きている』(1949)の中で、藤原ていが「日本人はあちこちにかたまって眠っていた」と書き記しているように、引揚げという残酷な移動の途中で、引揚げ者同士がお互いに助け合って生きていくというようなことは、ごく一般にあった話である⁽³³⁾。

『制服』と『流れる星は生きている』の時空間は確かに異なっているが、二つの作品に登場する日本人引揚げ者が直面している緊迫した状況と、こうした状況下において抑圧される存在と化した者同士が自然に結束を強めている点で共通している。しかし、この均衡は、ある二つの要素が出現したことで崩壊してしまう。まず「巡查」の身分を象徴する「制服」の出現である。「巡查」は引揚げ前夜に「ひげ」とお酒を交わしている途中で酔う。酒と交換するために質に出すべき品物を「ひげ」へ渡そうとした際、過去に着ていた「制服」がそこから露出してしまったことで物語に変化が生じる。この「制服」をめぐる、定年になった「巡查」と「ひげ」との間に生じた微妙なズレについて、「巡查」が乗船券を買える時間が過ぎてしまうのではと心配している際の、「ひげ」の助言からうかがうことができる。

【初出版】(一幕五景)

大丈夫さ、その服を着ていきゃいいじゃねえか。そうすりゃ、誰もなんとも言わんよ。な、時間外だって、大っぴらで、いばって買えるよ。[...]どうだ、たいしたもんだ、一年まえとそっくりだぜ。どっからどう見たって、まちがえのない、よっぱらいのチンサアだ。

「ひげ」の言葉に示されているように、「巡查」は「制服」さえ着ていれば、切符販売の「時間外」で切符を購入できる特権を持ち、こうした特権に対して、「誰もなんとも」言わないということが作品の中でも常識化されている。この下級役人の「巡查」は、すでに退職しているにも関わらず、この権力を象徴する「制服」さえ着用してあれば、その権力が退職前の水準で維持され、弱者共同体内部における抑圧する側の存在と化してしまう。つまり、「制服」

(31) 改訂版『制服』では、初出版『制服』にみる「友情」という表現が「精神」に変更されている。また、三人の仕事の分担がより明確に記されており、三人は平等であることが徹底されている。

(32) 前掲、木村陽子(2005年)、p.179

(33) 藤原てい『流れる星は生きている』日比谷出版社、1949年4月(『流れる星は生きている』中央公論新社、2007年7月、p.231)

という権力を象徴する記号の出現によって、同じ抑圧される共同体であるはずの内部でも、権力構造が上下に分けられてしまうのだ。このような、抑圧される共同体内部の分裂は、敗戦後の引揚げという総移動において、日本人引揚げ者同士の中にも起きた悲劇を示唆していると考えられる。これは作者個人の体験だけではなく、引揚げ者の間で見る暴力行為というのは、引揚げ期間中において普遍的なものであったことは事実のとおりである。引揚げの実態を研究している若槻泰雄は『戦後引揚げの記録』の中で、この『制服』のテキストと似たことを書き記している。

危急の場合、人間の醜い姿が最も現れるのは利己主義である。接收を免れて比較的楽な生活をしていた日本人の中には、難民に対し冷たい態度をとるものが珍しくはなかった。[……]極限状況においては、利己主義とともに退廃・刹那主義が蔓延する。[……]妻子を売った金で自堕落な生活を送ったり、日本人が日本人を襲うという現象さえ現れた。⁽³⁴⁾

この記述からも、「楽な生活」をする日本人と「難民」との間には上下関係が見られ、そこに「日本人が日本人を襲うという現象」が必然的に起きていたことが読み取れる。

次に、『制服』に示唆されている、敗戦直前の植民地で弱者共同体内部の均衡が崩壊するもう一つの誘因としては、植民地に残留している一般邦人が、本土日本に帰還できるかどうかという結果を指摘できる。これについては、「巡查」が初めて「ひげ」と「ちんば」に、自分が日本への引揚げが決定したことを語っている際、「ひげ」と「ちんば」の反応からうかがわれる。

【改訂版】(三幕七景)

制服の男 うん、じつはな、その話もあって、ちょっとよったんだが……(包をふりむいて見て)私もな、そら、もう年だし、人並みの、身のふり方も考えにやらんとってさ……そんな、こんなで、考えていた矢先、ちょうど国のほうから便りがあってな、手頃な土地が目かったって言ってきたもんで、ま、考えてみて、こりゃ逃がせん機会だというわけで、思いきって引き揚げることに決めたのさ。ああ、あさって、新潟行の船が出るってんで、これから、いらんもの売っぱらうついでに、切符買って来ようと思っただけ……
(ちんば、起き上がり、半身乗り出すようにして男をみつめる)

ひ げ (しだいに興奮して)くに帰るってかい？ 本当かね？

ちんば どこって言ってたっけか？ 空襲は大丈夫かい？

制服の男 ああ、千葉の奥だからな。

ちんば 千葉ってば、醤油のとれるところか……

(34) 若槻泰雄『戦後引揚げの記録』時事通信社、1991年12月、pp.177-178

制服の男 ああ、醤油もあるし、魚もとれるし、米もとれるし、木のはえた山もあるし、
年中流れている川もあるし、それに住んでいるのは日本人ばかりで、どん
な貧乏人だって、みんな同じ日本人なんだからなあ。

[…]

ひげ へえ？おれたたちのことなんぞ、もうどうでもいいってのかい？

下線に示されているように、「制服の男」——この時点ではまだ「制服」を着ていない——が語っている「日本人」とは、本土の日本人を指し示しており、この概念には、「ひげ」や「ちんば」のような外地にいる日本人が含まれていない。つまり、引揚げが可能となった時点の「制服の男」とは、既に「弱いもの同志」ではなくなってしまう。この『制服』に呈示される、引揚げが可能な人間と不可能な人間に分類された結末は、同じ日本人引揚げ者の中でも差別や偏見が生じているという現実を示唆しているのだろう。

引揚げ体験が僕にとってわりと大きな意味を持つというのは、やはり、三百何十人を出発して、博多の引揚援護局に着いたときには、六十何人くらいになっていたという事実ですね。われがちに小舟に乗るときに、ほかの人間を突き退ける力を持った人間だけが残っちゃったわけですから、これははじめから善いも悪いもないし、もしそれが裁かれるんだったら、これは当然刑務所行きであるというふうに思っています。⁽³⁵⁾

引用は引揚げ作家の五木寛之がその引揚げ体験を語った内容の抜粋である。「ほかの人間を突き退ける力を持った人間だけが残っちゃった」という一節に着目すれば、日本に帰還できた引揚げ者は、帰還できない人間を「突き退ける」——実際に突き退けたわけではなくとも、両者の間には残酷な競争があったことは事実である——ことで生き残った結末が記録されている。『制服』において、同じ日本人引揚げ者であっても、本土に帰還する希望を抱く引揚げ者と、引揚げを無期限に延長された引揚げ者の間にみる争奪、すなわち「ひげ」が見せた豹変は必然的な行為であり、そこには安部が実際に目の当たりにしてきた引揚げ者の惨状と重なっているように思われる。

このように、同じ引揚げ者によって結成された弱者共同体であっても、敗戦間際になると身分に相違が見られ、それによって必然的に共同体内部には階級の差が生じてしまうのだ。また、引揚げという移動においては、特権者と一般人との間に見られる抑圧関係とは別に、たとえ同じ一般人同士であっても、本土の日本に帰還できるかどうかで抑圧関係が生じてしまう。『制服』のテキストから呈示されている人物間の被害と加害との葛藤は、引揚げという国家による総移動に見られる、かつての被害者が加害者に代わり、加害者はいつの間にか被害者となってしまう、という複雑な状況を示唆しているとの結論に至った。

(35) 五木寛之・日野啓三「異邦人感覚と文学」『文学界』1975年4月号、p.193

おわりに

本論文では、安部公房の戯曲『制服』を対象として、作品に登場する「死人」という特殊な存在に着目しながら、その語りの複雑性を考察し、〈引揚げ者〉としての安部公房の眼差しを追ってきた。作品に登場する「死人」は、普通の人間と同じように行動や発言はできるが、その〈声〉は死んだ人間、すなわち「死人」の間でしか機能しない。こうした「死人」の背景に、戦後の日本社会において、引揚げ者の〈声〉が本土の日本人に排除されていることによって、彼らの記憶が「死人」という特殊な存在としてしか表象できなかった、という状況を描こうとしている安部の姿勢を読み取った。

また、この論文では、『制服』における登場人物が被害者であると同時に加害者でもある、という特質を通じて、加害意識と被害意識との葛藤を内包するテキストが、安部公房の引揚げに関する認識を反映していることを明らかにした。『制服』において、語り手は登場人物の加害的側面と被害的側面の両方を語ろうとしたが、初出版においてはその葛藤の全貌を書き記すことはできなかった。その一方で、改訂版では、引揚げ者の加害的側面と被害的側面の葛藤が十分に前景化され、その背景には、安部が引揚げ者として実感した諸感覚と、当時の社会で直面した諸現実を見出すことができる。この戯曲に登場する人物は、おそらく日本に帰還できなかった引揚げ者たちの現実の縮図であり、そこには必ず具体的な因果関係が示唆されていた。つまり、入植者が戦時中の植民地での加害的立場と、敗戦後において日本に帰還できない結末という被害的記憶が因果としてテキストに提示されていることが明らかになった。

安部は重要なテーマについて異なるメディアで繰り返し表現する、という実践を頻繁に行ってきた。このような、社会の現実に対する作者の多様な思考が投影されているアダプテーションという創作手法には、小説のみでは語りえない重要な主題——『制服』における〈引揚げ〉という引揚げ者たちの総移動を例に挙げられる——を他の文芸ジャンルを通して徹底的に探究し続ける、引揚げ作家としての安部公房の切なる希求が込められている。しかし、作家が一つの素材を書くことに執着すると、これを安部に即して言うならば、この執着はアダプテーションという同じテーマを繰り返し表現する創作手法であるものの、そこには、作家自身が描いているテキストをそのまま事実として認識してしまう、という疑問が生じてしまう。

たとえば、引揚げ者を語る際、よく言われるのが〈故郷の喪失〉や〈帰郷の困難〉であるが、過去の植民地を故郷と見なし、その故郷が喪失した感覚を物語るのは、果たして妥当だと言えるのであろうか。無論、『制服』の中では朝鮮人も登場するものの、「羅津」を連想させる作品の舞台が果たして彼らの故郷と言えるのかについては疑問が残る。〈帰郷〉という概念をめぐる問題は、他者を描写する際に、作者が無意識に自己の欲望や意図に基づいて他者を操作しようとする傾向とも深く関連している。つまり、言語を用いて他者を正確に描写することの限界が指摘でき、言語による他者の表象が常に恣意的なもので、他者を純粹に描くことは不可能であるという理論的問題に帰結する。

解 放(かい ほう、XIE Fang)
吉林大学

【付記】『制服』の引用に関して、一幕五景の初出テキストは『安部公房全集4』(新潮社、1997年11月)、三幕七景の改訂テキストは『安部公房全集5』(新潮社、1997年12月)に拠る。引用中の[...]は省略を意味し、論述に見る<>は強調を意味する。なお、引用・参考文献の副題と、ルビや傍点などは適宜省略した。

参考文献

- 五十嵐恵邦『敗戦と戦後のあいだで 遅れて帰りし者たち』筑摩書房、2012年9月
池田紀「出ふるさと記Ⅲ——引揚者・安部公房」『新潮』第102巻第6号、2005年6月
今野喜和人編『翻訳とアダプテーションの倫理』春風社、2019年2月
伊豫谷士翁、平田由美編『「帰郷」の物語／「移動」の語り 戦後日本におけるポストコロニアルの想像力』平凡社、2014年1月
岩田和男、武田美保子、武田悠一編『アダプテーションとは何か——文学／映画批評の理論と実践』世織書房、2022年2月
大久保典夫「安部公房における小説と戯曲」『國文學 解釋と鑑賞』第39巻第3号、1974年3月
加藤聖文『海外引揚の研究——忘却された「大日本帝国」』岩波書店、2020年11月
高榮蘭『「戦後」というイデオロギー 歴史／記憶／文化』藤原書店、2010年6月
坂堅太「安部公房と「満洲」 起点としての植民地体験」『植民地文化研究』第18号、2019年7月
佐藤泉『戦後批評のメタヒストリー 近代を記憶する場』岩波書店、2005年8月
島村恭則編『叢書 戦争が生みだす社会Ⅱ 引揚者の戦後』新曜社、2013年8月
鈴木政子『語らなかった女たち——引揚者・七〇年の歩み』本の泉社、2018年8月
波瀾剛「〈故郷〉を〈創造〉する〈引揚者〉——安部公房とシュルレアリスム」『日本語と日本文学』第30号、2000年3月
橋本明子著、山岡由美訳『日本の長い戦後 敗戦の記憶・トラウマはどう語り継がれているか』みすず書房、2017年7月
リンダ・ハッチオン著、片渕悦久、鴨川啓信、武田雅史訳『アダプテーションの理論』晃洋書房、2024年4月

絵本を用いた初級日本語会話授業の実践 —語彙・文法習得における効果—

Implementing Picture Books in Beginner Japanese Speaking Classes: Effects on Vocabulary and Grammar Acquisition

ゲン・リン・ラン

Abstract

Improving methods of teaching speaking is crucial in foreign language education. While there are benefits to traditional activities that encourage students to create dialogue independently, there is a need for learning material that provides more model speech support. In one of the author's Japanese speaking classes at a university, picture books were introduced as teaching material and received positive feedback from students. Recognizing the potential benefits of picture books for enhancing speaking skills, this study explores their impact on vocabulary and grammar acquisition. The author conducted two beginner Japanese speaking classes at the same university over three sessions. In the first session, both classes learned the same grammar structure and completed a pre-test. In the second session, one class used a picture book as learning material, while the other used a traditional text-based dialogue script with minimal illustrations, and then both classes completed a post-test. In the third session, the learning materials were switched between the two classes, and a second post-test was conducted.

The results showed no significant differences between the two classes in terms of vocabulary retention and grammar acquisition across the sessions. However, within-group analysis revealed that Class A experienced a significant improvement in vocabulary retention and grammar acquisition during the third session, when using the picture book. In Class B, a significant improvement in vocabulary retention was noted when using the dialogue script during the third session, but no change in grammar acquisition was observed at any time. While the results do not conclusively demonstrate the superiority of picture books in enhancing speaking skills, they suggest potential benefits of the material. Interviews with students highlighted positive learning experiences with picture books, citing increased motivation, engagement, and speaking practice both in and out of class. Although further research is required to confirm the effectiveness of picture books in improving speaking skills, the findings indicate promising potential for their use, especially for large classes where group work is necessary.

Keywords 日本語教育、絵本、会話授業、協同学習、成人学習者、語彙・文法習得

Japanese language education, picture book, speaking class, cooperative learning, adult learners, vocabulary/grammar acquisition

1. はじめに

日本語授業において、特にさまざまな国における大学の日本語専攻の学部教育課程においては、スピーキング指導の重要性がますます高まっている。スピーキング能力は、外国語学習における主要な能力の1つであり、発音・イントネーションや文法・語彙の正確さ、流暢さなどが求められる技能である⁽¹⁾。この能力を向上させるためには、効果的な教材と魅力的な学習活動を学生に提供する必要がある。これまで、筆者は協同学習理論に基づいたさま

(1) American Council on the Teaching of Foreign Languages の『ACTFL proficiency guidelines 2024』に基づく。

さまざまなグループ活動を授業に導入し、学生が協力してスピーキング能力を高める試みを行ってきた。これらの活動は良好な成果をもたらし、学生は授業に対して高い満足度を示し、最終試験においても高い成績を取得できている。

しかし、コース終了時に実施した学生へのインタビューでは、いくつかの問題が見られた。学生は即興で会話スキットを作成してスピーキングを練習しており、このような活動は運用能力と創造能力を大いに活用できる取組ではあるものの、特に初級学習者にとってはワーキングメモリーへの負担が大きくなることから、学習意欲の低下や精神的疲労を引き起こす可能性があることが分かった。興味深いことに、学生に最も好ましい活動を尋ねたところ、多くの学生が絵本を用いた活動を選んだ。

外国語教育における絵本活用に関する研究は一部存在するが、成人学習者⁽²⁾を対象とした研究はほとんど行われていない。絵本は伝統的に子ども向けの教材と見なされることが多く、成人学習者向けの教材としての利用は一般的ではない。しかし、筆者は、適切なストーリーを持つ絵本であれば、成人向けの会話授業においても有益な教材になり得ると考える。絵本の視覚的要素は、学生の授業への参加を促す刺激を提供し、効果的なスピーキング練習のために明確な会話文脈を示してくれる。また、絵本にはモデル自然会話が含まれており、学生が自分で文法的に正確な表現や会話の流れを考える負担を軽減できるため、初級学生のワーキングメモリーへの負荷を減らす利点もある。なお、絵本にはストーリーラインが含まれており、言語学習、特に会話スキルの向上に効果的であると考えられる。その理由は、学生が論理的な順序に沿った文脈の中で会話を練習することで、より効果的な学習成果が得られると指摘されているからである(Oller 1983, Taira 1993)。

以上のことから、本研究では成人学習者を対象とした日本語会話授業における絵本活用に焦点を当て、その効果を検証することを目的とした。特に、絵本を用いた活動が学生のスピーキングにおける語彙および文法習得にどのような影響を与えるかについて考察する。そして、本研究で得られた知見に基づき、絵本が成人学習者の日本語スピーキング能力向上に有効な教材となり得るかどうかを明らかにすることを目指す。

2. 先行研究

2.1 絵本の特徴に関する外国語スピーキング教育における理論的枠組み

絵本の特徴として、視覚的な要素がある、ストーリーラインがある、自然な口頭表現のセリフがあるという3点が挙げられる。これらの特徴により、絵本は外国語スピーキングの練習において有用な教材となり得るのではないだろうか。特に初級レベルの学生にとって、この種の教材は、視覚的な絵やイラストとシンプルで明確なストーリーラインが学習している言語の理解を助け、さらに教材に含まれる自然な口頭表現を通じて実践的なスピーキングスキルを養うために効果的であると考えられる。これらの絵本の有効性に関する予測は、以下の4つの理論的枠組みに基づいている。

(2) 本研究での「成人学習者」は、18歳以上の成人で教育活動に参加する者を指す。

・Oller(1983)のエピソード仮説⁽³⁾

Oller(1983)のエピソード仮説によると、テキストはエピソード的に動機づけられ、構造化されているほど、より容易に産出、理解、そして想起が可能になるとされている。Ollerは文型の意味を意識したコミュニケーション活動を用いた言語学習の実験(Oller, 1968)と、自然で時系列的なテキストを用いた言語学習の実験(Oller, 1969)の結果から、順次的な構造(sequential structure)と有意義な問題(meaningful conflict)を含むエピソード的構造に従ったテキストを使用することが、第二言語習得において良好な効果をもたらす可能性があることを示唆した。

Taira(1993)は、Oller(1983)のエピソード仮説を実証するために、日本人大学生を対象とした英語授業において実験を行った。継続的なストーリーラインを含む教材と、そうでない教材をそれぞれ2つのクラス(合計96名)に導入し、教材の英語能力への影響を事前・事後テストを用いて検証した。その結果、エピソード的な練習問題を使用した学生群の方が、テストにおいて有意に高い得点を示し、対照群に比べて全体的な英語能力が向上していることが明らかとなった。

・Paivio(1971)の二重コード仮説

Paivio(1971)の二重コード仮説は、情報処理のために2つの認知サブシステムが存在することを主張している。具体的には、長期記憶(LTM)においては、言語システムとイメージシステムという2つのサブシステムが機能している。言語システムは単語を用いて知識を処理し、イメージシステムは非言語的情報、例えば心的イメージを処理する。Paivio(1971)によれば、これら2つのサブシステムは並行して作動し、同一の情報に対して二重の表現を提供する。

そのため、言語教育の現場において画像を取り入れることにより、学習者は言語的および視覚的な情報の両方に触れることができる。その結果、同じ概念に対して2つの相互に関連するメンタルコードが形成され、その学習内容がより記憶に定着しやすくなるとされている。さらに、二重コードにより複数の回復経路が確保され、あるコードの思い出しが難しい場合には、もう一方のコードが記憶回復の手がかりとして機能する。したがって、外国語教育において画像を用いた学習を組み込むことで、学習プロセスが加速する可能性が示唆されている。

バウアー& ヒルガード(1981)は、多くの学習実験を通じて、情報をイメージや視覚的に表象することで、通常1.5倍から3倍の記憶促進効果が得られることを示した。つまり、人間が新しい内容を学習する際、言語的情報と視覚的イメージを組み合わせることにより、より高い学習効果が得られることを示唆している。

鄭(2007)は、Paivio(1991)の二重コード説に基づき、第二言語の語彙を習得する際に、母語の翻訳に依存する学習方法と、絵や状況など単語の意味を表す非言語的な刺激を同時に提示する学習方法とでは、第二言語の心内辞書の形成や語彙習得に関わる神経基盤に異

(3) 原文はEpisode Hypothesisである。

なる影響を与える可能性がある」と述べている。実験では、日本語を母語とする44名の被験者に、全く未知の韓国語の語彙を①テキストから学ぶ方法と、②コミュニケーション場面から学ぶ方法で習得してもらった。その結果、コミュニケーション場面とともに覚えた単語は、コミュニケーション場面でも翻訳テストでも同様に正確に想起できたことが明らかになった。つまり、場面に基づいて学習された単語は、テキスト条件下でも正確に想起できることから、場面学習がテキスト学習よりも語彙習得において効果的であることを示している。場面学習がテキスト学習に比べ、想起タスクにおいて高い効率を示したという結果は、Paivio(1991)の二重コード仮説によって裏付けられている。

・Swain(1995)のアウトプット仮説

Swain(1995)のアウトプット仮説は、言語学習者が単に言語を理解するだけでなく、積極的に言語を使用することによって、本格的な言語習得が促進されると主張している。この仮説によれば、アウトプット活動は文法や語彙の理解を深化させ、実際のコミュニケーションに必要なスキルを向上させるとされている。

具体的には、アウトプットが学習者に以下の3つの主要な機能を果たすと指摘している。第一に、「気づきの機能」であり、学習者が自身の言語的な知識の不足や誤りに気づく機会を提供する。第二に、「仮説検証の機能」であり、学習者が自身の言語運用を試み、その結果を基に適切さを確認することを可能にする。第三に、「メタ言語的機能」であり、アウトプットを通じて言語形式や構造を内省し、理解を深めることを助ける。本研究ではグループでアウトプット活動を行うため、学習者が自らの発話が誤りであることを示す否定的フィードバックを受ける機会が多くなり、発話の修正を迫られることになる。これにより、上述した気づきの機能がより促進されるようになる。同時に、フィードバックがある環境では、仮説検証の機能とメタ言語的機能が自然に発揮されることが期待される。

・Johnson et al.(1994)とKagan & Kagan(2009)の協同学習理論

Johnson et al.(1994)の理論においては、協同学習は学習者同士の相互作用に重点を置き、互恵的な協力関係、積極的なインターアクション、個々の責任感、そしてグループスキルの要素を組み合わせることによって学習の質が向上するとされている。これに対して、Kagan & Kagan(2009)の理論は、Johnson et al.(1994)の理論と多くの共通点を持ちながらも、活動の構造的側面、すなわち協同学習の活動のストラクチャーに特に重きを置いている。これらの理論はいずれも、協同学習が個別学習に比べてより効果的であり、学習者スキルを向上させる手段として位置づけている。

以上のことから、Oller(1983)の仮説に基づくストーリー性を持ち、さらにPaivio(1971)の視覚的事象と語彙的情報の2つのシステムを兼ね備えた教材として、絵本が挙げられる。また、筆者の大学で担当している初級レベルで、人数の多いクラスにとっては、絵本を用いた協同学習活動においてスピーキングの練習を行うことにより、学生のスピーキング能力の向上が期待できると考えられる。

2.2 外国語教育における視覚教材の活用

絵本やコミックストリップ⁽⁴⁾など、視覚的教材に関する先行研究が外国語教育の分野においてはいくつか行われてきた。まず、英語教育における視覚的教材に関しては理論研究と実践研究が存在している。

Donaghy & Xerri(2017)の英語教育に関する著書において、Theuma(2017)は、コミックス⁽⁵⁾の利点として、話し言葉が文字として明確に提示されている点を挙げ、映画などの視覚教材よりも注目しやすく、学習者のスピーキング練習に有用であることを指摘している。また、成人学習者にも適用可能であり、学習意欲を高める効果があるとも述べている。同書において、Lewis(2017)はグラフィックノベル⁽⁶⁾やコミックスの特徴とその教育的活用法について論じ、具体的には、イラストや文字情報を基にした推測活動、ストーリーの順序を探る活動、セリフの適切な位置を考える活動、エンディングの作成活動などが詳細に記述されている。また、Lewis(2017)は、この種の教材において相槌や感情表現、オノマトペといったインフォーマルな言語表現が含まれていることを指摘し、それが話し言葉の練習に有効であることを示している。さらに、Csabay(2006)は、Oller(1983)のエピソード仮説に基づき、外国語授業におけるコミックストリップを活用した様々な活動を提案している。

英語会話授業に視覚的教材を導入した実践研究も多く報告されている。Öz & Efecioglu(2015)、Gultom et al.(2022)、Torkkel(2022)はアンケートを行った結果、視覚的教材のメリットとして学習者の学習意欲の向上、語彙習得の促進、言語理解力の向上、スピーキングに不可欠な自然な口頭表現の習得機会等を挙げており、これらは英語教育の現場で肯定的に評価されている。また、これらの効果は年少学習者に限らず、成人学習者にも有効であることが出口(2017、2018)の研究で示されている。さらに、Rokhayani & Utari(2014)、Renyta(2015)、Harahap(2021)の実践授業では、コミックストリップやグラフィックノベルを使用した英語の会話授業では、中学生や高校生の語彙習得、発音、総合的な口頭表現力の向上が報告されている。

日本語教育における絵本使用に関する研究としては、山口(2002)や渡邊(2016)の研究があり、これらの研究では年少者の学習者に積極的な日本語の読解への取り組み、内容理解と記憶の強化、読解能力や読む意欲・自信の向上といった効果が報告されている。また、国府田(2004)の研究では、絵本を通じた活動が「話す」「聞く」技能の練習にも寄与することが示された。

しかし、これらの先行研究にはいくつかの課題が残されている。まず、Csabay(2006)やLewis(2017)で提案された教材の適用方法が実践的に検証されていないため、大人数クラ

(4) コミックストリップとは連続したイラストや絵のコマに短いテキストやセリフを組み合わせてストーリーを伝える形式のメディアである。通常、数コマからなる短い形式で、1ページまたは小さなスペースに収まるようデザインされている。

(5) コミックストリップの定義と同様である。

(6) グラフィックノベルとはイラストや絵を主体としながらも、長編のストーリーを展開する形式の本のことである。

スでの使用における適用性、グループ分けの方法、所要時間、学生の反応などの具体的な要素が十分に明確化されていない点が問題として挙げられる。次に、既存の実践的な研究の多くは、年少学習者を対象にして1つのグループのみで行われており、成人学習者への適用可能性については十分な検討がされていない。また、会話テストの評価が研究者1人のみによって行われている場合が多く、評価の信頼性を高めるためには、より多様な評価者や複数の評価方法を導入する必要がある。したがって、今後の研究では、より適切なテスト実施方法の検討とともに、スピーキング能力の多様な側面を含めた包括的かつ正確な評価方法が求められる。

なお、日本語教育における絵本の使用に関する先行研究は、主に幼児や小学生を対象とし、読解能力への効果を中心に行われており、使用されている絵本は日本人向けに市販されているものが多い。そのため、成人学習者を対象とした研究が求められている。また、日本語スピーキング能力への影響についても、より詳細な検証が必要であると考えられる。さらに、日本語学習者のニーズに合わせた専用の絵本の開発が今後の課題として挙げられる。

3. 研究方法

3.1 教材デザインと授業の流れ

本研究は、絵本を用いた日本語会話の実践授業を通じて、スピーキングする時の学生の語彙力および文法力の向上を検証することを目的とする。対象者はホーチミン市にある大学の日本学部の1年生17名である。これらの学生をクラスA(8名)とクラスB(9名)の2クラスに分けて、授業を行った。授業はZoomを使用してオンラインで実施され、全3回の授業が行われた。本研究の対象は『みんなの日本語』の第27課まで学習を終えた初級学習者であり、対象とする学習項目は可能形である。

使用した教材は筆者が開発したもので、2種類あり、会話文教材と絵本教材である。会話文教材とは主に文字で書かれたセリフが中心であり、イラストは補助的な役割で少数含まれている教材である。一方、本研究における絵本とは、1ページごとに絵とテキストが組み合わさり、大人向けの物語性を備えたストーリーラインを持ち、4人以上のキャラクターによるナラティブと会話文を含み、さらに絵がキャラクターの状況や文化的背景を明確に示すように描かれた教材である。

2種類の教材は具体的な内容は異なるが、どちらも同じ登場人物が設定されており、ストーリーはホーチミン市の観光をテーマに展開されている。それぞれの教材に登場する場面や会話のシーンは異なるものの、同等の文字数と共通のキャラクターおよび場面設定により、2クラスの間で均一な学習内容を確保できるよう工夫されている。授業で使用した具体的な教材の詳細は、図1の通りである。

図1 本実践で使用された教材の詳細

会話文教材	絵本教材
➤ 新出語彙のリスト ➤ ギャップのある会話文のファイル ②チケット売り場に並んでいる時 ラン： ねえ、みんな 見て！ 学生割引が あるんだ！ アイン： あっ、本当だ。学生は 2万ドンで (2) _____んだ。(買う) バオ： ゆかさん、学生証を 持っている？ ゆか： うん、持っているよ。 スタッフ： 学生証を 見せてください。 みんな： はい、お願いします。 スタッフ： はい、(3) _____。(確認する) ありがとうございます。 ゆか： すみませんが、現金が足りません。クレジットカードで (4) _____か？(払う) スタッフ： はい、クレジットカードが (5) _____。(使う) ゆか： じゃあ、お願いします。 ➤ 完成会話文のファイル ②チケット売り場に並んでいる時 45秒 ラン： ねえ、みんな 見て！ 学生割引が あるんだ！ アイン： あっ、本当だ。学生は 2万ドンで 買えるんだ。 バオ： ゆかさん、学生証を 持っている？ ゆか： うん、持っているよ。 スタッフ： 学生証を 見せてください。 みんな： はい、お願いします。 スタッフ： はい、確認できました。ありがとうございます。 ゆか： すみませんが、現金が足りません。クレジットカードで 払えますか？ スタッフ： はい、クレジットカードが 使えます。 ゆか： じゃあ、お願いします。	➤ 新出語彙のリスト ➤ セリフ抜き絵本のファイル おいしい ホピロンを 食べた後、バオさんは 言いました。 (バオ) 「 _____ 」 (ラン) 「 _____ 」 (アイン) 「 _____ 」 (ゆか) 「本当だね。 _____ 」 ➤ セリフのみファイル ページ 6 - みんな、私、いちごのスムージーが飲みたい！ - 一杯いっぱい 2に 万まん ドンで _____んだ。(買う) 日本ではマンゴスチンとドラゴンフルーツが高いよ。アボカドも。 - みんな、見て、この店みせはスムージーが安いよ！ - うん、私もものが乾いた。すいかを食べたい！ ➤ 完成絵本のファイル おいしい ホピロンを 食べた後、バオさんは 言いました。 30秒 (バオ) 「みんな、私、いちごのスムージーが飲みたい！」 (ラン) 「うん、私も ものが乾いた。すいかを食べたい！」 (アイン) 「みんな、見て、この店はスムージーが、安いよ！」 (ゆか) 「本当だね。一杯 2万ドンで買えるんだ。日本では マンゴスチンとドラゴンフルーツが 高いよ。アボカドも。」

2クラスの授業の流れは次の通りである。まず、新しい語彙をグループで読み上げ、意味確認と発音の練習を行う。次に、朗読活動に先立ち、「可能形」の活用を練習するための課題を設定し、学生が文法を十分に理解できるよう工夫した。会話文クラスは翻訳の段階に入る一方で、絵本クラスでは文法や語彙の理解をさらに深めるために、翻訳課題だけではなく、セリフの順番を並べ替える活動を取り入れた。課題の答え合わせを行った後に完成版の絵本を用いて朗読活動を実施した。

朗読活動においては、絵本のページごとに、または会話文の段落ごとに、時間制限を設けた。それにより、学生の集中力を高め、話すスピードの改善を図った。なお、本調査の教材はオープンエンディングであるため、学生が次に続く会話を考える活動も実施した。これで、自由会話スキット作成を円滑に導入し、学生の負担を軽減することを目指した。

3.2 調査の手続きおよび分析方法

第1回授業終了後に事前テスト(下表のO1)を実施し、その得点に基づいて学生を2つのクラスに分けた。第2回および第3回授業の後には、それぞれ事後テスト1(下記のO2)と事後テスト2(下記のO3)を実施した。テストの結果を分析し、クラス内で事前テストおよび2回の事後テストの間に有意な相違が見られるかどうかを確認するため、繰り返しのある一元配置分散分析 (One-way repeated measures ANOVA)⁽⁷⁾を用いて統計分析を行った。このデザインはEdmonds・Kennedy(2017)による事前事後テストデザインのスイッチングレプリケーション法である。また、2クラス間各テストの平均結果に有意な差が見られるかどうかを明らかにするため、等分散を仮定した2標本によるt検定も行った。

授業の回数、使用教材と事前事後テストのデザインを表1に示す。

表1 授業の回数、使用教材と事前事後テストのデザイン

	1 回目		2 回目		3 回目	
グループ A (n=8)	2 クラス 一緒に基本 を勉強	O ₁	文章	O ₂	絵本	O ₃
グループ B (n=9)			絵本	O ₃	文章	O ₂

使用したテストは、2つのパートから成る会話テストである。パート1は語彙テストで、学生はテストビデオを視聴し、画面に映し出されるベトナム語で書かれた単語を日本語で言う形式で行われた(図2)。このテストには時間制限が設けられているが、必要に応じてビデオを一時停止することが許可され、回答がない場合には「パス」と答えることができる。

パート2はパート1と同じパターンで行われるが、ベトナム語で書かれた文を日本語に翻訳するタスク(図3)であり、文法能力を評価することを目的としている。学生が自分のスマートフォンやコンピュータを使用してテストを受ける様子を録画し、その動画を筆者に送るように指示した。本研究のテストの結果は大学の正式な評価に反映されないため、学生が授業で得た知識を活用し、不正行為を

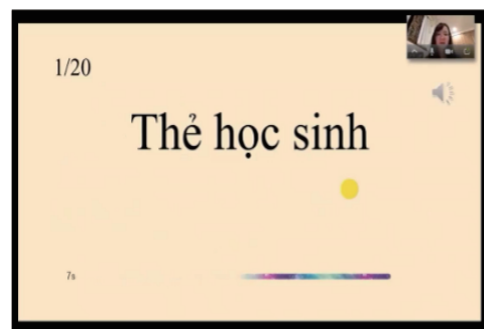


図2 パート1の語彙テストの例

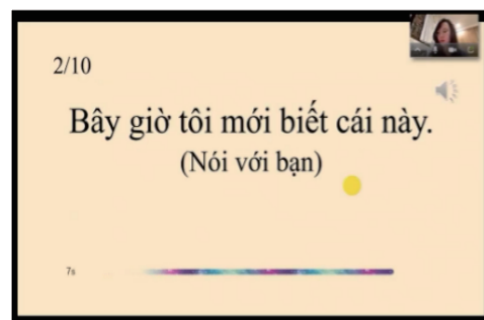


図3 パート2の文法テストの例

(7) 繰り返しのある一元配置分散分析 (One-way repeated measures ANOVA) は、1か月後～2か月後～3か月後などの3時点以上の平均値の比較を行う経時的なデータの比較に用いられ、量的従属変数を対象として分析する方法である。

行わずにテストを受けるよう指示された。

実践授業3回の後に、各種類の教材を用いて勉強した体験について把握するため、受けた学生全員に半構造化インタビューを行った。

4. 結果

4.1 2クラス間の差

各クラスの会話テストの結果を表2に示す。語彙テストは20点満点で、文法テストは10点満点となっている。

表2 各クラスのテストの点数

ク ラ ス A	事前テスト		事後テスト 1 (会話文)		事後テスト 2 (絵本)	
	語彙	文法	語彙	文法	語彙	文法
A1	18	8	19	7	20	9
A2	19	4.5	18.5	8	19.5	9
A3	13	8	17	8	19	9.5
A4	9	8.5	17	7	19	8
A5	12	5.5	9	4	13.5	7.5
A6	14	5.5	19	5.5	17	5
A7	13	5	17	4.5	19	9
A8	9	5	14	4.5	16	6

ク ラ ス B	事後テスト		事後テスト 1 (絵本)		事後テスト 2 (会話文)	
	語彙	文法	語彙	文法	語彙	文法
B1	16	9	17	7	20	9
B2	18	6.5	19	8	20	9
B3	15	8.5	20	10	20	7.5
B4	16	7.5	16	4	17.5	3
B5	17	6	17	8	17	9
B6	14	5	17	5	20	8
B7	15	6	12	8	20	9.5
B8	11	4	15	6	16	5
B9	12	7.5	14	6	12.5	9

4.1.1 2クラスの事前テストの平均値の比較

第1回の授業では、学生たちは同じクラスで同じ内容を勉強して、基本練習を行った後、事前テストを受けた。表3に、クラスAとクラスBの事前テスト(語彙テストおよび文法テスト)の平均値を比較したt検定の結果を示す。クラスAとクラスBの学生の語彙能力が等しいかどうかを確認するために、事前テストの平均値に対してt検定を実施した。まず、クラスA($M = 13.375$)とクラスB($M = 14.889$)の語彙テストにおける平均値の差について、統計的に有意な差があるかを検証した。自由度(df)は15であり、t値($t = -1.039$)を得た。両側検定の結果、p値は0.315であり、通常の有意水準である0.05を超えていたため、帰無仮説は棄却されなかった。したがって、クラスAとクラスBの語彙テストの成績に統計的に有意な差が存在しないことが示された。

表3 クラスAとクラスBの事前テストの平均値の比較に関するt検定結果

	語彙 A	語彙 B		文法 A	文法 B
Mean	13.375	14.889	Mean	6.250	6.667
Variance	13.411	5.111	Variance	2.643	2.625
Observations	8	9	Observations	8	9
Pooled Variance	8.984		Pooled Variance	2.633	
df	15		df	15	
t Stat	-1.039		t Stat	-0.528	
P(T<=t) two-tail	0.315		P(T<=t) two-tail	0.605	
t Critical two-tail	2.131		t Critical two-tail	2.131	

続いて、クラスA(M = 6.250)とクラスB(M = 6.667)の文法テストの平均値に統計的に有意な差があるかどうかを検証した。自由度(df)は15であり、得られたt値は-0.528であった。両側検定の結果、p値は0.605であり、通常の有意水準である0.05を大きく上回っていたため、帰無仮説は棄却されなかった。したがって、クラスAとクラスBの文法テストの成績に統計的に有意な差はないと結論付けられる。

よって、クラスAとクラスBの間で2種類のテストにおいて統計的に有意な差は見られず、両クラス的能力が等しいことが確認された。

4.1.2 2クラスの事後テスト1の平均値の比較

2回目の授業では、クラスAは会話文教材を使用した一方、クラスBは絵本教材を使用してスピーキングを練習した。2クラスの事後テスト1の平均値を比較したt検定の結果は表4の通りである。

表4 クラスAとクラスBの事後テスト1の平均値の比較に関するt検定結果

	語彙 A 会話文	語彙 B 絵本		文法 A 会話文	文法 B 絵本
Mean	16.313	16.333	Mean	6.063	6.889
Variance	11.353	6	Variance	2.674	3.361
Observations	8	9	Observations	8	9
Pooled Variance	8.498		Pooled Variance	3.041	
df	15		df	15	
t Stat	-0.015		t Stat	-0.975	
P(T<=t) two-tail	0.988		P(T<=t) two-tail	0.345	
t Critical two-tail	2.131		t Critical two-tail	2.131	

語彙A(会話文)と語彙B(絵本)の平均値(クラスA 16.313、クラスB 16.333)に統計的に有意な差があるかどうかを検証したところ、自由度(df)は15であり、t値は-0.015となっており、p値は0.988であり、これは有意水準0.05を大きく上回っている。したがって、語彙Aと語彙Bの間に統計的に有意な差がないと判断される。

同様に、文法A(会話文)と文法B(絵本)の平均値(クラスA 6.063、クラスB 6.889)の両側t検定の結果、自由度(df)は15で、計算されたt値は-0.975となり、p値は0.345である。これは有意水準0.05を大きく上回っている。したがって、文法Aと文法Bの間に統計的に有意な差がないと分かった。

したがって、2回目の授業の時点には、クラスA(会話文)とクラスB(絵本)のテスト結果の間に、統計的に有意な差は認められず、両者の語彙能力と文法能力は等しいと言える。

4.1.3 2クラスの事後テスト2の平均値の比較

3回目の授業では、使用する教材を交換し、クラスAは絵本教材を使用し、クラスBは会話文教材でスピーキングを練習した。表5は、クラスAとクラスBの事後テスト2の平均値を比較したt検定の結果を示したものである。

表5 クラスAとクラスBの事後テスト2の平均値の比較に関するt検定結果

	語彙 A 絵本	語彙 B 会話文		文法 A 絵本	文法 B 会話文
Mean	17.875	18.111	Mean	7.875	7.667
Variance	4.911	6.924	Variance	2.625	4.938
Observations	8	9	Observations	8	9
Pooled Variance	5.984		Pooled Variance	3.858	
df	15		df	15	
t Stat	-0.199		t Stat	0.218	
P(T<=t) two-tail	0.845		P(T<=t) two-tail	0.830	
t Critical two-tail	2.131		t Critical two-tail	2.131	

語彙A(絵本)と語彙B(会話文)の平均値(クラスA 17.875、クラスB 18.111)を比較するためにt検定を行ったところ、自由度(df)は15であり、t値は-0.199となっており、p値は0.845である($p > 0.05$)。したがって、語彙Aと語彙Bの間に統計的に有意な差がないと結論付けられる。

同様に、文法A(絵本)と文法B(会話文)の平均値(クラスA 7.875、クラスB 7.667)の両側t検定の結果、p値は0.830である($p > 0.05$)。したがって、文法Aと文法Bの間に統計的に有意な差がないと分かった。

よって、3回目の授業の時点にも、クラスA(絵本)とクラスB(会話文)のテスト結果の間に、統計的に有意な差は認められず、両者の語彙能力と文法能力は等しいことが分かった。

以上の各t検定の結果を総合的に分析すると、語彙および文法において、会話文教材を使用したクラスと絵本教材を使用したクラスの間には、いずれのテストにおいても統計的に有意な差は見られなかった。これにより、両クラスの学習成果はほぼ同等であると判断される。

以上のことから、語彙や文法の学習において、会話文教材と絵本教材のいずれも有効であり、学習効果が均等であると結論づけることができる。

4.2 クラス内における3回テストの平均値の差

本研究では、クラス間の学習効果を比較するとともに、クラス内において3回の授業を通じて学習効果の変化が生じたかどうかを検証した。クラスAは会話文教材を先に使用し、その後絵本教材を用いてスピーキング練習を行った。一方で、クラスBは絵本教材を先に使用し、その後会話文教材を使って練習を進めた。クラスAにおいては、会話文教材から絵本教材へと進む学習効果を観察し、クラスBでは絵本教材から会話文教材へと進む学習効果を調査した。語彙テストと文法テストの得点の平均値を基に、繰り返しのある一元配置分散分析(One-way repeated measures ANOVA)を実施し、これらの学習効果の変化を検討した。一元配置分散分析で主効果が有意であった場合、どの条件の組み合わせに差があるのかを調べるためにボンフェローニの方法を用いて p 値を調整しながら t 検定を繰り返して、下位検定を実施した。

4.2.1 クラスAの3回のテスト得点平均値の比較

まず、3回の授業にわたってクラスAの語彙能力の変化を確認する。表6は、クラスAの3回にわたる語彙テストの平均値を比較した結果を示している。

表6 クラスAによる3回の語彙テストの繰り返しのある一元配置分散分析の結果

Source	DF	Sum of Square (SS)	Mean Square (MS)	F Statistic (df ₁ ,df ₂)	P-value
Factor A: Between Subjects (rows)	7	146.2396	20.8914	4.7574 (7,14)	0.006387
Factor B: Between Treatments (columns)	2	83.5208	41.7604	9.5097 (2,14)	0.002463
Error	14	61.4792	4.3914		
Total	23	291.2396	12.6626		

Mauchlyの球面性検定により、球面性の仮定は棄却されず、仮定に違反していないことが示された ($\chi^2(2) = 3.184, p = .204$)。

繰り返し測定の分散分析では、3回テスト間で従属変数に有意な差があることが示された ($F(2, 14) = 9.51, p = .002$)。各テストの平均値は語彙A・事前が13.38、語彙A・会話文が

16.31、語彙A・絵本が17.88である(表6、図4)。

表7 クラスAの各語彙テストのボンフェローニ補正を使用した事後の対応のt検定の結果

Pair	Difference	F statistic	Critical value	p-value
「語彙A・事前」と「語彙A・会話文」	2.9375	5.5403	9.7807	0.0508
「語彙A・事前」と「語彙A・絵本」	4.5	15.2215	9.7807	0.005888
「語彙A・会話文」と「語彙A・絵本」	1.5625	6.0179	9.7807	0.0439

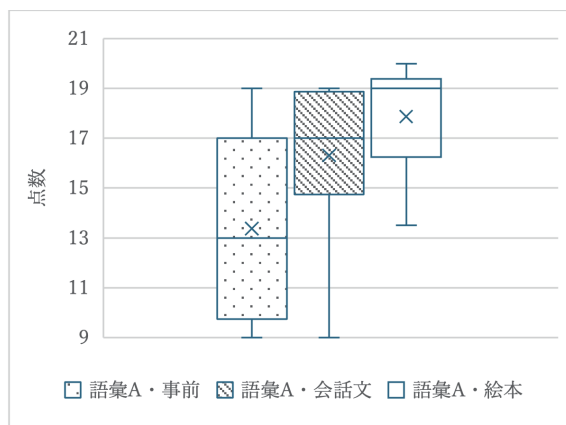


図4 クラスAの3回の語彙テスト結果の箱ひげ図

ボンフェローニ補正を使用した事後の対応のt検定($\alpha = .017$)では、「語彙A・事前」と「語彙A・絵本」のペアの平均値に有意な差があることが示された(表7)。

つまり、学生の語彙力が1回目と3回目の授業の間で向上していることが確認された。クラスAでは、会話文教材を先に、絵本教材を後に使用した。これにより、絵本教材の使用によって語彙力が有意に向上したことが示されている。これは、クラスAの学生にとって、絵本教材が語彙学習において有効であったことを示唆している。

次に、3回の授業に渡ってクラスAの文法能力の変化を見る。表8は、クラスAの3回にわたる文法テストの平均値を比較した結果を示している。

表8 クラスAによる3回の文法テストの繰り返しのある一元配置分散分析の結果

Source	DF	Sum of Square (SS)	Mean Square (MS)	F Statistic (df,df)	P-value
Factor A: Between Subjects (rows)	7	35.9896	5.1414	3.6716 (7,14)	0.01835
Factor B: Between Treatments (columns)	2	15.8958	7.9479	5.6759 (2,14)	0.01566
Error	14	19.6042	1.4003		
Total	23	71.4896	3.1082		

Mauchlyの球面性検定の結果、球面性の仮定は棄却されず、したがって仮定違反は確認されなかった($\chi^2(2) = 0.297, p = .862$)。

繰り返し測定分散分析の結果、3回テスト間で従属変数に有意な差が認められた($F(2, 14) = 5.68, p = .016$)。各テストの平均値は、文法A・事前が6.25、文法A・会話文が6.06、

文法A・絵本が7.88であった(表8、図5)。

表9 クラスAの各文法テストのボンフェローニ補正を使用した事後の対応のt検定の結果

Pair	Difference	F statistic	Critical value	p-value
「文法 A・事前」と「文法 A・会話文」	0.1875	0.1096	9.7807	0.7503
「文法 A・事前」と「文法 A・絵本」	1.625	6.1937	9.7807	0.04167
「文法 A・会話文」と「文法 A・絵本」	1.8125	10.8416	9.7807	0.01325

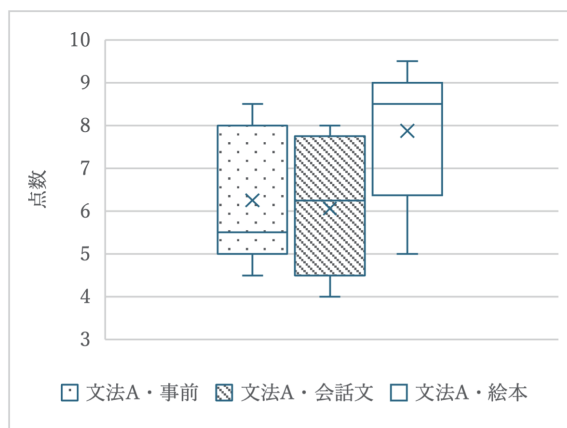


図5 クラスAの3回の文法テスト結果の箱ひげ図

事後の対応のt検定では、ボンフェローニ補正された有意水準 $\alpha = .017$ を用いた結果、「文法A・会話文」と「文法A・絵本」のペアの平均値に有意な差があることが示された(表9)。

つまり、クラスAにおける文法テストの結果でも、3回の授業を通じて有意な差が認められた。特に、2回目の「文法A・会話文」と3回目の「文法A・絵本」のペアに有意な差が確認され、絵本教材の使用によって文法能力が向上したことが示唆される。

4.2.2 クラスBの3回のテスト得点平均値の比較

同様に、3回の授業にわたってクラスBの語彙能力の変化を確認した。表10は、クラスBの3回にわたる語彙テストの平均値を比較した結果を示している。

表10 クラスBによる3回の語彙テストの繰り返しのある一元配置分散分析の結果

Source	DF	Sum of Square (SS)	Mean Square (MS)	F Statistic (df ₁ ,df ₂)	P-value
Factor A: Between Subjects (rows)	8	95.5	11.9375	3.9157 (8,16)	0.009706
Factor B: Between Treatments (columns)	2	46.8889	23.4444	7.6902 (2,16)	0.004568
Error	16	48.7778	3.0486		
Total	26	191.1667	7.3526		

Mauchlyの球面性検定の結果、球面性の仮定は棄却されず、仮定違反は確認されなかった($\chi^2(2) = 0.424, p = .809$)。

繰り返し測定分散分析の結果、3回テスト間で従属変数に有意な差が認められた(F(2,

16) = 7.69, $p = .005$)。各テストの平均値は、語彙B・事前が14.89、語彙B・絵本が16.33、語彙B・会話文が18.11であった(表10、図6)。

表11 クラスBの各語彙テストのボンフェローニ補正を使用した事後の対応のt検定の結果

Pair	Difference	F statistic	Critical value	p-value
「語彙B・事前」と「語彙B・絵本」	1.4444	3.25	9.094	0.1091
「語彙B・事前」と「語彙B・会話文」	3.2222	18.663	9.094	0.002546
「語彙B・会話文」と「語彙B・絵本」	1.7778	3.7891	9.094	0.08746

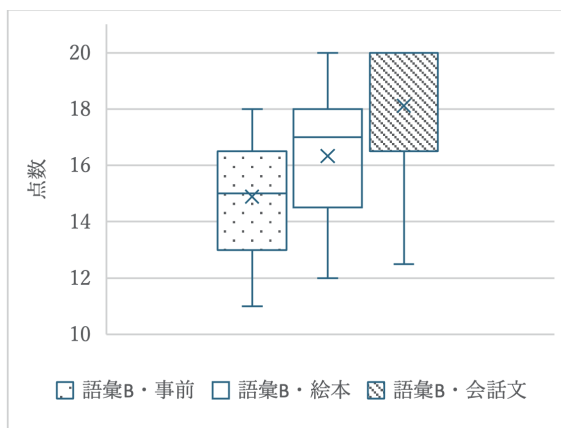


図6 クラスBの3回の語彙テスト結果の箱ひげ図

事後の対応のt検定では、ボンフェローニ補正された有意水準 $\alpha = .017$ を用いた結果、「語彙B・事前」と「語彙B・会話文」のペアの平均値に有意な差があることが示された(表11)。

つまり、クラスBにおける語彙テストの結果では、事前回、絵本教材回、会話文教材回の間で有意な差が認められた。しかし、クラスAと違って、クラスBには「語彙B・事前」と「語彙B・会話文」のペアに有意な差があり、会話文教材を使用することで語彙力が向上していることが示された。これにより、絵本

教材を先に、会話文教材を後に使用した順番で取り扱ったことで、クラスBにとって会話文教材の方が語彙力の向上に有効であった可能性がある。

最後に、クラスBの文法能力の変化を見る。表12は、クラスBの3回にわたる文法テストの平均値を比較した結果である。

表12 クラスBによる3回の文法テストの繰り返しのあ一元配置分散分析の結果

Source	DF	Sum of Square (SS)	Mean Square (MS)	F Statistic (df1,df2)	P-value
Factor A: Between Subjects (rows)	8	48.8519	6.1065	2.5353 (8,16)	0.05389
Factor B: Between Treatments (columns)	2	4.963	2.4815	1.0303 (2,16)	0.3794
Error	16	38.537	2.4086		
Total	26	92.3519	3.552		

Mauchlyの球面性検定の結果、球面性の仮定は棄却されず、仮定違反は確認されなかった($\chi^2(2) = 0.965$, $p = .617$)。

繰り返し測定分散分析の結果、3回テスト間で従属変数に有意な差は認められなかった($F(2, 16) = 1.03, p = .379$)。各テストの平均値は、文法B・事前が6.67、文法B・絵本が6.89、文法B・会話文が7.67であった(表12、図7)。

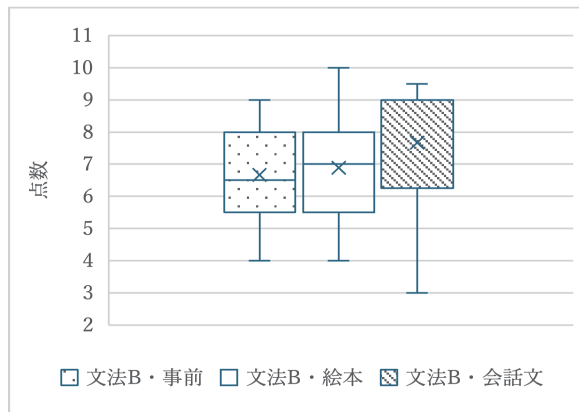


図7 クラスBの3回の文法テスト結果の箱ひげ図

この結果から分かるように、クラスBの文法テストの結果では3回の授業を通じて文法能力に有意な差は認められなかった。このことから、クラスBでは絵本教材を先に、会話文教材を後に使用という教材の順番によって文法能力に対する効果が明確には確認されなかった。つまり、クラスBにとって、文法能力に関しては各教材の影響が明確に示されていないことが分かった。

総合的に見ると、クラスAは絵本教材の使用回(事前回との比較)で、クラスBは会話文教材の使用回(事前回との比較)で語彙能力における学習効果が確認されたが、文法能力においてはクラスAの絵本教材の使用回(会話文教材の使用回との比較)でのみ有意な向上が見られた。この結果からは、絵本教材と会話文教材のどちらがより有効かを一概に結論づけることは難しいが、教材の有効性は学習内容や使用順序に依存する可能性がある。

4.3 インタビューの結果

実践授業を3回実施した後、参加した17名の学生のうち、16名に対し、半構造化インタビューを行った。インタビューでは、使用教材に関する体験や感想を主に尋ね、その意見を以下にまとめた。

まず、授業に対する全体的な感想について、多くの学生はグループで練習することが楽しく、互いに助け合いながら学べたことを肯定的に評価している。さらに、授業中の大部分の時間を発話に使えたことや、グループ内で役割を果たすことで貢献感があったという意見も見られ、学習に対する意欲向上に寄与していることがうかがえる。これらは、Nguyen (2024)と同様に、協同学習の活動が学生の主体性や積極性を促進する効果を示している。

次に、2種類の教材に関しては、絵本の方を好む学生が圧倒的多数で、16名中13名であった。その理由として、絵本は背景を想像したり、新しい単語を推測したりすることを促進し、学生の興味を引きやすかったという点が挙げられた。また、絵や色がたくさんあることにより緊張感を大いに緩和できたと感じた学生が多い。一方で、会話文の方を好んだ学生は1名のみで、教材の内容から新しい情報を得られたことを理由に挙げている。また、会話文と絵本の両方を選んだ学生も1名であった。

具体的に、最初の印象に関して尋ねられた時、絵本教材は絵の多さやかわいらしさが学

生の学習意欲を高め、内容を推測する楽しさが感じられたと多くの学生が答えた。このような教材は大多数の学生にとって初めてのものであり、新鮮さを感じたことが明らかになった。特に、インタビューにおいて一人の学生は、絵本教材を授業外でも何度も読んでおり、自立学習の一環として読み上げる練習を行っていたと述べた。このような事例は、絵本が学生の動機づけに与える効果を示す良い例である。一方で、会話文教材については、多くの教科書に見られる形式に似ているため、フォーマルな学習環境を意識したと答えた学生がおり、これにより初めは緊張感を抱いたことが推測される。さらに、文字の多さや文章の長さに対して不安を感じた学生が多かった。絵が少ないことで文字に集中し、文法の分析や意味の翻訳に専念できたとの意見があったが、文字情報に主に依拠した練習では、会話の背景を想像しにくいという意見も見受けられた。これらから、視覚的要素を伴う教材が学生の興味を引きやすく、学習効果を高める可能性があることが示唆される。

教材の理解度については、両者の内容がかなり分かりやすいことにより、この点では違いがほとんど見られない。回答からは教材による理解度が学生の個別の学習スタイルによって異なることが示されているが、絵本の視覚的要素が内容の理解をより助けるという点は多くの学生に共通している。また、絵やイラストが新しい単語の意味を推測しやすくし、記憶の定着にも貢献していると学生は感じている。具体例としては、食べ物の単語(「スムージー」や「ドラゴンフルーツ」など)がイラストで明確に描かれているものや、表情を表す単語(「びっくりする」)、感覚を表す言葉(「のどが渴いた」)、動作を表す言葉(「パソコンがかばんに入る」)といった登場人物の行動から推測できる語彙が挙げられており、視覚的な刺激が記憶の補助として効果的であることが裏付けられている。全員が絵本のイラストが新しい語彙の習得に役立ったと答えていることから、視覚的要素の重要性が再確認される。しかし、絵本教材に関する困難さについては、大部分の学生が特に大きな問題はなかったと述べているが、一部の学生は漢字の読みにルビが振られていないこと、新しい語彙が多く覚えにくかったこと、新しい文法に慣れていないため動詞の活用が遅いことなどを挙げている。

教材についての意見とともに、実施されたグループ活動についても学生の意見を聞いた。両教材を使用したグループ活動において、まず時間制限付きの練習が行われた。絵本の各ページや会話文の各段落に対して、あらかじめ設定された時間内に読み上げることを目標とし、学生たちはその時間内に内容を発話できるようグループで協力しながら練習を行った。この活動に対して、学生からは集中力を高める助けになったとの意見が多く聞かれた。また、制限時間に合わせて読み上げることに楽しさを感じたという声や、授業時間をより効率的に活用できたと感じた学生も少なくなかった。さらに、時間に追われたことにより自然なスピードで話せるようになったという自己評価も見られた。

加えて、もう1つの重要な活動として、ストーリーのエンディングを作成する課題が実施された。両教材ともに、登場人物たちが忘れ物に気づいた場面で物語が終わっており、学生たちはその後の展開をグループで相談し、会話スクリプトを作成することでストーリーを

完結させる形式であった。この活動に対しては、想像力を発揮できることで非常に楽しかったという感想が寄せられた。また、ストーリーを自分たちで創作することにより、物語が「自分のもの」になったという実感が得られたとする意見もあり、学習内容により主体的に取り組む機会となったことが示唆された。さらに、この活動は学習した文法を実際に応用する機会を提供し、知識を実践的に活用する能力を伸ばす良い機会となったと評価されている。

最後に、絵本教材に関して学生からは以下の改善点が指摘された。まず、今回は新しい登場人物が多かったため、名前や背景を十分に覚えられないという意見があった。次に、教材のイラストに関しては、面白いデザインやユーモアを感じられる絵が加わることで、さらに学習意欲が高まるとの声が寄せられた。また、話の舞台がベトナムに限定されていることに対して、日本を含む他の場面、例えば登場人物が日本を旅行するシーンなどを追加してほしいという希望があった。登場人物の多様性に関しても、もっと様々な背景を持つキャラクターが登場することで、物語がより豊かになるという意見があった。さらに、学生は他のエピソードも盛り込まれることを期待しており、短く覚えやすいセリフ、特に感情表現に関するセリフが増えることで、学習の効果が向上すると指摘した。エンディングに関しては、現在はエンディングを自分たちで作成する活動を行っているものの、本来の物語の結末がどうなるのか知りたいという学生もあり、正式なエンディングの提示を求める意見も見られた。

総じて、インタビューの結果から、絵本を使用した授業が、会話文を使用した授業と比較して、学生にとってより好意的に評価されていることが明らかである。視覚的要素を含む絵本の使用は、学生の動機づけや理解促進、記憶保持において効果的であり、今後の会話授業においても有益であることが示唆された。一方で、会話文についても一部の学生には有用であるため、学生のレベルや目的に応じた適切な教材選択が求められる。

5. 考察と結論

本研究では、絵本教材の影響を確認するために、2クラスの会話日本語の実践授業を行った。各テストの結果および教材使用順序から、次のような点が明らかになった。まず、クラスAとクラスBの間で、3回のテストの平均値に有意な差が見られなかったことから、絵本教材と会話文教材の効果には大きな違いがないと考えられる。両教材は、語彙と文法の学習において共に効果的であり、また教材の使用順序も学習結果に大きな影響を与えないことが分かった。特に語彙学習において、どちらの教材も効果を発揮し、学習の進行に伴い3回目の授業で成績が向上したことが確認された。

しかし、クラスAにおける結果を詳しく見ると、語彙と文法の両テストにおいて、絵本教材を使用した第3回目では有意な成績向上が見られた。特に文法学習においては、会話文教材を使用した第2回目と比較して、第3回目のテスト結果が向上しており、絵本教材が文法の理解を深める上で特に効果的であることが示されている。先行研究から明らかなように、絵本の活動では、学生が絵本のセリフを適切な順序に並べ替えることで、文字情報と画像

情報を同時に活用することが求められるため、理解と記憶を助ける効果があった(Paivio, 1971)と解釈できる。また、絵本教材は意味のあるストーリーの流れを、モデル会話のセリフとともに提供するため、抽象的な文法ルールを理解を具体的な事例で助け、文法学習を促進することができる(Oller, 1983)。したがって、クラスAのテスト結果はこれらの先行研究の結論を裏付ける証拠となると考えられる。

一方で、クラスBの結果は異なり、語彙テストでは、会話文教材を使用した第3回目に成績の向上が見られたが、文法テストでは3回とも有意な変化が見られなかった。このことから、クラスBにおいては、教材の種類が文法学習に対して大きな影響を与えなかったことが考えられる。クラスBの学生にとって、教材自体よりも、教材の使用順、学習の進め方や個別の理解度といった他の要因が文法テストの成績に影響を与えた可能性がある。

なお、本研究において、両クラスとも3回にわたって同じ文法項目を学習していた点も結果に影響を与えたと考えられる。時間の経過とともに学習が進むことで、文法項目の定着度が自然に高まり、成績が向上した可能性が考えられる。そのため、第3回目のテスト結果が向上しているのは、教材の影響だけでなく、時間の経過や繰り返し学習の効果も反映されている可能性がある。したがって、今回の実践において、1回絵本を使用しただけでその効果を完全に断定することは難しいと考えられる。

統計的な分析結果では、絵本の有効性がはっきりと示されなかった一方で、インタビューの結果からは、絵本の使用が多くの学生にとって非常に効果的であり、魅力的であることが明らかになった。特に、絵本は学生の興味を引きやすい点が強調されている。学生が絵本教材を好んだ理由として、視覚的な要素が緊張を和らげ、文法の理解や語彙の記憶に役立ったことが挙げられた。また、今回の絵本教材に含まれるグループ活動(セリフ順番探し、音読時間制限、エンディング作成)のデザインに対しても良い反応が見られ、発話やグループ活動における積極的な参加を促進した効果が明らかになった。

一方、会話文教材を好んだ学生は1名にとどまり、新しい情報を得られた点を評価しているものの、多くの学生は、文字の多さや堅苦しい形式に対して心理的負担が大きかったと述べている。文字情報に依拠することで文法の分析に集中できたという意見もあったが、視覚的な要素が少ないため、背景や文脈を想像するのが難しかったという指摘もあった。このことから、一般的な会話文教材は学生にとって緊張感を伴いやすい傾向があり、教材に対する興味を持続させるためには、教師の工夫が求められる。

総じて、統計的な調査分析からは絵本の効果が明確には確認できなかったものの、クラスAにおける結果から、絵本が文法能力において一定の効果があると示唆された。また、両クラスの学生へのインタビューからは、絵本がスピーキングに対する意欲に大きな肯定的影響を与えたことが明らかになった。特に、語彙の習得や記憶の定着において、視覚的要素の重要性が再確認され、今後の会話授業において有効な教材となりうることを示された。

今回使用した絵本は学生から好意的に受け入れられたものの、いくつかの改善点も指摘された。例えば、登場人物が多く、名前や背景を覚えるのが難しいと感じた学生や、日本の

場面や多様なキャラクターの追加を望む声があった。これらのフィードバックは、教材のさらなる改善に資するものであり、より多様で魅力的な内容を加えることで、学生の学習意欲を高めることが期待される。

最後に、絵本は子どもだけでなく、成人学習者にとっても有効な教材であることが明らかになった。特に、大人数のクラスにおいて、グループ活動の教材として使用することで、学生全員の発話率が大幅に向上し、積極的な発話を促進する効果が確認された。しかし、本研究では、絵本の効果を1回の授業でしか検証していないため、スピーキング能力の向上に及ぼす継続的な影響について結論を出すには至らなかった。今後の研究では、複数回にわたる授業を通じて長期的なデータを収集し、絵本を活用した学習活動の効果をより詳しく検証することが求められる。なお、定期的なテストの得点に加えて、絵本を活用したグループ活動中の学生同士のやりとりを観察し、学生が教材をどのように活用しているか、また実際に産出したことばについて質的に分析を行うことも重要である。

グエン リンラン(ぐえん りんらん、NGUYEN, Linh Lan)
東京外国語大学大学院博士後期課程

参考文献

- American Council on the Teaching of Foreign Languages. (2024). *ACTFL proficiency guidelines 2024*. <https://www.actfl.org>
- Csabay, N. (2006). Using Comic Strips in Language Classes. *English Teaching Forum*, 44(1), 24-26.
- Donaghy, K., & Xerri, D. (Eds.). (2017). *The Image in English Language Teaching*. ELT Council.
- Edmonds, W., & Kennedy, T. (2017). *An applied guide to research designs*. SAGE Publications, Inc, <https://doi.org/10.4135/9781071802779>
- Gultom, E., Frans, A., & Cellay, E. (2022). Adapting the Graphic Novel to Improve Speaking Fluency for EFL Learners. *Al-Hijr*, 1(2), 46–54. <https://doi.org/10.55849/alhijr.v1i2.13>
- Harahap, B. C. (2021). Utilizing Comic Strip To Improve Students' Speaking Skill Of Grade XI Mas Al-Manar Hamparan Perak. Skripsi thesis, Universitas Islam Negeri Sumatera Utara Medan.
- Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Holubec, E. J. (1994). The new circles of learning: *Cooperation in the classroom and school*. Alexandria, Va: Association for Supervision and Curriculum Development.
- Kagan, S. & Kagan, M. (2009). *Kagan cooperative learning*. Kagan Publishing.
- Oller, J. W., & Obrecht, D. (1968). Pattern drill and communicative activity: a psycholinguistic experiment. *IRAL - International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 6, 165-174. 10.1515/iral.1968.6.1-4.165.

- Oller, J. W., & Obrecht, D. (1969). The Psycholinguistic Principle of Informational Sequence: An Experiment in Second Language Learning. *IRAL - International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 7, 117-123. 10.1515/iral.1969.7.2.117.
- Oller, J. W. (1983). Story Writing Principles and ESL Teaching. *TESOL Quarterly*, 17(1), 39-53. <https://doi.org/10.2307/3586423>
- Öz, H., & Efecioglu, E. (2015). Graphic novels: An alternative approach to teach English as a foreign language. *Journal of Language and Linguistic Studies*, 11(1), 75-90.
- Paivio, A. (1979). *Imagery and Verbal Processes (1st ed.)*. Psychology Press. <https://doi.org/10.4324/9781315798868>
- Renyta, O. K. (2015). Using Comic Strips to Improve the Speaking Skills of Grade VIII Students of SMP N 15 Yogyakarta in the Academic Year of 2013/2014. S1 thesis, Universitas Negeri Yogyakarta.
- Rokhayani, A., & Utari, A.R. (2014). THE USE OF COMIC STRIPS AS AN ENGLISH TEACHING MEDIA FOR JUNIOR HIGH SCHOOL STUDENTS. *Language Circle: Journal of Language and Literature*, 8, 143-149.
- Swain, M., & Lapkin, S. (1995). Problems in Output and the Cognitive Processes They Generate: A Step Taira, T. (1993) Episode Hypothesis and Computerized-Cloze Exercises. *Language Laboratory*. 30. 63-76. Towards Second Language Learning. *Applied Linguistics*, 16 (3), 371-391. <https://doi.org/10.1093/applin/16.3.371>
- Torkkel, C. (2022). Graphic novels: a way to broaden the repertoire of English teachers in the grades 4-6 (Dissertation). Retrieved from <https://urn.kb.se/resolve?urn=urn:nbn:se:miun:diva-44738>
- 国府田晶子(2004)「絵本と対話による「読み書き能力」の育成—JSL教育を必要とする定住型児童を対象に—」早稲田大学日本語教育研究, 5, pp.61-75.
- ゴードン・H. バウアー、アーネスト・R. ヒルガード、梅本亮夫(1988)『学習の理論<下>』、培風館
- グエンリンラン(2024)「初級レベルのオンライン日本語授業における協同学習の効果：会話テストの結果に基づく量的分析」東京外国語大学大学院 言語・地域文化研究, 30, pp.361-380.
- 鄭嬌婷(2007)「脳科学的アプローチによる第二言語習得研究」博士学位論文の要旨及び審査結果の要旨, 5, pp.118-131.
- 出口友香理(2017)「成人英語学習者への英語絵本活用における有効性の再考」有明教育芸術短期大学紀要, 8, pp.57-63.
- 出口マクドナルド友香理(2018)「短期大学英语教育における英語絵本活用の効果—ニーズ分析と実践—」有明教育芸術短期大学紀要, 9, pp.125-136.
- 山口真帆子(2002)「日本語を母語としない年少者に対する絵本を用いた日本語教育—日本

語イマージョン教育でのケーススタディー」横浜国大言語研究, 20, pp.25-11.
渡邊奈緒子(2016)「外国語学習における絵本多読の効果:絵本多読の経験がある学習者へのインタビュー」一橋大学国際教育センター紀要, 7, pp.71-82.

書き言葉資料における評価形容詞の構文についての考察 —「面白い」を「大きい」「嬉しい」と比較して

A Study of the Syntax of Evaluative Adjectives in Written Materials

張 舒鵬

Abstract

This paper reaffirms the relationship between “intermediate” and “evaluative” adjectives as noted in previous studies. Then, examples of adjectival predicative sentences in written materials were collected for the typical examples of evaluative adjectives “omoshiroi” and attributive adjectives “ookii” and emotional adjectives “ureshii,” and the three were compared and discussed in terms of subject, sentence structure, and some syntactic features. The linguistic phenomena involved in the “intermediate” were quantitatively confirmed along with actual examples.

As for the subject, most of the subjects in the “omoshiroi” sentences are <the object of evaluation>, showing an aspect similar to that of the “ookii” sentences. However, about 30% of the subjects appear in the form of “~no,” “~tokoro,” “~koto,” etc., which differs from the “ookii” sentences. Regarding sentence structure, we confirmed that “omoshiroi” can take both “ookii” and “ureshii” constructions, and further pointed out that there are many “without ga” sentences and that the situation differs from that of “ookii” and “ureshii” in subject omission. Furthermore, with regard to syntactic features, we observed that some parts indicate “active participation of the evaluator” and some parts indicate “basis for evaluation,” even though they are not essential elements of the “omoshiroi” sentences. Such a part is not observed in “ookii” or “ureshii” sentences.

As a result of the discussion, “omoshiroi” can be said to be in the middle of “ookii” and “ureshii” in terms of subject and sentence structure. On the other hand, there are unique features observed only in “omoshiroi,” so it cannot be said that it is always in the middle of the two. The linguistic facts pointed out in this paper can also be explained by the meaning of “evaluation”. The evaluation (content) represented by “omoshiroi” is not a common perception. The evaluator is actively in contact with the object of evaluation on some basis, and evaluates things on a case-by-case basis.

Keywords 形容詞文 属性形容詞 感情形容詞 評価形容詞 主語標示

Adjective sentence, Attributive Adjective, Emotional Adjective,
Evaluative Adjective; Subject marking;

1. はじめに

これまでの日本語の形容詞の分類を扱う諸先行研究において、大きく属性形容詞と感情形容詞の2種類を認めたうえで、「中間的なもの」として言及される一部の形容詞がある。具体的に言うと、属性形容詞は物事の属性を表すのが典型的な働きで、感情形容詞は人間の感情を表すのが典型的な働きとしたうえで、「中間的なもの」は属性・感情の両側面を有すると論じられてきた。簡単な例で示すと、

- (1) 雪は白い。
- (2) (私は)彼からの手紙が嬉しい。

(3) この本は面白い。

(4) 私は彼の出世が面白くない。

(いずれも作例)

(1)では、属性形容詞「白い」は「雪」としての属性を示す。(2)では、感情形容詞「嬉しい」は「私」の感情を示し、「彼からの手紙」は「私」の感情を引き起こした機縁を表す。そして(3)では、「面白い」は「この本」の属性を示し、(4)では「面白くない」は一種の感情的なものと考えられる。このように、(3)(4)における「面白い」はそれぞれ(1)属性形容詞、(2)感情形容詞と似た面を持つということから、形容詞2分類の下では、「中間的」なものとして扱われていた(詳細は次節)。しかし、上記言語現象は、属性形容詞としての「面白い」と感情形容詞としての「面白くない」があるということを示すに過ぎないのであって、どのような意味で「中間的なもの」であると言えるかは、はっきりしない。「中間的なもの」の内実は論者によっていろいろでありうる。また「中間的なもの」とだけ述べてその内容を詳しく記述しないままでは、読者ごとに異質なものを想像しうる。

ところで、上記「中間的」とされる形容詞群は、先行研究ではしばしば「評価(の)形容詞」と呼ばれている(詳細は次節)。「評価形容詞」の研究においては、「中間的」ということの内実を明らかにする必要がある。本稿は「評価形容詞」を研究する一連の研究の一部として、書き言葉資料を用いて「中間的」について詳細に考察することを目的とする。具体的には、その代表例である「面白い」と、属性形容詞の典型例「大きい」、感情形容詞の典型例「嬉しい」の実例を集めて、形容詞述語文という環境においての、主語の現れ方や文型、構文的特徴などについて考察する。3者の比較・考察を通して、「評価形容詞」がどのような意味で属性形容詞と感情形容詞の「中間」にあると言えるのかを検証していきたい。

次節では先行研究における「中間的な」形容詞と「評価形容詞」について概観し、3節では調査対象「面白い」「大きい」「嬉しい」と、コーパスを用いて実例を収集する調査方法について説明する。4節では①主語②文型③従属節の観点から3者の例を考察・比較する。5節ではまとめを述べ、「面白い」に見られた「中間的」なものとしての現象と、「評価形容詞」であることとの関連性について説明してみる。

2. 先行研究

2.1 形容詞分類において「中間的なもの」の存在を指摘したもの

西尾(1972)では、形容詞の表す語彙的意味について、基本的に「客観的な性質・状態の表現」対「主観的な感情・感覚」(p.21)の2者対立と見ている。さらに、意味の面だけではなく、語のふるまいとして10項目の環境を分類基準にしている(表1)。そのうえで、「こわい・にこらしい・寂しい・可愛い・暑い・面白い」などを挙げて、「ごく普通の用法の範囲内でも属性と感情の両面をあわせもっていて、両グループの中間に位置づけるのが妥当だ」(p.35)と指摘している。さらに、形容詞の主観面・客観面の交渉を説明する際に、「おかしい」の例「かきの歩き方はおかしい。」と「わたしはおかしかったが、笑いをこらえた。」を用いて、「主客

の両面を考えることができ」とし、「客観面が支配的であるばあいは、属性形容詞としてはたらし、主観面が支配的になると、感情形容詞になる」(p.182)と説明している。以上から、西尾(1972)における「中間的」な形容詞とは、属性と感情の両面を持っており、場合によってはどちらにもなりうるものと捉えられる。

表1 西尾(1972)による属性形容詞・感情形容詞の分類基準の10の環境⁽¹⁾

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
環境 形容詞	く がる	(わたしは)く 話し手の感情・感覚 (だ)。	あなた あなた 第二(三)人称者の感情(覚) (だ)。	あなた あなた 感情(覚)の表れた様子 (だ)。	△対象モノ△がく (だ)。	△対象人△がく (だ)。	△対象コト△がく (だ)。	く(な)こと△内容△	△体の部分△がく (だ)。	くくて(で)たまらない
うれしい	○	○		○			○	○		○
かなしい	○	○		○			○	○		○
いやな	○	○		○	○	○	○	○		○
重宝な	○				△	△	△	△	△	△
きたない	○				△	△	△	△	△	△

川端(1976)では、形容詞をまず二種、「知覚を中心とした或る外面的な情態に関するものと、情意を基とした或る内面的な情態についての」(p.181)ものがあることを主張している。さらに、「形容詞の意味的な種類は、以上の二種—情意・状態⁽²⁾のそれを二極としてその連続のなかにすべてが属している」としたうえで、「中間態がその形式をもって存する」(p.183)と述べている。「中間態」については「痛覚や温度感覚のような下位感覚に意味上対応する形容詞」(p.183)と「評価の形容詞」(p.184)を認めている。さらに、川端(1983)では、「評価の形容詞」について、次のように述べている。

- (1) 西尾(1972:22-23)の表を一部抜粋して作成したものである。○は「筆者個人の自省において生じうると感じられるもの」で、空欄は「生じえない(のではないかと)感じられるものである」(p.21)。また、斜線については触れていない。「うれしい」「かなしい」「いやな」は感情形容詞で、「重宝な」「きたない」は属性形容詞である。
- (2) 川端(1976)で言う「情意・状態」の形容詞、川端(1983)で言う「情意・情態」の形容詞は、本稿で言う「属性・感情」の形容詞とほぼ同じものだとして了解される。

なお、連絡⁽³⁾の中間形式を自らの固有な文形式とするような形容詞文が存在するであろう。一つは、「美しい・かわいい・醜い・良い・悪い・勇ましい・雄々しい・憎い」のような評価の形容詞を述語とする場合である。これらは広義には情意性形容詞であって、従って、当然ことがら⁽⁴⁾としての主語をもつ。情意の主体たる「私」も、少なくとも意味的には了解されるのである。

花の散るのが美しい／嘘をついてはいけない

しかもこの形容詞文の特徴は、その「私」が主語として文に現象しないことに求められる。そして、よりしばしば、ものの主語をもつことに安定するという、情態性形容詞文に等価な現象をもつ。

花は美しい／あの子はかわいい／奴が憎い

(中略)ここには、意味的には情意性形容詞文と等価で、形態的には情態性形容詞文に似通う、という在り方での中間者形式があると言ってよいであろう。(pp.132-133)

このように、川端(1976, 1983)は、形容詞文の主語が「もの」か「ことがら」か、構文に主語としての「私」が現れうるかどうかに注目しており、意味的には感情形容詞文だが形態的には属性形容詞文に似ているようなものを「中間態」「中間者」と見ていると捉えられる。

小針(1994)は形容詞文について、「対象としての物事の状態」を表現する属性形容詞文と、「話し手“私”自身の心的状態を表現」する感情形容詞文のほかに、「評価形容詞文」を主張し、「属性と感情の中間に位置する」と述べている(pp.57-58)。変化テストを用いて、

- (5) ××大学の試験は難しい。去年まではそうだったが、今年はそうでなくなった。
(小針1994:58、例(11))。(5)は筆者による)

「外的な基準において難易度が低くなったという意味と、“私”の学力が向上した結果「難しく感じられなくなった」という意味とが成り立つの」で、「評価形容詞文での変化テストが両義的になる」と述べ、「評価形容詞文が本来持つ中間的な性格、つまり＜対象面＞と＜作用面＞とが融合しているという性格が、変化テストによりあぶり出され」たと説明している(p.58)。なお、評価形容詞文の形容詞には「怖い、有難い、つまらない、面白い、かわいい」などを挙げている(p.58)。以上のことから、小針(1994)でいう「中間」とは、評価形容詞文が、意味的に属性・感情のどちらにも解釈できるということのように捉えられる。

2.2「評価形容詞」という用語について

2.1で見たように、川端(1976, 1983)では、属性形容詞・感情形容詞の中間態として2種類の形容詞を主張し、そのうち「美しい、可愛い、良い、悪い」などを「評価の形容詞」と呼ん

(3) 「情意性形容詞文と情態性形容詞文」の連絡のこと。いわゆる二者の相互移行のことと了解される。

(4) 川端(1983)の引用における傍点や下線は、いずれも原文通りである。以下同様。

でいる。小針(1994)では、三種の形容詞文を挙げているが、「評価形容詞文」が「属性」と「感情」の中間に位置すると述べている。

さらに、仁田(1998)は、形容詞の装定用法・述定用法を考察するために、形容詞を「属性形容詞」「評価・判断形容詞」「感情・感覚形容詞」の3タイプに分けて分析を行っている(p.34)。また、仁田(2014)では、「典型的な属性とも感情とも少し異なる」評価形容詞の例として、「すごい、ひどい、すさまじい、素晴らしい」を挙げている(p.183)。

2.3 評価形容詞をめぐる筆者の研究

2.1と2.2で確認したように、形容詞の分類を扱う先行研究には、立場や分類基準が必ずしも一致するとは限らないが、「属性形容詞」と「感情形容詞」を両端において、中間的なものを認めるものがある。一方、「評価形容詞」という類を指摘し、それが「属性形容詞」と「感情形容詞」の中間にあると捉えるもの(川端(1976, 1983)や小針(1994))もあれば、どちらとも異なると捉えるもの(仁田(2014))もある。このように、評価形容詞を論じる際に、「中間的」がキーワードになっており、言い換えれば、属性形容詞、感情形容詞との関係を常に意識しなければならないということである。しかし、上述のように、「中間的」をどのような意味で言っているのかについては、研究者によって異なるし、同じ研究者においても必ずしも十分に検討されているとは言えない。とりわけ実例による丁寧な分析は管見の限り、見当たらない。「中間的」の内実を明らかにするためには、文の主語や文型、文が表す意味などの面において詳細な実例調査や分析が必要不可欠だろう。

一方、筆者は「評価形容詞」という形容詞の下位分類を研究するために、張(2016, 2019, 2023)において、論考を重ねてきた。張(2016)では、西尾(1972)など中間的な形容詞を論じる先行研究を5点取り上げ、論点を整理したうえで、評価形容詞は形容詞述語文の環境においてだけでなく、さまざまな面から議論を深めていく必要があると主張した。一方、張(2016)では諸先行研究の観点整理中で、「中間的」な形容詞の例に複数の論考で取り上げられているものがあることを指摘した。「面白い」は3点、「可笑しい・怖い・可愛い・あわれな、気の毒な、やかましい・汚らしい」は2点の論文において取り上げられている。張(2016)は仮にこれらを「評価形容詞」とした。さらに、「『思ウ』認識動詞構文」の「〔主体〕ガ＋〔対象〕ヲ＋形容詞連用形＋思ウ」、「〔主体〕ガ＋〔対象〕ヲ＋形容詞終止形ト＋思ウ」によるテストで、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下BCCWJ)を用いて、共起する形容詞を分析し、評価形容詞と感情形容詞の近接性を議論した。また、張(2019, 2023)はそれぞれ「連体修飾」、「話し言葉資料に見る話者の表現意図」などの面から評価形容詞について論考を重ねてきた。

形容詞の語彙文法体系における評価形容詞の位置を明らかにするためには、評価形容詞が主文述語として働く場合の考察が不可欠である。本稿はその目的を達成する一環として、書き言葉資料において実例を詳細に見ていく中で、評価形容詞が「中間的」と指摘されている一面の内実を形容詞述語文の主語、文型、構文上の特徴から考察し、属性形容詞、感情形容詞とのかかわりあいを考えたい。

3. 調査対象と調査方法

評価形容詞の書き言葉における構文上の特徴を明らかにするために、本稿はその第一歩として、まず典型的な評価形容詞である「面白い」に絞って、主文の述語として働く文を集めて、詳細な分析を行う。なお、「面白い」を典型的な評価形容詞として考察の対象にしたのは、以下の理由による。2.3で述べたように、張(2016)における評価形容詞を取り扱う先行研究5点の論点整理によれば、「面白い」が最も多くの論文で取り上げられている(5点中3点)。また、BCCWJでは、「面白い」の用例が最も多くヒットする。

評価形容詞は属性形容詞と感情形容詞の中間に位置するものと論じられてきたが、その「中間的なもの」の内実を明らかにするためには、属性形容詞、感情形容詞と比較しながら考察することが必要である。したがって、本稿ではそれぞれの典型例で、かつBCCWJにおいて用例数が上位にある「大きい」と「嬉しい」も調査の対象として用例を集める。

調査の対象を「面白い」「大きい」「嬉しい」の3語にしたうえで、BCCWJから検索アプリケーション「中納言」を用いて主文述語の例を集めた。用例検索を行う際の設定条件は以下の通りである。

短単位検索；語彙素：「面白い」「大きい」「嬉しい」

検索対象：コア 出版・新聞 出版・雑誌 出版・書籍

非コア 図書館・書籍 特定目的・ベストセラー

(検索対象語数：40,997,327；記号・補助記号・空白を除いた検索対象語数：34,834,946；検索対象サンプル数：12,450)

以上の条件で検索後、「面白い」4143例、「大きい」11822例、「嬉しい」3174例が得られた。ここで、「面白い」「嬉しい」と用例数をそろえるために、「大きい」の11822例からランダムに4000例を抽出した。次に、いわゆる狭義での書き言葉資料を分析するために、それぞれの用例から手作業で①翻訳物の例、②小説における会話文や新聞・雑誌のインタビューなどにおける談話の文、③引用節などを取り除いた。最後に、調査対象の形容詞が主文の述語として働く用例だけを選出し、「面白い」527例、「大きい」268例、「嬉しい」441例を得た。

4. 考察

4.1 主語について

4.1.1 主語の語彙的種類

本稿では、形容詞述語文において、「～ガ」⁽⁵⁾によって示される部分を形容詞の主語と考える。集めた用例では、「大きい」の主語がほとんど一般名詞である。川端(1983)は、情意の形容詞文の主語について、「実質名詞によるより通常、例えば抽象的な概念に^{こと}が^らの意味を担う「別れが淋しい／人の死が悲しい」、^{もの}が状況の中に浮かんでいるものとしての

(5) 具体的には、「～が」「～は」「～も」「～だって」「～とは」などの形で現れる。

「死んだ母が恋しい／そう言える人がうらやましい」であり易く、更に、ことがらとしての句形態をとった「死に別れたのが悲しい／ここで遭えたのがうれしい」において典型化する」(pp.130-131)と指摘しているが、本稿では「面白い」「嬉しい」は名詞や「～の」に示されたもの以外に、指示詞や「～こと」「～ところ」などその他の形式名詞で示すものが目立った。例を以下のように示しておく。

- (6) 和風建築の平屋で、庭の広さに比べると母屋⁽⁶⁾はそれほど大きくない(大沢在昌『調毒師を捜せ』)
- (7) 確かにボーリングはゲームとしても面白い。(黒瀬光章『捨てれば開ける』)
- (8) するとN氏は、戸をはさんでは不吉だといって、車室内に入って握手をするのだった。これは、なんとなく面白かった。(清水孝純『幻景のロシア』)
- (9) 前世を「記憶」する少女たちは、自分は戦士・王女・巫女だったという。けっしてふつうのOLや主婦でないところが面白い(高橋紳吾『きつねつきの科学』)
- (10) それに対してこの教科書ではところどころに「励ましのことば」があるのが面白い。(黒田龍之助『外国語の水曜日』)
- (11) このたびの師、塩屋泰山は(中略)いろいろな挿話を混えながら教えてくれるので、篤姫は時間の経つのもおぼえないほどおもしろかった。(宮尾登美子『天璋院篤姫』)
- (12) 商談が成立したのでピップさんは嬉しそうだった。(池澤夏樹『南の島のティオ』)
- (13) 飛行機を見送った後、テントの中で一番先に手にとるものが日本からの手紙である。なんといっても手紙が一番うれしい。(風間深志『地平線への旅』)
- (14) 福岡ではごはんを食べながら海が見えるのがとてもうれしかったのです。(西川勢津子『私の嫁いびり』)
- (15) 「痰をとってほしいの？」 美奈子がすぐさま理解してくれたことが、うれしかった。(植松文江『十四年十回のがん手術を生き抜いて』)
- (16) むずかしい手術が成功して元気に退院したときがいちばんうれしい。(松尾佳子ほか『ペットと動物の仕事』)

(いずれもBCCWJの引用である⁽⁷⁾)

なお、(16)のような「～時」が主語に立つ例は、「嬉しい」にしか観察されなかった。以上見たように、「面白い」も「嬉しい」も主語の形が数パターンあるが、「大きい」はほとんど一般名詞である。

4.1.2 主語の意味的立場とその中身について

本稿では、意味の面で、形容詞述語文の主語が述語との関係において示す「身分」のこと

(6) BCCWJの例文における下線はいずれも筆者によるものである。

(7) 本稿の例文は作例や先行研究の引用を除き、いずれもBCCWJの引用である。

を「意味的立場」と呼ぶ⁽⁸⁾。大まかにいうと、属性形容詞文の場合、主語の意味的立場は基本的に＜属性の持ち主＞である。感情形容詞の場合、主語の意味的立場は＜感情の主体＞の場合もあれば、＜感情の機縁＞の場合もある。評価形容詞においては、評価を下す者（以下、＜評価者＞と呼ぶ）の場合と、＜評価対象＞の場合がある。

(17) 雪は白い。(雪＝＜属性の持ち主＞)

(18) (私は)彼からの手紙が嬉しい。(私＝＜感情の主体＞；彼からの手紙＝＜感情の機縁＞)

(19) この本は面白い。(この本＝＜評価対象＞)

(20) 私は彼の出世が面白くない。(私＝＜評価者＞；彼の出世＝＜評価対象＞) (例(1-4)再掲)

4.1.1に挙げた例(6)の「母屋」は「大きい」という属性の持ち主である。さらに、わずかな例しか観察されなかったが、次の例(21)では、「スケール」は「大きい」という属性を有するものではなくて、属性を示すための尺度である。本稿ではこのような主語の意味的立場を＜属性の側面＞と呼ぶ。

(21) それは、(中略)と書いたが、監督のデミィもまた、それに近い考え方を持っているからだ。ただし、デミィの場合は、もっとはるかにスケールが大きい。彼は、グローバルな視点に立って、異なる文化や人種、国と国との関係といったことに強い関心を持っているのである。(大場正明『サバービアの憂鬱』)

また、上に挙げた例(12)の「ピップさん」は「嬉しい」という感情の主体で、例(13-16)の「手紙」「美奈子がすぐさま理解してくれたこと」「むずかしい手術が成功して元気に退院したとき」などは、「嬉しい」という感情を引き起こす機縁である。一方、例(7-10)の「ボーリング」「これ」「けっしてふつうのOLや主婦でないところが」「それに対してこの教科書ではところどころに「励ましのことば」があるの」は「面白い」という評価の対象である。例(11)の「篤姫」は評価を下す者で、＜評価者＞である。

次に、「大きい」「嬉しい」「面白い」のそれぞれの主語について、語彙的意味的にどのような種類なものがあるかをざっくり見ていく。「大きい」文の主語には、「弓」「チューリップ」「戸河内町の干し柿」など物を表すものや、「足」「耳」のような身体部位を表すもの、「世界」「翳」「声」のような抽象的な物事を表すものがあった。ほかに、「衝撃・被害」「効果・役割・力」「喜び・くやしさ」「差・違い」「可能性」など概念を示すものも多くあった。いずれも、「大きい」という属性を持つ物事と考えられる。

「嬉しい」文では、＜感情の主体＞としての主語には、上の例(12)の「ピップさん」のよう

(8) いわゆる「意味役割」との異同については、ここでは踏み込まない。

な三人称がある一方、次の例(22)のように、一人称の例もわずかながら観察された。

- (22) しかし、手紙を読み、すべて了解した。君がセリナを知っていたことは、少しも気づかなかった。しかし僕は嬉しい。(池波正太郎『緑のオリンピア』)

「嬉しい」文の＜感情の機縁＞を表す主語は、まず普通名詞のほうを見ると、「手紙」のような物事がある以外に、「モルツの生が1杯二百九十円」「タダの魚」「小学生未満入園無料」のプール」など金額が安いことを示す表現や、「足を伸ばして寛げるゆとり」「通気性」など性質を示すものもあった。さらに、「海老原の思いやり」「片平さんの気持ち」「元春の勇氣ある態度」「そのお坊さんの一言」や「兄への愛情」「恋人のような雰囲気」などの表現が目立っており、人間関係、とりわけ他者から感情の主者への態度を示すものが多かった。さらに、「～こと」「～の」による表現には下記のようなものがあった。

- (23) 専務とはいえ、サラリーマン重役の椎名に、百万円は決して少ない額ではない。
それを、要求もしないのに送ってくれるのが嬉しい。(渡辺淳一『化粧』)
- (24) 真木を見る河合の目が好奇心に輝いている。日本人と会えたことがよほど嬉しいらしい。(戸井十月『小説宝石』)
- (25) 冷たい板の感触が、足の裏に心地よかった。それに、腰のわきに両手をついて、軽く胸をそらせると、しなるような感じが全身に広がっていくのも、うれしかった。(佐藤亜有子『首輪』)
- (26) 各客室には、それぞれ趣向を凝らした内風呂があるのも嬉しい。(実著者不明『部屋まで選ぼう癒しの温泉宿百選』)
- (27) オレゴン州は売上税がかからないので、ほかの州よりも安く買物ができるのがうれしい。(分担不明『アメリカ語学留学』)
- (28) 出発に向けて、日本語でのきめ細かなアドバイスがもらえるのが嬉しい。(西森有里『ペンギンと泳ぐ旅』)

以上のように、「～の」「～こと」の部分は「嬉しい」という感情を引き起こす機縁だが、意味的にいくつかのタイプが見られる。①他人から感情の主者にとって好ましいことをしてくれる場合(例(23))、②感情の主者が何かを実現する場合(例(24))、③感情の主者にとって好ましい状況がある場合(例(26))である。それぞれのタイプは別々に働いているわけではなく、例(27)や例(28)のように、一つの機縁に同時に現れることもある。上記＜感情の機縁＞の共通点としては、＜感情の主者＞はその事柄の一参与者であり、常に自身対他人、自身対周りの状況という関係の中で感情が引き起こされたり、感情を引き起こしたりするということである。これは、後で述べる「面白い」文の＜評価対象＞と異なる点である。

一方、「面白い」文の主語を具体的に見ていくと、まず＜評価者＞のほうでは、上記例(11)

の「篤姫」のような三人称の例がほとんどだったが、次の例(29-30)のような、一人称の例もわずかながらあった。

- (29) だが、その程度の料理でも意外に、生徒によって仕上がりに差があり、ぼくはそれが面白かった。(弘兼憲史『ヒロカネ食堂』)
- (30) ルミは、前にも増して美しく見えた。「や、これはこれは」ダルタニアンがやって来ると、(中略)ルミをさっさと連れて行く。私は、いい気分ながら、少々面白くなかった。—これも相対性原理なのかしら？(赤川次郎『華麗なる探偵たち』)

<評価対象>では、名詞で示されるものには、「映画」「小説」「物語」「文章」など文芸作品系のものや「話」「言葉」「評論」「意見」など言語系のものが顕著にあった。また、「水上バス」「釣り」「ゴルフ」「ボーリング」「川下り」などの事柄があった。さらに、「議員」「男と女」や「形容」「姿」「顔」など人間にかかわる表現、「世界」「日本」「店」「セーター」などの物ごとを示す例があった。一方、「～の」「～ところ」のほうを見てみると、

- (31) (略)近世初頭の笑話集『醒睡笑』(岩波文庫)の巻一「謂へば謂はるる物の由来」にみえる小話で、つぎのようにある。大辺路・小辺路には人馬の往来の困難なところが多く、糠や藁も不足がちで、役に立たない痩せ馬ばかりであったというのは誇張であろうが、「へちまの皮」と「辺路馬の皮」を掛けたところが面白い。(小山靖憲『南紀と熊野古道』)
- (32) このようなマンガは八十年代になって急速に増えた。少女だけでなく大人も「日本沈没」やノストラダムスの大予言に一抹の不安を覚えはじめた時代である。前世を「記憶」する少女たちは、自分は戦士・王女・巫女だったという。けっしてふつうのOLや主婦でないところが面白い。(高橋紳吾『きつねつきの科学』)(例(9)再掲)
- (33) いずれにせよ、日本でも中国でも、「息／いき」が同じような観念で解されていたのはおもしろい。(志田唯史『不思議な漢字』)
- (34) 街の中に忽然と黒猫のビルが建っているというのは面白そうだ。(妹尾河童『ぼくはこんな本を読んできた』)
- (35) だがその時彼のはらわたは、実は煮えくり返っているのである。その証拠に、それからはどんな話をもちかけてやっても上の空だ。それを横眼で見ているのはまことに面白い。(筒井康隆『アルファルファ作戦』)
- (36) 滑降は往路を戻るほか、五輪尾根や山頂から白高地沢上部の急斜面を滑ることも可能だ。(中略)一方、南面の柳又谷側へは、山頂直下の斜面から赤男谷などへと滑り込むのが面白いだろう。(菊池哲男『スキーツアー』)
- (37) このような現象を伏流とよんでいます。(中略)七日原でもそのような現象が見

られるかどうか、しらべてみるのもおもしろいでしょう。(実著者不明『日曜の地学』)

下線部はいずれも「面白い」の＜評価対象＞だが、中身は上に挙げた＜感情の機縁＞の特徴と比べて、多種多様である。例(31-32)は文学作品の内容である。例(28)は過去の事柄である。例(34)は一種の環境の描写である。例(35)は評価者自身の行動である。例(36-37)は「面白い」という評価が得られるだろうと考えた行動である。ただ、＜感情の機縁＞との違いを意識して＜評価対象＞を意味的にタイプ化するなら、一つは評価者から離れたところにある出来事や状況や内容であり、もう一つは評価者が能動的に自ら進んで参加する事柄である。また、上の例(31-32)のように、「～ところ」による表現があるが、これらは＜評価対象＞であると同時に、評価の「焦点」⁽⁹⁾とも捉えられる。例(31)も例(32)も、興味深い文学作品を取り上げている文章だが、その文学作品全体が面白いものだが、さらに具体的にどういうところが面白いかというと、それぞれ「～ところ」を用いていて、その面白さを説明している。評価の対象のある部分に焦点を当てて、そこが特に面白いと表現しているので、評価の「焦点」と考えられるのである。

4.1.1と4.1.2で観察したことを、用例数とともに簡単に表にまとめると、以下のようになる。

表2 各形容詞の主語の意味的立場と主な出現形式

	「面白い」		「大きい」		「嬉しい」	
主語の意味的立場	<評価者>	<評価対象>	<属性の持ち主>	<属性の側面>	<感情の主体>	<感情の機縁>
主な形と代表例	「人を表す語」(23例)	普通名詞(186例)「映画・話」	普通名詞(250例)「差・可能性」	普通名詞(8例)「規模」	「人を表す語」(107例)	「～の」(62例)
		「～の」(93例)				普通名詞(43例)「手紙・気遣い」
		「～ところ」(16例)	その他	その他		「～こと」(34例)
		指示詞(20例)				指示詞(38例)
		その他 ⁽¹⁰⁾ (9例)				その他

「面白い」を「大きい」と比較する場合、「大きい」の＜属性の持ち主＞も＜属性の側面＞もほとんど普通名詞で示される。一方、「面白い」における＜評価対象＞は普通名詞で示さ

(9) 評価の「焦点」については本稿では指摘にとどめておき、詳細な考察は今後の課題とする。

(10) 「その他」には「～ほう」、「疑問詞」(どこ、どれ、何)などを入れた。

れるものが多くあったが、「～の」「～ところ」や指示詞などのものもあり、割合的には3分の1ほどを占めている。これは、「面白い」は一種の評価として、「大きい」のような属性と異なることを意味する。つまり、＜評価対象＞には、一つの名詞に集約されるものがある一方、一つの名詞として捉えにくく、フレーズの形で捉えたり、いったん前の文で述べたうえでもう一度指示詞を用いて捉えなおしたりするものがある。このことは、＜評価の対象＞が＜属性の持ち主＞のようにある物事として存在するとは限らず、＜評価者＞による探索行為により新たに発見されたり、説明によって明らかになったりする場合が少なくなく、よってクローズの形を取りやすいという側面があるということである。

一方、「面白い」を「嬉しい」と比較する場合、まず意味的立場から見ると、両者とも、主語が「評価」「感情」をめぐる対象や機縁と、「評価」を下す者、「感情」を持つ者という2方向に分かれることにおいて、共通性を見せている。しかし、その割合に注目すると、「嬉しい」における＜感情の主体＞と＜感情の機縁＞は必ずしも同じ文に同時に現れるとは限らないが、約1対1の割合で現れている。それに対して、「面白い」においては＜評価対象＞がほとんどであって、＜評価者＞はわずかしかな観察されていない。このことから、「評価形容詞」の「面白い」は、評価者が顔を出す情意的な一面がうかがえるが、主な働きは物事をめぐって、その物事へ評価を下すことにあると言える。

主語の観点において観察された以上のような言語事実から、「面白い」文は「物事に対する評価」に重きを置いており、「大きい」文に似通っている一方、＜評価者＞がわずかながら文に現れることがあり、「嬉しい」文に似た特徴も示している。また、主語を意味の面で見ると、一つの名詞で言い表せるようなものがある（属性形容詞文に近い一面）一方、一つの名詞に収まりきらず、フレーズなどの形で表現されるものも多くある（感情形容詞文に近い一面）。

4.2 構文の観点から

4.2.1 形容詞の文型について

形容詞の文型について、まず、日本語記述文法研究会編(2009)を引用しながら確認しておく。同先行研究によると、「述語は、必須の名詞とともに文の意味内容の中心となる事態を描き出す。述語にとって必須の名詞がとる格の組み合わせを文型という。」(p.12)。さらに、「…形容詞の文型は限定的である。(略)形容詞は、性質や感情、感覚の持ち主を表す名詞だけをとる1項形容詞が中心であるが、その性質や感情、感覚の対象をとる2項形容詞もある」(p.13)としている。そのうえで、1項形容詞の文型である「が」文型については、「形容詞の多くは、性質や感情・感覚などの持ち主を主体とする[が]文型をとる。ただし、主体は「は」で表されることが多い」と述べている(p20)。なお、「感情の持ち主としての主体は、文中に現れないのが普通である」(p20)と述べている。

さらに、2項形容詞の文型について「が、が」文型、「が、に」文型、「が、から」文型、「が、と」文型を挙げているが、本稿の調査対象が該当する「が、が」文型だけについて、確認しておく。同先行研究では「が、が」文型を「対象明示型」と呼んでおり、そこに入る形容詞の例として、

「うれしい、悲しい、楽しい、さびしい、など／嫌いな、好きな、正確な、得意な、苦手な、不快な」(p.21)などを挙げている。さらに、「心的状態の主体を「が」、対象を「が」で表す。主体は「は」で表されることが多い」(p.22)としている。

ところで、形容詞文の型として、いわゆる「象は鼻が長い」というものがある。このような文においてまず「鼻」と「長い」が＜属性の持ち主＞対「属性」の関係であって、両者が結合したものが、「象」に対して説明を行っている。このような文にある名詞項目を「が」格に置き換えると、「～が、～が形容詞」になる。日本語記述文法研究会編(2009)において上で確認したように、「述語にとって必須の名詞がとる格の組み合わせを文型という」(p.12)という理由から「象は鼻が長い」タイプの型を2項形容詞の文型として認めないと思われる。ただ、本稿の調査において、「象は鼻が長い」タイプの「～が、～が大きい」文が観察された。「面白い」と「大きい」の違いを見るのに必要な言語現象であるので、本稿ではこのようなものも「文型」として扱い、分析を行う。本稿では便宜上、「象は鼻が長い」タイプを「～が～が」タイプI、感情形容詞による「私は彼からの手紙が嬉しい」(作例)のようなタイプを「～が～が」タイプIIと呼んでおく。

4.2.2 実例に見られた形容詞の文型

以上の確認を踏まえたうえで、本稿で集めた形容詞述語文を対象に、実際の書き言葉資料において主語が現れているかどうか、何項で現れているかに注目し、形容詞別に整理を行った。実例では、「ガ不出現」、「～が」、「～が、～が」、「～が、～が、～が」の4パターンが見られた。表にまとめると、以下になる。

表3 形容詞の構文パターンの用例数と割合

	「面白い」	「大きい」	「嬉しい」
～ガ不出現	155(29.4 ⁽¹¹⁾)	8例(3.0)	151例(34.2)
～が	355例(67.4)	207例(77.2)	269例(61.0)
～が～が	17例(3.2)	52例(19.4)	21例(4.8)
～が～が～が	-	1例(0.3)	-
合計	527例	268例	441例

表にある各形容詞文における構文パターンの分布だけを見ると、「面白い」は「～ガ不出現」の実例が3割、「～が」の実例が6割強、「～が～が」がわずかとなっている。文型とその割合の観点で見ると、「面白い」は「嬉しい」のそれと似ている。この言語事実について言及されている先行研究は、管見の限り見当たらない。

以下、「～ガ不出現」「～が～が」「～が～が～が」の実例を挙げておく。なお、「～が」の例は上の4.1.1、4.1.2に挙げたので、ここでは省略する。

(11) 括弧内の数字は、それぞれの各文型の用例数とその形容詞文の総数に占めるパーセンテージを表す。

「～ガ不出現」の例

- (38) 不覚だった。ひょっとしたら舞い上がっていたのかもしれない。真っ赤に染まったまま動かない右腕を押さえ、マナは目の前の異形を見上げた。大きい。(あおしまたかし他『爆炎campus ガードレス』)
- (39) 夜おそく帰宅した主人が「なんとなく、顔色が白くなったな」とほめてくれた。やっと主人が気がついてくれた。うれしかった。(うつみ宮土理『うつみ宮土理の根こんぶ健康法』)
- (40) 顔を見ることができないのは残念だけど、声を聞けたからうれしい。(清水久美子『夢がかなう日』)
- (41) 問題が起こった時の対応法も同じ経験をした会員がアドバイスをしてくれるので、会に出席すると、何か一つは得るものがあるってうれしい。(分担不明『ホームヘルパーを知っていますか』)
- (42) 授業は、これまで院内で学んだ内容より専門的だった。しかし、シスター今園の授業の基礎があるためか、とりわけ難しくは感じず、それぞれ、面白かった。(早船洋美『赤坂・修道女の飛翔』)
- (43) 野草がハーブのような効果を出して、じつに高級っぽい味になる。焚き火にはまたフライパンがよく似合う。(略)こういうアウトドア好き焚き火料理好きの友人を何人も知っているが、その料理にその人の人生観のようなものが妙にくっきり現れるので面白い。(椎名誠『活字の海に寝ころんで』)
- (44) もっと塗装に変化をつけ、形を作り変え、釣り場に合わせた自分だけのオリジナル・ブラーを作っても面白い。(高木道郎『防波堤釣り入門』)

上記例はその文に「～ガ」が現れていない実例だが、そのうち、例(38)と例(42)においては、前の文に「～ガ」と考えられるもの(「目の前の異形」「授業」)が現れているので、主語の省略と考えられる。一方、「嬉しい」の例(39-41)では、「～ガ」が現れないが、感情形容詞の場合、＜感情の主体＞が省略することが多いということから、いずれも感情の主体が省略されていると考えられる。ところが、「面白い」の例(43-44)では、文脈や「～ガ」が省略されていると考えにくい。あえて言うなら、「その料理にその人の人生観のようなものが妙にくっきり現れる」の部分、「もっと塗装に変化をつけ、形を作り変え、釣り場に合わせた自分だけのオリジナル・ブラーを作る」という部分が「～ガ」相当と捉えられやすい。上の表3で示されているように、「～ガ不出現」の割合は「面白い」「嬉しい」はともに3割ほどだが、しかし、今確認したように、「～ガ不出現」の事情が異なる。

「～ガ～ガ」の例

- (45) 日本は南北に長いため、冬の積雪状況は地域、年により差が大きい。(岡田一次『ニホンミツバチ誌』)

- (46) 裕子は元気な父と一緒に散歩できることが嬉しかった。(折原一『耳すます部屋』)
- (47) 年寄りの話は圧倒的に女性のもが面白かった。(加藤剛『時間の旅、空間の旅』)
- (48) ところが、このお雑煮も、ところ変われば品変わるで、言葉や風習が違うように日本各地のお餅の形や、おつゆの味付け、中にいれる具もさまざまに違っているのが面白い。(大原穰子『故郷のことばなつかし』)
- (49) 朔太郎は、バカ息子呼ばわりには馴れているので、河原乞食から野良犬になったことが、面白かった。(萩原葉子『朔太郎とおだまきの花』)
- (50) すると腹を立てた夫は、腹を立てない妻が面白くない。(加藤諦三『気が晴れる心理学』)

例(45)は「～ガ～ガ」タイプIのもので、ほとんど「大きい」文においてのみ観察されている。「嬉しい」文の例(46)、「面白い」文の例(49-50)は「～ガ～ガ」タイプIIである。また、「面白い」文の例(47-48)は「象は鼻が長い」文と似た構造を取っているが、「年寄りの話は面白いが、特に女性のもが面白い」、「このお雑煮も面白いが、特に地方によって味や具がさまざまに違っているところが面白い」というふうに解釈できるので、「～ガ～ガ」タイプIに近いものである。このように、「～ガ～ガ」構文の場合、「大きい」「嬉しい」はそれぞれタイプI、タイプIIの構文のみを取るが、「面白い」は両方向の構文を取っている。ただ、割合から見ると、「大きい」のタイプIIは2割ほどで、「嬉しい」文のタイプII、「面白い」文のタイプI+IIはごくわずかである。

「～ガ～ガ～ガ」の例

- (51) 本稿も、この時期の制度史的理解は二論文によるところが大きい。(安丸良夫『日本近代思想大系』)

このパターンの例は「大きい」文において1例しか観察されなかった。

以上、構文の観点で「面白い」「大きい」「嬉しい」の文を見たが、「面白い」は「大きい」「嬉しい」両方の構文を取りうることにについては、西尾(1972)に指摘されている通りである。ただし、「～ガ不出現」については、割合的には「嬉しい」文に近いこと、また、「面白い」と「嬉しい」とでは主語省略の事情が異なるということが本稿の考察によって新たに分かった。

4.3 「面白い」文における「評価者の積極的な参与」を示す部分と「評価の根拠」を示す部分

「面白い」文において、「評価者の積極的な参与」を示す部分と「評価の根拠」を示す成分が顕著に観察された。

- (52) 発見された大隕石孔ができたときに飛び散ったかけらが、地球に到達したのかかもしれないと考えるとおもしろい。(村山定男ほか『天文学への招待』)

- (53) 丁寧に見なければ、日本人かポルトガル人かわからない。しかし、そういう全体の生活の要素の一部分だと見ると、ほんとうに面白い。(司馬遼太郎ほか『世界のなかの日本』)
- (54) 日英両方のイディオムを比較研究して見ると、東西人情の同じことも、また国柄や国振りの異なることも自からわかってきて、無限の興味を覚えるものである。単なる言葉の並べ方でも比較して見ると実に面白い。(田中菊雄『英語研究者のために』)
- (55) 最初に舞妓をやったときは、一回限りのつもりだった。それに男だし、店だしなんて問題外だった。でも、やってみたら、面白い。(奈波はるか『少年舞妓・千代菊がゆく!』)
- (56) もっと塗装に変化をつけ、形を作り変え、釣り場に合わせた自分だけのオリジナル・ブラーを作っても面白い。(高木道郎『防波堤釣り入門』)(例(44)再掲)
- (57) ふと思い付いて、割れないカップをデパートに探しに行くと、ヴァリエーションが沢山あってナカナカ面白い。(高山宗東『お見舞い道楽。』)
- (58) 最近、新しい街作りとしての都市開発も進み、訪れるたび、いろんな変化、発見があって面白い。(松美里瑛子『無料空間』)

例(52-58)の下線部は、評価者が「面白い」という評価を下すのに行う／行なった能動的な取り組みを示している。評価は評価者が自ら何かしらの行動・行為・思考活動をする中で積極的に下されるものである。このような取り組みを示す部分は、「大きい」文にも「嬉しい」文にも観察されなかった。「面白い」文の特徴的なものと言えるだろう。このような言語事実は、以下のように考えられる。「大きい」などの「属性」は一部の物事に「所有される」ものとして認識されている、あるいは「大きい」とはどういうイメージか共通の認識があるため、ある物事が「大きい」かどうかを言う時は、一人一人の話者が物事へ働きかけて判断する必要がない。一方「面白い」という評価はあらかじめある物事に存在する「属性」ではないので、一人一人の話者が一回一回物事との接触の中で「面白い」かどうかの知見を獲得し、評価を下すのである。また、感情は多くの場合、ある物事によって受身的に引き起こされることが多く、話者自らの積極的な取り組みを必要としない。

一方、「面白い」文には、「評価を下す根拠」を示す部分が多く観察された。

- (59) 英語にも日本語にも lost という単語が入っているから、面白い。(ロジャー・パルバース『文通英語術』)
- (60) 私はいつも特別にだしてもらっているのだが、やはりそのような年配の常連が十人ほどいるというから面白い。(辛島昇『カレー学入門』)
- (61) こういうアウトドア好き焚き火料理好きの友人を何人も知っているが、その料理にその人の人生観のようなものが妙にくっきり現れるので面白い。(椎名誠『活

字の海に寝ころんで』)(例(43)再掲)

- (62) このジョン・ベルナル、天才なのか、ただのお馬鹿さんなのか、時々、さっぱり解らなくなるので面白い。(山田詠美『熱血ポンちゃんが来りて笛を吹く』)
- (63) それだけに平均的な調査にはないメンタルな部分が過剰なほど正直に表れていて面白い。(松尾羊一『ザ・渋谷研究』)
- (64) 他にも本館地下のミュージアムショップが充実していて面白い。(浦井正明『「上野」時空遊行』)
- (65) 「銀河」は二本煙突の千トンの船、もちろん二本もの煙突は飾りみたいなものでそれがかえって遊覧船的で面白い。(柳原良平『船旅を楽しむ本』)

例(59-65)の下線部は、なぜ「面白い」といえるか、評価者がその評価を下すための根拠を示す部分である。

以上のような言語事実については、以下のように考えられる。例えば「大きい」の場合、ある物事が「大きい」かどうかは、「属性」がその物事に安定して存在する(と認識されている)一面であるため、特別に根拠を提示しなくても済む。しかし、評価形容詞「面白い」の場合、評価とは評価者の評価対象に対する一回ごとの行為であるがゆえに、通常他の人との共有が困難である。そのため、物事に「面白い」という評価を下すときに、その根拠を提示することが多い。

以上のように、「面白い」文における「評価者の積極的な参与」を示す部分と、「評価を下す根拠」を示す部分について確認した。これらの部分は「面白い」文の必須要素ではないにもかかわらず、書き言葉資料の例文には多く観察された。一方、「大きい」文、「嬉しい」文にはこのような要素は観察されなかった。

5. まとめ

以上のように、諸先行研究で言われる「中間的」な形容詞、「評価形容詞」について再確認したうえで、評価形容詞の典型例「面白い」と属性形容詞「大きい」、感情形容詞「嬉しい」を対象に、書き言葉資料における形容詞述語文の実例を収集し、①主語、②文型、③一部構文的特徴の観点から3者を比較・考察した。先行研究で大づかみに取り上げられている「中間的」と考えられる言語現象を実例に沿って量的にも確認することができた。主語に関していえば、「面白い」文の主語はほとんど<評価対象>であり、「大きい」文に近い一面を示している。ただ、「～の」「～ところ」「～こと」などの形で現れるものが3割ほどもあり、「大きい」文と異なる。文型に関していえば、「面白い」は「大きい」「嬉しい」両方の構文を取りうることを確認し、さらに「～ガ不出現」の文が多くあること、主語省略において「大きい」「嬉しい」と事情が異なることを指摘した。さらに、構文的特徴については、「面白い」文の必須要素ではないにもかかわらず、「評価者の積極的な参与」を示す部分と「評価の根拠」を示す部分があることを確認した。このような部分は「大きい」文にも「嬉しい」文にも観察されない

ものである。

考察を通して、大まかにではあるが、「面白い」は主語、文型の面では「大きい」「嬉しい」の中間にあると言える。一方、4.3で述べたように、「面白い」にしか観察されない独自な特徴もあるので、必ずしも常に両者の中間にあるとは言えないことが分かる。

また、以上のような言語事実は、「評価」(行為としてではなく、内容としての「評価」)「属性」「感情」それぞれの意味の違いから説明できると考えられる。属性は物事に存在する一般認識である。また、「大きい」などについて想起されるイメージは、個人差があるにせよ共通すると言える。それに対して、「面白い」のような評価(内容)は共通認識ではない。評価者が何かしらの根拠をもって、積極的に評価対象への接触の中で一回一回獲得し、そのうえで物事へ下したものと考えられる。一方「感情」は一種の共通認識と考えられるが、物事の方に存在するのではなく、感情を持つ人間のほうにある。また、感情はある物事を機縁に受身的に引き起こされるのが普通である。

本稿は評価形容詞の典型例「面白い」のみを「大きい」「嬉しい」と併せて考察したが、本稿で観察された現象はその他の評価形容詞(可笑的、怖い、可愛いなど)においても見られるかどうかは、今後の課題としてさらなる考察が必要である。また、考察を通して、「評価(内容)」の内実を「属性」「感情」との関係において精緻化していきたい。

張舒鵬(ちょう じょほう、ZHANG Shupeng)
東京外国語大学 特別研究員

参考文献

- 川端善明(1976)「用言」『岩波講座日本語6 文法I』大野晋ほか編 岩波書店
川端善明(1983)「文の構造と種類—形容詞文—」『日本語学』2-5 明治書院
小針浩樹(1994)「文類型の中での形容詞文の位置づけについて」『国語学研究』33 東北大学文学部国語学研究室
張舒鵬(2016)「「評価形容詞」の設定—「思ウ」認識動詞構文による試案—」『東京外国語大学日本語教育年報』20 東京外国語大学日本専攻
張舒鵬(2019)「形容詞の種類と連体修飾のあり方について」『言語・地域文化研究』25 東京外国語大学大学院総合国際学研究所
西尾寅弥(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所報告44 秀英出版
仁田義雄(1998)「日本語文法における形容詞」『月刊言語』27-3 大修館書店
仁田義雄(2014)「形容詞1」『日本語文法事典』日本語文法学会編 大修館書店
日本語記述文法研究会編(2009)『現代日本語文法2』くろしお出版

資料

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』国立国語研究所 (<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>) (最終確認日:2024年8月22日)

戦後日本人の中国旅行記における「友好」の語り方 — 野上弥生子の『私の中国旅行』に着目して

The Narrative of "Friendship" in Post-War Japanese Travel Accounts of China: Focusing on Yaeko Nogami's *My Travels in China*

鄒 韻

Abstract

In the post-war period, China adopted a "people's diplomacy" policy, inviting multiple Japanese organizations and individuals to enhance bilateral exchanges. In 1957, Japanese writer Yaeko Nogami accepted invitations from the Chinese People's Association for Cultural Relations with Foreign Countries (CPAFFC) and the China Writers' Association to visit China. Her travelogue *My Travels in China* functioned as a political document with significant ideological connotations. This study examines Nogami's text within the historical context of post-war Japanese intellectuals' engagement in promoting Sino-Japanese friendship, analyzing its narrative strategies through textual analysis. While positioning herself as a geographically proximate observer of New China, Nogami explicitly recognizes the constraints of her outsider perspective and warns against simplistic interpretations of Chinese society. Furthermore, by comparing the published travelogue with Nogami's private diary, this research reveals intentional narrative framing: the text systematically emphasizes the Chinese Communist Party's revolutionary achievements—particularly those associated with Yan'an—while deliberately omitting historical connections to pre-1949 China, thereby constructing a distinct representation of New China's emergence.

Keywords 野上弥生子、『私の中国旅行』、戦後日本、新中国
Yaeko Nogami, "*My Travels in China*", Post-war Japan, New China.

一、はじめに

日本人の中国旅行記については、これまでの研究では主に戦前のものに注目されてきた。1949年のいわゆる新中国成立から1972年の日中国交正常化までの間、中国は民間外交の政策を展開し、日本の作家や政治家、元軍人等の日本社会の各界に対して、団体または個人の招待を頻繁に行った。数多くの日本人が海を渡り直接中国大陆に足を踏み入れたことが確認できる。

日本の先行研究においては、1953年の内山完造を代表とする「引揚げ打合せ代表团」の中国訪問や、1955年に中国を訪問した火野葦平の中国旅行記、60年代から中国へ二度訪問した有吉佐和子の訪中に着目する研究が多い。一方、中国側の先行論では、1957年の中野重治をはじめとする日本学術・文化界の訪問、60年代の大江健三郎の中国旅行に関する研究もみられる。これらの研究は、日中両国の国交回復にむけた民間交流の一環としての日本人の中国訪問の意義や位置づけ、または戦後日本人の中国認識といった方面から論じられている。この時期における戦後日本人の訪中についての研究は未開拓の分野が多く、訪

中の経緯を明らかにするには実証的な研究が必要である。また、「日中友好」の文学と位置付けられる紀行文はどのように「友好」を語っているのかについても、さらなる考察を要する。

本稿が注目するのは1957年の夏に中国対外文化協会と中国作家協会の招きで中国大陸を訪れた女性作家の野上弥生子の訪中記である。弥生子の帰国後、紀行文「延安紀行」、「北京の監獄」、「胡同の家」、「大同と雲崗」、「広州」というようにまとめられて雑誌『世界』に連載され、(連載の詳細は後述するが)1959年に単行本『私の中国旅行』として岩波書店によって出版された。

野上弥生子の『私の中国旅行』に関する先行研究は極めて少ない。まず挙げられるのは1966年の田中艸太郎の論である。火野葦平の「赤い国の旅人」を中心とするこの研究では、それと野上弥生子の『私の中国旅行』と比較し、「戦争を媒介にしてかつて存在した日本人の二つの対極的な型」というように二つの紀行文を位置付けている。その中で田中は、「赤い国の旅人」は元兵士であった火野の「複雑な心境」を描き出していると指摘しており、「二十年前の火野自身と戦争と中国対現在の火野と中国との微妙な絡み合いの中で」、自分自身の「存在自体にかかわる重大な対決」を語り、「私たちの心に触れてくるもの」として作品を評価している。一方、野上弥生子の中国訪問記に対しては、「無垢な精神的童女性」と皮肉な表現を使いつつ、「過去の罪悪感に責められる暗さ、苦しみというものはどこにもない」ことに「ある種の驚嘆を禁じえなかった」と批判している。

『私の中国旅行』を中心に研究したものとしては、管見の限り陳淑梅の論しかない。陳は「かつての日中戦争の罪悪感から、そのような『過渡的』な中国を見る弥生子の眼差しは、常に肯定的なものであり、現時点から見れば、やや寛大すぎるという嫌いもある」⁽¹⁾と述べる一方で、「市井の新生中国人民の生活や暮らしぶりにより強い興味」を持っていると指摘しているように、弥生子の庶民への視線を評価している。そして、弥生子の肯定的な語り方と同時代の中国の現実の間にはズレがあるが、そのような「国づくり」の途上にある新中国に対する弥生子の考えは「恣意的な思いやりではなく、当時の日本人の多くに働きかけていた、新中国が持つ『牧歌的』なイメージが大きく影響している」と結論付けている。

本論は上述の田中が指摘している火野と野上を代表とする戦後日本人の紀行文の「対極的な型」を認めつつ、火野の「反省」の語りに対して、弥生子の紀行文を新中国に対する戦後日本人の「友好」の語り方として位置付ける。そうした「対極」は戦時下の経験や記憶による違いであり、また語り手のジェンダーや語り方の戦略にも関わっていると考えられる。火野葦平は日本の軍隊の一員として中国に滞在した経験があり、戦争に加担し戦後には「戦犯」とも呼ばれていた。彼は団体とともに再び中国を訪れた際に、かつての戦争体験を語らざるを得なかっただろう。一方、後述するが弥生子は、戦時下に日本の戦争に対して否定的な態度を貫いており、平和の使者として中国側に招待されることになった。母親大会などの平和活動が盛んに行われていたことを考えると、50年代は女性が、「戦争の加害者」というよりむしろ「平和の母」として見做されていた時期でもあった。こうした語り手の違い

(1) 陳淑梅、1997年、34頁。

によって、田中が指摘する「対極的な型」になったのではないだろうか。

したがって、本論はこうした「友好」が語られる歴史的背景として、まず50年代の国際政治関係における日中両国の動向を論じる。さらに、「友好」生成のプロセスを明らかにするため、弥生子の紀行文だけでなく日記やインタビューなどの一次資料なども分析の対象とし、弥生子の訪中旅行の経緯を考察する。最後に、野上弥生子全集⁽²⁾に収録されている弥生子の日記を参照して紀行文との比較を行い、弥生子は中国旅行を通して、何を語るのか、何を語らない、あるいは語れないのかを検討し、日中の友好関係を築こうとする日本人の中国旅行記の語り方を探る。

二、訪中の歴史的背景

1945年における第二次世界大戦の終結により、国際秩序は大きく変化した。アメリカ政府は日本に対して西側陣営の一員として国際社会に復帰させる政策を講じた。さらに1951年、サンフランシスコ平和条約が締結され、それにより日本はアメリカ軍による占領が終了し、主権を回復した。しかし全面講和ではなく、ソ連や中華人民共和国、朝鮮などの同盟関係ではない国を除いた、西側諸国を中心とした国々との片面講和の形となった。佐野方郁が指摘した通り、「戦後日本は、『欧米か、アジアか』という二者択一ではなく、西側諸国、特にアメリカとの同盟関係を肯定した上で、それら諸国との関係とアジア諸国との関係を『両立』させることを目標としてきたのである」⁽³⁾。1955年、共産圏諸国との関係改善、アジア外交の重視を図る鳩山内閣は、4月にインドネシアで行われたバンドン会議に参加し、戦後アジアへ復帰する姿勢を見せた。

一方中国側では、共産党が日中間の民間交流によりアメリカの封鎖対策を打破しようとしていた。1953年、周恩来総理は大山郁夫との会談で、国交正常化するまでは民間の貿易文化交流を促進するという考えを提出した⁽⁴⁾。そうした民間交流は徐々に開始され、1955年には郭沫若をはじめとする中国科学院代表団の訪日⁽⁵⁾、1956年には梅蘭芳が率いる中国京劇団の訪日公演⁽⁶⁾が行われた。また中国からの各分野の日本人の招待も行われるようになった。招待されたのは議員等の政治家の他に、学術視察団や労働組合団体、新聞放送視察団、市川猿之助、松山樹子、北川桃雄をはじめとする劇団、舞踊、美術界の面々、さらには毛沢東の招きに応じた旧日本陸海軍の元軍人団等である。このように、日中間では科学、文化、芸術、政治、経済、貿易などの各方面の民間交流が日増しに発展していった。

弥生子の訪中旅行の翌年の1958年に起こった長崎国旗事件をきっかけに、日本と中国

(2) 野上弥生子の日記は1991年に刊行された『野上弥生子全集13巻』(岩波書店)から引用する。以下同様。

(3) 佐野方郁、1999年、102-103頁。

(4) 張歴歴、2011年、26頁。

(5) 張歴歴、2011年、35頁。

(6) 袁英明、2014年。

の関係は再び悪化の局面に直面した。同年竹内好は戦後以降の日中交流、とりわけ中国側からの招待に関して、「戦争状態がおわらず、国交が回復していない国の間で、しかも侵略国の方からでなしに侵略された方から^マ交友の手をさしのべてくれたのである。これを平和謀略だといって非難するものはほとんど人非人である」⁽⁷⁾と論じている。また南原繁が「日本民族の運命と東洋の未来を決定するのは、実に日中両国の関係を正しく平和な基盤の上に立て直すことにほかにはないであろう」⁽⁸⁾と論じているように、多くの日本知識人は中国側の好意を受け入れ、日中関係を改善させることによって日本の戦後の局面を打開しようとしていた。

弥生子の中国訪問はまさにこのような歴史的背景を持っていた。本格的にその経緯を論じる前に、弥生子の紀行文が掲載された『世界』という雑誌の位置づけを押さえておこう。雑誌『世界』は1946年1月に創刊された総合雑誌であり、安倍能成が組織した同心会の機関誌という性格で出発したという⁽⁹⁾。創刊者の岩波茂雄の同年4月の逝去により、運営が吉野源三郎の手に移っている。先行論で指摘されているように、『世界』は50年代の「進歩的勢力の城」⁽¹⁰⁾(94頁)であり、「政治関係や国際問題を理解するための『もうひとつの大学』」⁽¹¹⁾であった。とりわけ、50年代の激しく変動する国際関係の中、吉野を代表とした平和問題談話会は清水幾太郎や丸山真男、久野収、都留重人などを中心に全面講和を主張していた。弥生子はこうした『世界』雑誌の創刊メンバーと親しく⁽¹²⁾、とりわけ編集長の吉野源三郎は弥生子の訪中旅行に関わっていたことが確認できる人物である⁽¹³⁾。また、弥生子は戦後の平和活動に積極的に参加し、講和問題の署名にも関与したことがあった⁽¹⁴⁾。このように、野上弥生子の訪中旅行は中国側の外交政策に基づく日中間の文化交流の一環として位置付けることができ、さらには、日本知識人による日中友好関係の樹立を目指した共通の理解に基づくものであったと考えられる。

三、訪中旅行の経緯と準備

1. 招待の経緯

(7) 竹内好、1958年、27頁。

(8) 南原繁、1958年、17頁。

(9) 岩倉博、2022年、84-85頁。

(10) 竹内洋、2015年、94頁。

(11) 竹内洋、2015年、97頁。

(12) 弥生子の夫である野上豊一郎は英文学者であり、後に法政大学の教授、総長になっている。漱石門下として知られ、安倍能成や岩波茂雄らとも親しく、岩波書店に大変近い立場にいた。(小平麻衣子、2016年、54頁。青木一平、2020年)

(13) 『野上弥生子全集13巻』には、訪中旅行の日程が決まらず、吉野から「督促して貰ふことを頼む」と書かれている。(『野上弥生子全集13巻』、82頁)

(14) 1950年に「非武装国日本女性の講和問題についての希望要項」を平塚らいてうや野上弥生子等の連名で来日中のダレス国務省顧問に提出している。(嘉指信雄、2015年)。

1957年の訪中は弥生子にとって初めての中国訪問ではなかった。1938年10月から翌年の11月まで、夫の野上豊一郎は日英交換教授として外務省から派遣されてケンブリッジ大学などで講義していたが、弥生子もそれに同行していた。その旅の途次で上海と香港へも訪れていたのである。彼女は戦前の中国への旅に関して、『私の中国旅行』の「まえがき」において「日本の、むしろ一般の植民政策なるものに対して、私なりの素朴な疑惑をもちはじめたのは、この旅行が与えた一つの実感だといってよい」⁽¹⁵⁾というように語っている。

訪中した1957年は弥生子の代表作とされる『迷路』が刊行された翌年である。この小説は、戦前に「黒い行列」、「迷路」として発表されたが戦争により中断され、戦後に執筆が再開されて1956年10月まで前述の総合誌『世界』で掲載された。戦時中に中国共産党と結んで反戦活動を行い革命の聖地である延安まで脱出した日本人青年を描いたこの小説は、弥生子が延安に行く前に書かれたものである⁽¹⁶⁾。つまり、弥生子の中国への関心は、中国訪問以前からあったと言えよう。

中国対外文化協会と中国作家協会による招待の経緯に関しては、『野上弥生子全集』に収録された日記の記述が参考になる。4月5日の日記には「内山完造よりデンワにて中国の作家協会の茅盾氏らから野上弥生子、内山完造両氏の招きのデンポオが来たとの通知がある」(全集⁽¹⁷⁾、62頁)と記されており、当初内山完造と一緒に訪中するものと弥生子は考えていた。実際には、内山完造は野上弥生子だけを招待してくれとの電文を二人の招待と勘違いしたものらしい。日記には、「中共行きは私にはたのしみより少し心の重荷をかんじさせる」(全集、62頁)と記されている。当時すでに72歳になっていた弥生子には、「健康的に旅行が快適に過されるかどうかの心配」もあった。慎重に考慮した上で、「東京にゐればなにかと雑事に煩はされるのみ故、いつそ中国に行つた方がよい」(全集、69頁)と中国への旅を決心し、三男耀三の妻である三枝子と一緒に中国に行くことになった。

なぜ内山ではなく中国人とほとんど親交がなかった作家の野上弥生子が招待されたのだろうか。実は、1953年の引揚げ打合せ代表团に参加した際に内山完造はすでに新中国に訪れていた⁽¹⁸⁾。また、かつて戦争に加担した軍人や兵士を含めて中国を訪れたことのない有識者を招くことには、さまざまな立場の人々に新中国を知ってもらいたいという中国側の意図があったとも考えられる。

弥生子の訪中に関する中国側からの報道もその意図を知る手掛かりになるだろう。1959年の中国の雑誌『世界文学』においては、野上弥生子の訪中旅行と同年刊行された『私の中国旅行』が言及され、「女性ならではの心遣いから」延安時代の共産党の指導者の生活を描いたと『私の中国旅行』を評価している。また、「作者の長編名作『迷路』は、戦争に反対し日本侵略軍隊から延安まで逃げ出した主人公の物語を描いた」ものであり「延安まで資

(15) 野上弥生子、『私の中国旅行』、岩波書店、1959年。以下同様。

(16) 小平麻衣子、2017年。

(17) 『野上弥生子全集13巻』からの引用は以下「全集」と省略する。

(18) 川崎真美、2022年。

料を収集しにきた」と報じられている⁽¹⁹⁾。しかし、1984年に刊行された『迷路』の「あとがき」によると、野上自身は『迷路』完成前に中国を訪れたことはなく、中国の戦場の場面については画家飯田善国が出征した際の手記を参考にしたと記されている⁽²⁰⁾。また、『迷路』には改稿はあるものの、続編はない。つまり、中国招待側は弥生子のことを詳しくは知らなかったことが推測できる⁽²¹⁾。中国側の招待は、「延安」を描いた『迷路』の作者としての弥生子に対するものであったのだろう。

また、弥生子が出発する二週間前に、東京大学に勤めていた次男の野上茂吉郎をはじめとする訪中物理学代表团(団長は朝永振一郎)がすでに中国へ向かっていた。陳淑梅が「野上親子はともに日中文化交流の一翼を担うことになった」と指摘しているように、野上一家の日中友好交流における活躍もおそらく、中国が野上弥生子を招待した理由の一つであろう。

2. 訪中前の準備

弥生子は中国対外文化協会と中国作家協会の招きを受け入れて訪中の準備を始め、中国に関する文章や書籍、具体的には丁玲の「霞村にゐた時」、巴金の「家」、駱賓基の「北望園の春」、毛沢東の文芸講話等を読んだと日記には記されている。また、「とにかく中共の作家協会の招待だからこんな人にも逢ふと見なければならず、それに中国作家のものを少しもよんでゐないとあつては礼でない」とも書いている。実際には、北京に着くと招待側から著名人との会見を望むかと聞かれたが、「私は中国語ができないから、現代の中国文学も翻訳で読むにすぎず、また特定の作家の作品を研究してもいないので、ほんの興味だけでお逢いしても邪魔するだけ」(『私の中国旅行』、39頁)と応じており、対外文化協会のスタッフとの交流のほかは、特に中国の知識人との交流は紀行文の中では触れられていない⁽²²⁾。馬場公彦の研究によると、50年代の日本人の報告記や紀行文において「中国の人々と通訳を介した「賓客待遇の心地よさ」が語られる一方で、「特定の個人との深い交友関係を裏づけるような記述に乏しい」⁽²³⁾。

中国に長期滞在したことがなかった弥生子にとって、中国訪問には事前に情報を把握する必要があった。文学作品などを読むことに加え、例えば5月15の日記には、野坂参三から訪中の助言を受けたことも記されている。「延安で親しくした趙安博、李初黎、黄乃に逢ふことを勧められる。黄さんはむかしの黄興の息子。(中略)さうして中国でも庶民の私生活を見て来るやうにといふ。」(『野上弥生子全集13』、94頁)と日記に記されている。野坂参三

(19) 李正倫、1959年。

(20) 野上弥生子、「あとがき」、『迷路・下』岩波書店、1984年、649頁。

(21) また、1957年6月7日の『人民日報』において、「野上弥生子と娘の三枝子とともに北京に到着」と書かれている。しかし実際には娘ではなく、三男の妻である。「日本女作家野上弥生子到京」、『人民日報』、1957年6月7日、1頁。

(22) 日記では、北京大学の哲学者の馮友蘭と賀麟に言及し、さらに文学者の謝冰心との会見が記されているが、具体的な経緯については言及されていない。

(23) 馬場公彦、2010年。

は戦前、日本共産党で活躍し、戦時中に五年間、延安に滞在していた。彼は大陸に進攻した日本軍に反戦を呼びかけ、1946年に中国から帰国した際には、軍国主義と戦い抜いた英雄として日本国民に迎えられたことで知られている⁽²⁴⁾。引用に名前が出てきた人物とは、弥生子は訪中旅行の際に会っている。

以上の訪中前の準備を考えると、弥生子は招待以前から中国に対する関心を持っており、訪問前にも中国文学や日本人の友人を通じて中国の事情を事前に確認していたことがうかがえる。新中国に対する認識も、このように従来の中国に対する知識に基づくものが多かったと考えられる。

四. 隣人としての立ち位置

さて、この訪中旅行、あるいは新中国を、弥生子はどのような立ち位置から観察し、認識していたのだろうか。戦時下における弥生子の行動は、「私の中国旅行記」の「まえがき」に記されている。そこには、「否定もたんに観念的な抵抗にとどまったのは恥ずかしいが、無力ながらもこの態度が守れなかったなら、いかに中国の寛大な御招きがあったとしても、それに応ずるほど厚顔にはなりえなかった」(『私の中国旅行』、まえがき)というように、日本の植民地政策に対してつねに否定的な態度を貫いていたことが語られている。また、北上した汽車の沿線で戦時中によく耳にした土地の名前を実際に聞き、その風景を目にしながら、当時のこと回想する様子が次のように語られている。「あらためて、どういう国に来たかを思い知らされた。その土に血とともに浸み込んでいる恥じと、悪の追想に打ちひしがれるのを免れたのは、戦時中もどうにか保った私の良心のおかげである。満州事変なるものの頃に遡って考えても、日本軍部の行き方には私はつねに否定的であった」(「私の中国旅行記」、161頁)。弥生子は「良心のおかげで」侵略行為に加担しなかったことを述べながらも、「いま客となっている国に加えた悪に対しても、同じ責任は免れない辛さを痛感した」(「私の中国旅行記」、36頁)というように、日本人の一員としての戦時下の責任は否定できないことを語る。

しかしながら、こうした戦争責任に対する認識からうかがえる彼女の立ち位置は、同時代に訪中した火野葦平のそれとは大きく異なったものである。戦時下の日本の兵士兼青年作家として中国に滞在した火野は、1955年に再び懐かしい土地を訪れたことを「赤い国の旅人」に記している。彼の紀行文においては、「今さら悔いてもしかたがないし、謝罪してみてもなおさらはじまらぬことであろう」⁽²⁵⁾という「苦しい」気持ちが語られている。そこではかつての自分との対決が語られており、中国の旅は単に懐かしい土地への再訪だけを意味するのではなく、かつての自己を否定することによって新たな自己を再構築する過程となっていると考えられる。一方、弥生子の紀行文からは、自己はむしろ中国に対する「親し

(24) 小林峻一、加藤昭、1993年、9-10頁。

(25) 火野葦平、1960年、182頁。

い隣人」⁽²⁶⁾と位置づけられ、他者として途上にある新中国を外側から眺めていることが読める。

中国に対する弥生子の立ち位置は彼女の服装からもうかがえる。弥生子は中国訪問中、終始和服姿だった⁽²⁷⁾。「北京に着いたら中国服を作るつもりでいた」(『私の中国旅行』、114頁)が、「この考えを私に捨てさせたのは、新僑飯店にいるあいだに見かけた少数民族のひとつとである」と紀行文には記されている。そして、中国の少数民族の人々は民族衣装姿で、「自信にみちて堂々としているのに驚かされた」と語る。また、中国人から見れば和服姿は「少数民族のどれかに属するもの」かもしれないと書いている。それに対して火野は、日本人の訪中国が大勢の中国人に見られたことを、「私たちが揃って背広を着ていることが珍しいのか、日本人自体が珍しいのか、巡査が来て追っばらってもなかなか去らない」⁽²⁸⁾と記している。こうしたことから、和服姿の弥生子は中国人の眼には際立って異なる他者の姿として映じたであろうと考えられる。弥生子は「いつか御客さんでなく、自由な旅人として半年か一年ここに住めないだろうか」(『私の中国旅行』、45頁)と嘆き、「文字通りの隣人として触れ、親しむこと」を望んでいることを語る。

弥生子はこのように他者として新中国に触れる一方、「もとの中国を知らずにすんだ私は、批判にも正しい資格を欠いている」(『私の中国旅行』、52頁)というように他者である自分の限界も認識している。先行論でも、1950年代の訪中記の中の新中国の思想体制に対する判断には「明快な結論を出そうとする傾向」⁽²⁹⁾がみられることが指摘されている。1958年に帰国した弥生子は画家朝倉摂との会談の中で中国への旅に言及し、「よく日本の作家が中国にいて、中国に自由がないああいうところに住む気がしない、というけれども、これも一応は自然だが……ある意味ではゴウマンな批評だと思う」⁽³⁰⁾というように訪中した日本人の一部の傲慢さを批判している。

以上のように、『私の中国旅行』における弥生子の他者としてのまなざし、隣人としての立ち位置を確認した。弥生子はかつての戦争の記憶に対する日本人としての「責任は免れない辛さを痛感」していると語りつつも、火野葦平が過去の己と対峙したのとは異なり、その立ち位置を中国の外側に置いて隣人である他者のまなざしから新中国に触れていた。また、そうした他者としての立場の限界を認め、訪中旅行だけで新中国への結論を急ぐことの危うさも提示するのである。

(26) 野上弥生子、1959年、46頁。「ホテル住いでは、最後まで外側を眺めるに終わったであろう。『北京』に、むしろ『中国』に、文字通りの隣人として触れ、親しむことができたのはこの典型的な胡同の生活のおかげであり(後略)」。

(27) 1961年に初の訪中をした有吉佐和子の和服姿も先行論の中で取り上げられている。池田尚広、2020年。

(28) 火野葦平(1960)、前掲、182頁。

(29) 小島秋良(2023)、前掲、76頁。

(30) 野上弥生子、朝倉摂、「伝統の花咲く未来を」、『大分合同新聞』、1958年1月1日。(『野上弥生子全集 29巻』から引用、379頁)。

五、「友好」の語り方

1. 前景化される延安訪問

次に、弥生子の中国旅行の訪問先と移動の経路について考察する。日記に記される経路、『世界』の掲載順及び単行本に収録されている経路を次のようにまとめた。

単行本の各章	「中国の南門・広州」・「北京・胡同の家」・「北京の監獄」・「大同と雲崗」・「延安紀行」
『世界』の掲載順	「延安紀行」(一、二、三)の連載(単行本の第五章):『世界』第142号から144号まで(1957年10月-12月)。 「北京の監獄」(単行本の第三章):『世界』第147号(1958年3月)。 「胡同の家」の連載(単行本の第二章):『世界』第149号(1958年5月)と第151号(1958年7月)。 「大同と雲崗」(単行本の第四章):『世界』第154号(1958年11月) 「広州」(単行本の第一章):『世界』第159号(1959年2月)
日記に記される訪中の経路	広州⇒北京⇒大同⇒西安、延安⇒北京⇒上海、蘇州、杭州⇒日本へ帰国

単行本の『私の中国旅行』は訪問先によって五章に分けられており、訪問順の時系列に沿って収録されていることがわかる。だが実際には、単行本の第五章に当たる「延安紀行」は一番早い時期に上梓されており、訪中の最中に掲載されている。また、掲載だけではなく、日記からも「延安紀行」は最初にかかれた部分であることが確認できる。また、やはり帰国前に、「延安をたずねて」という文章が雑誌『図書』に発表されている。同誌によると、「延安をたずねて」は「北京から日本にむけて放送された講演の速記」である⁽³¹⁾。つまり、中国滞在中に弥生子は延安訪問のことを日本に伝えていたのである。そう考えると、この中国旅行記は延安が前景化されて語られるものだと言える。

また、『明治以降日本人の中国旅行記』から確認すると、1957年までに戦後中国に訪れた日本人の訪問先としては、上海、北京、武漢、天津、杭州、西安、広州等の大都市の他に、社会主義の重要な生産現場である長春、瀋陽、撫順、鞍山なども挙げられている。管見の限り、弥生子は戦後はじめて延安を訪れた日本人かもしれないのである。いうまでもなく、延安は中国共産党が1937年から1947年まで拠点を置いた、中国の革命運動の象徴的な場所であった。だが、延安訪問は当初、予定に入っていなかった。もともとは決められたコースで中国を回ることになっていたが、対外文化協会側が何か希望する訪問先があるかと弥生子に聞いたところ、弥生子は「できれば延安へ行ってみたい」と希望を告げたのである。その理由について彼女は次のように述べている。

ずっと以前に、エドガー・スノーの『中国の赤い星』をよんだ頃の影響で、正直にいえば、思想的であるより興味の方が強かった。最近では私の作品に関係もあるし、今度の旅

(31) 野上弥生子、「延安をたずねて」、『図書』第95号、1957年、11頁。

行で、古くからの希望がかなえられるものなら、という願いがあらたにされた。『私の中国旅行』、136頁)

1950年代の日本では欧米のジャーナリストが書いた有名な中国論の刊行が多く、一時的な流行となっていた⁽³²⁾。弥生子が紀行文と日記で言及したエドガー・スノーの『中国の赤い星』やアグネス・スメドレーの著作もこの時代の日本に大きな影響を与えた中国論である。とりわけ、『中国の赤い星』は中国共産党の形成過程と党の思想を理解するための重要な歴史的文献として、日本だけでなく世界中の多くの人に読まれてきた。『私の中国旅行』に書かれている延安についての言説も『中国の赤い星』を踏襲しているものが多い。弥生子は延安の歴史と交差させながら目の前の延安の風景を語り、「すべての仲間が石の洞窟に軒をならべて困苦を分かち合い、勇気づけあい、労わりあった当時の友情、愛、団結をみじんも乱さないで今日に及んでいる中共の生成過程」(『私の中国旅行』、196—197頁)を、延安を通して再確認できたという。また、弥生子は「現在の北京の中共政府を性格的に正しく認識するには、この渓谷に約十年間あった延安政府を学ぶことが前提になるとしたい」と述べており、新中国を認識するにはかつて革命精神の象徴とされる延安を理解する必要があることを示唆している。

2. 語る訪問先と語らない訪問先

『私の中国旅行』で語られる訪問先は、前述したように、広州、北京、大同、延安、西安を中心としている。具体的には、広州では越秀山公園・中山紀念堂・農民講習所・水上部落、北京では四合院(胡同)・十三陵・北海公園・北京監獄、大同では雲崗石窟・華嚴寺、延安では寶塔山・楊家嶺(延安革命紀念館)・王家坪・棗園、西安では博物館・大雁塔である。これらの場所は弥生子自身の言葉を借用すれば、「三千年の歴史をもち、最大にして最古でありながら、なお且つ世界の最新の国」(『私の中国旅行』、1頁)としての象徴である。

十三陵、雲崗石窟、華嚴寺、大雁塔等はまさに前近代の中国文化として世界に誇る観光地である。訪問先からこのような新と古の融合を読み取れるだけでなく、弥生子の旅行記における語りには新しい中国と古い中国が交差している。例えば、北京駅を目にした弥生子は「三千年の伝統をふまえた国の表玄関」(『私の中国旅行』、106頁)と語る一方で、モスクワ行きの電車が走っているところを見ると、「次元を異にする世界の存在」と語り、「いわば古い革袋にかえってもっとも新しい思想、精神のうま酒がかもされている」(『私の中国旅行』、106頁)という。また、「お国の新しい国家建設のさかんな意欲、実践に目を見張りつつも、その底にあって、疑いなく伝統のふしよく土となっている」(『私の中国旅行』、70頁)と述べるように、新しい中国は伝統や歴史を継承した古い中国と連続しているものであると示唆している。

一方、上記の訪問先は、例えば中国共産党が組織された経緯を展示する越秀山公園の博物館、毛沢東の事跡である農民講習所、新中国の解放によって成長してきた下層階級であっ

(32)馬場公彦(2010)、前掲。

た水上部落、人間の教育・改造の空間とされる北京の監獄、延安革命記念館など、いずれも革命の聖地、あるいは社会主義国家である中国の新しさを象徴する空間である。つまり、古い中国として誇る観光地だけでなく、解放後の新中国の「新しさ」を象徴する場所に案内されていたのである⁽³³⁾。野上弥生子は「解放後の中国が、そのまえとは別な中国であるように、同じイデオロギーで脱皮した砂漠の隣邦」になった(113頁)といったように繰り返し中国の「新しさ」を語る。これらの空間は新しい国づくりの生産・再生産の現場といえるだろう。

紀行文に記される弥生子の訪問先は、香港から入国し、広州、北京、大同、西安、延安までとされており、帰りは北京に引き返して改めて上海に下ったという。しかしながら、日記には7月2日に上海に到着して上海人民遊楽場で芝居を見たことや、翌日南京路でイギリス支配の名残りの石造の建物、旧仏租界、郊外の工人住宅地、幼稚園、上海大廈、魯迅博物館などを訪れたことが書かれている。上海で芝居を見た弥生子は「このローマンでいかにも別な中国を見せてゐる—即西欧化のものと中国のすがたを」(全集、149頁)と語り、「上海には北京になかったネオンの灯も幾分輝いてゐる」(全集、154頁)とモダンな上海を描く。また、杭州で西湖見物をしたことや、「魯迅の弟子」(全集、155頁)であった黄氏⁽³⁴⁾に会って魯迅について色々話したこと等も記されている。

繰り返しになるが、弥生子は戦中の1938年に一度上海に立ち寄っている。しかし、そうした時空を越えた戦中と戦後の上海での体験の違いを弥生子は語らなかった。火野葦平は「赤い国の旅人」において「戦跡行脚などという感傷はこの国では許されないのであった。その建物にちょっと行ってみたいという衝動は弱くはないけれども、それはいえないことなのである。」⁽³⁵⁾と訪中している日本人として、ノスタルジーを語ることの難しさを書いている。両者の旅行記を比較すると、野上弥生子が予めそうした語りにくさを排除して新中国の生成を前景化して語っているのに対して、火野葦平は過去と現在、戦争と平和等の微妙な絡み合いの中から中国を語っていると言えるだろう。

3. 新しい中国・古い中国をめぐる言説

このような新しい中国と古い中国をめぐる言説は、弥生子の紀行文だけでなく、1959年の山川菊栄の訪中旅行記からも見ることができる。1959年、中華人民共和国の建国十周年を祝うために国慶節祝賀訪中団体が結成され、片山哲をはじめとする代表団の訪中に菊栄も同行したのである。帰国後、菊栄は「新しい中国・古い中国」という題で訪中旅行の体験を『世界』に発表した⁽³⁶⁾。弥生子と同様に菊栄も社会主義制度の建設による新中国の新しさを強調し、「驚異的な社会主義的建設の進行が、虐げられふみにじられてきた後進民族にどれだけ深くかつ大きな感激を与え、自信と激励を与えるかは、想像以上のもの」があると語る。

(33) 日記においては北京師範学校の附属小学校や人民委員会教育局直属の託児所の参観についてメモをしている。

(34) 弥生子は「魯迅の弟子」(魯迅の学生)であった黄氏としか書いていないが、おそらく黄源のことだと考えられる。応宜文、2022年。

(35) 火野葦平、前掲、183頁。

(36) 初出：山川菊栄「新しい中国・古い中国」『世界』169号、1960年1月。(『山川菊栄集7：明日の女性のために』から引用。『岩波書店』、1982年、『岩波書店』、206—225頁。)

一方で菊枝は、西安や成都を訪ねて各地の歴史上の人物、例えば玄奘、李白などに言及して長い歴史を誇る伝統的な中国を語り、古い中国と新しい中国の連続性を示唆している。

以上のように、弥生子の日記と紀行文とのズレから、さらに同時代の日本人の紀行文から、古い中国と新しい中国との連続性が繰り返し語られていることが確認できた。その一方で野上弥生子は、中国共産党の誕生と革命以外の近代中国の歴史についてはほとんど触れず、ノスタルジックな感情も語らないようしていた。上海を代表とする中国のモダニズムのイメージは社会主義国家の建設としての新中国の言説に収まらないものなのだろうか。馬場の研究によると、1950年代の日本人の紀行文には、「新中国の新しいさを強調するあまりか、旧中国との連続性についてはほとんど顧慮されていない」(前掲、149頁)という傾向がみられる。しかし、弥生子の紀行文や同時代の日本人の紀行文の語りからすると、馬場が指摘した旧中国とは三千年の歴史を持つ古い中国のことではなく、近代中国のことだと考えられる。50年代の日本人の中国旅行記においては、伝統的な中国文化を継承した新しい中国の言説が繰り返し語られているのである。

六、むすび

以上のように、本稿は野上弥生子の訪中旅行の経緯とその紀行文『私の中国旅行』を考察した。戦後中国は「人民外交」に基づき、日本に対して多くの団体や個人の招待を行った。1957年に、72歳の弥生子は中国対外文化協会と中国作家協会の招きに応じて中国大陸に足を踏み入れた。中国政府の公式招待による個人旅行であったため、弥生子の『私の中国旅行』には多くの政治的意味が込められていた。また訪中旅行には『世界』の編集側も関わっていたことから、『私の中国旅行』は戦後の日本知識人による日中友好関係の樹立を目指した共通の理解に基づくものだったと言えるだろう。言い換えれば、その成立に日中関係の改善を図ろうとする社会的背景を持っていた『私の中国旅行』は、戦後の日中友好を目標にして書かれたプロパガンダ的な作品だと言えるのである。本論は火野葦平の「赤い国の旅人」に見られる「反省」の語りに対して、野上弥生子の紀行文を新中国に対する戦後日本人の「友好」の語りとして位置付けた。弥生子は親しい隣人として他者の視線から新中国を観察し、認識する。また、他者であるからこそ、自分の認識に限界があることを認め、新中国への結論を急ぐことの危うさを批判している。

さらに、紀行文の掲載順と執筆順からは、『私の中国旅行』は延安を代表とする中国共産党の革命や新中国の成立を前景化して語られた作品であると考えられる。一方、紀行文と日記を比較すると、上海などの訪問先を紀行文ではあえて語らなかったことも確認できる。『私の中国旅行』では、古い中国の伝統を継承する新しい中国の言説が語られる一方で、近代中国、あるいはそこからの連続性についての語りは存在しない。このように、野上弥生子は予めそうした語りにくさを排除して、新中国の生成を前景化して語っているのである。

新中国成立から日中国交正常化までの間に、多くの日本の文化人が中国政府の招待を受

けて中国大陆に訪れた。これらの日中知識人の交渉や文学的な創作については、今後の課題として研究していきたい。

鄒韻(スウ イン, ZOU Yun)

杭州師範大学 講師

参考文献

日本語文献(五十音順)

1. 青木一平、「野上弥生子と安部能成一漱石門下生の交遊」、『日本史学集録』第41号、2020年、49-61頁
2. 池田尚広、「戦後日中文化交流における有吉佐和子：1961年、1965年の訪日を中心に」、『杏林大学外国語学部紀要』第32号、2020年、131-145頁
3. 池田尚広、「火野葦平「赤い国の旅人」論：「新中国」印象とオポチュニズム批判を中心に」、『中国研究月報 = Monthly journal of Chinese affairs』第78巻第1号、2024年、1-19頁
4. 袁英明、「京劇・梅蘭芳と日本：三度の訪日公演の背景とその目的」、『芸文研究』第106号、2014年、87-100頁
5. 嘉指信雄、「原点から問い直す反核・平和思想—平塚らいてう・丸山眞男・森瀧市郎」、『平和研究／特集「積極的平和」とは何か』第45号、2015年、23-42頁
6. 川崎真美「「引揚げ打合わせ代表团」内山完造の中国訪問(1953)」、『人文学研究所報』第67号、2022年、233-246頁
7. 小平麻衣子、『夢みる教養—文系女性のための知的生き方史』、河出ブックス、2016年
8. 小鳥秋良、「訪中記から見る中国との再会：火野葦平『赤い国の旅人』論」、『JunCture：超域的日本文化研究』第14号、2023年、66-78頁
9. 小林峻一、加藤昭、『闇の男：野坂参三の百年』、文藝春秋、1993年
10. 竹内洋、『革新幻想の戦後史(上)』、中央公論新社、2015年
11. 竹内好、「中国観の破産—日中問題の考え方—」、『世界』第154号、1958年
12. 野上茂吉郎「日中両国物理学界の学術交流に関する覚え書について」第12巻第7号、1957年、320-321頁
13. 野上弥生子、『私の中国旅行』、岩波書店、1959年
14. 野上弥生子、「あとがき」、『迷路・下』、岩波書店、1984年
15. 野上弥生子、『野上弥生子全集(13巻)(29巻)』、岩波書店、1991年
16. 火野葦平、「赤い国の旅人」、『世界紀行文学全集 第11巻 2 (中国編 第2)』、修道社、1960年
17. 馬場公彦、『戦後日本人の中国像—日本敗戦から文化大革命・日中復交まで』、新曜社、2010年
18. 南原繁、「日中国交回復の道」、『世界』第154号、1958年

19. 山川菊栄、『山川菊栄集7：明日の女性のために』、『岩波書店』、1982年

中国語文献(ピンイン順)

1. 高華鑫、「1960年安保運動与大江健三郎的中国之旅」、『外国文学評論』第2020年第2号、2020年、90-110頁。(題目拙訳：1960年の安保運動と大江健三郎の中国旅行)
2. 李正倫、「野上弥生子：《我在中国旅行》」、『世界文学』、1959年、165-166頁。
3. 『人民日報』、「日本女作家野上弥生子到京」、1957年6月7日。(題目拙訳：日本女性作家の野上弥生子が北京に到着)
4. 楊雪、「文学抵抗与“文学統戦”——1957年中野重治的中国之旅再探」、『日語学習与研究』第2021年第3号、2021年、11-21頁。(題目拙訳：文学抵抗と「文学統戦」：1957年の中野重治の中国旅行に関する研究)
5. 応宜文、「魯的学生：浙籍文学翻譯家黄源」、『浙江大学学報(人文社会科学版)』2022,(4)、129-129頁。(題目拙訳：魯迅の学生：浙江省出身の文学翻譯家黄源)
6. 張歴歴、『新中国和日本關係史(1949—2010)』、上海人民出版社、2011年。(題目拙訳：新中国と日本の關係史)

Tracing Japonic Lineages through Matryoshka Distribution: Phylogeny, Migration, and Language Replacement in Eastern Japan

マトリョーシカ分布からたどる日琉諸語の系統：
東日本における系統発生、移住、言語の置き換え

Yosuke Igarashi

Abstract

言語形質の間に含意的階層が存在し、それに対応する等語線が入れ子状の構造を持つことは、言語系統の再建や、移住による言語の拡散の理解に有益な手がかりを提供する。筆者はこの地理的分布を「マトリョーシカ分布」と称し、これが現代の日本列島に観察されることを先行研究で示してきた。本研究では、マトリョーシカ分布の概観を提示し、東日本における日本語系諸方言の系統分類に対するその示唆を検討する。8世紀の東日本語の唯一の現存する子孫とされる八丈語の系統的位置を再考することで、マトリョーシカ分布が基層日琉語—日琉祖語の分岐とその後の言語置換の間の時代に、八丈島を含む東日本で話されていた基層の日琉語系変種—を反映していると提案する。

Keywords マトリョーシカ分布, 東日本語, 基層言語, 日琉祖語, 移住経路

Keywords: matryoshka distribution, Eastern Japanese, substratum, proto-Japonic, migration routes

1. Introduction

Several patterns of linguistic trait distribution in the Japanese archipelago have been documented in Japanese linguistics. Notable examples include the “concentric circle distribution,” where traits spread concentrically outward from the Kinki region; the “East-West opposition distribution,” where distinct linguistic traits are found in Eastern and Western Japan; and the “North-South opposition distribution,” where differences in linguistic traits are observed between the Japan Sea coast and other regions (Sato 1986; Kobayashi 1991; Onishi 2002; Hikosaka 2002; Abe 2013). In Japanese linguistics, such distributions are typically explained as the result of diffusion, that is, the borrowing through contact between different speech communities. However, some distributional patterns can reflect phylogenetic rather than diffusion-based relationships. The “matryoshka distribution,” which I have proposed in several studies since 2017, exemplifies this type of linguistic trait distribution that is argued to reflect phylogenetic relationships (Igarashi 2017, 2018ab, 2021).

This paper outlines the matryoshka distribution of linguistic traits proposed by Igarashi (2021) and examines its implications for the phylogenetic classification of Japonic languages in Eastern Japan. Specifically, it revisits the phylogenetic position of Hachijo, often considered the sole surviving descendant of 8th-century Eastern Japanese. It further proposes that the matryoshka distribution reflects substratum Japonic—the Japonic varieties spoken between the divergence of Proto-Japonic and the subsequent language replacement in Eastern Japan, including Hachijo Island.

Thus, the matryoshka distribution is argued to provide insights into the phylogeny of Japonic varieties and the migration routes of their speakers across the ancient Japanese archipelago.

2. Matryoshka distribution

The concept of matryoshka distribution of linguistic traits in the Japanese archipelago was first proposed by Igarashi (2017). However, the term matryoshka distribution and its interpretation draw significant inspiration from Sagart (2004, 2013).

Sagart (2004, 2013) found that the numerals for ‘5’ to ‘10’ in Formosan languages are reflected according to an implicational hierarchy, in which the presence of one reflex of the numeral implies the presence of another, as in *puluq ‘10’ < *Siwa ‘9’ < *walu ‘8’ < *enem ‘6’ < *lima ‘5’ < *pitu ‘7.’ He also observed that the isoglosses marking the geographical distribution of these numerals form a nested pattern, describing them as occupying “geographical areas nested like matryoshka dolls” (Sagart 2013: 249). My term “matryoshka distribution” derives from this metaphor. Drawing on several lines of evidence that suggest these numerals are innovations not present in Proto-Austronesian, Sagart (2013) reconstructs the geographical expansion of Formosan languages as spreading counterclockwise from northwestern Taiwan, where these numerals are absent, to the eastern coast, where all six numerals are attested.

Thus, the existence of an implicational hierarchy among linguistic traits, coupled with the nested nature of their corresponding isoglosses, may provide significant insights into the reconstruction of language phylogeny and the processes of language spread through migration. The ensuing discussion in this section outlines the concept of matryoshka distribution and its implications for phylogenetic branching and the geographical expansion of languages, under the framework established by Igarashi (2021).

Figure 1 presents linguistic maps illustrating the hypothetical distribution of linguistic traits within a specified geographical area. The solid lines delineate the boundaries of this area, while the dotted lines represent the isoglosses. In these maps, the forms *x* and *a*, both of which have the same meaning *M1*, are distributed as depicted on the left of Figure 1; the forms *y* and *b* with the meaning *M2* are illustrated in the center of Figure 1; and the forms *z* and *c* with the meaning *M3* are shown on the right of Figure 1. Notably, the distribution of trait *a* entirely encompasses that of trait *b*, while the distribution of trait *b* completely encompasses that of trait *c*. When isoglosses 1–3 are overlaid onto a single linguistic map, they will appear nested without intersecting, as demonstrated in Figure 2. This pattern of distribution is referred to as the matryoshka distribution. More precisely, the matryoshka distribution can be defined as (1).

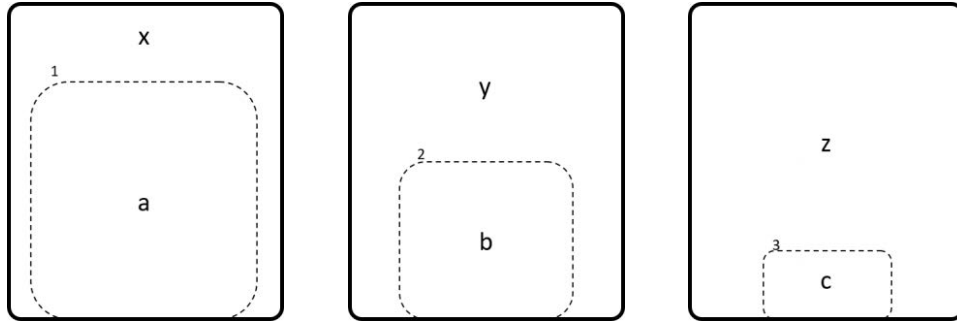


Figure 1: Traits a , b , and c showing a matryoshka distribution.

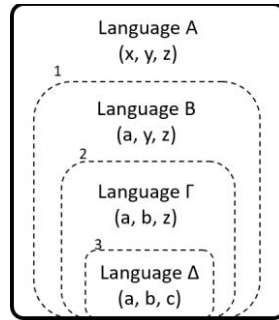


Figure 2: Matryoshka distribution.

Table 1: Matrix representing the presence/absence of traits a , b , and c .

	Trait a	Trait b	Trait c
Language A	0	0	0
Language B	1	0	0
Language Γ	1	1	0
Language Δ	1	1	1

(1) Matryoshka distribution

A geographical distribution of linguistic traits where the distribution of one trait is properly contained within that of another, such that the set of locations exhibiting the former trait forms a proper subset of those exhibiting the latter.

As illustrated in Figure 2, we designate a language that lacks traits a , b , and c as Language A , a language that possesses only trait a as Language B , a language that includes both traits a and b but omits trait c as Language Γ , and a language that has all three traits as Language Δ . When the presence of traits a , b , and c is represented as “1” and their absence as “0” in a matrix format,

it appears as shown in Table 1. The table demonstrates that the traits exhibiting matryoshka distribution form an implicational hierarchy. Specifically, any language that possesses trait a must also possess trait b , and any language that possesses trait b must also possess trait c ; however, not vice versa.

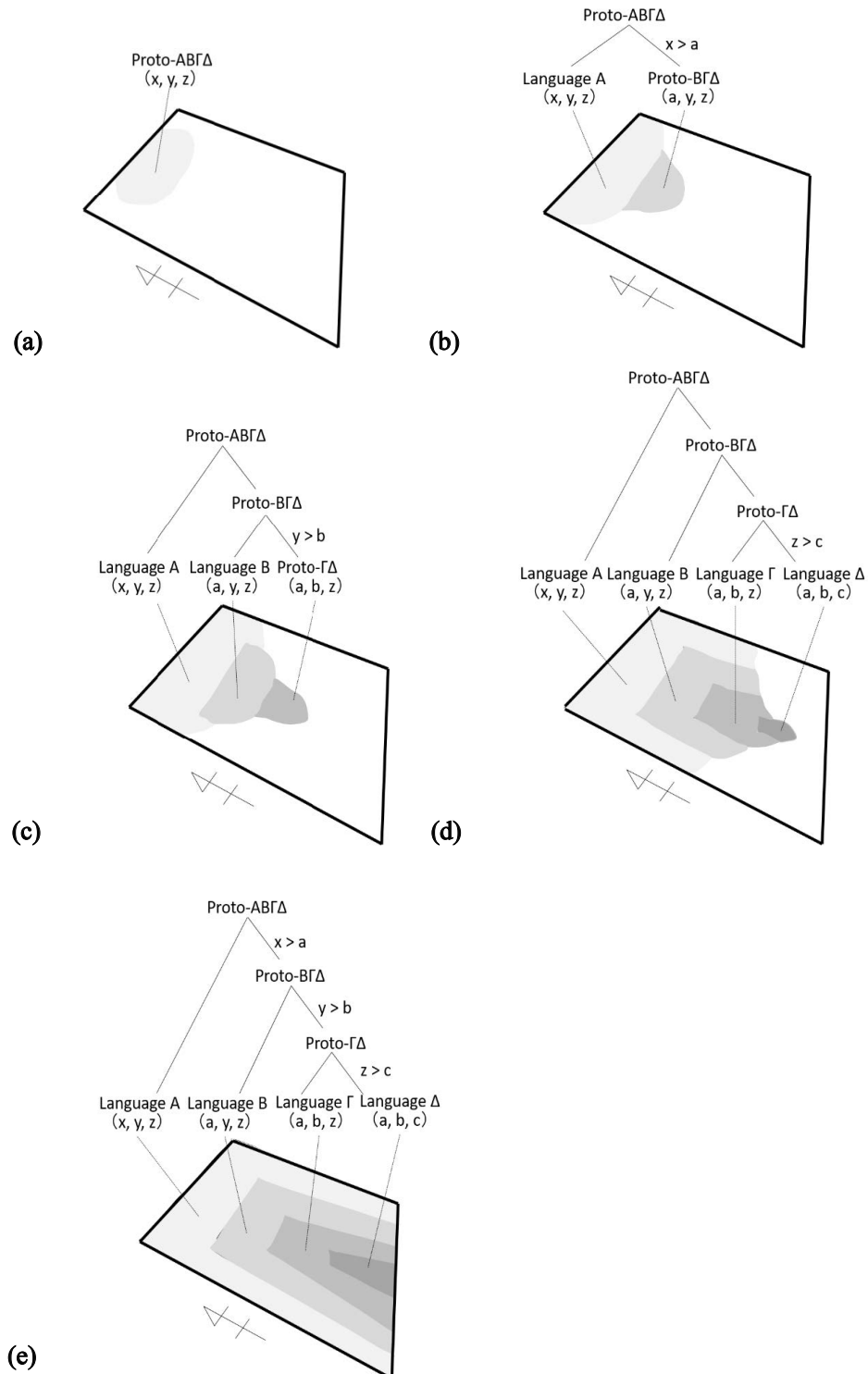


Figure 3: Phylogenetic branching and speaker migration of the four languages depicted in Figure 2.

As suggested by Sagart (2004), this type of distribution can be interpreted as the result of sequential innovations occurring in a nested manner. Thus, the matryoshka distribution can be regarded as a type of geographical distribution that reflects phylogenetic branching. The process by which languages diverge due to innovations occurring in a nested fashion is illustrated in Figure 3, using the four languages from Figure 2 as examples, in conjunction with the patterns of speaker group migration. The rectangles indicated by bold lines in Figure 3 represent the geographical areas where the four languages will ultimately be distributed. In the first stage, the common ancestor of the four languages (Proto-*ABIZ*) is located at the northern edge of the area (Figure 3(a)). This language possesses the archaic traits *x*, *y*, and *z*. In the second stage (Figure 3(b)), the group situated to the south that speaks Proto-*ABIZ* replaces trait *x* with trait *a* ($x > a$). At this juncture, Proto-*ABIZ* diverges into the languages that have experienced the innovation $x > a$ (Proto-*BIZ*) and the one that has not (Language *A*). The Proto-*BIZ* speakers subsequently migrate further south. In the third stage (Figure 3(c)), the southern group speaking Proto-*BIZ* replaces trait *y* with trait *b* ($y > b$). At this point, Proto-*BIZ* further diverges into the languages that have undergone the innovation $y > b$ (Proto-*IZ*) and the one that has not (Language *B*). The Proto-*IZ* speakers continue their migration southward. In the fourth stage (Figure 3(d)), the southern group that speaks Proto-*IZ* replaces trait *z* with trait *c* ($z > c$). At this stage, Proto-*IZ* diverges into the language that has experienced the innovation $z > c$ (Language *I*) and the one that has not (Language *A*). The groups speaking languages *A*, *B*, *I*, and *A* expand their geographical distributions, ultimately resulting in the present-day distribution (Figure 3(e)).

3. Matryoshka distribution in Eastern Japan

Igarashi (2017) was the first to propose the existence of the matryoshka distribution in the Japanese archipelago. Subsequent research (Igarashi 2018ab, 2021) has refined and expanded this initial proposal, demonstrating its presence in both Eastern and Southern Japan (Kyushu and the Ryukyu Islands), primarily through analyses of the *Linguistic Atlas of Japan* (NINJAL (ed.) 1966–74) and the *Grammar Atlas of Japanese Dialects* (NINJAL (ed.) 1989–2006).

Some linguistic traits that exhibit a matryoshka distribution in Eastern Japan align with patterns traditionally understood as East-West opposition contrasts, where different traits are found in Eastern and Western Japan (e.g., Kobayashi 1991). Previous research has also noted that the isoglosses separating traits between the East and West vary depending on the trait (e.g., Hikosaka 2002). However, the potential for these traits to exhibit a nested structure appears to have gone unnoticed. Moreover, traditional studies have generally attributed the present-day distribution of traits to diffusion processes, with the Kinki region—centered on the historical capital of Kyoto—considered the political and cultural hub from which such traits spread. Consequently, the East-West distribution has often been explained as the outcome of innovations originating in Western Japan,

which, for some unknown reason, did not extend to Eastern Japan (Onishi 2002). Additionally, there is a longstanding tradition of interpreting the East-West distribution in a philological context, where the emergence of a linguistic trait is equated with its first documented occurrence in written records. For example, the trait observed in Eastern Japan that first appeared in the literature during the early modern period is regarded as a regional innovation emerging during that era, which spread across Eastern Japan but did not reach Western Japan (Kobayashi 1991), again, for some unknown reason. This interpretation downplays the fact that Eastern Japanese varieties were not extensively documented in writing until the early modern period when the political and cultural center began shifting to the Kanto region. In any case, no existing interpretation has considered that some trait distributions in Eastern Japan reflect eastward migrations of speakers, which led to successive waves of linguistic innovations.

The observation of matryoshka distribution in Southern Japan supports Hattori's (1976a) hypothesis that the Japonic varieties spoken in Kyushu and the Ryukyu Islands constitute a monophyletic clade. This hypothesis has recently undergone rigorous examination by several researchers (Serafim 2003; Jarosz 2019; Karimata 2020; de Boer 2020; Igarashi 2021; Jarosz et al. 2022; Jarosz and Orlandi 2022; Igarashi 2023). This section aims to elucidate the matryoshka distribution in Eastern Japan, following the framework established by Igarashi (2021), and to connect this discussion to the subsequent analysis in Sections 4–5 regarding the phylogenetic position of Hachijo and the phylogenetic relationships between modern Eastern Japanese varieties and 8th-century Old East Japanese.

In the following discussion, I use a representative reflex, enclosed in slashes, as a label for reflexes that trace back to a single proto-form. For example, /kakasi/ 'scarecrow' serves as a representative of various cognates, such as [kakaɕi], [ka:ɕi], [kagaɕi], and [kagasi], all of which may derive from the proto-form *kakasi 'scarecrow' in Eastern Japan. I have chosen not to use reconstructed forms because reconstructing a proto-form for every word exceeds the scope of this study. In the notation, "LAJ-xxx" and "GAJ-xxx" refer to the map numbers in the *Linguistic Atlas of Japan* and the *Grammar Atlas of Japanese Dialects*, respectively.

As shown in Figure 4, five isoglosses can be identified in Eastern Japan, each forming part of a matryoshka-like distribution. These will be referred to, from the outermost to the innermost, as Line E1, Line E2, ... Line E5.

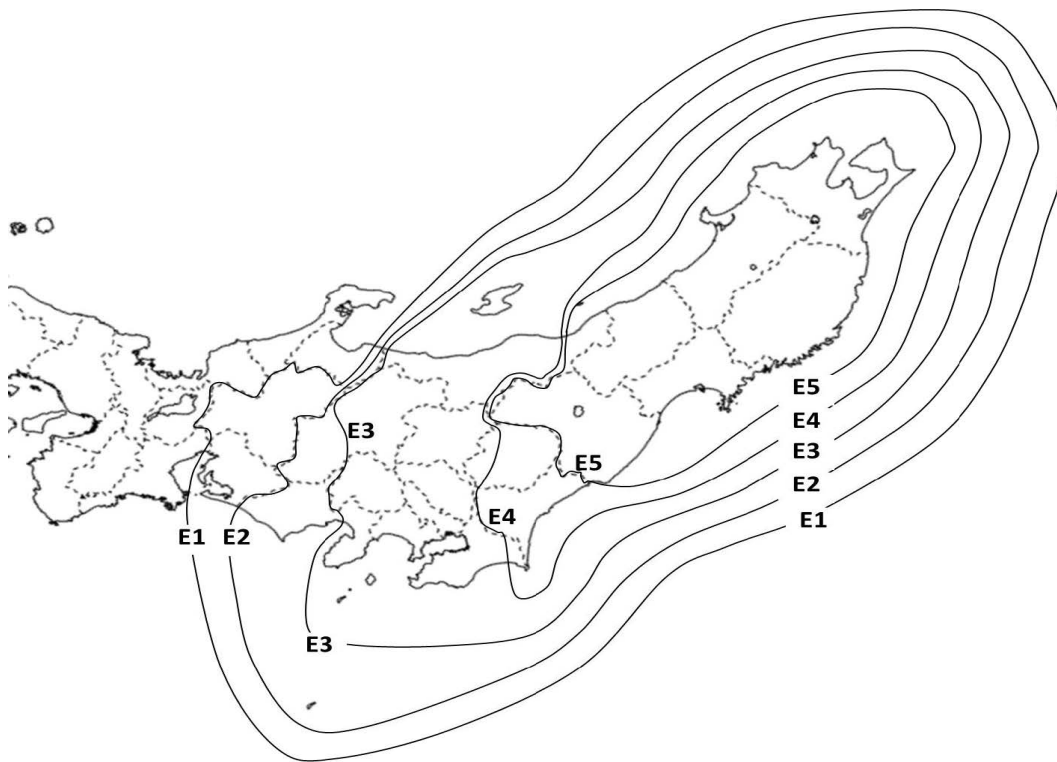


Figure 4: Matryoshka distribution in Eastern Japan.

Line E1 encompasses the entire region east of the western borders of Niigata, Gifu, and Aichi Prefectures. The linguistic traits marked by Line E1 include /sjow-/ ‘to carry a load on one’s back’ (LAJ-065) and /kakasi/ ‘scarecrow’ (LAJ-190). The Western Japanese form corresponding to /kakasi/ ‘scarecrow’ is /kagasi/ (LAJ-190), which is etymologically transparent as ‘something that causes sniffing,’ considering that scarecrows were originally objects used to protect crops from harmful animals by emitting smells. Thus, the Eastern Japanese form /kakasi/ can be seen as an innovation, with the onset of the second syllable devoiced. The reflexes [kagaçi] and [kagasi] in the Tohoku region are not derived from the Western Japanese /kagasi/, but rather result from further sound changes, specifically intervocalic voicing, in which the onset of the second syllable becomes voiced. Although absent in Aomori Prefecture, /koke-/ ‘scale’ (LAJ-217) can be considered part of this distribution. Additionally, /akui-/ ‘heel’ (LAJ-129) (<? *a-kupi- ‘heel’; cf. West Old Japanese *a-* ‘foot,’ *kupi₁-pi₁su* ‘heel’) (Jidaibetsu Kokugo Daijiten Jōdaihen Henshū Iinkai (ed.) 1967), though largely absent from most of the Kanto region, and /mama/ ‘cliff,’ which is not found in Gifu Prefecture (Shogakukan Kokugo Jiten Henshubu (ed.) 1989: 2280; Lawrence 2013), are also included. The isogloss between Aichi and Mie Prefectures occasionally extends into Mie, where /kakasi/ is attested as well.

Line E2 encompasses the entire region east of a line that is drawn along the eastern boundaries of Toyama, Gifu, and Aichi Prefectures, which directly adjoin the western boundaries of Niigata,

Nagano, and Shizuoka Prefectures. In Japanese dialectology, this isogloss is referred to as the Itoigawa-Hamanako Line. Hachijo Island is included within Line E2. The linguistic traits associated with Line E2 include /okkana-/ ‘frightening’ (LAJ-42) and /sjoppa-/ ‘salty’ (LAJ-39).

Line E3 encompasses the entire region east of a line that begins at the western border of Niigata Prefecture, extends southward near Lake Suwa in Nagano Prefecture, and further south to the Abe River in Shizuoka Prefecture—referred to in geography as the Itoigawa-Shizuoka Tectonic Line. While Hachijo Island lies outside Line E3, the other Izu Islands fall within it. Traits distributed within Line E3 include /janoasatte/ ‘the day after tomorrow’ (LAJ-285) and the negative verbal suffix /-nai/ (GAJ-72). Words beginning with /kana- ~ kama- ~ kaga-/ meaning ‘lizard’ (LAJ-224) also belong to this category. Another possible feature is /makime/ ‘whorl of hair’ (LAJ-102), although it is absent in much of Nagano, the Joetsu region of Niigata, and Yamagata Prefectures.

Line E4 encompasses the entire region north of the boundary between the Joetsu and Chuetsu regions of Niigata Prefecture, the western border of Fukushima Prefecture, and the boundary between Ibaraki and Chiba Prefectures. The northern and eastern parts of Tochigi Prefecture are located within this boundary. Traits associated with Line E4 include the voicing of plosives between vowels, particularly the voicing of alveolar plosives as seen in /adama/ ‘head’ (LAJ-101). However, this trait may be better interpreted as an archaic retention rather than an innovation. Another trait marked by this isogloss, though absent in the northern Tohoku region, is /sitaki/ ‘spit’ (LAJ-118).

Line E5 encompasses the entire region north of the boundary between the Joetsu and Chuetsu regions of Niigata Prefecture and the boundary between Fukushima Prefecture and northern Kanto. Traits associated with this line include /konoge/ ‘eyebrow’ (LAJ-111).

Based on traits exhibiting the matryoshka distribution, Igarashi (2021) proposed the phylogenetic tree shown in Figure 5, which posits the “Southern” and “Macro-Eastern” branches as the first-order clade from Proto-Japonic. The “Other” category in Figure 5 includes varieties spoken in the Kinki, Shikoku, and Chugoku regions. Since no matryoshka distribution is observed in this area, these varieties are left unclassified in the phylogenetic framework ⁽¹⁾. The Southern branch comprises

(1) However, as noted in Igarashi (2021: footnote 12), /naba/ ‘mushroom’ is not limited to Kyushu and the Ryukyu Islands; it is also found in Hiroshima, Ehime, Kochi, and Yamaguchi Prefectures, as well as in the Iwami region of Shimane Prefecture (LAJ-245). Additionally, /tutu ~ tudu/ ‘saliva’ is present in the Iwami region of Shimane Prefecture and Yamaguchi Prefecture, as well as in Kyushu and the Ryukyu Islands (LAJ-118). By definition, this distribution exemplifies a matryoshka pattern. I excluded /tutu ~ tudu/ in Igarashi (2021) because it may be a reduplication of *tu ‘saliva’ that likely arose in parallel and independently, making it unsuitable for phylogenetic classification. I excluded /naba/ ‘mushroom’ because it is likely to be an archaic form in Proto-Japonic and thus not a shared innovation. However, within the context of the discussion in Sections 4–5 of this paper, it is also conceivable that /naba/ and /tutu ~ tudu/ reflect the substratum preceding the replacement of varieties in the eastern Sanyo and western Shikoku regions by the West Old Japanese Branch. In particular, the etymological opacity of /naba/ compared to the transparency of West Old Japanese *take*₂ ‘mushroom’ (*ta ‘paddy field’ + *kai ‘hair’ (Martin 1987)), along with the current localized distribution of /take/ ‘mushroom’ in the Kinki region, suggests that /take/ represents a West Old Japanese innovation while /naba/ retains its Proto-Japonic origin. If this hypothesis holds, it is possible to infer that the homeland of Proto-Japonic lies within the area encompassing northern Kyushu, the Sanyo, and Shikoku.

varieties labeled F through J, spoken in Kyushu and the Ryukyu Islands, although these varieties are not discussed in detail in this paper.

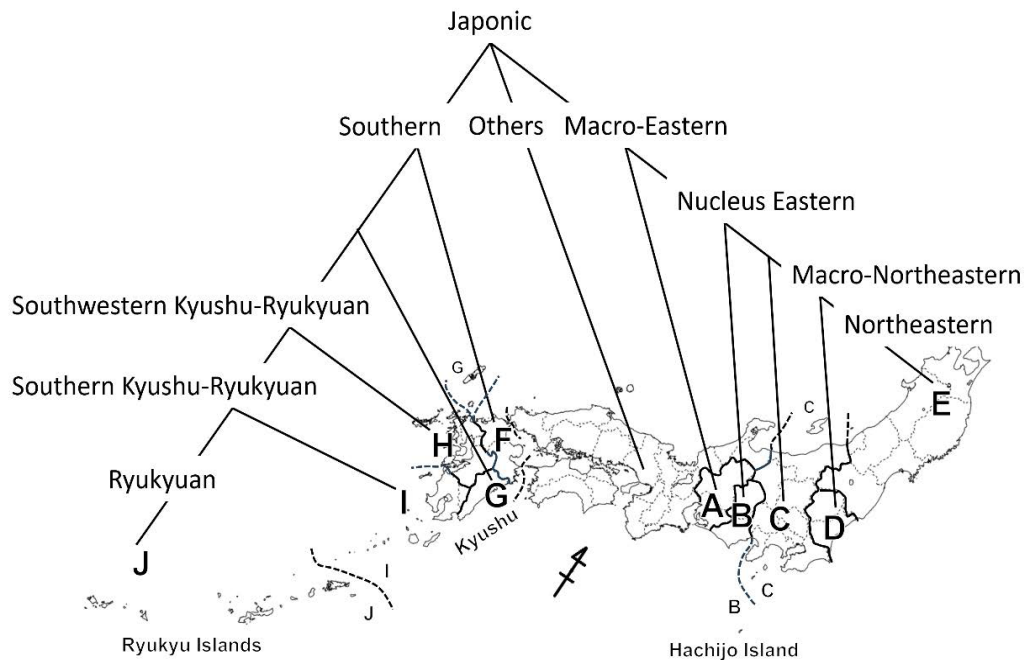


Figure 5: Phylogenetic tree proposed based on matryoshka distribution (Igarashi 2021).

The Macro-Eastern branch encompasses varieties distributed east of Niigata, Gifu, and Aichi Prefectures, corresponding to the “Eastern Dialects” as defined by Tojo (1953). Within this branch exists a clade referred to as the “Nucleus Eastern” clade, which includes varieties located east of the Itoigawa-Hamanako Line. This clade aligns with the “Eastern Mainland Dialects” as categorized by Tsuzuku (1949). Hachijo is not considered the first divergence from Proto-Japonic; instead, it is classified among the varieties within the Nucleus Eastern clade of the Macro-Eastern branch.

Examining the phylogenetic tree’s topology alongside the geographical distribution of these varieties allows us to infer two primary migration routes (Figure 6). The first route involves speakers migrating eastward from Aichi and Gifu Prefectures to western Shizuoka Prefecture, then likely moving north through Yamanashi and Nagano Prefectures⁽²⁾, before continuing east into the Kanto region and finally progressing north to the Tohoku region. The second route consists of speakers departing from northern Kyushu, moving westward through western Kyushu, then

(2) This migration route from western Shizuoka Prefecture northward to Yamanashi and Nagano Prefectures, though not apparent in Figure 4, is inferred from the differing distributions of /janoasatte/ ‘the day after tomorrow’ and the negative verbal suffix /-nai/, both discussed within the scope of Line E3 in this paper. While the isoglosses for these traits overlap in Shizuoka and Nagano Prefectures, they diverge in Yamanashi Prefecture, where /-nai/ is confined to the eastern region. Based on these distributions, I propose that the innovation of using /-nai/ solely as a verbal negation marker took place in northern Nagano after the introduction of /janoasatte/ ‘the day after tomorrow.’

southward to southern Kyushu, and ultimately continuing south to the Ryukyu Islands. Additionally, one can posit that the *Urheimat* (homeland) of Proto-Japonic is likely situated between northern Kyushu and the regions of Gifu and Aichi Prefectures. At a minimum, this homeland could not have been located in the Ryukyu Islands or in Eastern Japan.

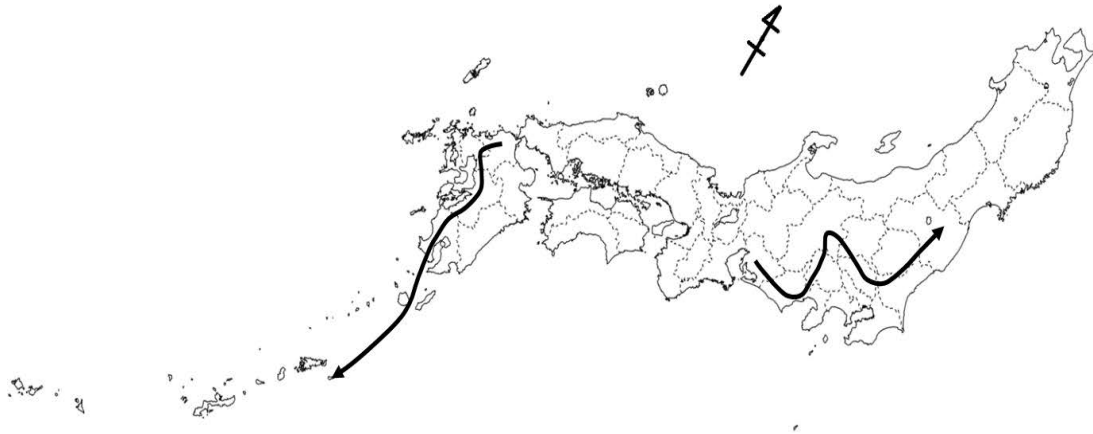


Figure 6: Proposed migration routes of Japonic speakers inferred from matryoshka distributions.

Returning to the phylogenetic position of Hachijo, the proposed phylogenetic tree indicates that Hachijo is one of the varieties within the Nucleus Eastern clade. Hachijo shares specific traits with other Macro-Eastern varieties, including /kakasi/ ‘scarecrow,’ /koke-/ ‘scale,’ /akui-/ ‘heel,’ /mama/ ‘cliff,’ /okkana-/ ‘frightening,’ and /sjoppa-/ ‘salty,’ which are distributed between the E1 and E3 lines. However, it lacks certain traits such as /janoasatte/ ‘the day after tomorrow,’ the negative verb suffix /-nai/, /makime/ ‘whorl of hair,’ the voiced realization of intervocalic stops, /sitaki/ ‘saliva,’ and /konoge/ ‘eyebrow,’ which are found within the E3 line. In this regard, Hachijo exhibits similarities with the varieties spoken in western Shizuoka and southern Nagano Prefectures.

Explaining this distribution solely through diffusion presents several challenges. According to the diffusion hypothesis, one would need to assume that borrowing occurred from varieties in the region between the E1 and E3 lines (i.e., Gifu, Aichi, western Shizuoka, and southern Nagano), while no borrowing took place from varieties within the E3 line (i.e., the northern Izu Islands, eastern Shizuoka, northern Nagano, Niigata, the Kanto region, and the Tohoku region). To support this hypothesis, one would need to account for the absence of borrowing from the geographically proximate Izu Islands or, notably, from the Kanto region, which gradually gained cultural and political prestige following the establishment of the Tokugawa Shogunate in the 17th century. Therefore, it is more plausible to reject the diffusion hypothesis and interpret the observed distribution of relevant traits as a result of Hachijo’s branching off from the Nucleus Eastern clade before the innovations within the E3 line occurred.

4. Phylogenetic position of Hachijo and modern Eastern Japanese

Since 2017, I have argued that Hachijo forms a monophyletic clade with modern Eastern Japanese based on the matryoshka distribution (Igarashi 2017, 2018ab, 2022). Independently, de Boer (2020) also proposed a phylogenetic tree in which Hachijo belongs to the East Old Japanese (EOJ) branch, along with other modern Eastern Japanese varieties. While this interpretation has gained some attention, it remains a minority view. The prevailing consensus among mainstream researchers is that Hachijo constitutes one of three sister branches within the Japonic family—namely, Ryukyuan, Japanese, and Hachijo (Hattori 1968; Kupchik 2011), with all modern Eastern Japanese varieties classified under the Japanese branch.

The prevailing hypothesis that Hachijo represents the earliest branch of Proto-Japonic is grounded in the similarities between modern Hachijo and 8th-century Eastern Japanese. It was not until the 8th century that Japanese was recorded in writing in sufficient quantity and quality. The Japanese of the 8th century is referred to as Old Japanese (OJ). OJ largely reflects the variety spoken in the Yamato region (present-day Nara Prefecture), the political center of Japan at the time. However, although scarce, some records also document varieties spoken east of present-day Shizuoka and Nagano Prefectures. To distinguish between these, the former is referred to as West Old Japanese (WOJ) and the latter as EOJ. The dominant view posits that EOJ's descendants were replaced by the WOJ branch, leading to their extinction in Mainland Japan and leaving no modern descendants. However, Hachijo, spoken on isolated islands 278 km from Tokyo, is frequently regarded as the sole surviving descendant of EOJ because of their shared linguistic traits. This has led researchers to consider Hachijo the sole surviving descendant of EOJ (Kindaichi 1967; Hattori 1968; Kupchik 2011). This section specifically aims to challenge this prevailing view.

The crucial basis for the claim that Hachijo is a descendant of EOJ is the shared sound changes, namely, the change in which the Proto-Japonic diphthong **ia* changes to *a* (Hattori 1968). The evidence for this shared innovation is, however, found primarily in verbal morphology.

Additional evidence supports that Hachijo and EOJ belong to a different branch from WOJ: it is the lack of Mid Vowel Raising (MVR) occurring in WOJ, where the mid vowels of Proto-Japonic shift to high vowels (**e > i*, **o > u*) (Hattori 1976b, 1978ab, 1979; Frellesvig and Whitman 2004; Pellard 2008, 2015). It is generally accepted that modern Mainland Japanese underwent MVR. However, evidence for the absence of MVR in Hachijo is primarily found in verbal and adjectival suffixes (Igarashi 2021).

The question of whether Hachijo is the sole surviving descendant of EOJ can be divided into two sub-questions (2):

- (2) a. Are there other surviving descendants of EOJ besides Hachijo?
- b. What constitutes evidence of the replacement of EOJ by the WOJ branch, ultimately

leading to is extinction?

Regarding the first question (2a), two modern Eastern Japanese varieties have often been considered similar to EOJ: one spoken in Akiyama Village, located on the border between Niigata and Nagano Prefectures, and the other spoken on Toshima Island in the northern Izu archipelago (Kindaichi 1967). The similarities are found in the distinction between adnominal and predicative adverbial suffixes in both the Akiyama and Toshima varieties, as well as in the distinction between adnominal and predicative verbal suffixes in the Akiyama variety. Specifically, the adnominal adverbial suffix is *-ke*, and the adnominal verbal suffix is *-o*, both of which are shared with Hachijo and EOJ. However, these features are retentions from Proto-Japonic (Pellard 2008), and the shared retention does not indicate that the Akiyama and Toshima varieties form a clade with EOJ. Nevertheless, the presence of *-ke* and *-o* in Akiyama, Toshima, Hachijo, and EOJ suggests that these varieties did not undergo MVR. In contrast, the adnominal adverbial suffix in WOJ is *-ki*, and the adnominal verbal suffix is *-u* due to the shifts **e > i* and **o > u*. The absence of MVR, although the evidence is limited to adjectival and verbal morphology, suggests that the Akiyama and Toshima varieties are not part of the WOJ branch. In other words, these two Eastern Japanese varieties, along with Hachijo, can be considered surviving descendants of the non-WOJ branch (Igarashi 2021).

Furthermore, although shared sound changes have not been confirmed, evidence points to modern Eastern Japanese varieties sharing lexical and morphological innovations with EOJ. One such example is the word *mama* ‘cliff,’ attested in EOJ but absent in WOJ and modern Western Japanese. According to Lawrence (2013), it is found across modern Eastern Japan, east of Aichi Prefecture, including Hachijo Island, within the isogloss E2 line discussed in Section 3. If this word represents a lexical innovation absent in Proto-Japonic, the hypothesis that modern Eastern Japanese varieties, including Hachijo, belong to the EOJ branch would be strengthened.

The second piece of evidence relates to the negative verbal suffix *-nai*. This suffix is found only in Eastern Japan, east of northern Nagano Prefecture and Yamanashi Prefecture, within the isogloss E3 line discussed in Section 3. In the Japanese archipelago west of this area, including the Ryukyu Islands, the suffix *-nu*, derived from the adnominal form of the WOJ negative suffix *-nu*, is used. One view holds that the Eastern Japanese negative suffix *-nai* originates from the EOJ negative suffix *-nape*. Indeed, de Boer (2020) supports this view, interpreting it as evidence that modern Eastern Japanese belongs to the EOJ branch. The predicative form of this EOJ verbal suffix is *-napu*, and a suffix widely believed to derive from this form, *-noo*, is found only in areas near the border between Yamanashi and Shizuoka Prefectures, such as Narada in Yamanashi and Ikawa in Shizuoka (GAJ-72). Since EOJ *-nape/-napu* is considered an innovation (Kupchik 2011), if the modern Eastern Japanese negative suffix derives from it, this would provide further evidence that modern Eastern Japanese belongs to the EOJ branch.

One might argue that evidence linking modern Eastern Japanese to the EOJ branch is too scarce to justify its classification as part of the EOJ branch. However, if we maintain that Hachijo is the sole exception belonging to the EOJ branch, such an objection would not hold because the evidence for Hachijo's affiliation is equally limited, with the key evidence primarily lying in the morphology of verbs and adjectives. As Hirako and Pellard (2013) demonstrated, modern Hachijo also exhibits innovations shared with the WOJ branch. This hybrid nature of Hachijo led Pellard (2015) to speculate on its phylogenetic position as the first branching of Proto-Japonic.

However, Hattori (1976a) argues that the scarcity of shared sound changes between Hachijo and EOJ is due to the strong influence of WOJ varieties, while still maintaining that Hachijo belongs to the EOJ branch. If this reasoning is valid, one could similarly argue that modern Eastern Japanese, although heavily influenced by WOJ varieties, still belongs to the EOJ branch. In this case, Hachijo would no longer be the sole surviving descendant of EOJ but would be one of several surviving descendants, along with other modern Eastern Japanese varieties.

This brings us to the second question (2b). What constitutes evidence of the replacement of EOJ by the WOJ branch, ultimately leading to its extinction? In Igarashi (2021), I discussed this issue by referring to the varieties of Hachijo, Akiyama, and Toshima as follows. Here, the term “central traits” refers to traits that define the WOJ branch, and “central languages” refer to varieties belonging to the WOJ branch:

Is the coexistence of central and non-central traits a result of replacement by central languages? Or did no language replacement occur, with only strong influence from central languages? Despite the importance of this question in constructing the phylogenetic tree of Japonic languages, it seems to have received little serious consideration. In my view, previous research suffers from the problem of asserting whether replacement occurred without clearly defining what constitutes evidence of language replacement. (Igarashi 2021: 33–34).

In Igarashi (2021), I adopted an extreme position, asserting that language replacement by the WOJ did not occur in Eastern Japan (and Southern Japan). This stance is not based on evidence demonstrating the absence of replacement; rather, it reflects a commitment to logical consistency. I contend that until a clear definition of what constitutes replacement is established, it is inappropriate to classify one variety as a descendant of EOJ while considering another to have been replaced by WOJ. In maintaining scholarly rigor, one can only take one of two positions regarding Eastern Japan: either all varieties are classified within the EOJ branch or all varieties belong to the WOJ branch, with EOJ serving as their substratum.

Recently, Baudel (2023ab) has initiated a substantive discussion on the possibility of language replacement on Hachijo Island, a topic that warrants close attention. He provides independent

evidence indicating the absence of sound changes characteristic of EOJ—namely, $*ai > a$, $*oi > u$, and $*ui > u$ —in Hachijo. Furthermore, the innovations that align with EOJ are confined to specific morphemes and lexemes. In contrast, most of the vocabulary in Hachijo shares innovations with WOJ. Based on this evidence, Baudel (2023ab) argues that Hachijo is not a descendant of EOJ; rather, EOJ serves as the substratum for Hachijo.

It may be premature to definitively conclude that modern Hachijo belongs to the WOJ rather than the EOJ branch. However, Baudel (2023ab) demonstrates that the claim of Hachijo as the sole surviving descendant of EOJ is insufficiently supported, thereby liberating the study of Japonic languages from the confines of the conventional perspective on Hachijo's unique phylogenetic position. This shift in viewpoint is important, as it allows modern Eastern Japanese to be regarded on equal footing with Hachijo in relation to EOJ, rather than treating Hachijo as a singular case. By extending the substratum hypothesis—where the replacement by the WOJ branch occurred in Hachijo Island, with EOJ serving as the substratum of modern Hachijo—it can be assumed that a similar replacement also took place in Eastern Japan. Thus, modern Eastern Japanese varieties can also be positioned within the WOJ branch, with EOJ as their substratum. As discussed in the following section, moving beyond the notion of Hachijo's exceptional status provides new insights into the linguistic history of Eastern Japan.

5. The role of the matryoshka distribution in Eastern Japan's language history

If the EOJ traits observed in Eastern Japan are merely remnants of a substratum Japonic language spoken before being replaced by the WOJ branch, does the phylogenetic tree proposed by Igarashi (2021) (Figure 5) still hold significance? I argue that it does. It is crucial to recognize that the matryoshka distribution not only offers insights into linguistic phylogenies but also reflects patterns of speaker migration. Traits considered likely to be innovations unique to Eastern Japanese follow an implicational hierarchy and display a geographically nested pattern, suggesting that these innovations accumulated progressively from west to east and from east to north. This implies that the matryoshka distribution in Eastern Japan traces the migration routes of speakers of the hypothetical substratum language of modern Eastern Japanese, introducing successive linguistic innovations along the way. In this sense, the tree in Figure 5 illustrates the relationships among Japonic languages before the eventual replacement by the WOJ branch.

Pellard (2015) estimates that the divergence of Proto-Japonic occurred during the first century CE—at the end of the Bronze Age Yayoi period, just before the Kofun period (c. mid-3rd century to 7th century CE), a time characterized by the consolidation of political authority. If this estimation is valid, the matryoshka distribution in Eastern Japan may be linked to human migration that began in this era. It would be worthwhile to explore the potential relationship between these demographic shifts and the expansion of central political power into Eastern Japan, particularly the region's

submission to the Yamato Kingship.

One might argue that the nested distribution of linguistic traits in Eastern Japan reflects the replacement of EOJ traits by those of the WOJ branch, thus the estimated migration route corresponding to the movement of WOJ speakers rather than EOJ speakers. However, if the distribution of traits specific to Eastern Japan were the result of language replacement, it would likely be more irregular and fragmented, rather than exhibiting the orderly, nested structure observed in the matryoshka distribution. It is true that non-WOJ archaic traits—specifically the retention of proto-Japonic mid vowels—are found only in geographically isolated areas, such as Hachijo Island, Akiyama Village, and Toshima Island. However, the linguistic traits identified by Igarashi (2021) form an implicational hierarchy and a geographically nested structure, making it challenging to attribute them solely to the diffusion of WOJ traits. Therefore, it is more plausible to interpret the matryoshka pattern as a remnant of the distribution of traits in ancient Eastern Japan before the replacement by the WOJ branch.

In summary, under the substratum hypothesis, the matryoshka distribution can be interpreted as reflecting the migration history of Japonic speakers, arguably since the transitional period between the Yayoi and Kofun periods, with the corresponding phylogenetic tree representing Japonic languages from that era until the replacement by the WOJ branch. Substratum traits that persisted after this replacement are not only found on present-day Hachijo Island but throughout Eastern Japan, offering valuable insights into the phylogeny of ancient Japonic languages and patterns of speaker migration.

6. Conclusion

This study explored how the matryoshka distribution observed in Eastern Japan offers insights into the phylogeny of Eastern Japanese and the migration patterns of their speakers. Specifically, by extending the substratum hypothesis—which posits that modern Hachijo, despite retaining EOJ traits, belongs to the WOJ branch, with EOJ functioning as the substratum—I proposed that all modern Eastern Japanese varieties have EOJ as their substratum. Under this hypothesis, the matryoshka distribution in Eastern Japan reflects the phylogeny of Japonic languages and the migration of their speakers during the period between the divergence of Proto-Japonic and the replacement by WOJ.

This interpretation, which is enabled by moving away from the view that Hachijo occupies a unique phylogenetic position, can similarly be extended to the matryoshka distribution in Southern Japan (Igarashi 2021). Increasing evidence suggests that modern Kyushu varieties share phonological and lexical innovations with Ryukyuan; however, the phylogenetic position of Kyushu varieties remains contentious. While some researchers argue that modern Kyushu varieties and Ryukyuan form a monophyletic group (Hattori 1976a; Igarashi 2021, 2023; de Boer 2020),

others contend that Ryukyuan is the substratum of modern Kyushu varieties (Jarosz 2019; Pellard 2021; Jarosz et al. 2022; Jarosz and Orlandi 2022). The evidence for shared sound changes between modern Kyushu varieties and Ryukyuan is largely confined to verbal morphology, while the majority of the vocabulary in modern Kyushu varieties exhibits sound changes characteristic of the WOJ branch (Igarashi 2021, 2023; Pellard 2021)—a situation closely resembling that of Hachijo, as described by Baudel (2023ab). Therefore, the substratum theory appears more applicable to Kyushu varieties.

The hypothesis that modern Kyushu varieties possess a Ryukyuan substratum aligns with Pellard's (2015) widely accepted phylogenetic tree, which positions Kyushu varieties within the Japanese branch alongside other Mainland Japanese varieties. Accepting the substratum hypothesis allows us to interpret the matryoshka distribution in Southern Japan, much like that in Eastern Japan, as a reflection of the phylogeny of Japonic varieties and the migration routes of their speakers during the period between the divergence of Proto-Japonic and the replacement by WOJ in Kyushu. This proposed migration route corresponds with Pellard's (2015) hypothesis in his linguistic-archaeological study, which suggested that Proto-Ryukyuan speakers remained in Kyushu until the 10th or 11th century. Pellard (2015) initially argued that no traces of Proto-Ryukyuan persisted in present-day Kyushu. However, in response to Igarashi (2018a, 2021), who identified linguistic traits uniquely shared by modern Kyushu and Ryukyuan varieties, along with evidence of a matryoshka distribution in Southern Japan, Pellard (2021) revised his earlier position, acknowledging that these shared traits likely reflect a Ryukyuan substratum in ancient Kyushu. This shift in perspective, alongside my own evolving recognition of the substratum hypothesis for Kyushu, demonstrates how examining the matryoshka distribution has contributed to advancing our understanding of the history of Japonic varieties.

This study, which posits that the matryoshka distribution reflects the substratum Japonic that was present before the WOJ branch replaced many varieties in Mainland Japan, highlights the importance of future research in elucidating the substratum Japonic as a key to understanding the diversity of present-day Japonic varieties. The traditional diffusion-based approach in Japanese dialectology, which attributes linguistic diversity to borrowing through contact between different language communities, remains crucial for explaining the diversification that occurred after the replacement by the WOJ branch. However, certain traits that cannot be accounted for by diffusion—remnants of the substratum—have clearly persisted to the present day. These traits offer valuable insights into the history of Japonic from the transitional period between the Yayoi and Kofun periods, culminating in the eventual consolidation of political authority. In conjunction with linguistic-archaeological studies, such as those by Pellard (2015) and Jarosz et al. (2022) for Southern Japan, further exploration of substratum Japonic will deepen our understanding of the ancient history of Japonic, which likely arrived in the Japanese archipelago with the spread of wet-

rice agriculture during the Yayoi period (Hudson et al. 2020).

IGARASHI Yosuke

National Institute for Japanese Language and Linguistics Professor

Acknowledgments

This research is based on work carried out under my cross-appointment at Tokyo University of Foreign Studies during the 2022–2023 academic year. It was also supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP24K00070 and the NINJAL project “Empirical Study on the Intonational Diversity in Japanese and Ryukyuan Dialects.”

References

- Abe, Seiya (2013) Nihongo no “nanboku-gata hōgen bunpu” kenkyū no tame no gengo chizu ichiran [A list of language maps for the study of the north-south dialect distribution of Japanese]. *The Annual Collection of Essays and Studies, Faculty of Letters, Gakushuin University*: 60, 21–79.
- Baudel, Étienne (2023a) Is Hachijō a living descendant of Eastern Old Japanese? Talk presented at the 17th International Conference of the European Association for Japanese Studies. Ghent, Belgium.
- Baudel, Étienne (2023b) Reconsidering the classification of Hachijō: A glimpse from historical phonology. Talk presented at the 26th International Conference on Historical Linguistics. Heidelberg, Germany.
- de Boer, Elisabeth (2020) The classification of the Japonic languages. Matine Robbeets and Alexander Savelyev (eds.) *The Oxford guide to the Transeurasian languages*, 40–58. New York: Oxford University Press.
- Frellesvig, Bjarke and John Whitman (2004) The vowels of Proto-Japanese. *Japanese Language and Literature* 38(2), 281–299.
- Hattori, Shiro (1968) Hachijōjima hōgen ni tsuite [On the dialect of Hachijo Island]. *Kotoba no Uchū* 3(11): 92–5. (Reprinted in Hattori (author) & Uwano (commentary) (2018), 39–43.)
- Hattori, Shiro (1976a) Ryūkyū hōgen to hondō hōgen [Ryukyuan dialects and Mainland dialects]. Iha Fuyū Seitan Hyakunen Kinenkai (ed.) *Okinawa gaku no reimei: Iha Fuyū sensei hyakunen kinen-shi* [The dawn of Okinawan studies: Commemorative volume for the 100th anniversary of the birth of Fuyū Iha], 7–55. Okinawa: Okinawa Bunka Kyokai. (Reprinted in Hattori (author) & Uwano (commentary) (2018), 45–81.)
- Hattori, Shiro (1976b) Nihon sogo no boin taikei [The vowel system of Proto-Japanese]. *Asahi Shinbun*, evening edition, June 22, 1976. (Reprinted in Hattori (author) & Uwano (commentary) (2018), 83–85.)

- Hattori, Shiro (1978a) Nihon sogo ni tsuite (8) [On Proto-Japanese (8)]. *Gekkan Gengo* 7(10): 94–103. (Reprinted in Hattori (author) & Uwano (commentary) (2018), 170–182.)
- Hattori, Shiro (1978b) Nihon sogo ni tsuite (9) [On Proto-Japanese (9)]. *Gekkan Gengo* 7(11): 108–117. (Reprinted in Hattori (author) & Uwano (commentary) (2018), 183–192.)
- Hattori, Shiro (1979) Nihon sogo ni tsuite (19) [On Proto-Japanese (19)]. *Gekkan Gengo* 8(9): 108–118. (Reprinted in Hattori (author) & Uwano (commentary) (2018), 305–319.)
- Hattori, Shiro (author) and Zendo Uwano (commentary) (2018) *Nihon sogo no saiken* [Reconstruction of Proto-Japanese]. Tokyo: Iwanami Shoten.
- Hikosaka, Yoshinori (2002) Tōzai hōgen no setten [The contact point between Eastern and Western dialects]. In: Yasuo Kitahara (supervision) and Yoshio Ebata (eds.), *Asakura Nihongo kōza 10: Hōgen* [Asakura Japanese language series 10: Dialects], 141–160. Tokyo: Asakura Shoten.
- Hirako, Tatsuya and Thomas Pellard (2013) Hachijōgo no furusa to atarashisa [The antiquity and novelty of the Hachijō language]. In: Nobuko Kibe (ed.), *Hachijō hōgen chōsa hōkokusho: shōmetsu kiki hōgen no chōsa hozon no tame no sōgōteki kenkyū* [Report on the Hachijo dialect: Comprehensive research for the survey and preservation of endangered dialects], 47–67. Tokyo: NINJAL.
- Hudson, Mark J., Shigeki Nakagome, and John B. Whitman (2020) The evolving Japanese: The dual structure hypothesis at 30. *Evolutionary Human Sciences* 2: e6.
- Shogakukan Kokugo Jiten Henshubu (ed.) (1989) *Nihon hōgen daijiten* [Comprehensive dictionary of Japanese dialects], Vols. 1–3. Tokyo: Shogakukan.
- Igarashi, Yosuke (2017) Nihongo shohōgen no keitō bunrui: Minami Nihongoha (Ryūkyū o fukumu) to Higashi Nihongoha (Hachijō o fukumu) no teishō [Phylogenetic classification of Japanese dialects using cladistics based on common innovations: Proposal of Southern Japanese Branch (including Ryukyuan) and Eastern Japanese Branch (including Hachijo)]. Paper presented in the 1st meeting for review and consultation on the phylogenetic relationships of Japanese dialects. Tokyo: NINJAL.
- Igarashi, Yosuke (2018a) Kyūshūgo to Ryūkyūgo kara naru “Minami Nihongoha” wa seiritsu suru ka?: Kyōtsū kaishin to shite no Kyūshū-Ryūkyū dōgengo ni shōten o oita keitōju kōchiku [Is the “Southern Japanese Branch” comprised of Kyushu and Ryukyuan languages established?: Phylogenetic tree construction focused on Kyushu and Ryukyuan cognates as shared innovations]. A paper presented at Kagoshima Daigaku kōkai kyōdō shinpojiumu “Kyūshū-Okinawa ni okeru kotoba to hito mono no idō” [Kagoshima University public symposium “The movement of language, people, and things in Kyushu and Okinawa”]. Kagoshima: Kagoshima University.
- Igarashi, Yosuke (2018b) Bunkigakuteki shuhō ni motozuita Nihongo-Ryūkyūgo shohōgen no keitō bunrui no kokoromi [Attempt at the phylogenetic classification of Japanese and Ryukyuan

- dialects based on cladistics]. A paper presented at Shinpojiumu “Fīrudo to bunken kara miru Nichiryū shogo no keitō to rekishi” [Symposium on the phylogeny and history of Japanese and Ryukyuan languages viewed from fieldwork and literature]. Tokyo: NINJAL.
- Igarashi, Yosuke (2021) Bunkigakuteki shuhō ni motozuita Nichiryū shogo no keitō bunrui no kokoromi [An attempt at the phylogenetic classification of the Japonic Languages based on cladistic methods]. In: Hayashi Yuka, Kinuhata Tomohide, Kibe Nobuko (eds.) *Fīrudo to bunken kara miru Nichiryū shogo no keitō to rekishi* [The phylogeny and history of Japonic languages viewed from fieldwork and literature], 17–51. Tokyo: Kaitakusha.
- Igarashi, Yosuke (2023) Gendai Kyūshū shohōgen ni okeru kyū kami nidan dōshi no “shimo nidan-ka” wa Kyūshū-Ryūkyū sogo kasetsu o shiji suru ka? [Does “shimo-nidanka” in upper bigrade verbs in modern Kyushu dialects support the Proto-Kyushu-Ryukyuan hypothesis?]. *Journal of the Linguistic Society of Japan* 163: 1–31.
- Jarosz, Aleksandra (2019) Non-core vocabulary cognates in Ryukyuan and Kyushu. *Proceedings of International Symposium Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia*: 8–29.
- Jarosz, Aleksandra, Martine Robbeets, Ricardo Fernandes, Hiroto Takamiya, Akito Shinzato, Naoko Nakamura, Maria Shinoto, and Mark Hudson (2022) Demography, trade, and state power: A tripartite model of medieval farming/ language dispersals in the Ryukyu Islands. *Evolutionary Human Sciences* 4, E4: 1–22.
- Jarosz, Aleksandra and Georg Orlandi (2022) Common Kyushu-Ryukyuan substratum in maritime vocabulary: A preliminary analysis. *Journal of Language Relationship* 20(4), 299–334.
- Jidaibetsu Kokugo Daijiten Jōdaihen Henshū Inkaishi (ed.) (1967) *Jidaibetsu kokugo daijiten: Jōdai hen* [Era-based Japanese dictionary: Ancient edition]. Tokyo: Sanseido.
- Karimata, Shigehisa (2020) Ryūkyūgo no kigen wa dono yō ni katarareta ka: Ryūkyūgo to Kyūshū hōgen no kankei wo tou. In Toshiki Osada (ed.), *Nihongo kigenron no rekishi to tenbō: Nihongo no kigen wa dono Yō ni ronjirarete kita ka* [History and prospects of the theory of origins of the Japanese language: How the origins of the Japanese language have been discussed], 227–249. Tokyo: Sanseido.
- Kindaichi, Haruhiko (1967) Tōgoku hōgen no rekishi wo kangaeru [Considering the history of Eastern dialects]. *Kokugogaku* 69, 40–50.
- Kobayashi, Takashi (1991) Hōgen tōzai tairitsu bunpu seiritsu patan ni tsuite no oboegaki [Memorandum on the development of the East-West contrastive dialectal distribution pattern]. *Kenkyū Hōkokushū* 12: 165–189. Tokyo: NINJAL.
- Kupchik, John E. (2011) A Grammar of Eastern Old Japanese Dialects. PhD dissertation, University of Hawai’i.
- Lawrence, Wayne (2013) Mama wo tazunete sanzenri: Hachijō hōgen no keitōteki ichi ni tsuite

- [Three thousand leagues to visit mama: On the phylogenetic position of the Hachijo dialect]. In Nobuko Kibe (ed.) *Hachijō hōgen chōsa hōkokusho: Shōmetsu kiki hōgen no chōsa, hozon no tame no sōgō-teki kenkyū* [Hachijo dialect survey report: Comprehensive research for the investigation and preservation of endangered dialects], 71–75. Tokyo: NINJAL.
- Martin, Samuel E. (1987) *The Japanese language through time*. London: Yale University Press.
- NINJAL (ed.) (1966–74) *Nihon gengo chizu* [Linguistic Atlas of Japan], 1–6 volumes. Tokyo: Ministry of Finance Printing Bureau.
- NINJAL (ed.) (1989–2006) *Hōgen bunpō zenkoku chizu* [Grammar Atlas of Japanese Dialects], 1–6 volumes. Tokyo: Ministry of Finance Printing Bureau.
- Onishi, Takuichiro (2002) Zenkoku hōgen no bunpu [Distribution of dialects nationwide]. In Yasuo Kitahara (supervised) and Yoshio Ebata (eds.) *Asakura Nihongo kōza 10: Hōgen* [Asakura Japanese language course 10: Dialects], 121–140. Tokyo: Asakura Shoten.
- Pellard, Thomas (2008) Proto-Japonic *e and *o in Eastern Old Japanese. *Cahiers de linguistique Asie Orientale* 37 (2), 133–158.
- Pellard, Thomas (2015) The linguistic archeology of the Ryukyu Island. Patrick Heinrich, Shinsho Miyara, Michinori Shimoji (eds.) *Handbook of the Ryukyuan languages: History, structure, and use*, 14–37, Berlin: DeGruyter Mouton.
- Pellard, Thomas (2021) Nichiryū shogo no keitō bunrui to bunki ni tsuite [On the phylogenetic classification and divergence of the Japonic languages]. In: Hayashi Yuka, Kinuhata Tomohide, Kibe Nobuko (eds.) *Fīrudo to bunken kara miru Nichiryū shogo no keitō to rekishi* [The phylogeny and history of Japonic languages viewed from fieldwork and literature], 2–16. Tokyo: Kaitakusha.
- Sagart, Laurent (2004) The higher phylogeny of Austronesian and the position of Tai-Kadai. *Oceanic Linguistics* 43 (2), 411–444.
- Sagart, Laurent (2013) The higher phylogeny of Austronesian: A response to Winter. *Oceanic Linguistics* 52(1), 1–9.
- Sato, Ryoichi (1986) Hōgen no goi: Zenkoku bunpu no ruikei to sono sein [Dialect vocabulary: Types and causes of nationwide distribution]. In Kiichi Iitoyo, Sukezumi Hino, and Ryoichi Sato (eds.) *Kōza hōgengaku 1: Hōgen gaisetsu* [Course in dialectology 1: Overview of dialects], 149–180. Tokyo: Kokusho Kankōkai.
- Serafim, Leon A. (2003) When and from where did the Japonic Language Enter the Ryukyus? –A critical comparison of Language, Archeology, and History. *Perspectives on the Origins of the Japanese Language* 31: 463–476.
- Tojo, Misao (1953) *Nihon hōgengaku* [Japanese dialectology]. Tokyo: Yoshikawa Kobunkan.
- Tsuzuku, Tsuneo (1949) Nihongo no hōgen kuwake to Niigataken hōgen [The classification of Japanese dialects and the dialect of Niigata Prefecture]. *Kikan Kokugo* 3(1).

東京外国語大学国際日本研究センター主催
夏季セミナー2024『国際日本研究への誘い』

2024年7月25日(木)・26日(金)

対面・オンライン(ZOOM)同時開催

サマースクール研究発表会

大学院生による研究報告(要旨)

国策への抵抗になりうるか ——池田みち子の〈上海もの〉を読む——

陸旭林

池田みち子(1914-2008)は『三田文学』の特派員として上海事変の翌年に戦地に赴き、その体験を同誌に発表した。1940年には再び上海を訪れ、居留民として一年以上滞在し、その間の体験を基にいくつかの小説を執筆した。

大橋毅彦氏はこれらの作品に見られる反逆的な精神を評価したが、池田の描く女主人公の心の揺らぎは、必ずしも当時の国策的な言説と対立するものではなく、むしろ日本勢力の優位性を補強しているとも考えられる。

1940年に「上海」が発表された時代背景には、新体制運動と全体主義の風潮があり、まだ二十代前半の池田は作家としてのキャリアをスタートさせたばかりで作品発表の場が必要だった。日中戦争が激化する中、池田が彼女の〈上海もの〉において現状に対する反逆精神を示せたのかを、「私」を軸とした人物関係に照らして検証したい。

キーワード 池田みち子、上海、国策的言説、反逆精神、時代迎合

プロレタリア文学運動における「女性解放」 ——「赤い恋」と「赤い恋」以上の間——

'Women's liberation' in the proletarian literary movement:
Between Red Love (1923) and Sunao Tokunaga's Akai koi ijyo
(More Than 'red love', 1931)

宮喬瑞

プロレタリア運動における「女性解放」という大きなテーマに関わる「愛情の問題」を扱う徳永直の「赤い恋」以上とその話題の嚆矢となるコロンタイの「赤い恋」から男女間の性的問題に関するいくつかの認識的齟齬が見て取れる。こうした一連の齟齬を生じたのは、プロレタリア文学の多くが「女性」解放などを掲げながらも、すでに形作られた従来の「性」関係への想像(=われわれが思う「女性」性と「男性」性)をプロレタリア運動という新しい文脈で見直さずに、無頓着に使用した結果に他ならない。したがって、プロレタリア運動における女性解放問題を論じる際に、天然・自然だと思われる男女の性差及びその上に築き上げられた人間関係を改めて追究する必要がある。それにわれわれの精神的構造の果たした役割をも考慮に入れつつ、何が運動におけるジェンダーに影響しているのかをテキストで見直していく。

キーワード: プロレタリア文学運動、ジェンダー、女性解放、徳永直、精神分析

Proletarian Literary Movement, Gender, Women's liberation,
Sunao Tokunaga, Psychoanalysis

日韓近代初期短編小説に現れた告白と近代的主体性 —森鷗外の『舞姫』と李光洙の『幼き友へ』を中心に—

李知垠

This paper analyzes and compares individual characters with respect to the keyword family which appear in the early-modern novels of Japanese and Korean, "Maihime" and "Dear Young Friend".

Up to now, the previous studies dealing with "Maihime" and "Dear Young Friend" has focused on the story of returning to homeland, which results from the frustration of self-realization, or the idea of building a civilized society.

These two works, which express the characters' inner thoughts by means of confession in relation to the conflict with the existing social system, can be regarded as the most important novels in the modern era of Korea and Japan. The main characters, Toyotaro of "Maihime" and Lim Bo-hyung of "Dear Young Friend", tried to realize their 'true love' as independent individuals in search of deviating from the "home" image of the existing feudal system. Toyotaro returned to his 'real existing' homeland, while Lim returned to his people.

It can be thought that the difference in coming back home is due to the fact that Toyotaro had a country to return, while Lim had no country to return. As he ignored the reality of lacking a homeland, Lim tried to board a new "home" called Modern Joseon, moving toward to the unknown world. In order to do this, Lim needed daydreaming. It seems that these have caused the inner differences between Japanese and Korean novels in the early-modern era.

keyword: confession, family, individual, return, identity

金子文子の裁判記録にみる「自然的存在」

“Natural existence” seen in Kaneko Fumiko’s Trial Records

加藤志歩

金子文子(1903-1926)の『何か私をこうさせたか』は、1925年夏から秋にかけて獄中で執筆された自伝的手記として知られている。彼女の思想を把握するための資料としては、獄中手記のほかに、調書や事件書類から成る裁判資料(以下、「裁判記録」)が挙げられる。本報告の目的は、「裁判記録」の中の訊問調書や書面・書簡から、彼女の自然・人間観を考察することにある。金子が多用した「自然」や「地上」という言葉からは、彼女の思想を理解する上で重要となる「弱肉強食」や「人類の絶滅」という概念に迫ることも可能だ。また、調書や書簡に度々引用された西洋の哲学や思想家は、人間を「自然的存在」と位置付けた金子の思想世界にどのように作用したのか。本報告では「裁判記録」を手掛かりに、金子文子の自然思想を検討する。

キーワード: 金子文子、自然哲学、人間観、自然観、生と死

Japanese natural philosophy and Subjecthood: Environmental philosophy and the Anthropocene

Jourdan Fayao Ariadne

Recent concerns about climate change and natural disasters have influenced the development of a sub-field in natural philosophy (自然哲学) also known as environmental philosophy (環境哲学). There is a specific dialogue between Japanese and western philosophers in this field, especially on how religion and politics can affect our perception of self and nature, from the perspective of different societies' cultures and even original communities' beliefs. To many scholars of the field, the Japanese understanding of *ambiance* passes the physical, solely scientific nature, and is argued by environmental philosophers as a broader concept named *milieu* (風土), that encompasses nature, climate, culture and spirit altogether. This interpretation sees human and human relations as one of the constitutions of what we understand by nature, distinguished from classic western dualism that separates subject (human) of the *ambiance* (environment). This lack of subjecthood on the environment is a symptom of Earth's current geological era, the Anthropocene, in which the human being is the main actor in nature, causing relevant impact to all species. I would like to further present on the specificities of Japanese environmental philosophy and its connections with natural philosophy, recent trends connected to natural disasters, and possibilities for international broader-scale dialogues between countries, such as Brazil.

Keywords: Environmental Philosophy, Japanese Natural Philosophy, Subjecthood, Ambiance, Culture

Nature and Subjectification in Natural Philosophy: Implications for Gender Studies and Feminist Philosophy in Japan

自然哲学における自然と主体化

—— 日本におけるジェンダー研究フェミニズム哲学との関係 ——

Soh Gabriel Chee-Seng

In this panel on natural philosophy, I will focus my presentation on the concept of nature in philosophy and the implications that it has on subjectification of people. Specifically, I will lay out arguments made by philosophers that have implications on the field of gender studies and feminist philosophy.

First I will start with a historical perspective of natural philosophy, providing brief analysis on the development across history before going into the arguments from more recent philosophers. In doing so, I will also pick up on case studies that demonstrate these philosophical concepts that reflect societal gender norms and roles in the form of political and social issues. A key concept I will pick up on is the Deleuzian concept of becoming-animal and how this plays into the gendered nature of existence. Finally, I will then compare and contrast this to the feminist philosophy in Japan.

****Presentation Proposal: Natural Philosophy and Gender Studies****

Nature and Subjectification in Natural Philosophy: Implications for Gender Studies and Feminist Philosophy in Japan.

In this panel on natural philosophy, my presentation will focus on the concept of nature in philosophy and its implications for the subjectification of individuals. Specifically, I will explore arguments made by philosophers that significantly impact the fields of gender studies and feminist philosophy.

Historical Perspective of Natural Philosophy:

I will begin with a historical overview, providing a brief foundation of natural philosophy across

history. From there, I will highlight key ideas that intersect with gender studies. This will include a detailed examination of case studies demonstrating how these philosophical concepts reflect societal gender norms and roles, particularly in political and social contexts.

A key focus will be the Deleuzian concept of "becoming-animal" and its implications for understanding gendered existence. I will analyse how this concept challenges traditional views of subjectivity and gender, offering a transformative perspective on human and non-human relationships.

Finally, I will compare and contrast the discussed philosophical arguments with feminist philosophy in Japan. This comparative analysis will provide a broader cultural context, by drawing on insights from Japanese philosophers, this will allow for more diversity in the field of gender studies and philosophy.

Marketing “Ethnic Harmony”: Ainu Tourism, the National Ainu Museum, and Japan’s Imperial Legacy

**民族共生」のマーケティング
——アイヌ観光、国立アイヌ民族博物館、そして日本の帝国遺産——**

Lea Pflueger

As a form of settler colonialism, Japan’s imperial conquest of the Ainu homeland necessitated the erasure of the presence of its Indigenous population both directly and indirectly. This ongoing structure of elimination extends to the realms of memory and becomes entangled with the narratives transmitted in tourism and museums. Tourism in particular has long played a central role in the material and ideological structures of colonialism in Ainu Mosir, serving the agenda of different stakeholders. The realities of settler colonialism are often unacknowledged in dominant discourse, affected by settler memory and historical amnesia. This thesis analyzes Ainu tourism and museum narratives with frameworks of settler colonial theory, memory studies, and heritage tourism, paying special attention to the newly established Upopoy National Ainu Museum and Park in Shiraoi as a complex site that reflects the historical dynamics of Japanese settler colonial memory in Yaun Mosir (Hokkaido). It finds that Ainu tourist sites and museums constitute contact zones in which official government narratives clash with Indigenous experiences and knowledge, revealing continued imperial structures and mechanisms. Though these spaces are deeply asymmetrical, there is potential for Indigenous empowerment and counternarratives, which can disrupt dominant narratives and subvert settler memory.

Keywords: Ainu, Settler Colonialism, Settler Memory, Ainu Tourism, National Ainu Museum, Contact Zone, Historical Amnesia

アイヌ、セトラー・コロニアリズム、日本帝国の記憶、アイヌ観光、
国立アイヌ民族博物館、コンタクトゾーン、歴史の健忘症

日中両言語における原因・理由文の対照考察 －因果接続詞の使用・不使用条件の異同をめぐって－

Contrastive Study of Cause and Effect Sentence in Japanese and Chinese

周禹吉

本発表は日中対照の視座から、両言語における因果関係を表す接続詞の使用・不使用条件の異同を考察したものである。発表者はまず「論理度」という概念を導入した。論理度は一定の文脈において原因・理由を含んだ論理関係を示す必要の程度を指す。

因果接続詞の使用・不使用を決める要因として、中国語では論理度だけが関与しているのに対し、日本語では論理度の他に従属節の独立性の高低も関与している。論理度の高い文脈においては、中国語でも日本語でも因果接続詞を使用することが必須である。それに対し、論理度の低い文脈においては、中国語では「因为～所以～」といった因果接続詞を省略することができる。一方、日本語では、原因・理由節の独立性が低い場合に限り、「から」「ので」といった因果接続詞の代わりに、動詞の中止形だけで従属節と主節を繋ぐことが可能である。逆に、原因・理由節の独立性が高い場合では、因果接続詞の使用は必須である。

キーワード：原因・理由文、接続詞、「から」「ので」「因为～所以～」

Cause and Effect Sentence, Conjunction, “kara”, “node”, “yinwei..suoyi..”

「方向名詞＋を＋見る」に関する考察

熊怡萱

日本語と中国語の両言語には、上、下、左、右、前、後ろ、東、西、南、北、中、外、内などの方位名詞が存在する。中国語の「看＋向＋方位詞」という表現に対して、日本語では「方向名詞＋を＋見る」という構造が用いられ、中国語の「向」に相当する移動方向を示す助詞「へ」や「に」は使用されない。本研究は、日本語における「方向名詞＋を＋見る」構造と中国語の相応表現との違いに基づき、コーパスを用いて「方向名詞＋を＋見る」構造の意味的、文法的小および語用的特徴を分析する。

キーワード：方向名詞；見る；意味；文法；語用

村上春樹作品における「無意識」の表象 —「街とその不確かな壁」を中心に—

The Representation of the Unconscious in Murakami's Work:
The City and its Uncertain Walls

肖瑶

「人間の心」に対する関心は、明治からの内面描写や告白を経て、精神分析における「無意識」の概念の影響を受け、現在でも多くの作家や批評家の注目を集めている。村上春樹も、「人間の心」に興味を示す一人である。1979年にデビューした村上は、「現代人の心のあり方」について独自の見解を持ち、「潜在意識というのはとても重要なものになります」と語り(村上26)、「無意識」を作品に取り込み続けている。

村上春樹の長編小説『街とその不確かな壁』(2023)は、1980年に書かれたほぼ同名の中編小説「街と、その不確かな壁」を新たに長編に書き直したものである。本発表では、村上の中編小説

「街と、その不確かな壁」(1980年)、『文藝春秋』9月号)と、43年後新たに長編に書き直した『街とその不確かな壁』(2023年)の比較分析を中心に、他のいくつかの作品をも視野に入れ、村上作品における「無意識」の表象の特徴と変遷を分析し、そこからみえてくる「現代人の心のあり方」を明らかにすることを目的とする。

キーワード: 村上春樹、無意識、内面、書き直し、壁

Hraki Murakami, Unconscious, Interiority, Rewrite, Wall

参考文献

村上春樹(2010)『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです:村上春樹インタビュー集 1997-2009』文藝春秋

夢野久作「縊死体」論 ——解体・再構築する物語

Yumeno Kyūsaku "Dead Body by Hanging":
A Story Deconstructed and Reconstructed

黄靖婷

昭和8年1月、『探偵クラブ』に発表された「縊死体」は夢野久作の短編小説で、自分が殺した女の遺体が発見されるのを待っている男の話である。中には、死んだはずの娘が生きているような矛盾が多くある。しかし、従来の研究は「縊死体」と短歌「獵奇歌」との関連性にしか着目していない。そのため、筆者は夢野久作がどのような手法で「縊死体」を作り上げたかについて、「瓶詰の地獄」や「ドグラ・マグラ」などの作品を参照しながら考察してみた。その結果、「縊死体」の構造は夢野久作の作品の傾向と一致していることがわかった。「縊死体」に出てきた人物の設定が矛盾し、物語は解体されるが、それが怪奇を表す方法として使われ、物語を再構築していく。

キーワード：夢野久作、縊死体、瓶詰の地獄、ドグラ・マグラ、探偵小説

Yumeno Kyūsaku, Dead Body by Hanging, Hell in Bottles, Dogra Magra,
Mystery fiction

中世室町期続歌会の様相についての考察 ——『公宴続歌』と『明題部類抄』を手がかりに

A Study on the Aspects of the Medieval Muromachi Period Sequential Poetry Party
— With the Kōentugiuta and Meidaiburuisyō as clues—

黄逸松

中世和歌の創作について考える際に、創作の場として重要なものは歌会である。歌会において、歌人たちは出された題に従って和歌を創作した。従って、歌題が、歌会の実態を考察する重要な切口になる。

中世室町期の歌会には形式の多様性が生じ、続歌と呼ばれた形式が流行していた。それは一般的な和歌会と異なり、歌人たちが全員同じ歌題を詠むのではなく、予め決められたひとまとまりの題(組題という)から割り振られ、詠作を行うものである。

本研究では、室町期の歌会の特徴的な形式である続歌会の様相について考察する。考察にあたっては、続歌会が行われた頻度とそこで出題された組題について分析する。多くの歌会を記録した『公宴続歌』と、最も古い成立の歌題集成書『明題部類抄』を手掛かりに、室町期の和歌世界における続歌会の様相を俯瞰的に捉えることを試みる。

キーワード：中世和歌、続歌、組題、『公宴続歌』、『明題部類抄』

Medieval times waka poetry, Sequential Poetry Party, Sequential Titles, Kōentugiuta, Meidaiburuisyō

Damião of Akitsuki: Exploring Early Kirishitan Thought and its Influence on Early Modern Japan's Social Dynamics

初期キリシタン思想の探究と戦国日本社会の影響
——秋月のダミアンを対象として

LAUBENSTEIN VICTOR

The outset of Christianity in Japan during the late 16th century constitutes a significant chapter in both Japanese and Western historiography. Recent scholarly inquiries within this field have concentrated on different groups and the intricate interplay between European missionaries and indigenous Japanese religious practices. Nonetheless, notable lacunae persist, particularly concerning the early Christians' conceptualization of Christianity prior to the onset of the Tokugawa persecution. This presentation aims to scrutinize the agency of a specific historical character, Damião of Akitsuki, a foundational member of the Society of Jesus, and to elucidate his comprehension of his own conversion and Christian identity. While Damião has garnered attention in recent academic discourse aimed at elucidating his significance, there remains substantial terrain to be traversed in comprehending his particular apprehension of Christian doctrine and his role in proselytizing amidst the Sengoku social structure. By synthesizing missionary accounts with local sources and discerning their subtleties, we can begin to elucidate the pivotal roles of notions such as pollution, retribution, and redemption in the dissemination of Christianity and its subsequent repression.

Keywords: kirishitan, Jesuits, thought and local society, Damião, Sengoku

Becoming the City of Prayers: Christianity and the formation of local public history in 20th Century Nagasaki

**「祈りの長崎」の誕生
—二十世紀長崎における公共歴史の形成とカトリック教—**

Yitong Xu

Founded in the late 16th Century as a centre of maritime commerce and Catholic proselytisation in Japan, the city of Nagasaki was transformed into a centre of anti-Christian persecution and state-monitored foreign trade by the policy of the Tokugawa Shogunate (1603 - 1868). Even after the Meiji Constitution of 1889 guaranteed the religious freedom of the Christians, this history of early modern Nagasaki still caused a border of memory that divided the ways the Catholic and non-Catholic populations of Nagasaki perceived the city's origin well into the 20th Century. By looking at three specific episodes in Nagasaki during the period between the late 1920s and the late 1940s, this research analyses how this border of memory informed the formation of both the Catholic and the non-Catholic narratives regarding Nagasaki's Christian past through public anniversaries, religious feast days and the city's post-atomic bombing urban planning. In contrast to the contemporary official rhetoric which saw the early modern history of 'Christian Nagasaki' as one of cosmopolitanism cultural exchange and co-habitation, this research concludes that 'Christian Nagasaki' remained a fractured mnemonic landscape in the early to mid-20th Century which gave rise to a shifting political dynamic of confrontation and collaboration between Catholicism and the rise and fall of Japan's militant nationalism.

Keywords: Nagasaki, public history, Catholicism in Japan, propaganda in wartime Japan, Twenty-Six Saints of Japan.

長崎、公共歴史学、日本のカトリック教、戦時日本におけるプロパガンダ、
日本二十六聖人

柄谷行人の「クリティーク」とは何か

What is Kojin Karatani's Critique ?

趙奕山

柄谷行人はもっとも世界的影響力を持つ現代日本の思想家のひとりである。とりわけ2001年に発表した主著『トランスクリティークーカントとマルクス』では、カントとマルクスを交差させて論じており、欧米の学界においても高く評価された。例えば、スラヴォイ・ジジェクは柄谷が同書で提起した「視差」の概念に触発されて、2006年に大著『パララックス・ビュー』を出版した。

それでは、柄谷がいう「トランスクリティーク」とは何か。この問題に対して、「トランスクリティーク」を二人の哲学者を比較するために提出された批判的思考の方法論として考える、または柄谷の思想の歩みを鑑みて「トランスクリティーク」を「文学批評」の言い換えとして考える、という二つの見方が一般的である。しかし、この二つの見方は、どちらも「トランスクリティーク」が柄谷の政治的実践と深く関連していることを看過している。本発表は、こうしたいままでの読解を批判しながら、柄谷の「クリティーク」の具体像を解明することを試みる。

近世川崎地域からの経世済民思想 —田中休愚と池上幸定・幸豊の比較をとおして—

Ideas of politics and economy in the 18th century Kawasaki region:
A Comparative analysis of Tanaka Kyugu and Ikegami Yukisada and Yukitoyo

篠原将成

本発表では、現在の川崎市域で近世中期に活躍した田中休愚と池上幸定・幸豊の政治経済的発言を思想史上に位置づけたい。休愚は農政一般を説いた『民間省要』を幕府に提出し、後に代官となったことで知られ、池上父子は新田開発と砂糖国産化を推し進めたことで知られる。休愚は自身の提言を「上二得有て下二失なく、上二損なくして下二益有、得失損益上下二利有の弁なり」と述べている。また幸定は、新田開発とは「国を広くするの功德有て、其身斗りの為にあらず」という「国益の術」であり、世のため人の為に何もしない者は「国賊」であるともいう。ともに百姓身分であるが、身分制下において足るを知るといった思考ではなく、政治経済的に積極的に発言していった。こうした発言を地域から捉え直し、思想史上に位置づける。

キーワード：川崎、思想史、地域史、国益、経世済民

Kawasaki, intellectual history, local history, national or social interest,
politics and economy

プリンタ業界において日本企業が強い理由

許民京

急速な技術進展と継続している事業モデルの革新により技術や事業に対する不確実性の高い精密機器と電機事業分野。この精密機器や電機事業において日本企業が強みを発揮している分野がコピー機・プリンタ、自動車、ゲーム機器、カーナビである。自動車やゲーム機器、カーナビの場合、市場や用途が限定的であることに比べ、プリンタは過去、市場と用途の拡大性が期待される分野であった。世界のプリンタ業界を見ると、日本企業が1980年代はじめから5割を超えるシェアを占めている。1980年代から始まったプリンタ業界での日本企業の独占が約40年間、高い競争力を持ちながら維持することになったその背景について先行研究により分析を行う。

Key words: ハードコピー機器、プリンタ業界、電子機器産業、レーザー＆ブレード戦略、特許戦略
HCP (hardcopy peripheral), Japan Printers and Peripherals,
electronic equipment industries, Razor and Blades model, patent strategy

日本ビール類市場のガラパゴス化現象と同型化分析 — 発泡酒・新ジャンルを中心に —

Characteristics and Isomorphism of Japanese low-malt beer and beer-like beverage

朴藝琳

本研究は日本の発泡酒と新ジャンルの製品・消費者の特徴、そして国内外の市場現況について調べた。さらに、日本の発泡酒・新ジャンル市場の背景に作用した「同型化 (isomorphism)」過程を分析した。ビール類飲料に付けられる酒税は、麦芽使用比率によって税率が違う。これにつれて日本の酒類会社は最も高い酒税が適用されるビールに代わることができ、税率は低く適用される発泡酒と新ジャンルを開発した。酒類会社は酒税法が改正される度に商品を新しく開発したりリニューアルし、これは日本の発泡酒、新ジャンル市場と日本酒税法が緊密に関連していることを示唆する。また、発泡酒と新ジャンルは日本のビール類市場で堅調な内需を持っているが、貿易は不在である典型的な「ガラパゴス化」された商品であることを確認した。このような背景には強制的同型化と模倣的同型化が作用し、これは発泡酒・新ジャンル市場をより強固にしたものといえる。

キーワード：日本ビール類市場、発泡酒、新ジャンル、第3のビール、ガラパゴス化、同型化
Japanese Beer Market, low-malt beer (Happoshu), beer-like beverage (New Genre),
Galapagos syndrome, Isomorphism

東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』要項および編集・応募規程

発行の目的: 国際日本研究センターにおける研究や研究活動と関連を有する研究成果を公表することを通じて、日本研究の発展に寄与することを目的とする。

発行回数並びに発行時期: 年 1 回、3 月 (2010 年度より開始)
※第9号から電子版のみ発行。

編集規程:

- ・国際日本研究センターは『日本語・日本学研究』の発行のために編集委員会を置く。編集委員会はセンター長、副センター長、編集幹事および各部門から選出された教員により構成される。
- ・投稿論文について: 『日本語・日本学研究』は、本センターの研究活動に関連した日本研究の諸論考を受け入れる。(本センターの研究活動については、本センターのホームページを参照のこと)
- ・査読: 投稿された研究論文については、編集委員会の責任において2名の査読者を選定するが、その際、編集委員会は外部の査読者を依頼することができる。査読は、査読要領にもとづき審査を行い、採否の決定をする。
- ・編集委員会は、東京外国語大学教員ならびにセンターの研究活動に積極的に参画した者、および必要に応じて外部の者に寄稿を求めることができる。
- ・その他、編集上の細則については編集委員会が適宜これを定める。

応募規程:

- ・日本の文化・社会・歴史並びに日本語・日本語教育に関する研究論文 (15ページ程度)、海外の研究動向・研究潮流の紹介 (15ページ程度)

研究ノート (10ページ程度) 書評 (10ページ程度)

- ・原稿の書式: 投稿論文は日英いずれかの言語とする。掲載決定後、日本語論文には、英語の概要 (300 語程度) 英語論文には日本語の概要 (800 字程度) をつける。
- ・投稿申込みと申込み締め切り: 論文の投稿を希望する場合は、指定の期日までに、「執筆申込書」に必要事項を記入し、下記編集委員会アドレスに E メールで投稿予定の旨を連絡すること。また、メールの Subject (件名) には「『日本語・日本学研究』投稿希望」と記入すること。

原則、投稿された論稿はすべて査読対象とする。ただし、編集委員会の判断により査読対象に含めないものを認める場合がある。

公開、複製、公衆送信に関する権利: 掲載された論文等の公開、複製、公衆送信の権利は、本センターに帰属する。本誌に発表されたものを転載する場合は、その旨を編集委員会に連絡して承認を得るとともに、当該論文等の初出を明示すること。

投稿申込み締切日: 毎年 7 月 31 日

原稿締切日: 毎年 9 月 30 日

【連絡先】 東京外国語大学国際日本研究センター

『日本語・日本学研究』編集委員会

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

電話 / FAX : 042-330-5794

E-mail : icjs_editorial@tufs.ac.jp

URL : <http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/>

Call for papers and the information
The Journal of the International Center for Japanese Studies,
Journal for Japanese Studies

Editorial policy and guidelines of Journal for Japanese Studies

Purpose:

To contribute to the development of Japanese Studies through publishing efforts and results pertaining to the research activities conducted at the International Center for Japanese Studies.

Publication Period and Frequency: Starting from the fiscal year of 2010, published annually.

From volume 9, this journal will be published in electronic format only.

Policies:

- ・Editorial Committee: For the publication of International Japanese Studies, the International Center for Japanese Studies will establish an editorial committee. The committee will be composed by the director of the Center, the associate director, a chief editor, and a staff member each from three divisions of the Center.
- ・Articles: The articles to be submitted for the Journal are selected considering their relations to the Japanese studies conducted by our center (please refer to the official website of the Center as below for details on our research areas and activities.)
- ・Reference: Two referees appointed by the editorial committee will review and select the submitted articles based on the selection guidelines. The editorial committee is permitted to request experts for referees from outside of Tokyo University of Foreign Studies (TUFS.)
- ・The editorial committee may request submission of articles from faculty members at TUFS, or other individuals who have actively contributed to the Center's research activities. The editorial committee will add or modify any other details as needed.

Submission Requirements:

Topics: Research article on Japanese culture, society, history, language, and language education (double space, approx. 15 pages,) international research trends (approx. 15 pages,) research report (approx. 10 pages,) book review (approx. 10 pages.)

Format: The articles may be written in Japanese or English. For articles in Japanese, attach a summary in English (approx. 300 words,) and for articles in English, attach a summary in Japanese (approx. 800 letters.)

In principle, all the articles are subject to be peer reviewed. However, the editorial committee might, at their discretion, permit the article not to be included in the review.

Policy Acknowledgement: All rights relating to the publication, reproduction, and public transmission of the articles published on the journal shall belong to the International Center for Japanese Studies. Any contents shall not be reproduced without showing the credit, first appearance of the article, nor the express written permission given by the editorial committee.

Entry Deadline: Every 31st of July

Submission Deadline: Every 30th of September

【For further information, please contact】

International Japan Studies Editorial Committee International
Center for Japanese Studies Tokyo University of Foreign Studies

【Address】 3-11-1, Asahi-cho Fuchu-shi, Tokyo 183-8534 Japan
Telephone and Fax: +81 (0) 42-330-5794
E-mail: icjs-editorial@tufs.ac.jp
URL : <http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/>

Formatting Guidelines for the Journal of the International Center for Japanese Studies, *Journal for Japanese Studies*

General Formatting (基本的な書式)

1. WORD を使用、A4 判で、余白は上下・左右とも 2cm、文字数 45、行数 40 とする。
2. 日本語論文の場合：MS 明朝を用いること。
タイトル：フォントは 16 ポイント、太字。
サブタイトル：フォントは 14 ポイント、太字。
氏名：フォントは 12 ポイント、太字。
本文：フォントは 10.5 ポイント。
註：脚注とする。フォントは 9 ポイント。
ローマ字、数字などはすべて Times New Roman を用いること。
3. English-language manuscripts must be written in Times New Roman.
Title: 16 pt. Bold.
Subtitle: 14 pt. Bold.
Name: 12 pt. Bold.
Text: 10.5 pt.
Notes: 9 pt.
4. 図表にはそれぞれ通し番号とタイトルを付けること。また出所を明確に表記すること。All figures and tables should have consecutive numbering and easy-to-understand titles. Add sources for all figures and tables.
5. インターネット上の参考資料については、入手先と参照した年月日を明示すること。All Internet-based sources must have access dates.
6. 本文の最後に、氏名（ふりがな、ローマ字表記）、所属を記載すること。英文表記は、姓は大文字、名は頭文字のみ大文字にすること（例：GAIDAI Tobita）。
Authors' full names and affiliation should provide on the end page. Write your family name in capital letters.
7. 参考文献リストの書式および字送り、行送りは本文と同じとする。表示形式は属する分野に従う。References should have the same line spacing as the main text of the paper. You may choose your reference style yourself (APA, Chicago, or MLA) according to the customs of your academic field.
8. 1 ページ目は、日本語タイトル、英語タイトル、氏名、キーワード（日本語、英語）、本文順に記入すること。目次は不要。
The first page should be completed in the following order: Japanese title, English title, name, keywords (Japanese and English), and text. No table of contents required.

東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』第15号 執筆者一覧

浅原正幸	国立国語研究所 教授
葉書辰	筑波大学大学院 国際日本研究プログラム
Lisa Sanders	東京外国語大学 博士後期課程
解放	吉林大学 准教授
NGUYEN, Linh Lan	東京外国語大学 博士後期課程
張舒鵬	東京外国語大学 特別研究員
鄒韻	杭州師範大学 講師
五十嵐陽介	国立国語研究所 教授

『日本語・日本学研究』国際編集顧問一覧(順不同)

孫建軍	北京大学	郭連友	北京外国語大学
蕭幸君	東海大学(台湾)	尹鎬淑	サイバー韓国外国語大学校
李吉鎔	中央大学校(韓国)	鄭家瑜	国立政治大学
金鍾德	韓国外国語大学校	林慧君	国立台湾大学
LIM Beng Choo	シンガポール国立大学	Tasanee Methapisit	タマサート大学

編集後記

東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』第15号を、ここにお届けいたします。今号では学内外から寄せられた論文4本、研究ノート3本、寄稿論文1本を掲載しました。また、本センター主催の夏季セミナー2024『国際日本研究への誘い』(2024年7月)におけるサマースクールで研究報告を行なった大学院生の発表要旨も収録しています。本号刊行にご協力いただいたすべての皆様に心より御礼申し上げます。(友常)

東京外国語大学国際日本研究センター
日本語・日本学研究 vol.15
Journal for Japanese Studies

発行日	2025年3月31日
編集者・発行者	東京外国語大学国際日本研究センター
代表者	友常勉
	〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 アゴラ・グローバル2F
	Tel/Fax: 042-330-5794

Journal for Japanese Studies vol.15 (2025)

Peer-Reviewed Articles

- An Attempt at Estimating Kanji Character Familiarity Using a Bayesian Linear Mixed Model: ... ASAHARA Masayuki (1)
A Study on Statistical Models as Linguistic Resources
- A Cognitive Approach to the Semantic Extension of Onomatopoeia Representing “Hardness (硬さ)”: ... YE Shuchen (21)
The Case of “Gorigori”
- Translating Character Voice: Lisa Sanders (51)
Proposing new subtitling guidelines for conveying character and culture in English subtitles for Japanese anime
- The ‘Anti-Homecoming’ Narrative and the Voice of the Dead in Abe Kōbō: XIE Fang (77)
“Seifuku”

Peer-Reviewed Research Notes

- Implementing Picture Books in Beginner Japanese Speaking Classes:..... NGUYEN Linh Lan (97)
Effects on Vocabulary and Grammar Acquisition
- A Study of the Syntax of Evaluative Adjectives in Written Materials ZHANG Shupeng (119)
- The Narrative of “Friendship” in Post-War Japanese Travel Accounts of China: ZOU Yun (137)
Focusing on Yaeko Nogami’s *My Travels in China*

Article

- Tracing Japonic Lineages through Matryoshka Distribution: IGARASHI Yosuke (151)
Phylogeny, Migration, and Language Replacement in Eastern Japan

Abstracts of the Graduate Students' Session in Summer Seminar 2024

Contributors

International Editorial Committee Members

Postscript